
彩炎の魔女

千風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彩炎の魔女

【Nコード】

N5593X

【作者名】

千風

【あらすじ】

強力な魔炎をその身に宿す“魔女”と、魔女が魔炎を使うための手段となる人間“魔士”。“最下級魔士”という不名誉なあだ名を持つマルク・クラウドは、パートナーとなってくれる魔女を探すも現在、九十九人連続で断られ中。そんなマルクはある日、謎めいた一人の魔女、ルビィネルと出会う。この世界で一番の魔女“彩炎の魔女”を目指すというルビィネルとの出逢いにより、マルクの運命は、大きく動き出していく。

1（前書き）

こんにちは。千風です。

新しく連載を始めました。

長々とした話になるかと思いますが、最後までお付き合いいただければ、幸いです。

では、『彩炎の魔女』。

どうぞ。

『魔女は儚い生き物だ』。

それは、昔の偉人の言葉だっただろうか。
だが、それは真実ではない。

——魔女は、強かな生き物だ。

「パートナー？」

流れるような金系の髪、海のように透き通る青色の瞳。

「冗談！ あんたみたいな最下級魔士とパートナーになるくらいなら、ブタとでも組んだ方がマシよ」

目を見張るほどに美しい顔立ちをしたその魔女は、その美しい顔を、少しも歪めずに、目の前の彼へと言い放った。

——レイール聖魔院——

「ギャハハハハ！」

上品とは言えない笑い声が、雲一つない青空へと、高々と響き渡る。

「いやあ、ブタは凄げえな！ 俺の予想以上の、見事な振られっぷりだぜ、マルク！」

目の前で大笑いする友人とは対照的に、明るさも楽しさも一切感じさせない、陰気な表情を見せる、マルクと呼ばれたその青年。少し癖のある柔らかそうな黒髪に、まだ、どこか幼さを残す赤色の瞳。整っていないわけでもないが、取り分けて目立つところもない、普

通の青年だ。まだ止まることのない友人の笑い声に、マルクの顎が、徐々に下方へと落ちていく。

「んでも、これで何人目だあ？ パートナー断られたの。この前が九十八人目だったからあ、お！ 次でついに大台、おめでとう！」
祝うかのように拍手をする友人。肩ほどまである長めの茶髪に、緑色の瞳の、こちらはどちらかというと、人目を引くような整った顔立ちの青年だ。その友人の拍手を聞き、マルクの顎は、ついに目の前のテーブルへと落ちる。

「ポンドさ……」

テーブルへと顎をつけたまま、マルクがゆっくりと口を開き、友人の名を呼ぶ。中庭のような場所にある、白いテーブルを囲むようにして座る、マルクとポンドは、揃いの服を着ていた。赤色の枠取りのある、横二つ、縦に三つずつ並んだ、六つボタンの黒色の上着に、黒色のズボンを履いている。堅苦しいその服は、若者が好んで着る服には見えない。マルクたちが居る中庭を行き交う、他の者たちも、同じ服を着ている。それは、このレール聖魔院に通う者たちが、着ることを定められている服、つまりは制服であった。

「仮にも俺の友達なら、少しくらい、優しい言葉を掛けてくれても良くない？」

「優しいねえ。“次の魔女はきつと、パートナーになってくれるさ”ってえ？ 俺あ、そういうの、友情じゃないと思うねっ」

拗ねたように言うマルクに対し、ポンドはその笑みを止めることなく、軽い口調で言葉を続ける。

「だいたい、他人事みたいに笑ってるけど、ポンドだって今、パートナーいないだろ」

「俺は心に決めた、たった一人の魔女を、口説き落としてる最中なの。誰彼構わず行った上に、全部に振られてくるお前とは違うのっ」「うっ」

指摘するようなポンドの言葉に、思わず苦い表情を見せるマルク。
「別に俺だって、好きで、誰彼構わず行ってるわけじゃ……」

「お疲れ様」

背後から聞こえてくる、涼風のような美しい声に、マルクが言葉を止めて、振り返る。

「アメジエス」

振り返ったマルクへと軽く右手を上げながら、二人の居るテーブルへと、ゆつくりと歩み寄って来るのは、腰ほどまである、まつすぐ長い黒髪に、深い紺色の瞳の、何とも美しい少女。白過ぎる肌は、どこか神秘的で、人間離れしている。若く見えるが、ひどく落ち着いた雰囲気纏っており、実際のところ、幾つなのか見当がつかない。アメジエスと呼ばれたその少女は、マルクたちと同じ黒色の制服は着ておらず、薄い紫色のワンピースを身に纏っていた。白く細い首には、董色のリボンが巻かれている。

「おう、終わったのか？ 魔族歴史の講義」

「ええ、死ぬほどつまらなかったわ」

どこか、うんざりしたような笑みを浮かべて、アメジエスが、座っているポンドのすぐ傍へと立つ。

「二人は何してるの？ 中庭のベンチなんかで」

「マルクの失恋話聞いて、笑ってた」

「何、また振られたの？ マルク」

「ああ、うん。まあ」

アメジエスの問いかけに、マルクがアメジエスから視線を逸らしながら、歯切れ悪く答える。

「そ、そうだ！ アメジエスのクラスで、誰か、俺のパートナーになってくれるような魔女って……！」

「いないわね」

「うっ」

即答するアメジエスに、マルクから、呻き声のようなものが漏れる。

「だってあなた、魔女の中でも有名なもの。“最下級魔士”って」
アメジエスが言葉を続けながら、ポンドの横の椅子を引き、ゆっ

くりとそこへと腰掛ける。

「誰も好き好んで、そんな魔士をパートナーになんか選ばないわよ」

「違いねえ！」

「ううう」

アメジエスの言葉に、ポンドが笑顔で頷くと、マルクがその呻き声を長くする。

「だあああああ！」

「うおっ」

突然、叫び声をあげるマルクに、ポンドが驚く。

「どうせ、俺は最下級魔士だよお！ 魔士試験だって、百九十回の落第の末に、奇跡的に受かって、自分でも何で、魔士になれたのか、わかんないしさあ！」

「随分、追い込まれてんな。今回は」

テールブルへと顔を押しつけたまま、胸の内を爆発させるように、大きな声を張り上げるマルクを、ポンドはどこか感心するように見つめる。

「奇跡的に受かったんじゃないわよ、マルク」

「へ？」

声を挟むアメジエスに、マルクがどこか、期待するように顔を上げる。

「あれは、試験官の採点ミス」

「だあああああ！」

アメジエスの容赦ない一言に、マルクが頭を抱え、またしても叫び声をあげる。

「トドメ、突き刺すねえ！お前も」

「甘いこと言って励ますのって、私、友情じゃないと思うわ」

呆れたような視線を向けるポンドに、アメジエスが、先程、ポンドが言っていたのと同じような言葉で主張する。

「もうダメだ……俺みたいなダメ魔士の、パートナーになってくれる魔女なんかいないんだ……俺は一生、マフレイヤになって、行け

ないんだっ……」

「ああ、マルクのネガティブスイッチが入っちゃった」

「ポンドのせいじゃないの？」

「お前のせいだろ」

テーブルに突っ伏したまま、陰気な言葉を続けるマルクに、ポンドとアメジエスは互いを見合い、互いに責任を擦り付け合う。

「ほら、そういった悩みとは、無縁の魔士様が来たわよ」

別方向を見て、そつと言いつつアメジエスに、見合っていたマルクとポンドが同時に振り向く。皆が、中庭から続く、大きな煉瓦の建物の入口付近を見やった。

「シリングくうーん！ 私、今日の講義でわからないことがあってえー！」

「ちよつと、私が先に聞くんだから！」

「あんたたち！ シリングくんだって、自分の講義で疲れてるんだから、少しは遠慮しなさいよね！」

煉瓦の建物から、中庭へと出て来たのは、色取り取りの髪色に、色取り取りの服を身に纏った、美しい顔立ちの女性陣。黄色い声や、少し怒ったような声を発する女たちに囲まれ、そこから出て来たのは、マルクたちと同じ、黒色の制服を纏った、一人の青年であった。銀色に近い白い短髪に、あまり感情のない、少し冷たい印象も覚える、細い青色の瞳。高い鼻に、上品な口元は、まさに絵に描いたような端正な顔立ちだ。女たちと比べると、頭二つ分は余裕で背が高い。

「かぁー、相変わらず魔女にモテモテだなあ。シリング・ウェーガツト様は」

女たちに囲まれたその青年を見ながら、どこか感心したように呟くポンド。

「まあ彼は、このレイル聖魔院で一番の魔士、“最上級魔士”だもの。パートナーになりたい魔女なんて、山ほどいるわよ。おまけに、あの顔だし」

アメジエスがあまり興味なさそうに、肩を落としながら、シリングを見つめる。

「その割には、まだパートナーいねえよな？ あいつ」

「彼ほど有能な魔士は、そうはいないから、魔院が今、彼のパートナーと成り得る魔女を、厳選してるそうよ」

「かぁー、最上級魔士様は、パートナー選んでも特別扱いってか」

驚きを越え、どこか呆れたように眉をしかめるポンド。

「同じ年に、同じ国に生まれて、同じようにこの魔院に通ってんのになぁ。なのに、どうしてこうも違っちゃったのかねえ？ 最上級魔士様と、ここに居る最下級魔士はっ」

「……………」

ポンドの言葉を聞きながら、マルクが、魔女たちに囲まれているシリングを見つめ、険しい表情を見せる。逃げるように目を逸らすと、マルクが静かに、椅子から立ち上がった。

「帰る」

「へ？ けど、午後から魔炎技術講習っ……………」

「どうせ出ても恥かくだけだし。だから、帰る」

「あ、おい、マルク！」

ポンドが引き止めるのも聞かず、マルクは足早に、その場から去っていった。マルクが背中に背負った、あまりにも暗い雰囲気を見て、ポンドはそれ以上、止めることも出来ず、軽く溜め息を落としながら、マルクへと伸ばしていた手を下ろした。

「マルクのネガティブ、今回は重症じゃない？」

「いつも重症だろ？ あいつは」

問いかけるアメジエスに、ポンドは呆れたように答えた。

レイル聖魔院には、二つの種族の者が通っている。

一つ目の種族は、マルクたち、“人”と呼ばれる者たちだ。聖魔

院に通う人間を、特に“魔士”と呼ぶ。魔士は、人の中でも選ばれた、少数の者だけになれるもので、魔士養成学校に通い、卒業試験を合格した者だけが、聖魔院へと足を踏み入れることが出来る。聖魔院では、魔士たちは皆、同じ制服を身に纏い、日々、勉強に励んでいる。

そして、もう一つの種族は、“魔女”。

魔女は、人に非ず、“魔族”と呼ばれる種族の者で、その身に“魔炎”と呼ばれる、強力な炎を宿している。だが、魔女は、その身に宿す魔炎があまりに強く、自らで炎を使い過ぎると、自身の寿命を縮めてしまう。

そのために作られたのが、“魔士”という制度であった。魔女は、“人”である魔士をパートナーとし、自身の魔炎を使わせる契約を行うのである。

レイール聖魔院は、魔士を育て、魔女と出会わせるための場所。また、契約した魔士と魔女が、その強力な魔炎を使えるようになるための、鍛錬の場所でもある。

であるからこそ、魔女とパートナーになれなければ、何の意味もなさない場所なのである。

そんな場所に通い始めて数ヶ月。

まだ、パートナーとなってくれる魔女を見つけることの出来ないマルクにとって、聖魔院はまだ、何の意味もなさない場所となっていた。

レイール聖魔院のあるレイヤという名の国は、“人”と“魔族”が共存する、この世界唯一の国であるが、その境界線は明確だ。国の中心を流れる大きな川、レイヤ川をラインとして、川から西側が“ヤール”と呼ばれる、人間たちの住む領域。東側が“レイール”と呼ばれる、魔族の住む領域として、はっきりと分けられている。聖魔院があるのは、魔族たちの住む東側の領域だが、人であるマルクの家は、ヤールの、それもあり外れの山奥の奥にあった。周りには木々しかない場所に、不釣り合いなほどに立派な、二階建ての木製の屋敷。ここが、マルクの育った家である。

「ただいま」

「お帰りなさいませ、マルク様」

重みのある鉄製の扉を開けて、屋敷の中へと入ったマルクを、すぐに玄関へと出て来て出迎えたのは、マルクよりも十程年上に見える、二十代半ば頃の年齢の男であった。色素の薄い、水色の髪に、宝石のような青色の瞳は、とても優しい。立派な体躯にはあまり似合わぬ、簡素な紺色のエプロンを纏ったその男は、満面の笑みでマルクを迎えた。

「随分と早い、お帰りでしたね」

「午後の講義、サボったから」

「ええ！？ サボった！？」

男の問いに素っ気なく答えながら、マルクが玄関を上がり、廊下を進んで、すぐさま二階へと続く階段を上っていく。男は焦ったような表情を見せながら、必死にマルクの後を追っていく。

「どこか、お体の調子でも悪いのですか！？」

「別に。出たくないから、出なかっただけ」

階段を上りきると、マルクが、二階の廊下に出てすぐある、右側の扉を開ける。扉の向こうには、寝台と机、それに本棚が置かれた、

簡素な部屋。マルクは部屋に入り、机の上へと鞆を置くと、制服の上着を脱ぎ、手慣れた様子で、机の横のラックへと制服を掛ける。

「魔炎操作の授業なんて、パートナーも居ない俺には、必要ないし」「マルク様……」

部屋の外から、不貞腐れた様子のマルクを眺めながら、男が少し困ったように目を細める。

「また、パートナーを断られたのですね。これで九十九人目ですか」「落ち込んでるんだから、みなまで言うなよ。っていうか、人数まで、すっごい、しつかり覚えてるんだね」

軽く頭を抱え込むようにして、その場で俯く男に、マルクは思わず呆れた視線を送る。

「このラピスラズ、女でさえあれば、魔女となって、マルク様のパートナーとなったというのに……！」

「気持ち悪いこと、言わないでよ」

涙を拭くような動作をしながら、言葉を続けるラピスラズに、マルクが、着替えをしながらも、顔をしかめる。

「魔族に生まれながら、マルク様のお役に立てないとは……！　まったく自分が、情けない……！」

「ラピスが気に病むことじゃないよ」

制服から、動きやすい部屋着となったマルクが、嘆くラピスラズに言葉を掛ける。

「どの魔女もパートナーになってくれないのは、俺が最下級魔士だからなんだし」

暗い表情で俯くマルクを見て、ラピスラズが眉間に皺を寄せる。

魔女にパートナーを断られ続けて、九十九人。最初は、まだ冗談のように笑い飛ばし、からかうポンドにも威勢よく怒鳴り返していたマルクだが、徐々にその勢いはなくなり、諦めの雰囲気が漂い始めていることを、ラピスラズは感じ始めていた。そんなマルクを励まそうと、ラピスラズが大きく笑みを浮かべる。

「だ、大丈夫ですよ、マルク様！」

上ずっているとなさえ思えるほどの明るい声で、ラピスラズがマルクへと声を掛ける。

「次の魔女はきつと、パートナーになつてくれますよ！」

笑顔で言い放ったラピスラズを見つめ、マルクがしばらくの間、真顔で固まる。やつとのこととで視線を外し、軽く息を吐くと、マルクは困ったように微笑んだ。

「そついうのつて、友情じゃないんだつて」

「へ？」

マルクの言葉に、ラピスラズが大きく首を傾げる。

「あの、マルク様、それつて……」

「ちよつと散歩、行つてくる」

「あ……」

ラピスラズの問いかけに答えることなく、マルクは足早に、帰つたばかりの部屋を後にした。

「最下級魔士、か……」

自身につけられた呼び名を口にしながら、マルクがそつと、平原に寝そべる。屋敷から少し歩いた、森の木々のひらけた、小高い丘の上。ここから見下ろす、ヤールの町と、その向こうに広がるレイールの町々、そして、さらに向こうに広がる山脈。この場所で、この景色を見ることが、マルクは昔から好きであつた。

——何が違つちやつたのかねえ？ 最上級魔士様と、ここにいる最下級魔士はつ——

聖魔院でのポンドの言葉と、数えきれないほどの魔女に囲まれた、最上級魔士、シリングの姿を思い出し、マルクが右側へと体を傾け、地面に程近いところへ顔を向けて、そつと目を閉じる。

「俺だって、あいつみたいになリたかつたよ……」

心の奥底からの声を発したと同時に、マルクは、意識を手放した。

「ん……」

その赤色の瞳を、マルクが少しずつ開いていく。平原で寝そべったまま、いつしか眠ってしまったようだ。来た時と比べて、空の色が赤い。もう夕方なのだろうか。帰らなければ、と思い、体を起こそうとするが、気持ちよく眠ってしまったためか、体はなかなか言うことを聞いてくれなかった。ゆっくりと体を覚醒させていきながら、マルクが顔を上げる。まだ、霞がかった視界の中に、森の緑とは対照的な、赤色が飛び込んできて、マルクが思わず首を傾げた。

「赤……？」

戸惑うように呟きながら、徐々に視界をはっきりとさせていく。森の緑の中に浮かび上がる、その、炎のような燃える赤色は、風に柔らかくなびいている。どうやら、ワインレッドのような、深い赤色をした、長い髪のような。その髪の持ち主の後ろ姿が、徐々に見えてくる。白く細い手足は、女性だろう。髪と同系色の、真っ赤なワンピースも、大きく膨らんだスカートが、赤い髪と同じように、風に揺れている。髪が大きく揺れると、その細い首に、赤色のリボンが巻かれているのが見えた。

「“魔女”」

そのリボンを見て、マルクが思わず呟く。

「誰だ!？」

マルクのその小さな声が耳に届いたのか、赤い髪を揺らしていたその者が、勢いよくマルクの方を振り返った。警戒するように輝いた銀灰の瞳が、とても印象的な、美しい顔立ちの少女だった。年は、マルクと同じくらいか、少し幼くも見える。腰ほどまで伸びた赤い髪も、この山の中では、よく映えていて、とても綺麗だった。

「あ、ごめん。驚かせちゃっ……」

「そなたも、サードニツクの手の者か!？」

「へ？」

ゆつくりと体を起こしたマルクが、少女へと謝罪の言葉を投げかけようとしたその時、少女が荒々しく声をあげ、白く細いその右腕を、マルクの方へと突き出した。

「な、何っ……」

「何度来ようとも同じだ！ 私はそなた等の思い通りには、ならぬ

ぞ！ “火発”^{ひはち}”！」

「いいい!？」

わけのわかつていないマルクに対し、威嚇するように叫びあげた少女が、突き出した右手をほんのりと赤く光らせると、次の瞬間、その光輝いた右手から、真つ赤な炎を放った。向かってくる赤々とした炎に、マルクが目の玉が飛び出しそうなほどに、大きく目を見開く。

「うわ、わわわ!」

草むらに転がりこむようにして、何とか炎を避けるマルク。だが、マルクの避けた炎は、マルクのすぐ傍の草むらを直撃し、草花に燃え移って、激しく焼け始める。

「あ!」

焼けていく草花に、険しい表情を見せるマルク。すぐにその場で立ち上がり、着ているシャツを脱ぎ捨てたマルクが、必死にそのシャツを振り下ろし、草花に燃え移った炎を消そうとする。

「こんなところで炎を使うなんて、何考えてんだよ！ 山火事にでもなったら、どうするんだ!」

「え？」

必死に消火にあたるマルクを見て、少女が戸惑うような表情を見せる。

「ふうー、やっと消えた!」

「そなた……」

何とか炎を消し、ホツとした様子で額の汗を拭うマルクの姿に、少女が途端に、警戒の色を薄くする。

「そなた、は……うつ」

「へ？」

マルクへと何かを言おうとしていた少女が、突然、その瞳を細め、その場に倒れ込んでいく。

「姉、上……」

「ええ！？　ちょ、ちよつと！」

小さな呟きを最後に、瞳を閉じ、力なく倒れ込む少女に、マルクは焦りの声をあげた。

山奥で出会った少女に、突然、炎で攻撃されたマルクであったが、倒れてしまった少女を捨て置いていくわけにもいかず、とりあえず少女を屋敷へと連れ帰った。

「特に外傷は見当たりません。恐らくは、魔炎を使った影響でしょう」

客間の寝台に寝かせた少女を前に、ラピスラズは落ち着いた口調で言い放った。

「魔炎を？」

「はい」

客間の出入口付近に立ち、ラピスラズへと聞き返したマルクに、ラピスラズが大きく頷く。

「魔女って、ホントに魔炎使ったら、寿命縮むんだね。一回使っただけで、ぶっ倒れちゃうなんて」

「通常は、それほど強くない魔炎一発程度では、倒れることはありませんが、元々、疲れが溜まっていたのでしょう。そこに魔炎を使ってしまったので、倒れられたのではないかと」

「ふうーん」

「栄養剤を打ちましたので、しばらく休めば、問題ありませんよ」

ラピスラズが、安心させるような穏やかな笑みを、マルクへと向ける。

「別にそこまで、心配してないけど」

「え？　ここで恩を売って、パートナーになってもらう作戦なのでは？」

「そんな作戦、練ってないよ！　っていうか、そんな方法でパートナー得たって、嬉しくも何ともないし！」

「もう手段を選んではいけないと、思いますけどねえ」

「うるさい！」

指摘するような鋭い視線を向けてくるラピススラスから、マルクが勢いよく視線を逸らし、拗ねるように口を尖らせる。

「けど、ラピスが居てくれて良かったよ。ヤールじゃ、魔族診てもらえるような病院もないし」

「お役に立てて、良かったです」

マルクの言葉に、ラピススラスが嬉しそうな笑みを浮かべる。

「けど一体、何者なんだろう。こいつ」

「そうですねえ。人間領であるヤールに、魔族の方がいらっしやるのは、実に珍しいですし」

「お前も魔族だけどね」

「私は特別製なのですよ」

二人の視線が、寝台で深く瞳を閉じたままの、少女へと向けられる。

「まあ、目を覚まされたら、色々とお話をうかがいましょう。さあ、夕食の準備、出来ていますよ」

「うん。そういえば、腹減っ……」

「ん、んん」

「ん？」

ラピスに景気よく返事をし、ラピスと共に客間を出ようとしたマルクが、漏れ聞こえてくる小さな声に気付き、振り返る。その声は確かに、寝台で眠る少女のものであった。声と共に、体を揺れ動かしている。

「あ、気が付いたか？」

「んっ……」

マルクが興味津々に見つめる中、少女が未だ瞳を閉じたまま、布団の中から右手を出し、その右手を寝台の横へと勢いよく伸ばす。伸ばされた右手は、寝台のすぐ横の台の上に置かれている、空の花瓶を掴んだ。

「もうすぐ目え、覚めるぞおお！」

「だあああああ！」

「おっと」

瞳を閉じたまま、掴んだ花瓶を、力強くマルクの方へと投げ放つ少女。マルクが背中をそり返して、何とか花瓶を避けると、マルクを通り過ぎた花瓶を、ラピスラズが見事に掴み止める。

「どんな寝相してるんだよ、一体！」

「んん？」

予告の言葉通りに、その銀灰色の瞳を大きく開いた少女が、開いたばかりの目を擦りながら、寝台の上でゆっくりと起き上がり、怒鳴っているマルクを戸惑うように見つめる。寝起きだからか、その瞳はまだ虚ろで、先程のような力強さはない。

「ああ、すまない。その辺りにある物を投げながら、目覚め予告をするのが、私の癖で……」

「どんな癖だよ」

「ん？ そなた……」

「はっ！」

少女からゆっくりとした視線を向けられたマルクが、どこか焦ったように身構える。

「べ、別に俺たち、怪しい奴じゃないからな！」

「そう言う人ほど、怪しいんですよね」

「うるさい！ 余計なこと、言うな！」

少女へと弁明するマルクが、茶々を入れるラピスラズに、強く怒鳴り返す。

「お前に危害とか加えるつもりないから！ だからもう、魔炎とか使うなよ！？ ってか、使ったら、またお前、倒れちゃうかもだし！」

弁明しながらも、少女の体を気遣うような発言をするマルク。必死に言葉を続けるマルクの様子を見て、少女がそっと、口元を緩める。

「ああ、わかった」

「へ？」

笑顔を見せ、そつと頷く少女に、マルクが戸惑うように首を傾げる。

「そなたが、悪意ある者でないことは、わかった。先程は、私の早とちりで、そなたを攻撃して、すまなかった」

「そ、そうか」

少女の言葉に、マルクが安心したように肩を落とす。誤解が解けたのであれば、もう魔炎で攻撃される心配もないだろう。

「ここは？」

「我々の屋敷です。魔炎を使って倒れられたあなたを、マルク様がお運びしたのですよ」

「そうか。重ね重ね、すまない」

「あ、いやっ」

深々と頭を下げる少女に、マルクがどこか慌てた様子で、首を横に振る。いきなり魔炎で攻撃されたため、少女は気性の荒い性格なのだとばかり思っていたが、素直に頭を下げるところを見ると、そうでもないようである。

「俺はマルク・クラウド。で、こっちがラピスラズ。お前は？」

「私はルビィネル」

「ルビィネル」

自分の中で確かめるように、マルクがその名を繰り返す。

「ルビィネル様は、随分とお疲れだったようですね。魔炎一発で、倒れられてしまうなんて」

「ああ。道がわからなくて、三日間ずっと、飲まず食わずで、迷い歩いていたらかな」

「そりゃ、倒れるわ」

ルビィネルの言葉に、マルクがどこか呆れた様子で肩を落とす。

「それでこの西側にいらしたんですね。魔女の方がこちら側に居るなんて珍しいと、先程もマルク様と話していたのですよ」

「西側？」

微笑みかけたラピスラズに、ルビィネルが戸惑った表情を見せる。

「何だ？ 西側というのは」

「へ？」

問いかけるルビィネルに、目を丸くするラピスラズ。レイヤに住んでいる者であれば、魔族であれ、人間であれ、東西で町が分離され、それぞれの種族で住む場所が決まっていることなど、知っていて当然のはずである。

「あの、失礼ですが、ルビィネル様は、どちらから……？」

「フレイヤだ」

「隣の国じゃないか！ どれだけ迷ってんだよ！」

ルビィネルの答えを聞き、マルクが思わず大きな声をあげる。フレイヤは、レイヤの隣にある、魔族のみが暮らす、レイヤよりも五倍ほど大きな国である。フレイヤとレイヤの間には、大きな山脈があり、その山を越えなければ、レイヤ側にはやって来れない。

「ここはレイヤの西側、人間たちの住む領域、ヤールです」

「ヤール……」

ラピスラズの解説を聞いたルビィネルが、少し考えるように首を捻る。

「つたく、どんな旅して来てんだよ」

「ここはレイヤなのだろう？ 私はレイヤに用があつて来たのだから、私の進んだ道は正しかったではないか」

「だからって、フレイヤからなら、火車とか、かしや炎列車とか、えんれっしや色々移動手段があつただろうが！」

「公共のものを使えば、見つかるだろう」

「誰に？」

「う……」

率直に問いかけるマルクに、ルビィネルが眉をひそめ、言葉を詰まらせる。

「何でもない」

「はあ？」

大きく首を横へと向け、マルクたちから視線を逸らすルビィネル。

誤魔化したつもりだろうが、まったく誤魔化せてはいない。顔をしかめるマルクの後ろで、ラピスラズが訝しむように、そつと目を細める。

「何か、温かい飲み物でももって来ましようかね。軽い食事も」

「ああ、ごめん。頼む」

「その間に、ルビィネル様に変なことをしてはダメですよ？ マルク様」

「しないよ！」

客間に流れる気まずい空気を感じ取ってか、ラピスラズが提案するように言う。マルクの怒鳴り声に送られるようにして、ラピスラズは、足早に客間を後にした。部屋にはマルクとルビィネルだけが、残される。

「ええーっと……」

二人きりになると、マルクが何を話そうかと、戸惑いながら、言葉を探す。

「なんで、三日も彷徨い歩いて、わざわざ、レイヤに来たんだ？」

「夢を叶えるためだ」

「夢？」

「ああ」

聞き返したマルクに、ルビィネルは、晴れやかな笑顔で頷いた。

「私は、“彩炎さいえんの魔女”になる」

「……っ」

そのルビィネルの言葉に、驚いた様子で、大きく目を見開くマルク。

「彩炎の、魔女？」

「ああ」

この世で一番の魔女に与えられる称号、“彩炎の魔女”。あらゆる炎を宿す魔女たちの、頂点に立つ魔女であるからと、その名が付けられた。レイール聖魔院に通う魔女は勿論、すべての魔女が目指すものの名である。だが、その称号を与えられる魔女自体が、百年

に一度、現れれば奇跡とされているので、目指すものと言うよりは、伝説に近い存在であった。

「私は彩炎の魔女となって、聖地マフレイヤに行く」

「聖地マフレイヤ……」

「ああ。すべての炎が生まれたとされる、この世界の始まりの場所だ」

繰り返したマルクに、説明するように言葉を続けるルビィネル。

「数多い魔族の中でも、彩炎の魔女と、そのパートナーだけが、足を踏み入れることを許されているという、禁断の聖地で……」

「知ってる」

「え？」

言葉を途中で遮るマルクに、ルビィネルが、不思議そうに首を傾げる。

「マフレイヤ、か」

その聖地の名を繰り返し、マルクがそっと、目を細める。

—— コーラル！ 俺、大きくなったら、マフレイヤに行くんだ

！

—— それは素敵な夢ですね、マルク…… ——

思い出される、幼い頃の自身の姿。

「俺も、行ってみたかったな……」

「え？」

マルクの小さな呟きを耳に入れ、ルビィネルが、戸惑うようにマルクへと視線を送る。

「しかし、随分と壮大な夢だなあ。彩炎の魔女に、聖地マフレイヤって」

「私が決めた夢だ」

どこか遠くを見つめるような表情を一転させ、明るく微笑んだマルクが、まるで茶化するようにルビィネルへと言葉を掛ける。すると

ルビィネルは、少し怒ったように口を尖らせ、はつきりとした口調で主張した。

「どんなに壮大であっても、私が叶える」

何の迷いもなく言い放つルビィネルを見て、マルクは何か眩しいものでも見るように、目を細める。

「そつか。じゃあ、頑張れよ」

そつと微笑むマルクの表情に、ルビィネルの夢を馬鹿にした様子はなかったが、どこか切なさのようなものが漂っていた。そのマルクの表情を見て、ルビィネルが少し眉をひそめる。

「そなた……」

「マルク様ー！ 扉を開けて下さーい！」

「へえへえ」

ルビィネルが何かを言う前に、マルクはルビィネルへと背を向け、客間の扉の方へと歩いていった。マルクが扉を開けると、料理やら飲み物に乗せたトレイを両手に、ラピスラズが再び姿を現す。

「さあ、ルビィネル様。遠慮なく、召し上がって下さいね」

「あ、ああ。すまない」

「ラピスは、料理の腕だけはいいから、味は保証するよ」

「“だけ”は余計ですよ。マルク様」

あれこれと言葉を交わすマルクとラピスラズを見つめながら、ルビィネルはどこか、考え込むような表情を見せていた。

翌日、レイール聖魔院。

「お！ 珍しく、もう来てんじゃ〜ん」

朝一番の講義の教室で、一人、座っていたマルクのもとへと、明るく歩み寄って来たのは、ポンドであった。何の悩みもなさそうに、明るい笑みを浮かべて、ポンドが自然と、マルクの横の席に座る。

「いっつも、遅刻ギリギリのくせによ」

「今日は、ちよつとな」

ポンドの言葉に、マルクが疲れたように肩を落とす。昨日出会った魔女、ルビィネルは、今朝、ラピスラズが目覚めた時にはすでに、客間から姿を消していた。ラピスラズに起こされ、そのことを知らされたマルクは、まだ日も昇らぬ内から、近くの山の中を探したのだが、結局、ルビィネルを見つけることは出来なかった。ルビィネルが、マルクの屋敷に留まる理由もないので、恐らく、出て行ったのだろう。引き止める義理はないが、助けたり、食事を振る舞ったりしたのだから、挨拶の一つくらい、あっても良かったのではと思う。

「結局、何だったんだろ……」

「ああ？」

「何でもない」

ポンドに話す気力すらなく、マルクが机の上に突っ伏す。

「よお、お前等。聞いたかあ？」

「んあ？」

そこへ、別の魔士の青年が、マルクとポンドのもとへとやって来る。

「今日、魔女科の赤炎クラスに、新しい魔女が入るんだってよ！」
青年の言葉に、マルクが突っ伏していた顔を、ゆっくりと上げていく。

「ふうーん。別に新しい魔女なんて、ちよくちよく入って来てんだろ」

「それが、今回の魔女は別物なんだって！ フレイヤの聖魔院からの編入らしいぜ！？」

特に興味なさそうに答えたポンドに、青年は、熱い口調で言葉を続ける。

「フレイヤ？ フレイヤからなんで、わざわざ、格下のレイールの魔院なんか」

「だから珍しいんじゃない！ フレイヤ出身の魔女なんて、エリートだろ！？ この聖魔院に通ってる魔女たちとじゃあ、天と地ほどの差があるぜ！」

「おっ前、そのうち、その辺の魔女に刺されるぞ？」

興奮気味に話す青年に、ポンドが呆れた視線を向ける。

「まあ、あのシリング・ウェーガットのパートナーにするために、わざわざ、フレイヤから呼び込んだって噂もあんだけどなあ」

「あああ、それなら納得。最上級魔士様は、何でも特別扱いだもんな」

二人の会話を聞きながら、マルクが昨日見かけたシリングの姿を思い出し、そつと目を細める。

「いいよなあ、最上級魔士様は。俺だって、エリート魔女のお近付きになりてえぜ」

「お前じゃ無理じゃね？」

「んだよ、冷てえなあ。お前も、エリート魔女のお近付きになりてえとか、思わねえの？」

「思わねえよ。俺、パートナーにする魔女はたった一人、心に決めてんだもん」

「また、それがよ」

心を示しているのか、左胸を指差すポンドに、青年は呆れたように肩を落とす。

「なあ、マルクは……！ って、まあ、マルクは思わねえか。最下級

魔士とは、無縁の話だもんな」

「放つとけ」

その言葉に、マルクが顔をしかめる。遠い話すぎるためか、ルビネルのことが気になっていたからか、馬鹿にしたような笑みを浮かべる青年にも、不思議と、腹は立たなかった。

「まあ確かに、無縁の話だなあ」

まるで興味を持っていない様子で、マルクがそっと、呟いた。

朝一からは眠気が相当にきつい、魔炎基礎学という堅苦しい授業を終えると、マルクはポンドと共に、教室を出た。

「次、魔炎の実技演習だけど、どうする？」

「どうするって、パートナーいない俺たちじゃ、実技授業に出たって意味ないだろ」

「だよなあ」

マルクの言葉に、ポンドが軽い笑みを浮かべて頷く。

「ああー、昼まで暇時間かあ。もういつそ、帰っちゃう？」

「いや、今日は午後に、マフレイヤ概論があるから居る」

マルクの答えに、ポンドが目を丸くした後、困ったように笑う。

「相変わらず好きだねえ、“聖地マフレイヤ”」

「最下級魔士だって、憧れんのは自由だろ」

「そりゃそうさ」

廊下を進みながら、言葉を交わすマルクとポンド。少し拗ねたように口を尖らせるマルクに、ポンドはそっと笑みを向ける。

「お前も一途だねえ。俺と一緒に」

「ポンドと一緒にされたら、俺の一途の価値が下がる」

「酷でえなあ。俺、結構、一途くんよお？」

「はいはい……って、うわー！」

「キャッ！」

ポンドの言葉を軽くあしらいながら、マルクが廊下の曲がり角を曲がったその時、曲がり角の向こう側から歩いて来た者と、思いきりぶつかってしまった。高い声の悲鳴と共に、マルクのぶつかった人物が、その場に尻もちをつく。

「あつ、ごめん！ 大丈夫でっ……！うっ……」

慌てて、座り込んだその人物へと声を掛けようとしたマルクであったが、その人物の顔を見て、思わず言葉を止めてしまう。

「大丈夫！？ トーパー！」

「痛たあゝい！」

一緒に歩いていたのだろう、明るい色の洋服に身を包んだ魔女たちに声を掛けられながら、甘えたような声をあげたのは、長い金色の髪に、青色の瞳の、美しい少女。それは昨日、マルクを、“ブタとパートナーになったほうがマシ”と言つて、こっぴどく振り払った魔女であつた。

「もう、どこ見て歩いて……！つて、あんた……」

顔を上げたその魔女、トーパーも、昨日振ったばかりのマルクに気付いたのだろう。その美しい表情を、見る見るうちに歪めていく。「何？ また性懲りもなく、パートナーにしてくれとか、言いに来たわけ？」

立ち上がりながら、大きく顔をしかめ、トーパーが非難するようにマルクを見る。

「俺はっ……」

「あのねえ、俺たちはただ、廊下を歩いてただけ。変な言いばかりは、よしてよね」

主張しようとしたマルクを庇うように、ポンドが一步前へと出てトーパーへと強い口調で言い放つ。

「だいたい、自分がそんなに、追いかけられるほど、いい魔女だと思つてるわけ？ 思い上がり、きついんじゃない？」

「んな！？」

「ちょ、ポンド……！」

挑発するような言動を取るポンドに、思いきり表情を引きつるトウーパと、焦ったようにポンドの方を振り向くマルク。

「ケンカ売って、どうすんだよ！」

「だって俺、ああいうタイプ、一番嫌いだし！」

注意するように言い放つマルクに、まるで反省した様子なくポンドが答える。揉め事を嗅ぎつけてか、近くの教室から、魔女や魔士やらが続々と、廊下を覗き込み始めていた。

「マルク？」

教室の一つから、他の魔女と共に、アメジエスも顔を出す。

「ん……？」

「あらあ？ あれ、何の騒ぎかしらねえ？ シリングくん」

今日も魔女たちに囲まれ、廊下を歩いてきた最上級魔士、シリングも、マルクたちの様子に気付き、その場で足を止める。

「何よ……」

マルクとポンドが言葉を交わす中、険しい表情を見せたトウーパが、先程までよりも低い声を発する。

「あんななんてねえ、この魔院の魔女、全員の笑い者なのよ！？」

物凄い剣幕で、捲し立てるように叫び、マルクを睨みつけるトウーパ。

「何の才能もない、最下級魔士！ あんたにパートナー申し込まれたって、皆で笑ってんの！ パートナーになんか、なってやるはずがないのにつて！」

トウーパの容赦ない言葉に、マルクが厳しい表情で、眉をひそめる。

「そりゃ、そうよね！ あんたなんかとパートナーになったら、その時点で、魔女人生、終わりだもの！」

どんどんと向けられる言葉に、言い返すことも出来ずに、ただ拳を握り締め、きつく唇を噛み締めて、徐々に俯いていくマルク。

「あんたみたいな最下級のパートナーになる魔女なんて、この魔院のどこにも居ないわ！ いい加減、諦めて、とっとと魔院を出てっ

てくくない!？」

多くの者が注目する廊下に、トウーパの甲高い声が響き渡る。

「うっわぁ」

「何もあそこまで……」

トウーパとマルクの様子を見つめていた魔女たちから、トウーパを非難するような声が漏れる。その中で、一際険しい表情を見せたアメジエスが、マルクたちのもとへ行こうと、教室の出口へと向かう。

「え？」

教室を出て行こうとしたアメジエスが、目の前を横切っていく姿に、言葉を止めて、目を奪われる。

「あんたねえ」

表立ってはあまり表情を変えていないが、纏う雰囲気からは、確かに怒りを感じさせるポンドが、さらに前へと出て、トウーパと距離を縮めようとする。

「いい加減につ……」

「少し、退いていてくれるか」

「へ？」

前へと出て行こうとしたポンドの肩を掴み、後ろへとさがらせ、代わりにマルクのすぐ横へと出て行く人物。振り返ったポンドが、自分の代わりに前へと出て行く人物を、戸惑うように見つめる。そして、マルクもまた、その人物を見て、驚きの表情を見せた。

「お前……!」

マルクの横に立った、長い赤髪の少女が、そつと微笑む。

「ルビィネル!？」

そこに現れたのは、昨日出会い、今朝、屋敷から姿を消した、ルビィネルであった。微笑みかけるルビィネルとは対照的に、マルクはわけがわからないといった様子で、ただ戸惑いの視線を、ルビィネルへと向ける。

「な、なんで、お前が」

「あんだ、確か、今日来たっていう、フレイヤの……」

「フレイヤ？　じゃあルビィネルが、編入してきたっていう……」

トウーパもどうやら、ルビィネルを知っている様子で、戸惑いの視線を送る。

「そなた、名はマルク・クラウドでよかったか？」

「へ？　なんで今、名前なんて」

「いいから、答えろ」

「そ、そうだよ。マルク。マルク・クラウド」

今、聞かなくてもいいこととは思うがと、考えを巡らせながらも、答えないわけにもいかず、マルクが気まずい表情のまま、渋々名を名乗る。

「マルク・クラウドだな。よし」

「へ？　って、痛ってええ！」

マルクの名を確認し、満足した様子で頷いたルビィネルが、何の前振りもなく、突然、その拳を突き上げ、マルクの顎下を、思いきり殴りつける。まさか、拳が向けられるなど、夢にも思っていないかったマルクは、口が開いたままだったところを殴られ、強く唇を噛み、大きくその表情を歪めた。噛んでしまったため、唇の端から、赤い血が流れる。

「いきなり、何す……！」

「貰うぞ」

怒鳴りあげようとしたマルクの唇の端を、右手の親指で拭い、流れ落ちたマルクの血を、親指の表面へとつけるルビィネル。ルビィネルのその行動に、マルクが頬を少し、赤く染める。

「な、何を……」

マルクが戸惑うように見つめる中、ルビィネルが、左手の親指を自身の口元へと持っていく。ルビィネルが親指へと歯を立てると、親指から、マルクと同じ赤い血が流れた。ルビィネルが両手を交差させ、マルクとルビィネル、それぞれの血のついた両親指を、上下から、重ね合わせる。

「我が炎の神、マフルよ。今ここに、血と血の契約を行う」

「え……？」

ルビィネルの口から奏でられるその言葉に、驚いたように、目を見開くマルク。

「汝の偉大なる炎により、我が身に宿りし赤炎を、我が選びし者に託せ」

「あれって……」

「魔唱^{まじやう}？」

廊下に凜として、響き渡るルビィネルの声を聞きながら、マルクとルビィネルの様子を、ポンドやアメジェスも、戸惑った表情で見守る。

「ちょ、ちよつと待てよ！ その魔唱^{まじやう}って……！」

「今、ここに、我がパートナーを決する！」

マルクが慌てて声を出すにも関わらず、ルビィネルは言葉を続け、そして、胸の前で重ね合わせていた両手を、高らかと天井へ突き上げた。

「その者の名は、マルク・クラウド！」

ルビィネルが誇らしく、マルクの名を叫びあげると同時に、天井へと突き上げられたルビィネルの両手から、真っ赤な炎のような、強い光が飛び出した。あまりに強い輝きに、見守っていた者たち全員が、思わず目を伏せる。ルビィネルの両手から飛び出した光は、天井のすぐ下で二つに分かれ、マルクとルビィネルの方へと、それぞれ降り落ちた。

「熱^{あつ}ち！」

降り落ちた光が、右手の甲を直撃し、マルクが思わず声をあげる。あまりの熱さに、火傷でもしたのではないかと、マルクが目を開けた時には、先程までの強い光は収まっていた。そして、マルクの右手の甲には、火傷の痕はなかったが、円の中に十字架の描かれたような、黒い紋様が刻みこまれている。

「何だ？ これ」

「う、嘘、でしょ……？」

紋様に気を取られていたマルクが、正面を向くと、トゥーパが、どこか青ざめた表情で立っていた。

「パートナー、契約？」

驚きを隠せない様子のアメジェスが、茫然と呟く。

「しかも今の魔唱は、“本結”^{ほんけつ}の契約だぞ」

「本結？」

同じく啞然とした様子のポンドの声に、マルクが振り返りながら、首を傾げる。

「魔女試験の為とか、そういう期間限定のパートナー契約が“偽結”^{ぎけつ}。逆に、一切期間のない、どちらかが死ぬまで続く、血と血で

結ぶパートナー契約が“本結”」

「どっちかが、死ぬまで……？」

ポンドの解説を受け、マルクがその表情を青ざめさせる。

「本、結……」

マルクがやつと事態を呑み込み、険しい表情となる。目の前に立つトゥーパが、こんなに青ざめた表情をしているのは、恐らく、本結の契約であることが、わかっていたからなのだろう。

「ちよ、ちよつと！ お前、何やって……！」

「しょ、正気！？ あんた、フレイヤから来た魔女でしょ！？ 最下級魔士なんかと、本結の契約なんて……！」

「これで、マルクが魔院を辞める必要はないな」

問いかけようとしたマルクの声を、勢いよく遮るトゥーパ。契約を行った本人以上に、慌てふためいているトゥーパに、ルビィネルは、一切焦った様子なく、穏やかに微笑みかける。

「今後は、私のパートナーを、最下級などと言って、笑い者にするのは止めてくれ。頼むぞ」

余裕たつぷりに微笑むと、ルビィネルはトゥーパから視線を逸らし、未だ、茫然としているマルクと向き直った。

「では、行こうか。マルク」

「え？ あっ」

「“移り火”」

ルビィネルが左手で、マルクの右手を取ると、二人の周囲を赤い炎が包み、一瞬にして、二人の姿を掻き消した。二人が居なくなり、静まり返った廊下で、トウーパが、力なく座り込む。

「こりゃ、困ったことになったもんだな」

腕を組んだポンドは、少し楽しげに微笑む。

「……………」

一連の出来事を見つめたシリングは、どこか厳しい表情で、目を細めた。

自分の体を真っ赤な炎が包んだが、まるで熱さはなく、炎が消えたと思うと、そこはもう、魔院の廊下ではなく、屋外であった。何度か見回していると、見覚えのある場所であることに気付く。そこは、魔院の建物の一つの、屋上であった。広い屋上の中心に、マルクとルビィネルが、手を繋いだ状態で立っている。

「あ、あれ？ 俺……」

「移動の炎、“移り火”。魔炎の一種だ」

「お前、また魔炎使って……！ あっ」

解説するように言うルビィネルに、言い返そうとしたマルクが、まだ繋いだままの手に気付き、少し頬を赤らめて、慌ててルビィネルの左手を振り払う。自分の右手と、振り払ったルビィネルの左手の甲に、同じ黒い紋様があることに気付き、マルクは眉をひそめた。

「これって……」

「“本結”のパートナー契約の証、“魔紋”まもんだ」

紋様を見つめるマルクに気付き、ルビィネルが自身の左手の甲に刻まれた紋様を見せるようにしながら、マルクへと説明の言葉を投げかける。

「魔紋の刻まれた同士の手を重ね合わせれば、魔唱なしに、炎を共有することが出来る。つまり、先程の“移り火”は、私ではなく、そなたが使ったのだ」

「俺が、魔炎を？」

「ああ。これが本結の契約だ」

「本、結……」

ルビィネルの口から放たれるその言葉に、一気に険しい表情となるマルク。先程のルビィネルとのやりとりや、ポンドの言葉は、すべて現実で、マルクが夢を見ていたとか、そうだったわけではないようである。

「マジ、かよ……」

マルクが、魔紋の刻まれた右手で、頭を抱える。

「なんでっ……なんで、俺とパートナー契約なんか、したんだよ！？」

顔を上げたマルクが、まるで責めるように、ルビィネルへと怒鳴りあげる。

「へ？」

「“へ”じゃない！」

惚けたような声を出すルビィネルに、マルクがさらに声を荒げる。

「もし、昨日のことで恩とか感じて、それで契約したっていうんなら……！」

「心配するな。そこまで恩に感じていない」

「それはそれで、どうだろ……」

あっさりと答えるルビィネルに、引きつった表情を見せるマルク。

「そなたは魔士で、パートナーとなってくれる魔女を探していた。

私は魔女で、パートナーとなってくれる魔士を探していた。だから契約した。何か、問題があるか？」

「大有りだ、馬鹿野郎！ さっき、会話聞いてなかったのか！？」

俺は……！」

「“最下級魔士”」

ルビィネルが発した自分の呼び名に、マルクが思わず表情をしかめ、言葉を詰まらせる。

「そうだよ。俺は、最下級魔士なんだっ……」

ルビィネルから視線を逸らし、深く俯いたマルクが、苦々しく言葉を落とす。不名誉極まりない呼び名ではあったが、その呼び名は事実であった。

「魔士試験だつて、試験官のミスで合格しちゃっただけだし、魔女九十九人にパートナー断られて、魔院皆の、笑い者、で……」

徐々に勢いのなくなっていくマルクの言葉を聞きながら、ルビィネルがそつと目を細める。

「だったら何だ？」

「何だじゃないよ！ お前、彩炎の魔女になるんだろ！？ 聖地マフレイヤに行くんだろ！？ だったら何で、俺と本結の契約なんかしたんだよ！」

大したことではないと言わんばかりのルビィネルに、マルクは再び顔を上げ、畳み掛けるように、次々と言葉を発していく。必死に叫ぶマルクを、ルビィネルは真剣な表情で、まっすぐに見つめていた。

「俺とパートナーになったりなんかしたら、お前の夢が……！」

「叶わないとでも、言いたいのか？」

遮るルビィネルの声に、マルクが言葉を止める。

「そうだよ。俺みたいな最下級魔士とパートナー組んで、彩炎の魔女になんか、なれるはずっ……」

「何故、そう決めつける？」

またマルクの言葉を遮ったルビィネルが、強い視線を、マルクへと向ける。

「何故、踏み出してもいないのに、その足を止めようとする？」

荒々しくはない、落ち着いた声だが、その言葉はまるで、マルクを責め立てているようであった。

「何故、夢見てもいないのに、諦めるようなことを言う？」

ルビィネルの銀灰の瞳が、マルクの瞳を突き刺す。

「何故、目指してもいないのに、“行ってみたかった”などと言うのだ？ そなたは」

「あっ……」

——俺も、行ってみたかったな……——

それは、昨日、聖地マフレイヤに行くと行ったルビィネルの前に、マルクが漏らした言葉であった。

「それ、は……」

答えとなる言葉を見つけることが出来ずに、そつと俯くマルク。

マルクは、子供の頃から、聖地マフレイヤに憧れていた。すべての炎が生まれたとされる始まりの場所を、いつか、自分の目で見てみたいと思っていた。だがずっと、思っているだけで、それを目指しはしなかった。行けるはずがないと、子供ながらにすでに、決めつけていたからである。ルビィネルの言った通りであった自分に気付き、マルクがどこか悔いるように、強く唇を噛み締め、拳を握り締める。

「そつ、だね。目指してもないのに、“行ってみたかった”とか、言う資格ないよな……」

力なく呟くマルクを見つめ、目を細めたルビィネルは、静かに魔紋の入った左手を伸ばし、きつく握り締められたマルクの右手を取った。

「なら、今から、目指せばいい」

「へ？」

力強く右手を掴まれ、マルクが戸惑うように顔を上げる。

「今から、その足を踏み出せばいい。今から、夢を見ればいい」

ルビィネルが口元を緩め、大きく微笑む。

「私が、そなたの夢も、一緒に叶えてやる」

何の迷いもない、晴れやかな笑みを、ルビィネルが、マルクへと向ける。

「私と共に、マフレイヤに行こう！ マルク・クラウド！」

「……！」

天高く、空まで響き渡るほどの大声は、まるで誓いのようで、その言葉を向けられたマルクはただ、驚きの表情で、目の前のルビィネルの見つめることしか出来なかった。

「そ、そんな、ことっ……」

「というか、もう本結の契約をしてしまったんだ。そなたに残された道は、共に目指すか、ここで死ぬか、の二択だ」

「へ？」

戸惑う間もなく、ルビィネルから突き付けられる現実。

「な、何だよ！ それええええ！」

マルクの大きな声が、屋上から、青々とした空へと、響き渡った。

百人目の魔女がくれた契約が、マルクのこれからの人生を、大きく変えることは、言うまでもない。

レイル聖魔院、院長室。

「随分と、軽率な真似をしたものですな」

感心した口調で話しつつも、その表情はどこか呆れたような様子の、一人の白髪の老人。魔士たちの制服と似たような法衣を纏ったその老人が、机に両肘をついたまま、ゆっくりと顔を上げ、前方に立つ人物へと視線を送る。

「ルビィネル殿」

院長室の中央に、堂々と立っているのは、ルビィネルであった。院長室には、その老人とルビィネルの姿しかない。聖魔院のトップである院長を前にしているというのに、ルビィネルにかしこまった様子はなく、どちらかという、院長の方がかしこまっているように見える。

「今回の編入は、あくまで社会勉強の一貫。パートナーを組むことは厳禁、というのが条件だったはずです」

院長が鋭い視線を投げかけるが、ルビィネルはまったく表情を変えずに、飄々としている。

「それを、初日から早速、しかも本結でパートナー契約を行ってしまうとは……」

「仕方ないだろう？ 魔女に罵られている、可哀想な魔士を、見て見ぬ振りなど出来なかったのだから」

ルビィネルの白々しい言葉を聞き、院長が深々と息を吐く。

「もし、これが、フレイヤ側に知れたら……」

「ああ」

大きく頷いたルビィネルが、どこか怪しげな笑みを浮かべる。

「だから、知れないよう、くれぐれもよろしく頼むぞ。院長」

不敵なその笑みを院長へと向け、魔紋の入った左手を軽く振り上げると、ルビィネルはあっさりと院長に背を向け、院長室を後にし

た。ルビィネルが去り、扉が閉まると、院長が再び、深く息を吐く。
「よろしいのですか？」

どこからともなく現れた、院長と同じ法衣を纏った眼鏡の女性が、
院長へと問いかける。

「構わん」

女性の問いに、院長は手短に答える。

「パートナーは、あの最下級魔士だ。いくら、あの魔女でも、何も
出来まい」

目を細めた院長は、どこか冷たく言い放った。

レイル聖魔院、第五演習室。

「だつから何度、言わせんだ！ てめえはあ！」

勉強の場であるはずの演習室に、荒々しい怒鳴り声が響き渡る。

「“放出”をやれつつってんだよ、“放出”を！ こうポンっと、
炎を前に飛ばすやつ！」

「だから、それが出来ないって言ってるだろ！？」

演習室の中央で、他の魔士や魔女たちに呆れた視線を向けられな
がら、怒鳴り合っているのは、マルクと、もう一人。紫がかった黒
色の短髪に、鋭い青色の瞳をした、妙に目つきも柄も悪い男であっ
た。三十代半ば頃であろうか。魔士の制服は着ておらず、全身黒一
色のシンプルな服装をしている。

「放出も出来ねえって、どういうことだあ！？ 魔炎操作の基礎に
なる、六つの炎技えんぎの中でも、一番簡単な技だぞ！？」

「出来ないもんは、出来ないんだから、仕方ないだろ！？ だいた
い、それを教えるのが、講師の務めだろうが！」

「んな簡単な技はなあ、養成学校で習ってくるのが当たり前なんだ
よ！ 特別手当出せ、コラァ！」

「出せるかあ！」

「んだとお!？」

徐々に熱さを増していく怒鳴り合いに、周囲から向けられる視線は、徐々に冷めていく。

「はぁ」

二人から少し離れた地面に、しゃがみ込んだルビィネルは、他の魔士や魔女同様、怒鳴り合いを続ける二人に、呆れた視線を送っていた。

「相変わらずみたいだねえ」

すぐ横から聞こえてくる声に、ルビィネルが顔を上げる。

「よっ」

「そなたは、確か」

「ポンド・アラールネル。マルクとは、養成学校時代からの、無二の親友! よろしくね、ルビィネルちゃん」

馴れ馴れしい口調で、ルビィネルへと軽い笑みを浮かべながら、ルビィネルのすぐ横へと座り込んだのは、ポンドであった。

「そなたはまだ、パートナーがいないのだろうか? 魔炎操作の講義には、出る必要はないのでは?」

「まあそうなんだけど、暇してるよりは、最下級魔士くんの奮闘振りを見学しようかと思ってね」

ルビィネルの問いかけに答えながら、ポンドが、未だ、怒鳴り合いを続けているマルクの方へと視線を向ける。マルクが突然、ルビィネルのパートナーとなったのは三日前。色々問題はああるが、とりあえずパートナーの魔女を得ることが出来たマルクは、パートナーがいなければ参加出来なかった、魔炎操作の実技講習に、参加し始めたのだった。だが、マルクの最下級魔士としての実力は偽りなく、毎日、担当講師を怒り狂わせているのである。

「しかし、放出も出来ないとは」

「予想を上回る最下級ぶりっしょ? うちのマルクくんは」

呆れを通り越したのか、感心するように言うルビィネルに、ポンドがどこか得意げに微笑みかける。

「あんたも凄い奴、パートナーにしちゃったねえ」

「まあ、じっくり進めばいいさ」

「進めばいいけどねえ」

「どう？ マルクは相変わらず？」

「おっ」

ルビィネルとポンドが言葉を交わしていると、そこにアメジエスが姿を現した。

「お前も見学かあ？ アメジエス」

「まあね」

「つてか、この講義、見学者多くね？」

後方を見回しながら、ポンドがポツリと呟く。二人の怒鳴り合いを見つめている者たちは、主に講義に参加している魔士と魔女だが、その他にも、講義には参加していない、魔女の集団や、魔士単独の者たちも多い。関係のない者がこれほど集まるのは、他の講義ではないことだ。

「パートナーの成り方が成り方だったから、注目を集めてるんじゃない？ ただでさえ、話題の二人だし」

「まあ、最下級魔士とフレイヤからの編入魔女だもんな」

アメジエスの言葉に、ポンドが納得した様子で頷く。ポンドからルビィネルへと視線を動かしたアメジエスが、ルビィネルへと右手を差し出す。

「自己紹介、まだだったわよね。私、魔女科の紫炎^{しえん}クラスのアメジエス。マルクやポンドとは、昔からの知り合いなの」

「赤炎^{せきえん}クラスに入ったルビィネルだ。よろしく」

ルビィネルとアメジエスが、互いに笑みを浮かべ、握手を交わす。随分と困らせてるみたいね、あのブラッドス先生を」

アメジエスが、マルクと怒鳴り合っている講師の方を見ながら、感心したように呟く。

「まあ、魔炎操作の一流の使い手からしたら、放出も使えないマルクは、特殊生命体に見えるだろうな」

「一流の使い手？」

「ええ。このレイール聖魔院でも、トップクラスの魔炎の使い手よ」
「では、あの者は魔族なのか」

マルクの前に立つブラッドスを見つめ、ルビィネルが少し目を細める。

「あまり、魔族らしくないな」

「確かに。ブラッドス先生って何か、ちょっと人間的だもんな」

「人間的というより、感情的でしょ」

大きく頷くポンドの横で、アメジエスはあまり興味のない表情を見せる。

「どうせ、俺なんか一生、放出使えないんだよお！ この講義に出る資格もないんだよお、俺なんてえ！」

「あ、ネガティブスイッチ入った」

頭を抱え、叫び散らしているマルクを見て、ポンドが慣れた様子で言う。

「ああーウゼ。おい、こいつのパートナー！ 何とかしろ！」

マルクと怒鳴り合っていた、目つきも柄も悪いブラッドスが、ルビィネルを呼ぶ。

「すまない」

「いいえ」

アメジエスに軽く謝ると、ルビィネルは立ち上がり、マルクとブラッドスのもとへと足早に歩いていく。

「お前、んな無能、パートナーにして、ナメてんのかぁ！？」

「どうせ、俺なんか無能なんだぁ！」

「無能の方が、伸びしろがあるだろう？」

「俺なんか、一生、無能なんだよぉ！」

ルビィネルが加わっても、怒鳴り声が止むことはなく、まだしばらく、講義は再開されそうにない。

「はぁーあ、やれやれだなぁ」

呆れたように肩を落としながらも、楽しそうな笑みを零すポンド

の横で、アメジエスは目を細め、どこか険しい表情で、マルクたちの様子を見つめる。

「んな顔するくらいなら、とっととパートナーになってやっとなら良かったのに」

「え？」

横から入ってくるポンドの声に、アメジエスが少し驚いたような表情を見せる。アメジエスが振り向くと、ポンドは鋭い瞳でアメジエスを見ていた。

「誰にも取られないって、思ってた？ そんな余裕ぶっこいてるから、ぽっと出の魔女に持ってかれちゃったんだよ」

挑発するように言うポンドに、アメジエスがあからさまに、表情をしかめる。

「燃やすわよ……？」

「へえへえ、ごめんなさい」

声を低くし、脅すというよりは、本気の口調で言い放つアメジエスに、ポンドはあまり悪びれた様子なく、平謝りし、その場からさっと立ち上がる。

「さあーで、マルクもパートナーゲットしたことだし、俺も、俺が心に決めた魔女を、口説き落としてこよっかなあ」

両手を上げ、伸びをしながら、ポンドが軽い口調で言い放ち、演習室の出入口へと歩いて行く。遠ざかっていくポンドの背を、アメジエスは険しい表情のまま、見送った。やがて、ポンドが演習室から出ると、アメジエスが、マルクとルビィネルの方へと視線を戻す。「とにかく、放出が出来るようになるまで、俺の授業出んじやねえ！」

「それは、授業放棄なんじゃないのか？」

「どうせ俺なんか、授業する価値もねえ男なんだよお！」

まだ終わらない騒ぎの中、まだ頭を抱え、嘆いているマルクを見つめ、アメジエスが険しかった表情を落ち着かせ、少し目を細める。「ねえ、今日も休み？ トウーパ」

背後から聞こえてくる魔女たちの会話に気付き、アメジエスが後方を振り返る。

「最近、ずっとじゃない？」

「よっぽど、堪えてんでしょ。あの二人が目の前で、本結契約しちゃったことが」

「トウーパの高いプライドが、ズツタズタって感じだったもんねえ」

「あの二人のこと、魔院中で話題になってるし、しばらくは講義、出てきにくいんじゃない？」

会話をしている魔女は、マルクがトウーパと衝突したあの日、トウーパと共に居た魔女たちだった。恐らくはいつも行動を共にしているのだから、トウーパ自身を心配している様子は特になく、噂話の一つのように、楽しげに話している。

「……っ」

魔女たちの会話を受け、アメジエスは何やら思うところがあるように、眉間に皺を寄せた。

「お前、聞いたか？ フレイヤからの編入魔女の話」

「ああ。陰険魔女に絡まれてた最下級魔士を、パートナーにしちまったんだろ？ しかも本結で！」

「すっげえ思いきりだよなあ！ 俺、今日の講義、見に行つたぜ！」「いいなあ！ 俺も行けば良かった！」

魔院の中庭に行く魔士の制服を纏った者たちが、楽しげに会話をしている。先程から、通る者すべてが、マルクとルビィネルのことを、話題にしていると言ってもいい。魔士も魔女も関係なく、皆が二人に興味を示している。そんな皆の会話を、中庭の目立たぬ、端のベンチに一人、腰掛けたトウーパは、不快な表情で聞いていた。

「何よっ」

金色で彩られた美しい爪を伸ばした、真っ白な美しい右手を、トゥーパが、血管が浮き出るまで強く、握り締める。

「あんな奴等……」

——これで、マルクが魔院を辞める必要はないな？ ——

思い出される、勝ち誇ったようなルビィネルの笑みに、トゥーパがさらに拳を握り締め、唇を噛み締める。マルクとの本結により、嘲笑われるかと思ったルビィネルであったが、皆の反応はむしろ良く、妙にルビィネルを英雄視した。そのお陰で、二人がパートナーとなるきっかけを作ったトゥーパは、すっかり悪者扱いされ、ルビィネルよりも嘲りの対象となってしまうたのだ。周りの視線が痛く、講義に出ることも出来なくなった、自分の現状を見つめ、トゥーパがまた、怒りを沸き上がらせる。

「何なのよ……！」

トゥーパが、握り締めた拳を振り上げ、強くベンチへと叩きつける。

「ストレスは、お肌の大敵ですよ？ 美しい魔女さん」

前方から降り落ちて来る声に、トゥーパが不快感いっぱい表情のまま、ゆっくりと顔を上げる。そこに立っていたのは、サラサラとした茶色の髪に、大きめの金色の瞳の、まだ若い青年であった。魔士の制服を纏っている。青年は、満面の笑みを浮かべているわりに、少しも感情の伝わって来ない、不思議な雰囲気を持っていた。

「一介の魔士ごときが、慣れ慣れしく、私に話し掛けないで」

「やれやれ。本当に、気位の高い魔女さんだ」

睨みあげて言い放つトゥーパに、青年が困ったように肩を落とす。「どうして魔族っていう生き物は、こつも、無駄にプライドの高い方ばかりなんでしょうねえ。だから僕は、いつもいつも……」

「私、今、機嫌が悪いの」

長々と続きそうだった青年の言葉を、トゥーパが勢いよく遮る。

「燃やされなくなったら、今すぐ、ここから消えて」

脅迫めいたトゥーパのその言葉を聞いて、青年は、怯えるどころか、どこか、満足げに微笑む。

「貴女のその、塔のように高いプライドを、傷つけた者たちが、許せないのでしょうか？」

試すように問いかける青年に、トゥーパの表情が、かすかに動く。「何が言いたいのか……？」

答えを急ぐように問うトゥーパに、青年が口角を吊り上げる。

「貴女のその“憂さ晴らし”、このボクにぜひ、協力させてはいただけませんか？」

うかがうように問いかける青年の右手から、黒光りした体に、四枚の羽根の生えた、鋭い赤色の瞳の、怪しげな一匹の虫が飛び出した。

全講義、終了後。レール聖魔院、大図書館。

「うううん……」

徐々に空も赤く染まり始めた夕暮れ時、マルクは一人、大図書館内の机に向かい、何やら分厚い本と、険しい表情で睨み合っていた。吹き抜け二階建ての図書館は、一階、二階、どちらにも机と椅子が並べられており、魔士や魔女が皆、本を手に、勉強を行っている。

「調べ物か？」

「へ？」

突然、話し掛けられ、マルクが本から目を離し、顔を上げる。すると、そこには、マルクが座る席のすぐ傍に立ち、マルクに微笑みかける、ルビィネルの姿があった。

「ルビィネル」

「“養成学校生のための、六つの炎技”？」

マルクの読んでいる本のタイトルを見たルビィネルが、戸惑うように眉をひそめる。

「ああ、養成学校の教科書。図書館に置いてあったから、読み直してみようかと思って」

ルビィネルに答えながら、マルクが少し苦い笑みを零す。

「随分と熱心なんだな。昼間、一生使えないんだと、嘆いていたわりに」

「嘆くのはもう、癖みたいなもんだよ」

からかうように言うルビィネルに、拗ねるように口を尖らせるマルク。

「嘆くのは嘆くけど、でも、すぐに諦めずに、出来ることから少しずつ、やっていこうかと思って」

口元を緩めて、マルクが穏やかに笑う。

「せっかく、お前がチャンスくれたんだし」

微笑むマルクに、ルビィネルが少し、驚いたような表情を見せる。だが、すぐにその表情は緩み、ルビィネルはどこか、楽しげに微笑んだ。

「そなたは、単純だな」

「放つとけ！」

ルビィネルの言葉に、マルクが思わず怒鳴る。

「どうせ、俺は単純なんだよー。思考回路とか、三本くらいしか通ってねえんだよー」

視線を落としたマルクが、いじけるように呟く。そんなマルクを見て、ルビィネルがホツとしたような笑みを落とす。

「いや、三本も通ってないだろう」

「落ち込み中に、さらに凹ませるようなこと、言っな！」

確信めいて言い放つルビィネルに、マルクが強く言い返す。

「そっぴや、なんで、お前はここに？」

「共に帰ろうと思って、探していた。一人で帰ると、道に迷う可能性が高いからな」

「偉そうに言っなよ」

堂々と方向音痴宣言をしているルビィネルに、マルクが少し呆れた表情を見せる。

「けど、よく、俺がここに居るってわかったな。図書館なんて俺、初めて来たのに」

「そなたとは、魔紋で繋がっているからな。魔紋の波動を辿れば、居場所くらい、すぐにわかる」

「へえー、そりゃ便利だな」

右手の甲に刻まれた魔紋を見ながら、マルクが感心した様子で声を出す。

「じゃあ俺も、お前の居場所が感知出来るってこと？」

「ある程度の魔力がないと、波動は辿れないから、そなたにはまず無理だな」

「あ、そう……」

あつさりと言い放つルビィネルに、元氣なく肩を落とすマルク。

「そうだ。マルク、ちよつと来い」

「え？」

マルクの腕を掴み、椅子から立ち上がらせるように、引つ張り上げるルビィネルに、マルクが戸惑った表情を浮かべる。

「な、何だよ？ 俺、今、勉強をつ……」

「教科書を読んでも理解出来なかったから、今、この状態なのだろう？」

マルクの言葉を退け、ルビィネルが得意げに微笑む。そのままルビィネルに強く、腕を引かれたため、マルクは机の上に、読んでいた本を放り投げた状態で、ルビィネルと共に、図書館を出た。講義が終わり、もうほとんど人通りのない中庭を進んで、各教室のある煉瓦の建物へと入る。廊下を突き進み、ルビィネルが向かった先は、昼間にブラッドスの講義を受けた、第五演習室であつた。

「演習室なんか、何の用なんだ？」

「演習に決まっているだろう？」

不思議そうに問いかけたマルクに、当然のように答えたルビィネルが、掴んでいたマルクの腕を離し、マルクの右手へと、自身の左手を伸ばす。

「これは、前にも説明したな？ 魔紋の刻まれた同士の手を重ね合わせることで、契約の合図」

その言葉通りに、ルビィネルが、魔紋の刻まれた左手で、魔紋の刻まれたマルクの右手を握る。

「契約すれば、魔炎を共有出来るが、しばらくすれば共有の効果は途切れ、再度の契約が必要となる」

「しばらくつて、どんくらい？」

「その時々だ」

「結構、曖昧なんだな」

正確さに欠けるルビィネルの問いに、少々、困った表情を見せるマルク。

「目醒めよ、我が赤炎」

ルビィネルが凜々しく言葉を発すると、発せられた途端に、マルクは、ルビィネルと重ね合わせている右手から、熱い、燃え上がるような何かが、伝わってくるように感じた。その熱感、皮膚の外側からではなく、内側から、まるで血液内を流れるように、伝わってくる。

「これが、私が魔炎を解放する際の魔唱。そして契約により、私の解放した魔炎は今、そなたと共有している状態だ」

ルビィネルが握った手を軽く上げ、目の高さのところまで持つていく。

「どうだ？ 何か感じるか？」

「んん、何かすっごいホッカホッカするものが、血が流れるみたいに、体中に広がってる感じがする」

「それが、私の魔炎だ」

マルクの答えを聞いたルビィネルが、そっと微笑む。

「これが、魔炎？」

「そうだ。もっとホカホカを意識してみろ。そなたが魔炎を知ろうとすれば、やがて魔炎は、そなたの目に映る」

「魔炎を、知る……？」

ルビィネルの言葉に促され、マルクが体中を駆け巡る、その温かいものへと意識を集中させる。すると、最初は感覚だけであった温もりが、徐々にはつきりとしたものとして感じ取れ、やがて、マルクの体全体を包み込む、赤い光の帯のようなものが見え始めた。その光を見て、マルクが少し驚いたような表情を見せる。

「これが、魔炎？」

「ああ」

問いかけるマルクに、ルビィネルが大きく頷きかける。ルビィネルの周囲にも、マルクと同じように赤い光が見える。同じ光に包まれているということが、魔炎を共有しているということなのだろう。「すごい。本当に見えた」

「次は、放出だ」

「へ？ 放出？」

ルビィネルのその言葉に、マルクが目丸くする。

「お前、もしかして、俺に放出を教えてくださいようとしてるのか？」

「それ以外の何に見えるのだ」

今頃気付いたマルクへと、呆れた視線を送るルビィネル。

「そなたのような単細胞生物には、教科書に書かれた内容を理解し、かつ、それを実行する能力など、初めから、備わっていない」

「ここ最近で一番、酷い悪口だわ」

ルビィネルのあまりの言いように、マルクは、怒鳴る気力も起きず、ただ呆れた表情を見せる。

「だから、感覚で覚える。いいか？ 今から、ここに魔炎を集中させる」

そう言つて、ルビィネルが、マルクの右手を握る、自身の左手を振り上げる。

「集中つて……うわ！」

マルクが言葉の意味を問う間もなく、二人の握り合った手のもとへ、二人の全身を包み込んでいた赤い光が集まっていく。集まった光は、その眩さを増し、直視しては目が潰れてしまいそうなほどに輝き始める。集まった光は、二人の手を包み、まるで炎のように揺らめき、燃え上がる。そして、集まったのは、光だけではなかった。「熱ちちちち！」

手を包む光から伝わって来る強い熱に、マルクが思わず声を上げ、その熱さから逃れようと、ルビィネルの手を離そうとする。だが、ルビィネルは強くマルクの手を握り締め、逃そうとしなかった。

「逃げるな！」

「逃げるよ！ このままじゃ、火傷するだろうが！」

強く言い放つルビィネルに対し、マルクも負けじと言い返す。

「魔炎を恐れる者に、魔炎は力を貸さぬ！ 魔炎を……」

ルビィネルが、燃え盛る炎越しに、まっすぐにマルクを見つめる。

「私を信じる！ マルク・クラウド！」

力強いその言葉に、逃げようとしていたマルクの手が止まる。逃げることを止めた途端、不思議と、熱さはなくなった。いや、伝わる熱感はそのままだが、焼かれてしまうという恐怖がなくなったといった方が正しいかも知れない。

「それでいい」

落ち着いたマルクを見て、ルビィネルが満足げに笑う。

「手に魔炎を集中させたまま、狙いを定める」

ルビィネルが、持ち上げた左手を、マルクの右手ごと、前方へと突き出す。突き出した二人の手の前方には、演習で使われる、大きな藁の人形が立っていた。恐らくはあれを、狙いとしているのだろう。ルビィネルが、その銀灰の瞳を、鋭く細める。

「狙いが定まったら、集めた魔炎を、一気に放つ！」

「うわ！」

突き出した手から、魔炎が放たれた瞬間、マルクの右手を、後ろへと押し出されるような感覚が襲った。マルクの右手を弾き、二人の手から飛び出した魔炎は、まっすぐに藁人形にぶつかり、一瞬にしてその姿を黒焦げにした。黒く焦げた藁が、細かく分解され、地面へと崩れ落ちたその光景を見つめ、マルクが啞然とした表情を見せる。

「す、凄い……」

「これが、放出だ」

ルビィネルはそう解説したが、今のそれは、マルクの知る放出ではなかった。養成学校時代の授業でも、昼間の講義でも、藁人形を一瞬にして燃やし尽くしてしまうような、そんな放出を使う者はいなかった。今まで見て来た、どの魔炎よりも、ルビィネルの魔炎が速く、強く、そして、熱い。

「やっぱりお前って、すごい魔女なんだな」

改めて感心した様子で呟くマルクを横目に、ルビィネルが少し、口元を緩める。

「当然だろう？ 私は、魔女の頂点に立つ者だぞ？」

「ハハ、それもそっか」

自信満々の笑みを浮かべるルビィネルに、つられるようにして、マルクも笑みを浮かべた。

「今の感覚を忘れないうちに、次は、そなただけで放出を使ってみる」

そう言つて、ルビィネルが、マルクの右手から手を離す。

「俺だけで？」

「今のはあくまで、私が補助したものだ。魔紋の刻まれた手を重ね合わせている間のみ、私がそなたの炎技を補助出来る」

「じゃあ、この前、“移り火” っていうのが使えたのも？」

「ああ。私が補助したからだ」

腕を組んだルビィネルが、数歩後ろへ下がり、マルクとの間に距離を取る。

「だが、手を繋いだままでは動きも鈍るし、手を離されてしまつては、成す術がなくなる。だから、そなた単体でも、炎技を使いこなす必要があるのだ」

「成程、成程」

ルビィネルの言葉に何度も頷いたマルクが、ルビィネルの手を離れた右手を、改めて、じっくりと見つめる。手を離れた後も、ルビィネルと共有している魔炎を、感じることは出来た。全身を包む光も、消えずに見えている。

「ええーっと、魔炎を右手に集中つと」

右手を掲げたマルクが、魔炎を集中させようと、真剣な表情を見せる。

「ううーん、うううーん！」

集中していることを表しているのであろう唸り声だけは大きいものの、マルクの右手に、魔炎が集まっていく様子は一切ない。

「理解力と実行力だけでなく、集中力も備わっていないのか」

「うるさいわ！」

深々と肩を落とすルビィネルに、マルクが思わず振り向き、怒鳴りあげる。

「どうせ俺には、知力も体力も魅力も備わってないよ……」

「これがネガティブスイッチというものか」

全身から陰湿な雰囲気醸し出し、一気に暗くなっていくマルクを見て、どこか感心したように呟くルビィネル。

「演習室の無断使用は、処罰の対象よ？」

入口の方から聞こえてくる、よく通る女性の声に、マルクとルビィネルが同時に振り返る。

「ああ、すみません。すぐに出っ……って、あつ」

相手を確認せぬまま、魔院の講師だと思ったのか、謝りつつ振り返ったマルクであったが、入口に立つその人物を見ると、言葉を止め、眉間に皺を寄せた。

「お前、はっ……」

「それとも、処罰が希望なのかしら？」

金色の巻き髪を手で振り払いながら、マルクへと冷たい笑みを浮かべたのは、トゥーパであった。こっぴどくパートナーを断られ、そして、ルビィネルとのパートナー契約をするきっかけともなった魔女。マルクにとっては、因縁の魔女とも呼べる。

「何だ。また、そなたか」

ルビィネルがどこか呆れたような表情で、軽く肩を落とす。

「先日の謝罪にでも来たのか？」

「ええ、そうね」

あつさりと頷くトゥーパに、マルクが戸惑うように首を傾ける。

「ぜひ、謝罪してもらいたいわ」

「は？」

トゥーパの言葉に、眉をひそめるルビィネル。

「あなたたちのせいで、私、魔院の皆からなんて呼ばれてると思う？ “陰険魔女”とか“暴言魔女”とか、もう散々よ？」

「事実ではないか」

「おい！」

涼しげな顔で、トウーパにも負けぬ暴言を吐くルビィネルに、マルクが思わず注意するように声を発する。

「ケンカ売ってどうするんだよ！」

「先にケンカを売られたのは、そなただろう？ 腹が立たぬのか？」

「俺はああいうの、言われ慣れてるから、今更、腹とか立たないんだよ」

「困ったものだな」

マルクの主張を聞いたルビィネルが、少し険しい表情を見せる。

「あなたたちのせいで、もう、私のプライド、ズタズタなのよねえ」

二人のやりとりを特に気にすることなく、冷たいままの微笑みを浮かべたトウーパが、言葉を続けながら、ゆっくりとその細い右手を掲げていく。

「起きてえ、私の黄炎^{おうえん}」

その白い右手が、黄色の炎を帯びていく。

「だから、謝罪して。あなたたちの、すべてで」

「……！」

トウーパから向けられる黄色く燃え上がる炎に、マルクとルビィネルは、大きく目を見開いた。

「おうれっか
“黄烈火”！」

「いええええ！？」

トウーパの右手から放たれた黄色の炎が、激しく燃え盛りながら空中を走り、まっすぐにマルクのもとへと飛んでくる。向かってくる炎を見つめ、頭を抱え、声をひっくり返すマルク。

「ダメだあ！ 俺、もう、死んだあゝ！」

「簡単に諦めるな！」

「うおっ！？」

マルクのすぐ傍へと駆けて来たルビィネルが、頭を抱えていたマルクの右手を力強く引き剥がし、握り締めて、向かってくる黄炎へと突き出す。

「此の身を守れ、我が赤炎！ “せきへきか赤壁火”！」

突き出されたマルクとルビィネルの手から、赤い炎が放たれ、二人の前方に立ちはだかるように巨大な壁を作ると、その壁が、トウーパの向けた黄炎を掻き消す。

「おお、すっげえー！ 何だ、今の！？」

「六つの炎技の一つ、“防御”だ」

「へえー、お前、他の炎技も使えるんだな」

「当然だろう。だいたい、今、そんなことに感心している場合か」
輝くような瞳で、目の前の炎の壁を見つめるマルクに、ルビィネルが呆れたように言い放つ。二人が手を解くと、前方の壁もすぐに消えた。ルビィネルが厳しい表情を見せ、今まさに黄炎を向けたトウーパと向き直る。

「どちらが処罰の対象だ」

ルビィネルが少し、吐き捨てるように言う。

「今のは、人を燃やせる炎だぞ？ そのようなものを、同じ魔院の者に向けるなど、何を考えている！」

「言ったでしょう？ 謝罪してっ」

声を荒げたルビィネルにも動じることなく、トウーパは落ち着いた様子で微笑む。

「そうじゃないと、私、許せそうにないの。 “黄烈火”！」

「なっ!？」

「あいつ、また……!」

またしても黄炎を二人へと向けて放つトウーパに、マルクとルビィネルがそれぞれ、驚きの表情を見せる。先程よりも速い炎は、今度は防ぐ暇もない。

「避ける、マルク！」

「どわあああ！」

マルクとルビィネルが左右に分かれると、その間を、トウーパの黄炎が通り過ぎていく。通り過ぎた炎は、そのまま演習室の壁に当たり、その辺りの壁一体を、一気に黒焦げにした。真っ黒になった壁を見つめ、マルクがその表情を青くする。

「あ、あんなの当たったら、死んじゃうじゃないかよっ……」

「だから、言っただろう。あれは、人を燃やせる炎だと」

「何、落ち着いてるんだよ！ このままじゃ俺たち、あの壁みたいに黒焦げさんに、されちゃうぞ!？」

「心配するな」

焦るマルクに、ルビィネルが冷静な口調で言葉を発する。

「魔女がそう何度も、自身で魔炎を使うことが出来ないことは、知っているだろう?」

「あ、そっか」

納得した様子で大きく頷くマルク。魔女の、その身に宿す魔炎はあまりに強く、自身でその魔炎を使えば、寿命を縮めてしまうのだ。マルクが初めてルビィネルと出会った時も、ルビィネルは、自身で魔炎を一度使っただけで、気絶してしまっていた。

「あんな全力の炎、自身で撃てるのは、せいぜい二度が限度だ。そろそろ、体力の限界で、倒れる頃でっ……」

「“黄烈火”！」

ルビィネルの言葉に逆らうように、左右に分かれた二人へと、同時に飛んでくる黄色の炎。

「撃つて来たじゃないかよお！」

「あれ？」

マルクは必死に叫び、ルビィネルは首を傾げながらも、それぞれ、向かって来た炎を避ける。両手を突き出し、二つの炎を同時に飛ばしたのである。トウーパは、倒れるどころか、先程までとまったく変った様子なく、元気にその場に立っていた。

「もうダメだあ！俺は今日、ここで火葬されるんだああ！」

「何故……」

頭を抱え、嘆いているマルクを横目に、ルビィネルが戸惑った様子で、トウーパを見つめる。この演習室に、三人以外の気配はなく、トウーパにパートナーがいる様子もない。パートナーがいないのであれば、今までの魔炎は確実にトウーパが使っているものである。あれほどの炎を連発すれば、余程の魔女でも、意識を失うか、倒れるかするのが普通である。

「あ……！」

考え込むように、トウーパを凝視していたルビィネルが、何かに気付いた様子で、大きく目を見開く。微笑むトウーパのその首筋に、一匹の、小さな虫がとまっているのが見えた。

「あれは、まちゅう魔蟲……」

「へ？」

より一層、険しい表情を見せるルビィネルに気付き、マルクが嘆くことを止め、ルビィネルの方を振り向く。

「何だ？ どうしたの？」

「あの者の首筋に、黒い虫がとまっているのが見えるか？」

ルビィネルの言葉に促され、目を凝らし、トウーパを見つめるマルク。

「ええ〜？ そんなの、とまってるかなあ？」

「どうやら視力も悪いらしい」

「どうせ俺なんて、視覚も嗅覚も悪いんだよ！」

残念がるように肩を落とするルビィネルに、マルクが思わず怒鳴りあげる。涼しげに二人の様子を見ていたトゥーパが、その金色の巻き髪を、手で払った瞬間、首元がよく見えるようになり、とまっている黒い虫の姿が、マルクの視界にもはつきりと入った。

「居た居た！ 黒い虫！」

「あれが魔蟲。我々、魔族の中でも異形の存在、“魔物”と呼ばれるものの一種だ」

「そういえば昔、習ったかなあ」

過去の記憶を遡り、マルクが不確かな様子で呟く。魔物や魔獣という存在は、魔士の養成学校に通っていた際、単語として聞いたことはあったが、見たことはなかった。魔物は魔族の住む領域に多く存在するものであり、マルクの住む人間領のヤールには、ほとんど居ないと言われていた。

「で、あの虫が何なんだ？」

「魔蟲は、人を襲うような危険なものではないが、魔族に取りつくと、麻痺症状を引き起こす」

「麻痺症状？」

「ああ。自分の体力に限界が訪れていても、倒れることなく、魔炎を使い続けられる感覚麻痺症状だ」

「んな！？」

ルビィネルの説明に、マルクが一気に焦りの表情となる。

「じゃ、じゃあ、あいつは……！」

「平気なんじゃない。平気じゃないことに、気付いていないだけだ」目を細め、厳しい表情でトゥーパを見つめるルビィネル。

「全力の魔炎を四発。これ以上使えば、命にもかかわる」

「そんなっ……！」

さらに焦るマルクの横で、ルビィネルが気難しげに唇を噛む。

「何とか、あの魔蟲を……」

「よし、謝ろう！」

「は？」

策を練ろうとしていたルビィネルが、マルクの発言に、目を丸くする。決めきった表情を見せたマルクは、トウーパとまっすぐに向き直り、深々と頭を下げた。

「何か色々と、ごめんなさあーい！」

演習室に、マルクの大きな声が響き渡る。それと同時に、トウーパの表情が歪んだ。

「“黄烈火”」

頭を上げたマルクへと、トウーパが黄炎を向ける。

「えええ！？　なんで！？」

「マルク！」

驚いているマルクを突き飛ばし、自身もマルクの方へと転がり込むようにして、何とか黄炎を避けるルビィネル。起き上がったルビィネルが、同じく起き上がったマルクを、強く睨みつける。

「何をしている！」

「だって、あいつ、謝ってって言ってただろ！」

「あんなプライドの高い魔女に、素直に謝ったところで逆効果だということくらい、わかれ！」

「じゃあ、どうするんだよ！？」

「“黄烈火”！」

不毛な言い合いを続けている二人のもとへと、再び飛んで来る黄炎。ルビィネルがすぐさま左手を伸ばし、マルクの右手を取る。

「“移り火”！」

二人を赤い炎が包み込むと、黄炎の落ちたその場から二人が姿を消し、トウーパから一番離れた、演習室の最奥へと移動する。

「フッフ……距離を取ったくらいで、私から逃げられるつもり……？」

すぐに移動したマルクとルビィネルの姿を捉え、トウーパが楽しげに微笑む。美しいその表情とは裏腹に、額からは汗が流れ、顔色

は青くなり、突き出した両手は、細かく震えていた。そのトウーパの様子を見て、ルビィネルが眉をひそめる。

「体には、確実に限界が来ている。このままでは、本当に……」
「ヤバいのか？」

「ああ」

ずっと冷静だったルビィネルも、トウーパの変化に、徐々に焦りを感じ始める。

「仕方がない。こうなったら、私が魔炎を使って、あやつから魔蟲を切り離す」

「へ？ け、けど、魔炎使ったら、お前まで……！」

「倒れる前に決める。二発も使えば十分だ」

不安げな表情を見せるマルクに、自信満々の様子で言い放つルビィネル。

「その間、そなたはここに……」

「そんなのは、嫌だ」

「何？」

否定するマルクの声に、ルビィネルが少し驚いたように顔を上げる。

「だって、それじゃあ、パートナーの意味がない！」

「マルク」

ルビィネルをまっすぐに見つめ、まるで訴えるように強く、声を張り上げるマルクを見て、ルビィネルがそつと目を細める。

「そうだな。私には、パートナーがいるのだったな」

マルクを見つめたルビィネルが、穏やかに微笑む。

「右手を貸せ、マルク」

「ああ！」

左手を差し出したルビィネルの言葉に大きく頷き、マルクが右手を突き出す。魔紋の刻まれた二人の手が、強く重なると、二人はその場で素早く立ち上がり、足並みを揃え、トウーパのもとへと駆け出して行く。

「あら。そんなに、私の炎に焼かれないの……？」

駆け込んでくるマルクとルビィネルを見つめながら、微笑んだトウーパが、痙攣し始めている右手を、まっすぐに二人へと伸ばす。

「なら、望み通り……」

「手を上へ突き上げる、マルク！」

「おう！」

トウーパが魔炎を撃つ前に、駆けている二人が動く。ルビィネルの声に反応したマルクは、固く握り締めたルビィネルの手を引っ張り上げるように、右手を上空へと突き上げた。

「彼の者を惑わせ、我が赤炎！ “霧赤炎”^{むせきえん}！」

突き上げられた二人の手から、真つ赤な炎が放たれると、放たれた炎が一気に広がり、演習室全体を包み込む。それは熱い炎ではなく、辺りを燃やすこともなくただ広がって、部屋をまるで、濃い霧で包んでいくかのようであった。炎の霧に包まれたトウーパの視界からは、マルクもルビィネルも見えなくなっていた。

「目くらましの霧炎……随分と地味な芸当、してくれるじゃない」

部屋の中がまるで何も見えなくなった状態だというのに、トウーパは、辺りを包み込んだ赤い炎を見つめながら、落ち着いた様子で笑う。

「でも」

トウーパが鋭く目を細め、自身の右方を振り向く。そこには、トウーパへと、正確に言えば、トウーパの首筋にとまった魔蟲へと伸びてきている、一本の手があった。

「見えてんのよね。“黄烈火”！」

「あ……！」

トウーパから向けられる黄炎に、手の伸ばしていたルビィネルが、大きく目を見開く。

「うっう！」

黄炎を受けたルビィネルが、後方へと吹き飛ばされると、部屋を包み込んでいた、霧状の赤炎が一瞬にして消え去り、また部屋全体

が見えるようになる。

「ルビィネル！」

「かすっただけだ、問題ない」

ルビィネルから少し離れた場所に立っていたマルクが、床へと倒れ込んだルビィネルを見て、思わず身を乗り出す。ルビィネルは、少し焦げた右肩を左手で押さえながら、マルクの言葉に答えた。

「残念だったわね。私、目はいいい方なの」

「口は悪いのにな」

得意げに微笑むトゥーパに、ルビィネルが挑戦的に言葉を返す。

だが、その額からは汗が流れ落ち、表情からも厳しさがうかがえた。魔蟲を切り離すことが出来なかった上に、ルビィネルが傷を負ってしまったこの状態では、トゥーパを助けることは、さらに厳しくなってしまったからだ。挑戦的なルビィネルを見て、トゥーパは涼しげに笑う。

「あなたは本当に、私のプライドを傷つけるのが上手いわね」

「あ……！」

まだ床に座り込んでいる状態のルビィネルへと、トゥーパが、その右手を伸ばす。

「その減らず口、燃やしてあげるわ」

「ク……」

トゥーパの右手から溢れる黄炎に、ルビィネルがより一層、険しい表情となる。

「ルビィネル！」

居ても立ってもいられず、マルクは、意識せぬうちに、その足を動かし、その場から駆け出していた。

「いい加減にしろよ！」

トゥーパのすぐ前まで来たマルクが、トゥーパが伸ばした右手を掴み、そのまま上方へと持っていく。腕を取られたトゥーパが、不快そうに表情を歪める。

「最下級魔士ごときが、慣れ慣れしく私に触らないで！」

強く声を張り上げたトゥーパが、右手に黄炎を集中させると、トゥーパの右手を掴んでいたマルクの左手までが、黄炎に包まれる。
「マルク！」

黄炎に焼けるマルクの左手に、ルビィネルが焦ったようにマルクの名を呼ぶ。だが、黄炎に包まれても、マルクがトゥーパの手を離すことはなかった。そんなマルクに、トゥーパが驚いた様子で、目を見開く。だがすぐにその表情は、険しいものへと変わった。

「離して！ 離しなさいよ！」

何度も右手を振り切り、マルクの手を振り解こうとするトゥーパ。
「俺がム力つくんなら、いくらでも、何とでも言えよ！」

トゥーパの手を掴んだまま、トゥーパの顔をすぐ目の前にして、マルクが声を張り上げる。

「な、何っ……」

「俺は悪口くらい、言われ慣れてるから、お前の暴言の一つや二つ、痛くも痒くもない！」

マルクの言葉の意味がわからず、戸惑い始めたトゥーパに、マルクがさらに、捲し立てるように、言葉を続ける。

「俺への文句くらい、いくらでも言っていからっ……」

マルクがまっすぐにトゥーパの青色の瞳を見つめ、そつと目を細める。

「こんなくだらないことのために、自分の命、使つなよ!!」
「……っ！」

溢れんばかりの感情のこもったマルクの言葉を、まっすぐに向けられ、トゥーパが大きく目を見開く。

「う、うるさい！」

戸惑いを振り払うように叫び、トゥーパが大きく口を開く。

「“黄爆火”！」
「黄爆火」おっしょっか

「うわあああ！」

「マルク！」

トゥーパの右手から放たれた黄炎が舞い上がり、上空で激しく爆

発すると、その爆風に飛ばされ、マルクが床へと倒れ込んだ。ルビ
イネルが、吹き飛ばマルクの様子を見て、思わず身を乗り出す。

「うっう……！」

その爆発により、マルクだけでなくトゥーパも吹き飛ばされ、同じように床へと倒れ込む。トゥーパが床に背中を打ちつけると、その衝撃でか、首筋にとまっていた魔蟲が、力なく床へと落ちた。

「あっ……」

魔蟲が落ちた途端、トゥーパの全身から、力が抜ける。

「魔蟲が取れたか。ん？」

トゥーパから魔蟲が落ちたことを確認し、ホッとしたように肩を落としたルビィネルであったが、上方から聞こえてくる、何か重たいものが揺らめくような、そんな鈍い音に気付き、ゆっくりと顔を上げる。顔を上げた途端、ルビィネルがまた、表情を険しいものへと変える。天井から吊り下げられていた巨大なシャンデリアの照明が、大きく揺れ動き、天井と繋いでいる器具も壊れ、今にも落ちようとしていた。

「さっきの魔炎が当たったのか……！」

ルビィネルが焦ったように声を漏らしている間に、照明はいよいよ天井との繋がりをなくし、速度をつけて、下へと落ちていく。その照明の真下には、未だ、倒れた状態のままの、トゥーパの姿があった。魔蟲から離れたトゥーパは、感覚が戻ったからか、ひどくぐったりとした様子だ。魔炎を使うことも、その場から動くことも出来そうにない。

「マズい……！」

落ちていく照明の下に、トゥーパの姿を見つけ、ルビィネルが慌てて右手を突き出す。

「トゥーパ！」

「え？」

右手を突き出したルビィネルの前方で、マルクが勢いよく立ち上

がる。マルクのその姿が、照明を撃とうとしていた、ルビィネルの魔炎の行く手を遮ってしまう。

「退け！ マルク……！」

その場から動くよう指示を出そうとしたルビィネルが、マルクの右手に集まる、赤々とした炎を見つけ、呼びかけようとした名を止める。

「右手を突き出せ、マルク！」

「え？ あ……！」

背中から聞こえてくるルビィネルの声に、一度は戸惑ったマルクであつたが、自身の右手に集まる強い熱、右手を包む赤い炎に気が付き、真剣な表情を作る。

「そして、叫べ！」

ルビィネルの声に後押しされ、マルクが、トウーパへと落ちていく照明に、魔紋の刻まれた右手を向け、大きく口を開く。

「せきれんか
“赤煉火”！」

マルクが大きく叫んだその瞬間、マルクの右手から、赤々とした炎の塊が放たれた。

「うっう……！」

すぐ上方で起きた衝突に、トウーパが思わず目を伏せる。美しいまでの真つ赤な炎が、空中を駆け抜け、降下して来ていた照明に当たると、恐らくは鉄製であろう照明が、一瞬にして溶けてなくなつた。何の破片も残らなかつたため、トウーパに危害が及ぶことはなく、炎が止むと、演習室は一気に静まり返つた。その静けさに気が付き、トウーパがゆっくりと目を開く。

「大丈夫か！？」

トウーパが目を開くと、そこには、心配するような表情を見せたマルクの姿があつた。マルクは倒れているトウーパのすぐ横にしゃがみ込み、トウーパの顔を覗き込んでいる。先程、トウーパの魔炎により焼かれた左手が、痛々しい。平気な顔をしていられるような傷ではないというのに、それでもマルクは、トウーパの心配をして

いる。

「……っ」

そんなマルクの様子を見て、トゥーパがそっと、目を細める。

「ご、めん……なさい……」

「へ？」

弱々しい声が、かすかに、マルクの耳に届く。だが、マルクの戸惑いの表情を見ることもなく、トゥーパは深々と、目を閉じてしまった。

「あ、おい！」

「すぐに医務室に運ぶんだ」

焦るマルクの背に、冷静な声が届く。マルクが振り返ると、マルクの後ろにルビィネルが立っていた。

「今すぐ栄養剤を打ってもらえば、十分に助かる」

「わ、わかった！」

ルビィネルの言葉に素直に頷くと、マルクが両手でトゥーパの体を横抱きにし、必死の足取りで、演習室の出口へと駆けていく。

「ついでに、そなたの火傷も診てもらえよ」

「おう！ って、お前は？」

「私も後から、すぐに行く」

「わかった！」

素直な返事を響かせて、マルクが演習室を後にする。演習室にルビィネルだけが残ると、より一層、静けさが増した。照明を一つ失い、少し薄暗くなった部屋で、ルビィネルが床に落ちた魔蟲を見つめ、目つきを鋭くする。

「^{ひばち}火発」

ルビィネルが魔蟲へと人差し指を伸ばすと、その指先から赤い炎が放たれ、魔蟲に直撃すると、その小さな体を一瞬にして、灰にした。魔蟲を燃やしたルビィネルが、どこか冷たい表情を見せる。

「フレイヤでも滅多に出ない魔蟲が、たまたま魔院に現れ、たまたま、私たちを快く思っていない魔女に取りついた、か……」

静かに言葉を落とし、ルビィネルが目を伏せる。
「随分な偶然だな」

「うーん」

魔院の領土内にある、マルクたちが居た演習室がよく見える木に登り、細い枝の上に器用に立って、双眼鏡を覗いている、魔士の格好をした青年。茶色のサラサラとした髪が、風に流れ、下ろされた双眼鏡の下から、金色の瞳が現れる。その青年は、昼間に、トウーパと接触していた、あの魔士の青年であつた。

「やっぱり、気位の高い魔女くらいじゃあ、使いものにもならないかあ」

青年が、がっかりした様子で肩を落とす。

「さあて、じゃあ、次は何して遊ぼうか？」

そつと微笑んだ青年が、演習室の方を見つめ、口元を緩める。

「ルビィネル」

自然と呼ばれたその名が、夜の風に吹き抜けた。

翌日、第五演習室。

“放出の練習してたら、照明が落ちて来て、ぶっ壊れちゃいました”だとお……？」

常態でも目つきの悪いブラッドスの目つきが、さらに鋭く、険しくなっていく。

「クソ真面目に練習なんか、してんじゃねえよ！」

「あんたが、放出使えないと、授業に出さないとか言っただんどうが！」

激しく睨み合い、どこか幼稚な怒鳴り合いを始める、マルクとブラッドス。トウーパとの交戦により、第五演習室は、照明一個を失

い、他にも壁が黒焦げになったり、演習用の道具が燃え尽きていたり、それなりの被害が出てしまった。だが、トウーパや魔蟲のことが、魔院側に知れば、トウーパが責任を取らされる可能性もあったため、ルビィネルの提案により、すべては、マルクの放出の練習によるものということにしたのである。

「バツ！ 俺を引き合いに出すんじゃないよ！ 給料減俸されたら、どうすんだ！」

「されれば？ 自分の発言にくらい、責任持てよ。講師さまっ」
「んだとお！？」

挑発的なマルクの発言に、ブラッドスの表情が勢いよく歪む。

「つか、こんだけ派手に教室壊しといて、放出、出来るようになったねえじゃねえかよ！」

「昨日の夜は出来たんだよ！」

「夢だろ、それ！」

「夢じゃない！」

二人の終わりそうもない言い合いを、ルビィネルは、少し離れた場所から、まるで他人事のように眺めていた。

「はあ、今日も相変わらずだねえ」

「本当、進歩のない人たちね」

そんなルビィネルの元へ、先日と同じように、ポンドとアメジェスがやって来る。

「すんごいのパートナーにしちゃったなあって、そろそろ後悔して来た？」

ポンドがまるで楽しむように、軽い口調でルビィネルへと問いかける。マルクを見つめたルビィネルは、そつと口元を緩めた。

「いいや」

「へ？」

涼やかなルビィネルの声に、ポンドが首を傾げる。

「進んでるよ、少しずつだけだな」

マルクを見つめるルビィネルの、浮かべたその笑みは、とても晴

れやかなものであった。

「どうせ俺なんか、一生、物覚え良くなったりしないんだよお！」

「お、ネガティブスイッチ」

頭を抱え、嘆き始めたマルクを見て、ポンドがまた、楽しそうに笑う。

「あー、面倒臭せえ！ パートナー！ こいつをとつとと、何とかしろ！」

「ハイハイ」

ブラッドスの怒鳴り声に、ルビィネルは疲れたように返事しながら、ゆっくりと立ち上がった。

結局は、放出を使いこなすようにはなれず、また、いつもと変わらぬ日々を送り始めたマルクに、変わったことが、一つだけあった。
「はぁーい、マルク！ お弁当、作って来たわよ！」
「ど、どうも……」

満面の笑みのトゥーパに、桃色の可愛い包みに入った弁当箱を渡され、思いきり困惑の表情を見せるマルク。共に昼御飯を食べようとしていたポンドとアメジエスも、その光景に、一瞬にして固まり、言葉すら失っていた。

「食後は、手作りプリンも用意してるからー！」

「は、はぁ……」

笑顔でプリンを見せてくるトゥーパに、マルクは、短く頷くことしか出来なかった。

「お、おい、マルク」

やっと自分を取り戻せた様子のポンドが、マルクの耳元に口を寄せ、トゥーパに聞こえないように、マルクへと問いかける。

「俺の目が確かであれば、あれは数日前、君をボロクソ言っていた、高慢ちき魔女だと思うんが」

「うん、そうだよ。ポンドの目は正しい」

「じゃあ、なんだって急に、こんな展開に？」

怪訝そうに眉をひそめ、ポンドが問う。

「いやあ、それが俺も、何がそんなにツボに入っただのか、よくわかんないんだよねえ」

頭を抱え、困ったように答えるマルク。

「健康お野菜ドリンクも、作って来たのー！」

『は、はあ……』

さらに笑みを向けてくるトゥーパに、思わずポンドもマルクと声を揃え、啞然と頷き返した。

「まあ、良いのではないか」

マルクのすぐ隣で、すでにパンを頬張りながら、ルビィネルがそつと微笑む。

「そなたを認める者が、一人、増えたのだから」

「認めるっていうか……」

ルビィネルの言葉を受けたマルクが、ゆっくりとトゥーパの方を見る。ばつちりとその目が合うと、トゥーパはその頬を赤く染めた。

「やっただー、そんなに見ないでよ、マルク！ 私、照れちゃう！」

「これは、ちよつと……」

元氣よく恥ずかしがっているトゥーパに、思わず声を失うマルクであった。

人間と魔族、唯一の共存国“レイヤ”。レイヤ西側、人間領“ヤール”。

ヤールの中でも、人々で賑わう町から少し離れた山の、山道を登ったその奥の奥、あまり人の立ち寄らぬ場所に、マルクの住む屋敷はあった。

「マルク様ー！ そろそろお時間ですよ、起きて下さーい！」

「ん、んん……」

一階のダイニングからとは思えぬほど、しっかりと聞こえてくるラピスラズの声に、深く目を閉じたままのマルクが、少しもがくような、そんな声を漏らす。マルクの部屋は、屋敷の二階を上がってすぐの場所にあり、広い部屋に置かれた、大きな寝台の上で、マルクは布団にくるまっていた。

「マルク様ー！」

「ハイハイ。起きます、起きますってば」

もう一度聞こえてくるラピスラズからの呼びかけに、届きはしないだろうが、答えるように呟いて、マルクがゆっくりと体を起こす。まだ半分ほどしか開かない瞳を擦り、何とか覚醒を促すマルク。口を開けば、大きな欠伸が漏れた。

「何だ？ もう朝か？」

「ああ、そうみたいだよって、へ？」

すぐ傍から聞こえてくる、マルクと同じように眠たそうなその声。その声に答えた途端、マルクが意識をはっきりとさせ、しっかりと目を開いて、その声の聞こえて来た方を見る。マルクの起き上がった場所の、すぐ横に見える、布団の膨らみ。その膨らみが、もぞもぞと動き始める。

「な、何っ……」

「もうすぐ、目え覚めるぞお！」

「どわああ！」

もそもそと動いていた布団が、突如、マルクの上に覆いかぶさられるようにして、押しのけられる。マルクがやって来た布団を払っている、先程、布団の膨らんでいたその場所から、一人の人物が姿を現した。

「んん、よく寝た」

大きく伸びをしながら、マルクと同じ寝台の上で、マルクのすぐ横から起き上がったのは、ルビィネルであった。真つ赤な髪は寝ぐせで少し乱れており、楽そうな、ワンピース型の水色の寝巻きを着ている。そんなルビィネルをすぐ横に、しばらくの間、固まるマルク。固まっているマルクの方を振り向き、ルビィネルが眠そうな表情のまま、そつと微笑む。

「おはよう、マルク」

「ぎっ……ぎゃあああああ!!」

マルクの絶叫が、朝の静かな屋敷に響き渡った。

「ああ、痛つてえ」

突然、同じ寝台から姿を見せたルビィネルに驚き、絶叫のまま寝台の上から転がり落ちたマルクが、その時、打ちつけた後頭部を押さえながら、眉間に皺を寄せている。マルクは寝巻きから魔士の制服に着替え、一階にあるダイニングテーブルで、ラピスラズの用意した朝食を取ろうとしていた。

「まったく、朝から騒々しい男だ」

そんなマルクを、呆れたような表情で見つめるのは、マルクの向かいの席へと座り、同じように朝食を取っているルビィネル。非難するように言うルビィネルを、マルクが非難するように、思いきり睨みつける。

「元はと言えば、お前が悪いんだろ！？ だいたい、なんでお前が、俺のベッドで寝てるんだよ！」

「ラピスに客間を用意されたのだが、風呂から上がった後に、道に迷い、そなたの部屋に辿り着いた」

「家の中で迷うなよ！ どんだけ方向音痴なんだよ！」

「そう誉めるな」

「誉めてない！」

その場で立ち上がったマルクが、勢いよくルビィネルへと怒鳴りあげる。

「それに、何で俺の家に来てるんだよ！ お前は、魔院の寮に部屋があるんだろうが！」

「まあ、それはそうだが、パートナーとは常に共に居た方が、あらゆる時に対処出来るだろう？」

「あらゆる時って？」

「それはあ……」

指摘するように問いかけるマルクに、ルビィネルが少し首を捻る。

—— あれは、魔蟲…… ——

—— 随分な偶然だな…… ——

数日前、レイールでは滅多に現れることのない魔物の一種、魔蟲が、マルクとルビィネルを快く思っていなかった魔女トウーパに取りつき、そして、そのトウーパに、二人は襲われた。ルビィネルは、その魔蟲出現に、偶然ではなく、故意的な何かを感じたのである。俯いたルビィネルは、考え込むように、険しい表情を見せたが、すぐにその表情を消し去り、笑みを浮かべる。

「世界滅亡の時とか」

「滅亡するんじゃ、対処も出来ないだろうが」

思いついたように言うルビィネルに、マルクが再び椅子へと腰を掛けながら、冷たい視線を投げかける。

「だいたい迷ったからって、健全男子の布団の中、潜り込むなよな。つたく、不用心な」

「そなたに、私をどうこう出来る度胸が備わっているとは、思えなかったから、つい」

「うるさいわ！」

ルビィネルの言葉に、頬を赤く染めたマルクが、強く怒鳴り返す。
「いやあー、さすがはルビィネル様。まったく、その通りでございますよあ」

「ラピス！」

キッチンから、カゴいっぱいに入った焼き立てのパンを持って、二人のいるダイニングへとやって来る、エプロン姿に満面の笑みのラピスラズ。

「どうせ俺には、男としての度胸もへったくれも、備わっちゃいないんだよあー！ クソあー！」

「朝からネガティブだな」

両手で頭を抱え、自棄になって叫ぶマルクを見て、ルビィネルがどこか、感心したように呟く。

「だいたい、ラピスが悪いんだぞ？ 俺に言わずに、勝手にルビィネルを屋敷に泊めたりなんかして」

「ルビィネル様は、マルク様のパートナーなのですよ？ お泊めするのを、断る理由がありません」

「俺には断れって言ってるの！」

「屋敷の主人でもないくせに、随分と偉そうなもの言いですねえ」
テーブルにパンを置きながら、ラピスラズが困ったように肩を落とす。

「コーラル様がお聞きになったら、さぞや、悲しまれることでしょう」
「う」

「うるさいなあ」

「コーラル？」

拗ねるように、ラピスラズから視線を逸らすマルクの正面で、ル

ビィネルが不思議そうに首を傾げる。

「マルクの親御さんか？」

「ふうーん。まあ、そんなような、そうでもないような」

「は？」

曖昧な答えを返すマルクに、ルビィネルは益々、首を傾げる。

「コーラル様は、このお屋敷のご主人で、マルク様の育ての親でいらつしやる方です」

「育て親？」

「マルク様は、まだ赤子の頃、この屋敷の近くに置き去りにされていたのですよ。それをコーラル様が見つけ、拾い、育て上げられたのです」

「そう、だったのか」

ラピスラズの説明に、ルビィネルがどこか齒切れ悪く頷く。赤子の時に、親に捨てられた事実など、あまり人に知られたいようなものではないだろう。だからマルクも、曖昧な答えを返したのかも知れない。少し気まずそうな表情で、ルビィネルが俯く。

「気にせずとも良いですよ、ルビィネル様。マルク様、笑えるほど溺愛されて、育って来てますから」

「うるさいっ」

そつと微笑みかけるラピスラズに、マルクが刺すような視線を向ける。

「今、コーラル様は、お仕事の関係で、別国へと出られておいでですがね」

「そういえば、今回は長いよな。もう、一ヶ月くらい経っつけ？」

「後数日もすれば、お戻りになるはずですよ」

「ふうーん」

ラピスラズの言葉に、あまり興味なさそうに答えるマルク。だが、その声は、無理に興味なく聞こえるように作ったような、そんな声であった。

「そろそろ、コーラル様が恋しくなってきたのではありませんか？」

マルク様」

「違っ……！ 誰もそんなこと、言っていないだろ！」

からかうように問いかけるラピスラズに、マルクが少し頬を赤く染め、ムキになって言い放つ。

「子供じゃあるまいし、恋しくなったりするかよ！」

「へえー、ふうーん。ほおー」

「何だよ、その顔は！」

固く腕を組み、強く主張したマルクに対し、疑っているような、白々しく細められた瞳を向けるラピスラズ。そんなラピスラズに、マルクがさらにムキになり、怒鳴りあげる。

「コーラル、コーラル……」

マルクとラピスラズの騒がしいやり取りが続く中、ルビィネルは焼き立てのパンを頬張りながら、何やら少し考え込むように、首を捻る。

「どこかで、聞いた名だな」

大騒ぎしているマルクとラピスラズに、そのルビィネルの声が、届くことはなかった。

レイル聖魔院、第二講義室。

「どつはあ」

「今日は朝から、随分とお疲れね。マルク」

顎を机の上へと付け、すべての生気が出てしまいそうなほどの、深い溜め息を吐くマルクを見て、すぐ前の席に座っていたアメジェスが、興味を引かれた様子で振り返る。

「ついに、あの金髪魔女に、痺れでも切らした？」

「きゃあ、おつはよー、マルクー！ えええ？ 今日もトウーパは力ワイイってえ？ そんなの知ってるけど、照れちゃうー！」

「まあ確かに、痺れは切れてきてるけど……」

講義室へとやって来たばかりのトウーパが、入口付近から、窓際に座っているマルクへと、全力で手を振っているのを見て、マルクがげっそりした様子で肩を落とす。

「そっちの魔女じゃなくて……」

「あら。じゃあ、赤髪魔女さんの方かしら？」

「ん？」

アメジェスの視線を受け、マルクのすぐ隣に座っていたルビィネルが、机に広げていた教科書から、視線を上げる。

「何だ、そなた。まだ今朝のことを、根に持っているのか？」

呆れたような表情で、隣のマルクを見るルビィネル。

「器の小さい男だな」

「どうせ俺の器なんて、お猪口にも満たない大きさなんだよー」

ルビィネルの言葉に、マルクが口を尖らせ、呟く。

「そなたのベッドに潜り込んで、一緒に寝ただけだろう」

「だああああー！」

マルクがルビィネルの言葉を掻き消すように、思いきり机を叩きつけ、その場で勢いよく立ち上がる。騒がしかった講義室は一気に

静まり返り、突然、立ち上がったマルクへと視線が集まる。講義室中から集められる視線に、マルクが我に返り、気まずそうな表情を見せる。

「あつ、いや、すみません」

誰にともなく謝り、静かにもう一度、席につくマルク。するとすぐに、講義室の者たちの興味は薄れ、また騒がしくなっていく。どうやら、ルビィネルの問題発言は、講義室の者たちの耳には届かなかったようである。

「ふああゝ、良かったあ。皆に聞こえてなくて」

「ほおーんと、良かった良かったあ」

「へ？」

すぐ背後から聞こえてくる声に、ホツとしていたマルクが、目を丸くする。

「マルクがウキウキワクワクな青春を送れているようで、親友として、俺も嬉しいよお。うんうん」

「ポ、ポンド！」

マルクが振り返ると、そこには、今、講義室へとやって来たのであろうポンドが立っており、何故か満足げな表情で、何度も大きく頷いていた。

「ああゝ、俺も早く、俺の魔女とウキウキワクワクな生活が、送らせてえなあ」

「違う！俺は別に、ウキウキでもワクワクでもない！」

羨ましそうに呟くポンドへと、頬を赤く染めながら、必死に主張するマルク。

「何々？何の話いゝ？」

「じつつは、マルクがさあ」

「そいつには、絶対に言うなあ！」

会話へと寄って来たトウーパに、簡単に口を開こうとするポンドを、マルクが必死に止める。トウーパも加わり、さらに焦った様子で、大きな声を張り上げているマルクを横目に、ルビィネルが呆れ

た様子で肩を落とす。

「やれやれ。ん？」

ルビィネルがふと、視線を前方へと向けると、マルクの前の席に座るアメジエスが、どこか暗い表情で、思い悩むかのように下方を見つめていた。そんなアメジエスの様子を見て、ルビィネルが戸惑うように首を傾げる。

「どうかしたか？」

「え？ い、いいえ。何でもないの」

問いかけたルビィネルに、慌てて顔を上げ、首を横に振るアメジエス。だが、アメジエスの表情は晴れないままで、その視線が、ルビィネルの左手の甲に刻まれた魔紋を見つけると、アメジエスは、少し辛そうに目を細めた。

「アメジエ……」

「アメジエース！」

様子の違うアメジエスを気に掛け、ルビィネルが呼びかけようとしたその時、ルビィネルよりも大きな声が横から割って入って来て、ルビィネルの声を掻き消す。

「今日も一段と美しいなあ！ 我が魔女、アメジエスよあ！」

よく通る、男性にしては高めの声を響かせ、講義室中の視線を集めながら、堂々とした立ち振る舞いとゆっくりとした足取りで、講義室へと姿を現したのは、流れるような金色の髪に、少し垂れ目がちな紫色の瞳の、それなりに整った顔立ちをした、マルクたちと同じ年頃の青年であつた。振る舞いは大きい、背は低めで、全体的に小柄である。魔士の制服を着ているが、袖口や首元に、派手な金色の装飾品を纏っており、他の魔士よりは、明らかに目立つ格好をしている。

「さすがはこの僕の、海よりも深く、空よりも澄み切った瞳にかなった魔女だよ！ ハッハッハ！」

「はあ……」

青年の笑い声が響き渡ると、マルク、ポンド、アメジエスの三人

が、ほぼ同時に溜め息を吐き、深々と頭を抱え込んだ。

「さあ、アメジエス！ 今日という今日こそ、天のようにすべてを見通し、大地のようにすべてを支える、偉大なる魔士、この僕のパートナーになっておくれ！」

「お断りするわ」

「……………」

三秒もかからぬうちに断られ、受け入れるように、大きく両手を広げ、ポーズを決めていた青年が、そのポーズと、堂々とした表情のまま、しばらくの間、固まる。

「も、もう一度、聞こう、アメジエス。太陽のように燃えたぎり、月のように輝く、この僕のパ……………」

「お断りするわ」

「……………」

今度は、青年がすべての言葉を言い終えぬうちに、断りを入れるアメジエス。その即答に、青年がまたもや固まる。

「何故だあゝ、アメジエス！ 僕の何がいけないというんだあゝ！」

「何かもう、すべて……………」

混乱した様子で頭を抱える青年に、冷たい視線を送りながら、アメジエスがそつと呟く。

「随分と激しい魔士だな。誰だ？」

「フラン・ケイシー。見たらわかるだろうけど、このレイル聖魔院の魔士の一人だよ」

ルビィネルが問いかけると、呆れ切った表情で青年、フランを見つめたまま、マルクが答える。

「ま、マルクと違って、上級魔士だけどなあ」

「放つとけ」

口を挟むポンドに、マルクが鋭い視線を送る。

「家がやたら金持ちの貴族で、人間なのに、魔族側のレイルの生まれなんだよなあ。確か」

「そうそう。で、やたらアメジエスに惚れこんで、アメジエスが

魔院に入った頃から、毎日毎日、ああやって、パートナー勧誘してるんだ」

「毎日？ それは凄いな」

マルクの言葉に感心したように頷き、ルビィネルが改めて、フランを見る。

「やや！ そこに見えるは、最下級魔士ではないか！」

「名前で呼べよ」

今、マルクに気付いたと言わんばかりの様子で、大きな動作と共にマルクの方を振り向くフランに、マルクが鋭い視線を向ける。

「奇跡的にパートナーを得たそうじゃないか。噂で聞いたよ」

「あ、そう」

フランの言葉に、マルクが愛想なく返事をする。

「これで、君がアメジェスに掛ける負担も、少しは減るだろうし、未来のパートナーとして、僕も一安心だよ」

「別に、そんなに負担掛けてないし」

「では、アメジェス！」

「聞けよ！」

マルクとの会話を勝手に終わらせ、再びアメジェスの方を見るフランに、マルクが思わず怒鳴りあげる。

「今日は、その気になれないというのであれば、仕方がない！ また明日、来よう！」

「まあ別に、明日もその気にはならないと思うんだけど……」

先程までは頭を抱えていたフランが、この短期間で立ち直ったのか、また堂々と背筋を伸ばし、アメジェスへと、宣言するように言い放つ。

「しばしの別れ！ 泣してくれるな、我が魔女よ！」

「しないわよ」

「では、これにて、失礼する！」

最後まで一方的な会話を繰り広げ、皆を散々呆れさせたまま、フランは嵐のように、講義室を去っていった。

「はあ」

フランが講義室から去ると、アメジエスが心からの溜息を放つ。

「お前も、変なのに惚れられちゃったなあ」

「何度断つても全然諦めないから、本当困るわ」

ポンドの言葉に深く頷きながら、ひどく困った様子で呟くアメジエス。

「あんだけ振られても、まだ諦めないなんて、ポジティブだよなあ。マルクとは大違い」

「どうせ、俺はネガティブだよ」

からかうように笑いかけるポンドを、マルクがひっそりと呟く。

「けど、別に、悪い奴じゃないよね。あいつ。色々とおかしいところはあるけど」

「まあね……」

頭を抱えながら、アメジエスがマルクの言葉に頷く。

「まあ、心底悪い人間じゃないから、余計に困るというか……」

「パートナー、なってやればいいのに」

「……っ」

マルクが口にした言葉に、アメジエスの表情が止まる。

「悪い奴じゃないし、俺よりは遥かに優秀な魔士だし、アメジエスも別に、パートナーがいるわけじゃなっ……」

続くマルクの言葉の途中、アメジエスが勢いよく、席から立ち上がった。突然、立ち上がったアメジエスを、マルクが戸惑うように見上げる。

「アメ、ジェス？」

「マルクには、関係のないことだわ」

「へ？」

深く俯いたまま、搾り出すようにそう呟くと、アメジエスは机の上に広げていた荷物をまとめ、足早に講義室を出て行く。

「あ、あ、アメジェス！？ 授業は！？」

呼び止めるマルクの声に、アメジエスが振り返ることはなく、そ

のままアメジエスは講義室を出て行った。

「ああゝあ」

「何々々？」

どこか呆れたように肩を落とすポンドの横で、トウーパは、まるで意味がわかっていない様子を見せる。そんな二人の前方でマルクは、アメジエスの方へと伸ばしていた右手を下ろし、戸惑うように、首を傾げる。

「俺、何か余計なこと、言っただけかなあ？」

悩むように首を捻るマルクの隣の席で、同じように、出て行ったアメジエスを見送ったルビィネルが、どこか厳しい表情で、目を細める。

「確かに、余計なことをしたのかも知れないな」

ルビィネルは、マルクにも届かない小さな声で、そっと呟いた。

レイール聖魔院、第十一演習室。

「ええー、午後の授業は、魔女科の皆さんに、炎技演習を、実戦形式で行っていただくざぁーます」

栗色の髪を塔のように頭のでっぺんに高々とまとめあげた、赤い縁取りの眼鏡を掛けた女性が、演習室に集まった魔女たちへと言い放つ。レイール聖魔院では、パートナーと共に出る講義もあれば、魔士単独、魔女単独で出席する講義もある。マルクたちと別れたルビネルは、トウーパと共に、魔女の炎技演習の講義に参加していた。

「あ、アメジエス」

周りを見回していたルビネルが、参加している魔女たちの中に、アメジエスの姿を見つける。アメジエスは、友人であるう、他の魔女たちと、楽しげに雑談していた。本来であれば、自然と中庭に集まり、昼食を共にするのだが、今日の昼食時、アメジエスは現れず、その姿を見たのは、朝の講義前以来であった。

「これから皆さんに一つずつ、疑似炎ぎしえんをお配りするざぁーます」

そう説明した女性講師が、魔女たちへ、手のひらに収まるほどの大きさの、橙色の球を、一人ずつに配っていく。少し弾力はあるが、硬めのその球を右手に持ち、ルビネルが首を傾げる。

「何なのだ？ これは」

「はあ？」

率直に問いかけるルビネルに、隣に立ち、同じようにその球を握り締めているトウーパが、思いきり顔をしかめる。

「疑似炎よ、疑似炎」

「疑似炎？」

「魔力に反応して、魔炎によく似た炎を生成してくれる球。握り締めて、魔力を込めると、ほら」

トウーパが説明しながら、右手の球を強く握り締めると、球から黄色の炎が発生する。

「自分の属性の炎を出してくれるの。私なら黄炎、おうえん あんたなら赤炎せきえん だって感じてね」

「本当だ」

ルビィネルもトウーパと同じように、球を強く握り締め、そつと魔力を込めると、球から、トウーパとは異なる、赤い炎が発生した。「これを使えば、魔炎を使わずに演習出来るし、ぶっ倒れも、寿命を縮めもせずに済むってわけ」

「成程。これは便利だな」

生じた赤炎を見つめながら、ルビィネルが感心した様子で呟く。見た目は、魔炎とそう変わらないが、魔炎を使った時に感じる、体の負担がまるでない。

「ってか、あんた、フレイヤの聖魔院に通ってたんでしょ？ なのに、疑似炎も知らないわけ？」

「え？」

何やら不審そうな瞳を向けてくるトウーパに、ルビィネルが焦ったように声を漏らす。

「い、いや、フレイヤでは、別の道具を使っていたのだ。だから、わからなかった。ハハハッ」

「ふうーん。他の道具なんて、あるんだあ」

納得した様子を見せるトウーパに、ルビィネルが少し安心したように肩を落とす。

「実戦は、一対一の対戦形式で行うざあーます。疑似炎は、魔炎に劣るとはいえ、それなりの威力を持った炎ですので、取り扱いにはくれぐれも注意するざあーます」

疑似炎を持った魔女たちに、講師が忠告するように、しっかりと言い放つ。

「三組ずつ、行くざあーます。では、まずう」

講師が懐からメモを取り出し、演習を行う魔女の名を、順番に呼

んでいく。

「最後の一組、赤炎クラスのルビィネルと紫炎^{しえん}クラスのアメジェス」
「え？」

自身の名と共に、よく知った名が呼ばれると、ルビィネルは目を丸くし、顔を上げた。思わずアメジェスの方を見ると、アメジェスもどこか神妙な表情で、ルビィネルの方を見つめている。

「名前を呼ばれた三組は、それぞれ演習コートに入って、実戦を始めるざあーます」

「あらら、いきなりいゝ？ まあ適当に頑張りなさいよ」

「あ、ああ」

トウーパに送られながら、ルビィネルが、演習室にある三つのコート、白い紐で囲まれた広場の、一番奥へと入る。他の二つのコートにも同じように、名を呼ばれた魔女が入っていき、その他の魔女たちはそれぞれ分かれ、コート内を見つめる。トウーパは、ルビィネルの入ったコートの、すぐ傍まで寄って来た。ルビィネルに遅れるようにして、アメジェスがコート内へと入って来る。どこか鋭い表情を見せているアメジェスに、ルビィネルはそつと微笑みかけた。
「よろしくな、アメジェス」

「ええ」

ルビィネルの呼びかけに、アメジェスが静かに頷くと、疑似炎を持った右手を軽く持ち上げる。するとアメジェスの右手は、薄い紫色の、美しい炎に覆われた。

「あれが紫炎……アメジェスの属性の炎か」

その美しい炎を見つめ、ルビィネルが少し目を細める。

「では、始めるざあーます！」

講師の掛け声に、ルビィネルとアメジェスが、同時に身構える。

「紫閃火^{しせんか}」！

アメジェスが右手を突き出すと、アメジェスの右手から生じていた疑似炎が、まるで閃光のような輝きを放ちながら、目にも留まらぬ速さで、ルビィネルのもとへと飛び出していく。向かってくる炎

を見つめ、ルビィネルがすぐに真剣な表情となる。

「きゃくひ脚火」^{きやくひ}」

ルビィネルが赤炎を纏った右手を、自身の両足に向け、軽く一振りさせると、ルビィネルの足を赤い炎が包む。ルビィネルは赤炎に包まれた両足で、勢いよく地面を蹴ると、高々と上空を舞って、アメジエスの向けた炎を避ける。宙を舞うルビィネルは、器用に態勢を整え、下方に見えるアメジエスへと右手を向けた。

「せきれんか赤煉火」^{せきれんか}」

上空から降り落ちてくる赤炎に、アメジエスは焦ることなく、両手を突き上げる。

「しへきえん紫壁炎」^{しへきえん}」

紫炎が壁のような形となって、アメジエスの前に立ちはだかるとルビィネルの向けた赤炎が、その壁に弾かれる。弾かれた炎は、まだ宙にいるルビィネルの方へと戻っていく。だが、ルビィネルも焦りはせずに、冷静に右手を掲げた。

「せっきゅうか赤球火」^{せっきゅうか}」

ルビィネルの周囲を淡い赤色の炎が包み、戻ってきた自身の炎から、ルビィネルの身を守る。その直後に、ルビィネルは無事に地面へと降り立ち、包み込んでいた炎も消える。一瞬ではあるが、容易ではなかったその攻防を、周囲の魔女たちは、息を吞んで見守った。他のコートでも対戦は行われているが、他の魔女たちの視線は、ルビィネルとアメジエスの対戦に集中している。

「すつこい。“放出”も“防御”も余裕で使ってるわね。さすが、フレイヤからの転入魔女」

「アメジエス、紫炎クラスでもトップクラスの魔女なのに、全然見劣りしてないもんねえ」

口々に感心の声を漏らす他の魔女たちの横で、トウーパが軽く、髪を払う。

「当然じゃない。私に勝ったんだから」

そう呟いたトウーパは、どこか得意げな笑みを浮かべていた。

「やるな、そなた」

皆の視線を集めていることなど、気にした様子もなく、地面に降り立ったルビィネルが、楽しげな笑みで、前方のアメジェスを見つめる。

「こついう、のびのびと戦える場合は、本当に久し振りだ」

「……っ」

わくわくしている子供のように、無邪気な笑みを浮かべたルビィネルが、鼓動を確かめるように、左手で自身の左胸を押さえる。その甲に刻まれている黒い魔紋を、再び視界に入れ、表情を曇らせるアメジェス。

—— “本結” で契約を……？ ——

—— パートナー、なつてやればいいのに ——

アメジェスの脳裏に、マルクがルビィネルとパートナーになった時の光景が、今朝のマルクの言葉が、次々と過ぎった。

「…… “紫閃火” 」

再びアメジェスの右手から放たれた紫炎が、先程よりも一層早く宙を駆け、あっという間に、ルビィネルの横を通り過ぎていく。驚いたように、大きく目を見開いたルビィネルの赤毛が数本、地面へと落ちた。アメジェスの紫炎に、かすめ落とされたのだらう。ゆっくりと顔を上げたアメジェスが、冷たく凍えるような瞳を、ルビィネルへと向ける。

「アメジェス……」

突き刺さるような、その視線を浴び、ルビィネルがそっと、目を細める。だが、アメジェスは、ルビィネルの様子を気に掛けることなく、また右手を、ルビィネルへと向けた。

「 “紫追火” 」

「 “脚火” ！」

またしても向けられる光速の炎に、ルビィネルは先程と同じよう

に、両足に赤炎を纏い、その場で飛び上がって逃れようとする。だが、ルビィネルが飛び上がると、アメジエスの放った紫炎も、ルビィネルの後を追うように、上空へと軌道を変える。

「追ってくる……？」

下方から迫る紫炎に、焦りの表情を見せるルビィネル。ルビィネルがその場で、赤炎を纏った右手を振り払い、飛び上がる向きを変えるが、それでも直、アメジエスの紫炎はルビィネルを追って来た。「追跡の炎か。本当に、実力のある魔女だ」

困ったように微笑んだルビィネルが、空中で体の向きを変え、追ってくる紫炎の方を向くと、目つきを鋭くし、胸の前で勢いよく両手を合わせる。

「^{せきはいつか}赤爆火”！」

ルビィネルが目の前で、放ったばかりの炎を爆破させ、追って来ていた紫炎を撃ち落とす。

『うつつ……！』

爆発の衝撃と、飛び散る二人の炎の残骸に、コートで対戦を見つめていた魔女たちが、思わず目を閉じ、身を伏せる。その中で一人、トウーパだけが、しっかりと見開いた瞳で状況を見つめ、険しい表情を見せていた。

「何よ、あれ。本気じゃない」

トウーパが、低い声を落とす。

「ふう」

地面に降り立つと、何とか紫炎を消し去ったルビィネルが、ホッととした様子で息を吐く。その額には汗が滲んでおり、先程までの、楽しんでいるような様子は見られなかった。額の汗を拭いたルビィネルが、確認するように周囲を見回す。

「今ので皆、火傷とかしていないよな……？」

少し焦ったように、コートの周囲に集まる、他の魔女たちの姿を見回すルビィネル。

「“紫閃火”」

「……っ」

透き通った声が響くと、ルビィネルは途端に、眉をひそめた。

「あっ……」

耳につく甲高い衝突音の後に、驚いたような、小さな声を漏らしたのは、アメジエスであった。周囲の魔女の様子を案じていたルビィネルに、少しの猶予を与えることもなく、次の炎を放ったアメジエス。その向けられた炎を、ルビィネルは、防ぐことも消し去ることもせずに、まっすぐに突き出した右手で、真正面から受け止めたのであった。そのルビィネルの反応が予想外だったからか、アメジエスは思わず目を見張り、ルビィネルを見つめる。

「……成程な」

真正面に受け止めた炎を、右手を振り払うようにして掻き消し、ルビィネルが何やら、納得した様子で頷く。

「良いぞ。相手にはなるう」

顔を上げたルビィネルが、鋭い視線をアメジエスへと向ける。

「だが、それで後悔するのは、そなたではないのか？」

「……！」

ルビィネルのその言葉に、アメジエスが大きく目を見開く。

「あなたたち、何をやってるざあーます！」

二人の間に張り詰めた空気が流れたが、それは、女性講師の大きな声の乱入により、あっさりと吹き飛んだ。

「これは、あくまで演習ざあーますよ！ 下手に本気を出して、怪我人でも出たら、どーするざあーます！？」

「すまない。相手が実力者だったものだから、ついつい本気が……」
「先生」

怒る講師に、ルビィネルが柔らかな笑みで謝罪しようとしていたその時、アメジエスが講師を呼び、ルビィネルの言葉を遮った。

「ちよっと調子が悪いみたいで、早退します。すみません」

「あら、そう？ 大丈夫ざあーますか？」

静かに申し出たアメジエスが、コートを出て、すぐ傍に立ってい

た講師のもとへと歩み寄り、そつと微笑んで頷き、右手の疑似炎を講師へと手渡す。何言か話すと、アメジエスは講師に一礼し、そのまま演習室を後にした。

「何だあ。アメジエス、調子悪かったんだあ」

「何か、いつもと感じ違ったもんねえ」

「……っ」

周囲を飛び交う魔女たちの会話を聞きながら、コートに一人、取り残されたルビィネルは、何やら考え込むように、目を細めた。

—— アメジエスは、魔族でありながら、レイヤ国の人間領、
「ヤール」の生まれであつた。

大層な理由ではない。両親が、魔族にしては財力も魔力もない部類で、レイールに居られるだけの甲斐性がなく、魔力だのの気兼ねのいらない、ヤールに住み始めたのだ。何てことはない理由だが、アメジエスにとっては、それは、ひどく劣悪な環境であつた。

「お、魔女だ！ 魔女が来たぞお〜！」

「炎で燃やされるぞお！ みんな、逃げる逃げろお〜！」

「……………」

まだ幼かつた頃、同じ年頃の人間の子供たちは皆、アメジエスを“違う生き物”として捉えた。実際に種族も違うのだから、無理に歩み寄ろうとは思わなかつた。強力な魔炎をその身に宿す魔女を、何の力も持たない人間たちが、恐れもせずに受け入れるはずもない。だから、アメジエスは納得していた。投げかけられる残酷な言葉も、冷たい視線も、自分の周りに誰一人、味方と呼べる者が居ないことも、当然のものとして受け止めていた。当然であるからこそ、無理などしない。努力もしない。それをただ、受け入れていればいいのだと思つていた。

「お、アメジエス〜！」

「マルク」

そう思つていたアメジエスに、やたらと慣れ慣れしく言葉を掛けてくる、同じ年くらいの人間の子供が、ヤールには居た。

「アメジエスも買い物かあ？ おれもラピスに買い物頼まれちゃつてさあ。面倒つたら、ないよなあ」

「家で何にもしてないんだから、買い物くらい、したら？」

「お皿洗いなら、一ヶ月に一回くらいは、してるよあーだ」

その者は、何の偏見もなくアメジエスと接し、アメジエスと言葉

を交わした。それが当たり前のように、自然と、アメジエスのもとへと歩み寄って来た。

「マルクは、気にしないの？」

「何を？」

「私、魔女だよ？」

「うん。知ってるけど？」

アメジエスの問いかけにも、その者は言葉の意味がわかっていない様子で、ただ不思議そうに、首を傾げるだけであった。

「その、何かないの？ 人間じゃないんだとか、魔炎怖いとか」

「ああー、魔炎！ いいよなあ、アメジエス。魔炎使えるなんて！」

「いい……？」

思いがけない答えが返って来て、アメジエスはただ、戸惑うように顔をしかめる。

「おれも魔炎使ってみたいもん！ おれ、聖地マフレイヤに行くのが夢なんだ！」

マルクは、何の含みもない満面の笑みを、まっすぐにアメジエスへと向ける。

「すべての炎が生まれた場所なんだよ！？ 絶対、キレイな場所だよねー！」

「……っ」

何の偽りもない、ただ純粹に憧れる、透き通った瞳。

「マフレイヤか。大変だと思うわよ。マルク、頭悪いし」

「うるさいなあ！ どうせおれなんて、クラスで一番、頭悪いんだよあー！」

その者は、ただ、当たり前のように、アメジエスの傍に居た――

「十年以上も前のこと、よく覚えてるものよね……」

炎技演習の講義を抜けたアメジエスは、早退とは言ったものの、すぐに魔院を出ることはせず、魔院の校舎の屋上へと登り、広がるレイールの町並みを眺めていた。講義中であるからか、辺りは静かで、アメジエスに昔の出来事を、色濃く思い出させてくれる。

「……今日はもうあんまり、あなたの顔、見たくないんだけど」
屋上の向こうに広がる景色を見つめたまま、アメジエスがそっと呟く。

「すまない」

アメジエスの呟きに謝罪を返したのは、屋上の入口付近に立つルビィネルであった。ルビィネルは穏やかな笑みを浮かべながら、屋上の戸を閉め、アメジエスのすぐ隣へとやって来る。

「講義は？ いいの？」

「私の出番は、もう終わったからな」

「それもそうね」

互いに景色を見つめ、目を合わせぬまま、二人が会話を続ける。

「……すまなかった」

再び謝罪の言葉を口にするルビィネルに、アメジエスが少し、目を細める。

「それは、何に對して……？」

「マルクと、本結でパートナーとなったことに対してだ」

静かに問いかけるアメジエスに、ルビィネルもまた、落ち着いた口調で答える。

「何も知らぬまま、行動を起こしてしまった」

ルビィネルが少し、視線を落とす。

「私があのような、考えなしの行動を取っておらねば、今頃はそんなが……」

「あの時、あなたがマルクのパートナーになっていなかったとしても、別に、何も変わらなかったと思うわ」

ルビィネルの言葉を遮り、アメジエスが確信するかのように言い放つ。

「パートナーになって」って、私に言えるなら、もうとつくに私たち、パートナーになってたと思うもの」

「アメジエス」

ルビィネルがやつと振り向き、アメジエスの方を見つめる。アメジエスは相変わらず景色を見つめたまま、どこか遠くを見るような、そんな瞳を見せていた。

「勝手な話よね。言えなかったのは自分のくせに、あなたに当たったりして」

アメジエスが、自嘲するような笑みを浮かべる。

「言えなかった。言えなかったのよね。マルクが何人の魔女に振られても、すぐ落ち込んでても、それでも私には、“パートナーになって”の一言が言えなかった」

屋上の柵の上に肘を置き、顔のすぐ前で両手を組みながら、アメジエスが言葉を続ける。

「何故……？」

少し躊躇いながら、ルビィネルが静かに、アメジエスへと問う。

「マルクの夢を、叶える自信がなかったから、かしら」

自分でも言葉を探すように、アメジエスがゆっくりと答える。

「マルクは昔から本当に、聖地マフレイヤに憧れてて、マフレイヤに行くことを、本当に夢見てた」

目を輝かせていた、幼少時代のマルクの姿を思い出しながら、どこか懐かしむように、アメジエスが目を細める。

「でも、私にはそこまで高い志いしはなくて、彩炎の魔女になりたいとかも、別に思っていないくて」

アメジエスの表情が、悲しげに曇る。

「だから、怖かった。私とパートナーになることで、マルクの夢を潰してしまうことが。私のせいで、マルクの夢が終わってしまったらと思うと、怖くて、怖くて、だから、言えなかった」

弱々しいアメジエスの声が、風と共にルビィネルの耳に届く。

「言えなかったの……」

もう一度繰り返されるその言葉が、余計に物悲しく聞こえ、ルビイネルはアメジエスから視線を逸らし、その場でそっと俯いた。

「あなたみたいに、“一緒にマフレイヤに行こう”って、私には言えなかった」

空を見上げ、悲しげに微笑むアメジエスを横目に、ルビイネルがそっと、目を細める。

「それは、そなたが、マルクの夢の重さを、知っていたからだろう？」

「え？」

空を見上げていたアメジエスが、その言葉に、ルビイネルへと視線を移す。

「そなたが、誰よりも、マルクの夢を大切にしていたからだろう？」顔を上げたルビイネルが、アメジエスをまっすぐに見つめ、優しく微笑みかける。

「誰かに、自分の夢を大切に思ってもらえたら、私なら、とても嬉しいと思う」

ルビイネルの笑みが、少し寂しげに浮かぶ。

「だから、それは、マルクにとって、とても幸せなことだと思う」再び視線を落とし、どこか噛み締めるように呟くルビイネルを見つめ、アメジエスが少し、考え込むような表情を見せる。しばらくの沈黙が続いた後、アメジエスはそっと、口元を緩めた。

「そうだいいけど」

短く呟いたアメジエスが、今までの曇りがちな笑いではない、晴れやかな笑顔を浮かべる。

「さつきは、ごめんなさい。演習なのに、無茶しちゃって」「いいやつ」

ルビイネルが首を横に振りながら、大きく微笑む。

「あれはあれで楽しかった。久々にいい汗がかけたしな。またそのうち、手合わせしてくれないか？ アメジエス」

ルビイネルのその笑みを受け、アメジエスがさらに、笑みを深く

する。
「ええ、喜んで」

夕暮れに、空が赤く染まり始めた頃、魔院の講義を終えた魔士や魔女たちはそれぞれ、帰宅しようと、魔院の正門を潜り抜けていた。

「ふんふん、へえ、ほお、んん？　ううん……」

正門がよく見える中庭のベンチに腰掛け、教科書を読みながら、納得する声、感心する声、そして唸るような声を次々と漏らしているマルク。眉間には皺が寄り、険しい表情となっている。

「何してるの？」

「うお！」

急に話し掛けられ、マルクが驚きの声をあげる。

「な、何だ。アメジエスか」

マルクの座るベンチの前に立ち、マルクの顔を覗き込むように屈みこんでいるのは、アメジエスであった。アメジエスの姿を確認し、安心した様子のマルクが、教科書を閉じ、膝の上へと置く。

「一瞬、あれだけ必死に撒いたトゥーパが、戻って来たのかと思つて、焦つたあ」

「苦労してるわね」

冷や汗を拭うマルクを見て、どこか呆れたような表情を見せるアメジエス。

「ルビィネルを待つてるの？　だったら、もうすぐ……」

「いや、お前待ってた」

「え？」

マルクの答えに、アメジエスが少し戸惑うような声を漏らす。顔を上げたマルクが、真剣な表情を見せ、まっすぐにアメジエスを見つめる。

「今朝のこと。俺、何か無神経なこと言ったんなら、謝ろうと思つて」

向けられる透き通った瞳に、アメジエスがそっと目を細める。

「いや、俺、頭悪いし、神経もたぶん、人より少ないし、何か色々足りなさ過ぎるから、一日必死に考えたんだけど、何が悪かったのかわかんなくって……」

言葉が続けながら徐々に、マルクが顔を俯けていく。

「俺って、わかることと、わかんないことの比率、二対八くらいなんだよなあ」

陰気な空気を纏い、見るからに落ち込んでいくマルクを見つめていたアメジエスが、零すように笑みを浮かべる。

「一対九だと思うわよ」

「どうせ俺には、理解力とか、まるつきり備わってないんだよお！」
「フフフ」

頭を抱え、嘆いていたマルクが、聞こえてくる笑い声に、目を丸くし、顔を上げる。

「アメジエス？」

「まあ、マルクには一生、わからないでしょうね。ただ単に、私の機嫌が悪かったただけだし」

「機嫌？」

「そう。今朝、髪の毛のセットが、どうしても上手くいかなかったの」

「何だよ、それ」

口を尖らせるマルクを見て微笑みながら、アメジエスが、マルクの座るすぐ横へと腰掛ける。

「考えて損した」

「いい脳ミソの運動になったんじゃない？」

どこか拗ねたように呟くマルクに、アメジエスが悪戯っぽく微笑みかける。

「そういえば今日、炎技の演習でルビィネルと対戦したわよ」

「へえー、魔女科って、そんな講義やってんだ」

「ええ。ルビィネル、すごく強かった。あれなら本当に、彩炎の魔女になれるかも」

一つのベンチに、隣り合って座ったマルクとアメジエスが、正門を通って帰っていく者たちの姿を見つめながら、何げない会話を続ける。

「あいつの彩炎の魔女への意気込み、半端ないからなあ」

「そうみたいね」

感心するように言うマルクの横で、アメジエスが小さく頷く。

「前よりずっと、はつきりと見えてきたんじゃない？」

「へ？」

「聖地マフレイヤ」

戸惑うように首を傾げたマルクに、アメジエスが、マルクがずっと夢見てきたその場所の名を口にする。マフレイヤの名を聞くと、マルクはアメジエスから視線を逸らし、前方を見つめて、穏やかな笑みを浮かべた。

「そうかも」

「ルビィネルのお陰ね」

「うん」

アメジエスの言葉に、マルクが素直に頷く。

「後は、お前のお陰かな」

「え？」

思いがけないマルクの言葉に、アメジエスは少し驚いた様子で、マルクの方を振り向いた。

「私が？　なんで？」

「お前、言わなかったから」

「言わな、かった……？」

振り向いたマルクに、アメジエスが困惑の表情を見せる。

「うん。俺が聖地マフレイヤに行くのが夢だつて言ったらさ、皆が皆、言っただよ。“行けるはずがない”って」

そつと空を見上げたマルクが、どこか懐かしそうな笑みを浮かべる。

「けど、お前だけは、言わなかった」

「そう？　言わなかった？」

「言わなかったよ。“大変だと思う”とか、“苦労するよ”とかは言ったけど、“行けるはずがない”とは、絶対に言わなかった」

自身の記憶すら曖昧で、首を傾げるアメジエスに対し、マルクが確信を持って答える。

「だから、ギリギリのところで諦めずに済んで、今、まだこうして、夢見てられるんだと思う」

笑みをより大きくし、マルクが改めて、アメジエスの方を見る。

「だから、サンキューな。アメジエス」

向けられるマルクの笑みに、アメジエスが目を細める。

——それは、マルクにとって、とても幸せなことだと思う——

「だったら、いいな……」

「へ？」

「いいえ」

聞き返すように首を傾げたマルクに、アメジエスがそつと首を横に振る。

「お礼なら、もう少し成長してから言ってくれないかしら？」

「どうせ俺は、まだ放出も満足に出来ませんよぉー」

いつものように陰気な雰囲気を纏い、落ち込んだ様子で呟くマルクを見て、アメジエスは嬉しそうに微笑んだ。

翌日。レール聖魔院、第八講義室。

「やあ、今日も眩いばかりの美しさだねえ！　我が魔女、アメジエス！」

相変わらずの堂々とした、大きな立ち振る舞いで、今日もアメジ

エスの居る講義室へと現れたフランを、マルクやポンドたちが、呆れた様子で見つめる。

「光のように鮮烈で、闇のように深い魅力を持つこの僕でさえ、君の美しさには、眩暈がするよ!」

「医務室行け、医務室」

眩暈のしている動作を見せるフランに、ポンドがひっそりと呟く。

「さあ、アメジエス! 今日という今日こそ、花のように麗しく、風のように爽やかなこの僕の、パートナーになってくれたまえ!」

「いいわよ」

「そうか。今日もやはり、パートナーになる気には……って、へ?」

一度は元気をなくしかけたフランであったが、あまりにもあっさりと放たれたアメジエスの答えを思い返し、言葉を途中で止め、ひどく困惑した様子で、アメジエスの方を見る。

「アメジエス、今、何と……」

「いいわよ。パートナー、なってあげる」

「……………」

もう一度放たれたアメジエスの答えに、あまりにも衝撃が走ったのか、フランがすべての動作を止め、しばらくの間、固まる。

「ほ、本当に……?」

「嫌なら、別にいいけれど」

「嫌なはずないじゃないか!」

「じゃあ、契約成立ね」

そつと微笑みかけるアメジエスに、フランが大きく目を見開き、全身をわなわなと震え上がらせる。

「今日という日よ、ありがとおおー!」

「うるさいよ」

窓の外に向かって全力で叫ぶフランに、マルクが思わず突っ込む。

「僕とアメジエスの門出だ! 盛大に祝いたまえ、最下級魔士!」

「だから、名前で呼べっての!」

「まあまあ」

偉そうに言い放つフランに、席を立ち上がり、怒鳴りあげるマルクを、隣の席に座るルビィネルが、落ち着いた様子で宥める。

「んでえ？」

マルクとルビィネルが、フランとあれこれと言いつている間に、アメジエスの横に腰掛けたポンドが、探るように、アメジエスの顔を覗き込む。

「どういふ心境の変化なわけ？」

「別に」

ポンドの問いに素っ気なく答え、アメジエスが微笑む。

「ただ、叶えてあげられないなら、せめて、見守りたいって思っただけ」

微笑んだアメジエスが、フランに怒鳴りあげているマルクを見つめる。

「見守るなら、それなりに近いところに居ないとね」

「フランはあくまで、そのための手段ってことねえゝあああ、魔女って怖いっ」

「いいじゃない？ 彼はすごく喜んでるし」

呆れたように肩を落とすポンドに、アメジエスがどこか、含んだような笑みを浮かべる。

「けつど大概、アメジエスも一途だよなあー。俺と一緒に！」

「ポンドと一緒にされたら、私の一途の価値が下がるわ」

「ええゝ？ それ、マルクにも同じこと、言われたんだけどお」

冷たく言い放つアメジエスに、ポンドが落ち込んだ様子で、目尻を下げ、顎を机へと付ける。

「見守る、か……」

自身の発した言葉を繰り返し、アメジエスが感慨深げな表情を見せる。

「まあ、こんなこと」

アメジエスが再び視線を動かし、フランと話しているマルクを見る。

「あなたには、言わないけれど」
誰にも聞こえない声で呟き、アメジエはどこか、楽しげに微笑んだ。

レイル聖魔院、第五演習室。

「ハハハハ！ 炎技演習参加者、諸君よ！ 蝶のように軽やかで、蜂のように鋭い、僕とアメジエスの素晴らしいコンビネーションに、酔いしれないようにしたまえよ！」

集まった講義参加者たちの最前列で、演習室中に響き渡る声を発し、堂々とした立ち振る舞いで言い放つフラン。そんなフランを、他の魔士や魔女たちは、呆れ切った表情で見つめる。

「ウザッ」

美しい顔を勢いよくしかめ、思わず言葉を発するトゥーパ。

「何とかしろよ、アメジエス」

「嫌」

マルクの呼びかけに、アメジエスは二秒とかかることなく答える。

「嫌って、お前のパートナーだろ？」

「私がパートナーにしたのは、魔士としての彼の技能だけ。彼の人間性にまで、責任持てないわ」

「うわぁー、キッパリ」

アメジエスのはつきりとしたものの言い、思わず表情を引きつらせるマルク。アメジエスはいく先日、今までずっと断り続けていたフランと、パートナー契約を行った。契約は、マルクとルビィネルのような無期限契約の本結ではなく、いつでも解除可能の偽結による契約である。それにより、パートナーを組んだ魔士と魔女のみ参加出来る、炎技演習の授業にも、マルク、ルビィネルと共に参加を始めたのだ。だが、長い間、焦がれていたアメジエスとパートナーとなり、有頂天状態のフランとは異なり、アメジエスの様子はとても冷めていた。

「おいおい、その最下級魔士！」

「だから、名前で呼べってば」

力強く指差してくるフランに、マルクがうんざりした表情を見せる。

「慣れ慣れしく、我が魔女に話しかけないでくれたまえ！」

「私の交友関係に口を挟むようなら、パートナー契約、解除するわよ」

「どんどん、仲良くするがいい！」

「もう何々だよ、お前……」

アメジエスの脅しのような忠告に、あっさりと主張を覆すフランを見て、呆れたように肩を落とすマルク。

「とりあえず、うっせえ！」

「痛！」

皆の最前列に立っていたフランの後方から、ブラッドスが勢いよく、フランの後頭部を殴りつける。

「僕の繊細かつ、有能な頭に、何をしてくれるんだい！」

「さつきから、うっせえんだよ。どんだけ講義の邪魔したら、気が済むんだ」

非難するように振り返ったフランを、ブラッドスが鋭い目つきで睨みつける。

「これ以上、騒ぐようなら、俺の講義、出禁にすつからな！」

「授業拒否というやつだな」

ブラッドスの言葉を聞いたルビィネルが、どこか納得するように呟く。だが、ブラッドスの言葉がきいたのか、フランはそのまま大人しくなり、最前列から下がると、アメジエスのすぐ隣へと並んだ。今日は昨日の続きで、炎技の一つ、“ねんしょう 燃烧”の演習をやる。各自、散らばって、練習してみろ」

ブラッドスが講義参加者へ、少し適当とも取れる指示を送ると、皆それぞれ、魔士と魔女の二人一組となって、広い演習室へと散っていく。

「また燃烧かあ」

「放出も出来ていないのにな」

「放つとけ」

からかうようにそう言って、微笑みかけるルビィネルに、マルクがしかめっ面を向ける。

「“燃烧”は、体内を流れる魔炎を活性化させ、自身の体を強化する炎技だ。魔炎操作は体内のみだから、ある意味、“放出”より簡単かも知れないぞ」

「まあ、そう言われて希望を持って、やってみたものの、昨日は出来なかったけどな……」

励ましのようなルビィネルの言葉に、マルクが暗い表情で答えると、皆にまぎれ、二人も、人の居ない位置へと移動しようと足を踏み出す。

「ああ、マルク・クラウド」

「へ？」

不意にブラッドスに名を呼ばれ、マルクが踏み出した足を止め、振り返る。

「お前、明日、俺がやる特別課外講義の手伝いだから、朝、レイール西広場に六時集合な」

「特別課外講義？」

「ああ」

「何々？ 何、それえ？」

マルクへの言葉であったというのに、マルク以上の興味を示し、トウーパが身を乗り出して、ブラッドスへと問いかける。

「シリング・ウェーガットのパートナー選出だ」

「パートナー選出？」

「ああ。ったく、何だって俺が、んな面倒臭い講義しなきゃなんねえんだかつ」

ブラッドスが不愉快そうに顔をしかめ、右手で乱雑に頭を掻く。

「そういえば、魔女科に回覧来てたやあ。最上級魔士シリングのパートナーを決めるから、希望魔女は特別講義に参加しろって。そっか、明日だっけえ」

「けど、最上級魔士さんのパートナーは、魔院が直々に厳選するんじゃないかった？」

「その厳選作業で揉めたから、結局、実力試験的な講義を行って、決めることにしたんだと」

「へえ。まあどっちにしろ、すごい特別扱いよね」

ブラッドスと会話をしながら、アメジェスが感心するように言う。

「ちょ、ちょっと待てよ！ 何だって俺が、最上級魔士のパートナー選びの手伝いなんて、雑務をやらされなきゃいけないんだよ！」

少し怒ったような表情を見せたマルクが、抗議するようにブラッドスに食ってかかる。

「お前、この前の俺の講義でやった筆記試験の、注意書き、読んでねえだろ？」

「注意書き？」

「ああ。ちゃんとここに」

ブラッドスが懷から一枚の回答用紙らしきものをだし、マルクの前へと提示する。

「尚、この試験の点数が最下位だった者に、今度の特別講義の手伝いを命ずる」って、な？」

「ホントだ」

注意書きを確認し、頷くマルク。

「お前の筆記試験の結果は、百点満点中、十八点。四十七人中、堂々の最下位」

「……………」

クラスの試験順位表を目の前に見せつけられ、マルクが何も言い返すことが出来ぬまま、固まる。

「何だ。そなた、炎技だけでなく、頭の出来も悪いのか」

「だああああ！ どうせ俺なんて、頭脳も技量も、何もない奴なんだよぉー！」

ルビィネルの一言をきっかけに、マルクがまたいつものように、頭を抱えて嘆き散らす。

「パートナーのお前も手伝え。丁度、もう一人くらい、人手が欲しかったからな」

「ああ、それは構わぬが」

「えええー、楽しそう！ マルクが行くなら、トウーパも行こつかなあ！」

「お前は来なくていい」

ウキウキと声を弾ませるトウーパに、ブラッドスが冷たく言い放つ。

「んじゃ、明日六時な。遅れんなよ」

もう一度、確認するように言くと、ブラッドスが、すでに練習を始めている講義参加者たちの方へと歩き出していく。ブラッドスの去っていく姿を見ながら、マルクは深々と肩を落とした。

「はあゝあ。何だって俺が、そんなことをっ……」

「良いではないか。特別講義など、滅多に見られぬのだから」

「誰も、あの最上級魔士が、山ほどの魔女に囲まれて、偉そうにパートナー選びしてるところなんて、見たくないっての」

明るく言うルビィネルに対し、マルクはうんざりした様子で口を尖らせる。そんなマルクを見て、少し困ったような表情を見せるルビィネル。

「それほどに凄い魔士なのか？ そのシリング何とやらというのは」

「ええ。頭や炎技の実力は勿論、顔まで良くて、魔院中の魔女たちの憧れの的なのよ」

「まあ確かに、山のように高く、海のように広い人気を誇るこの僕と、人気を二分するほどだからね！ 彼は！」

解説するアメジェスの横で、誰も耳を傾けていないというのに、声を張り上げるフラン。

「同年だし、同じ頃に魔院に入っただから、昔からよく、最下級魔士のマルクの、比較対象にあげられてたのよねえ」

「マルクにとっては、これ以上ないコンプレックスということか」
深々と溜息を吐いているマルクの姿を見ながら、ルビィネルもそ

つと、息を落とした。

翌日、朝六時。レイル西広場。

「遅せえ！」

揃って現れたマルクとルビィネルに対し、すでに広場へとやって来ていたブラッドスは、不機嫌極まりない表情で言い放った。

「何でだよ？　ちゃんと六時に来ただろ？」

「こういう課外何たらの時は、ワクワクしちゃって、五分前には集まるのが常識だろうが！」

「そんな常識、聞いたことないよ！」

怒鳴りあげるブラッドスに、マルクも負けじと声を張る。

「ああー、まあいい。今日はスケジュールが詰まってるんだ。お前等、この名簿見て、とつとと魔女共の出欠確認しろ」

荒っぽく答えたブラッドスが、マルクへと、一枚の紙を渡す。その紙には、魔女のものらしき名前が、びっしりと並んでいた。

「こ、こんなに居るのかよ。あいつのパートナーになりたいって魔女は」

「まあ見た限り、魔院中のほとんどの魔女が、参加しているようだな」

「見た限り？」

すぐ隣のルビィネルの言葉に、戸惑うように顔を上げるマルク。顔を上げたその瞬間に、マルクは大きく目を見開き、驚きの表情を見せた。広めの演習室ほどの大きさのある、そのレイル西広場に、ほぼ隙間なく、所狭しと、魔女たちが集まっている。予想以上の参加者の多さに、思わず茫然としてしまうマルク。

「凄まじい人気だな。九十九人に振られた魔士とは、偉い違いだ」
「うるさいなあ」

感心するように、集まった魔女たちを見回しているルビィネルに

対し、マルクが拗ねるように唇を尖らせる。

「というか、確か、もうパートナーが居たんじゃ……っっていう魔女まで参加してるけど」

「最上級魔士が手に入ったら、乗り換えるんだろ？ 魔女にとって魔士なんて、道具みたいなもんだからな」

「ひどっ」

ブラッドスの言葉に、思わず肩を震わせるマルク。乗り換えられる魔士の心情を思うと、堪らないものがある。

「ま、魔士にとっても、魔女はただの力。酷いのは、同じだけどこか悲しみのようなものが滲んだ、ブラッドスのその言葉に、マルクが戸惑うように首を傾げる。

「シリングくんよお！」

「きゃああ！ シリングくーん！」

集まった魔女たちからあがる歓声に、マルクたちが一斉に振り向く。すると、広場の入口から、ゆっくりとした足取りで、マルクたちの元へと現れる、シリングの姿があった。鋭い青色の瞳は、今日もどこか冷たい。シリングが、ブラッドスのすぐ前へとやって来る。「すみません。少し遅れました」

「まあ、お前は講義参加者じゃねえからな。大目に見てやるよ」

ブラッドスへの挨拶が終わると、シリングが次に、マルクとルビネルの方へと視線を移した。

「お前たちは……」

二人の姿を見て、シリングが見覚えでもあったのか、そつと眉をひそめる。

「ああ。こいつらは、今日の特別講義の手伝いだ」

「手伝い？ そうか。講義のあるところを、俺のためにすまない。今日はよろしく頼む」

「へ？ あ、ああ。よろしく」

丁寧な言葉を掛けてくるシリングに、マルクが少し拍子抜けしたような表情となりながらも、慌てて答えを返す。

「適当に見学していいですか？」

「ああ。用があつたら、また呼ぶ」

「お願いします」

ブラッドスに深々と頭を下げると、シリングは、広場中の魔女の視線を集めたまま、歩き去っていった。

「紳士ではないか。あのフランとかいう者より、余程、好感が持てるぞ」

シリングの後ろ姿を見送って、ルビィネルが気持ちのいい笑顔で、マルクへと話しかける。

「だからズルいんだよ。頭も顔もいいのに、性格までいいなんてさ」

「そなたなど、どれも良くないのにな」

「どうせ俺は、頭悪いし、顔普通だし、性格捻くれてんだよぉー！」

「いいからお前等は、とっとと出欠確認に行け！」

嘆いていたところを、ブラッドスに怒鳴りあげられ、マルクとルビィネルが、追い立てられるようにして、広場に集まった魔女たちのところへと駆け寄っていく。

「ああー、では出席を取りまーす。名前を呼ばれたら、返事をして下さい」

マルクが名簿の順に、魔女の名を呼んでいき、聞こえたものの名に印をつけていく。ざっと百人は居るのだろうか。これほど集まれば、返事も聞き取りづらいかと思つたが、皆、気合い十分なのか、どこまでも届くほどの大きな返事を響かせた。

「次、サファイさん」

「サファイ？」

マルクの呼んだ名に、ルビィネルが首を傾げる。

「あれ、サファイさん？ 居ませんか？」

「居るわよ！」

「うわっ」

一度目の呼びかけに返事がなく、二度目の呼びかけをしたマルクのすぐ耳元から、聞こえてくる大きな返事。思わず耳を押さえなが

ら、マルクが振り向くと、そこには青いショートカットに、大きな金色の瞳の少女が立っていた。少しまつそうな目つきではあるが、少女はきれいな顔立ちをしている。袖なしの青色シャツに、白色の短いパンツ姿という、魔女にしてはラフな装いであった。首には、魔女が皆巻いている、青色のリボンが巻かれている。細身のルビィネルよりも、さらに細い、小柄な体型の魔女だ。

「あ、居たのか」

「ちよつと席外してただけ。ってか、出欠取るなら、でつかい声でそう言いなさいよね！ たまたまその場に居なかっただけで、欠席になんかされたら堪えないわ！」

「はあ、すみません」

物凄い剣幕で言い放つサファイに、理不尽な気もするが、言い返す氣力が湧かず、マルクは大人しく謝罪をする。

「相変わらず、文句の多い女だな」

「何ですって!？」

すぐ近くから聞こえてくる悪口に、サファイが勢いよく振り向く。

「って、ルビィネル!？」

「久し振りだな、サファイ」

振り向いた先に立っていたルビィネルを見て、サファイが大きく目を見開く。よく知った様子で、互いの名を呼ぶルビィネルとサファイに、不思議そうに首を傾げるマルク。

「なんで、あんたがここに居んのよ!？ あんた、フレイ……! 痛ったあ!」

ルビィネルが、思いきり、サファイの足を踏みつけ、サファイの言葉を途中で、強制的に終わらせる。

「何すつ……!」

「余計なことを言ったら、燃やす」

「……はい」

文句を言おうとしたサファイに、ルビィネルが冷たい表情を向け、マルクには聞こえないような小さな声で脅すように言い放つ。する

と、サファイの表情が一気に凍りつき、サファイは大人しく頷いた。
「知り合い、なのか？」

二人の様子に疑問を抱き、少し表情をしかめながら、マルクがルビィネルへと問いかける。

「ああ。フレイヤに居た頃の、顔見知りだ」

逆に怪しいほどの満面の笑顔を作り、マルクへと答えるルビィネル。

「何？ あんたこそ、この頭の悪そうな魔士と知り合いなわけ？」

「どうせ俺なんか、見た目通り、頭悪いんだよぉー！」

サファイからルビィネルへの問いかけに、またしても傷つき、陰気な空気を発するマルク。

「私のパートナーだ」

「パっ!？」

ルビィネルからの答えに、サファイがさらに大きく目を見開く。

「正気!？ パートナーなんか作って、あんた、サード二つ……！
痛ったあぁい！」

またしても足を踏みつけられ、強制的に言葉を終了させられるサファイ。

「余計なことは言うなと、言っているだろう……？」

「すみません……」

ルビィネルからの、マルクには聞こえない小さな脅しに、身を震わせながら、力なく謝るサファイ。

「そなたこそ、何故、このような場所に居るのだ？ そなたはフレイヤの聖魔院に通っていたはずだろう？」

「パパにお願いして、フレイヤに許可出してもらって、特別に、この講義に参加させてもらってんのよ」

「この講義に？ わざわざフレイヤから？」

「そう。このレイール聖魔院で、シリング・ウェーガットのパートナー選びに、特別講義を実施するって聞いたから、慌ててね」

目を丸くするマルクに、サファイが胸を張って答える。

「何だ。そなたも、最上級魔士を手に入れたい口か」

「その辺の魔女と一緒にしないでよね！」

呆れたように言い放ったルビィネルに、どこかムキになって言い返すサファイ。

「私は、ずっと前から、シリングのこと……！　って、こんな話、あんたたちにしても仕方ないか」

吐き出そうとした言葉を途中で呑み込み、サファイが一つ、深く息を吐く。

「とにかく、私の邪魔はしないでよね！」

偉そうにそう言い切ると、サファイはマルクたちに背を向け、足早に、他の魔女たちの中へと入っていった。

「変わった友達だな」

「別に友達ではない。たまたま、家同士が古くからの知り合いなだけだ」

「へえ、そうなんだ」

「おい、お前等！　出欠取れたか！？」

マルクとルビィネルが言葉を交わしていると、後方から、ブラッドスが歩み寄って来る。

「いや、まだ六人目」

「何してんだよ！　スケジュール詰まってるって、言ってるだろ！　とっとと取りやがれ！」

「はぁーい」

ブラッドスの怒鳴り声に、マルクはやる気のない返事を返した。

ブラッドスに急かされるようにして、出欠を取り終えたマルクとルビィネルは、続いて、実際の講義の準備に借り出された。今回の特別課外講義の内容は、大きく分けて、三つ。まず一つ目は、魔力測定。その名の通り、魔女たちが身に秘めている魔力を測定する。その魔力測定により、魔力の高かった三十名のみが、次の講義内容へと進めるのだ。

「これが魔力測定器だ。三人で分かれて、一人ずつ個別に、測つてくぞ」

「了解」

説明と共に、ブラッドスから渡されたのは、置き時計のような、大きな目盛りの横に、手の甲がギリギリ入るほどの狭い間しかない持ち手のついた、黒い機器であつた。

「ふうーん、これが魔力測定器かあ」

見たことのない機器を前に、マルクが興味深げに、まじまじと見つめる。導かれるように、魔紋の刻まれた右手を差し込み、持ち手をそつと握り締めた。

——ビィー！

「うおっ！」

強烈な機械音が鳴り響き、測定器の目盛りが一気に振り切れたかと思うと、また針が戻り、文字盤の中をぐるぐると回転し始める。

「な、何だあ？」

「何、やらかしてんだよ！　ったく」

持ち手から手を離しても、針の回転が止まらない測定器を見つめ、困った表情を見せるマルクのもとへと、ブラッドスがやって来る。

「最下級魔士の魔力なんか測らせるから、壊れちまっただろうが」

「どうせ俺の魔力は、精密機器でも測れないほどに、わずかだよ！
微量だよ！ 微塵だよ！」

少し涙目で嘆くマルクから、ブラッドスが測定器を取り上げる。
「予備持ってたきといて、正解だな。ほら、こっちでとっとと測って
来い」

「うっう……」

新しい測定器を手渡し、まだ落ち込んでいるマルクを、ブラッド
スが魔女たちのもとへと追いやる。マルクから取り上げた、まだぐ
るぐると回転している測定器を見つめ、そっと目を細めるブラッド
ス。

「完全に振り切れてやがんな……」

そう呟き、ブラッドスが表情を曇らせる。

「最下級のあいつが、んな大層な魔力持つてるはずもねえし、あいつ
の魔紋から、パートナーの魔力が漏れ伝わってきたってどこか」
ブラッドスが視線を移し、すでに魔女たちの魔力測定を開始して
いるルビィネルの姿を捉える。

「漏れ伝わった魔力だけで、測定器イカらせるなんて、恐ろしいね
え」

ルビィネルを見つめたまま、ブラッドスはどこか、浮かない表情
を見せた。

その後、マルクたちにより、集まった全魔女の魔力測定が行われ、
上位三十名が選出された。さらに、昼食の後、その三十名により、
疑似炎を用いた、炎技の実演が行われ、ブラッドスの審査により、
十名まで、魔女が搾られた。朝六時から開始から開始された特別課
外講義も、午後四時を回り、夕暮れに差し迫ろうとしていた。

「折角、シリングくんとパートナーになれると思ってたのに！」

「残念だなあ」

「ほらあー、紛らわしいから、選考から外れた奴は、とっとと帰れ」

最終選考に残った魔女以外の魔女たちは、各々に残念がりながら、ブラッドスの言葉を背中に浴び、帰路へとつく。広場を埋め尽くすほどに居た魔女も、十名まで減り、漸く、広場全体が見渡せるほどになっていた。

「何だ。そなたも残ったのか」

「当然でしょっ」

感心したように言うルビィネルに、しかめっ面で答えるサファイ。最終選考に残った魔女の中には、サファイの姿があった。

「ああゝあ、もうすぐ夕方じゃねえか。これからがメインだったのによ」

「メイン？」

「ああ、最終選考だ」

マルクと共に、残った十名の魔女が見つめる中、ブラッドスが説明を始める。

「最終選考は、この広場に隣接する、レイールの森を舞台に、ある生き物を搜索してもらう」

「ある生き物？」

「こいつだ」

ブラッドスが懷から取り出し、皆へと見せたのは、一枚の写真であつた。その写真には、一匹の茶色に猫が写っている。猫にしては、耳が長く、牙も鋭い。目も赤色で、珍しい外見をした猫だ。

「まあ皆、知っていると思うが、“魔猫”^{まびょう}と呼ばれる、魔物の一種だ」

「え！？ 魔物！？」

ブラッドスの言葉に、その場でただ一人、驚くマルク。一気に集まる視線に、マルクが申し訳なさそうに俯く。

「すみません……」

気まずいその空気に、思わず謝るマルク。

「ああー、お前たちには、森のどこかに居る魔猫を捜してもらう。捜し当て、俺のところまで連れ帰ってきた者を、シリング・ウェー

ガットのパートナーとする」

俯いたマルクをそのままに、ブラッドスが説明を続ける。

「魔猫は一匹。つまり、この試験をクリア出来る魔女は、一人だけだ」

「正真正銘、最終選考というわけか」

説明するブラッドスの横で、ルビィネルが納得するように頷く。

「魔猫は大人しい魔物だが、捕まえようとする者には攻撃する可能性もある。よって、魔炎の使用を許可する。勿論、自分が倒れない程度にな」

忠告するように言い放つブラッドスに、魔女たちが皆、真剣な表情を見せる。

「制限時間はない。その他ルールも、特にない。説明は以上だ。各自、森に移動し、魔猫の搜索にあたれ」

ブラッドスが説明を終えると、魔女たちは素早く身を翻し、我先にとこぞって、森へと駆け出していった。広場に魔女たちが居なくなり、その場に、マルク、ルビィネル、ブラッドスの三人だけが残る。

「さあーで、しばらくは待機だ。お前等も、朝からご苦労だったな。休んでていいぞ」

「はあー、やっと休憩かあ」

解放感からか、一気に肩の力を抜くマルク。

「俺、休憩所でちょっと、寝て来ていい？ 朝早かったから、眠気がすごくて」

「勝手にしろ。その代わり、起きて来なかったら、置いて帰るからな」

「わかったあ」

大きな欠伸をしながら、すでに眠る態勢を整えるような、気の抜けた声を漏らして、ブラッドスへと返事をする、マルクは休憩所へと向かうべく、そのまま広場を後にした。

「私も暇だから、向こうの池でも見てくるかな」

マルクに続くように、ルビィネルもその場から離れようとする。そんなルビィネルを見て、ブラッドスが鋭く、目を細める。

「お前さ」

ブラッドスの声に、去ろうとしていたルビィネルの足が止まる。振り返ったルビィネルは、ブラッドスから向けられる鋭い眼差しに、構えるように、真剣な表情を作った。

「何がしたいの？ 一体」

シンプルなその問いかけに、少し間を置いた後、ルビィネルがそつと、口元を緩める。

「私は、“彩炎の魔女”になる。それだけだ」

曇りのない笑みを浮かべ、はつきりと言い放つと、ルビィネルはブラッドスに背を向け、その場を去っていった。最終的に、広場に一人残ったブラッドスが、少し抱えるように、右手で頭を押さえる。

「彩炎の魔女、ねえ……」

ルビィネルの口にしたその言葉を繰り返し、ブラッドスは、神妙な表情を見せた。

「ふわぁーあ、ホントに眠いなあ」

また大きな欠伸を漏らしながら、マルクが、広場の入口を出て、すぐ右方にある休憩所へと向かう。休憩所は、小さな広場に、幾つかベンチが並んでおり、水飲み場なども用意されていた。

「あつ……」

人気のないその休憩所に、先客を見つけ、マルクが少し驚いたような表情を見せる。休憩所のベンチの一つに腰掛け、のんびりと本を読んでいるのは、朝見かけて以来、見ていなかった、今日の講義のある意味の主演である、シリングであった。マルクの声に気付いたのか、シリングが本から目を離し、顔を上げる。

「特別講義、終わったのか？」

「え？ い、いや、まだ。今、最終選考中」

「何だ、まだ終わらないのか」

マルクの答えを聞くと、シリリングがどこか、うんざりしたように顔をしかめ、再び本へと視線を戻す。その様子を見て、マルクは眉をひそめた。

「適当に見学してるんじゃないのか？」

水飲み場の方へと移動しながらも、マルクが、少し責め立てるように、シリリングへと問いかける。

「魔院が勝手に、一番有能な魔女を選出してくれるんだ。別に俺が見る必要もないだろう」

その言葉に、さらに表情を曇らせたマルクが、勢いよくシリリングの方を振り返る。

「け、けど皆、お前のパートナーになるんだって、凄い、張り切ってる……！」

「必要ない」

何とか魔女たちの頑張りを伝えようとするマルクであったが、その言葉は、シリリングによって、あっさりと遮られてしまう。まるで興味がないように、本を読み続けるシリリングの姿に、マルクが唇を噛み締める。

「お前のために一生懸命、頑張ってる魔女たちを、見てやろうとも思わないのかよ！？ お前は！」

張り上げられたマルクの声に、シリリングがまた、ゆっくりと顔を上げる。怒りを見せるマルクに対し、シリリングはひどく冷え切った視線を、マルクへと向けた。

「“最下級魔士” マルク・クラウド」

「え？」

シリリングが呼んだ自分の名に、マルクが驚いた表情を見せる。自身とは対照的存在である、“最上級魔士”のシリリングが、自分の名を知っているなどは、思ってもみなかったからだ。

「苦労してやっと、パートナーを得たばかりのお前には、“魔女”

という存在が、貴重なものに見えているのかも知れないが……」

読んでいた本を力強く閉じ、シリリングがまっすぐに、マルクを見つめる。

「魔女は所詮、俺たち“人”が、魔炎という強い力を得るための、道具に過ぎない」

突き刺すようなシリリングの言葉に、マルクが思わず表情をしかめる。

「それは、魔女にとっても同じだ。俺たち“魔士”は所詮、魔女が己の力を誇示するための道具」

マルクが今朝、同じようなことを言っていた、ブラッドスのことを思い出す。だが、どこか悲しげであったブラッドスとは異なり、シリリングの言葉はひどく冷たく、そこに、感情は見えない。

「道具に、情をうつす必要はない」

冷たいその言葉は、何か確信を持っているようにすら、聞こえた。

「それが、互いのためだ」

はつきりと言い切られたシリリングの言葉を聞き終え、マルクが厳しい表情のまま、ゆっくりと顔を上げ、その突き刺すようなシリリングの視線に、憶することなく、まっすぐにシリリングを見つめる。

「だから、誰がどれだけ頑張ろうと、誰がパートナーに選ばれようと、見る必要はない？」

「ああ」

迷うことなく頷くシリリングに、マルクがまた、強く唇を噛んだ。

「俺、勝手に、昔から、“最上級魔士”のお前に憧れてたけど……」

俯いたマルクが、少し低い声を漏らす。そして、勢いよく顔を上げると、マルクは、まるで睨みつけるように、シリリングを見た。

「全件撤廃！ もう二度と、憧れてなんかやらないからな！」

決まっているのかもわからない捨て台詞を残して、マルクはシリリングに背を向け、怒りの表れた足音を響かせながら、休憩所から去っていった。去っていくマルクの背中を見つめながら、シリリングがどこか、啞然とした表情を見せる。

「それを言うなら、前言撤回、じゃないのか……？」

シリングは、もうマルクには届かぬ訂正を、そつと漏らした。

「あー！ 全件撤廃じゃなくて、前言撤回だった！ 間違えたあー！」

休憩所を出たマルクは、怒りのままに歩を進めていたが、不意に足を止め、自身の間違いに気づき、その場で勢いよく頭を抱える。

「ヤバイ！ 絶対、馬鹿にされる！ やっぱりこいつ、馬鹿なんだって思われる！ うわあー！」

脳内に、嫌味ったらしく間違いを指摘するシリングの姿を浮かべ、さらに深く頭を抱えるマルク。

「どうせ俺なんて、脳みそ足りない、最下級魔士なんだよあー！」

「騒々しいなあ」

「うわあ！」

突然、すぐ傍から聞こえて来たその声に、マルクが思わず、驚きの声をあげる。マルクがすぐさま振り向くと、そこには呆れ顔を見せたルビィネルが立っていた。

「何だ、ルビィネルか」

「こんなところで、何を一人、ネガティブになっているのだ？」

「こんなところ？ あっ」

ルビィネルにそう言われ、マルクが今居る場所を確認するべく、周囲を見回す。辺りに見えるのは、鬱蒼とした木々ばかり。先程まで居た広場や、休憩所のように、ひらけた景色は一切見えず、ただ、どこまでも木々が広がっている。

「何だ、適当に歩いてるうちに、森に入っちゃったのか」

怒りのままに歩を進めていたため、気付かなかったが、恐らくここは、今まさに、最終選考が行われている、広場に隣接されていた森の中だろう。徐々に日も落ち始め、何の明かりもない森は、不気味な暗闇に包まれ始めている。

「何かあったのか？」

「へ？ い、いや、別に」

ルビィネルの問いかけに、マルクが誤魔化すように、首を横に振る。あのシリングに捨て台詞を吐いてきた上に、その台詞が間違っていたなどと、情けなさ過ぎて、ルビィネルにすら、話す気になれなかった。

「お前こそ、こんなところで何してるんだよ？」

「暇だから、池でも見に行こうと思ったのだが、いつこうに池に辿り着かなくなてな」

「池と森じゃ、真反対じゃないか。相変わらず、方向音痴……」

笑顔で答えるルビィネルに、マルクが少し呆れた表情を見せる。

「まあとりあえず、森出ようか。最終選考の邪魔になったら、悪っ

……」

「キヤアアアア！」

『……っ！』

森の奥から、突如聞こえてくる、女性の悲鳴に、マルクとルビィネルが険しい表情となって、すぐさま顔を上げる。少しばかり驚いた、という悲鳴ではない。明らかに何か、良からぬ事態が起こっている悲鳴であった。

「ルビィネル！」

「ああ、行こう！」

真剣な表情で頷き合い、マルクとルビィネルは、悲鳴の聞こえて来た森の奥へと、駆け出していった。

「アハハハ」

森の上空に浮かび、何やら楽しげな笑みを浮かべているのは、茶色い髪に、金色の瞳をした、魔士の制服を纏った青年。数日前、マルクとルビィネルのことで苛立つトウーパに近付いた、あの青年であった。

「さあ、遊ぼう」

青年が誘うように、右手を挙げる。
「ルビィネル」

マルクたちが森の奥へと駆け抜けていくその間にも、日はほとんど傾いていき、夕暮れの赤い光も徐々に薄れ始め、森の暗闇が深みを増していく。その暗闇により、増す不気味さが、マルクたちの中の嫌な予感を、膨れ上がらせた。険しい表情を見せ、額から汗を流しながら、木々を掻き分け、必死に、悲鳴の聞こえてきた方へと急いでいると、別方向から、同じ方向へと駆けていく足音が聞こえた。その音に、マルクとルビィネルが身構える。

「誰だ!？」

「誰!？」

勢いよく重なるマルクと、もう一つの声。

「サ、サファイ」

「何だ、あんたたちが」

威嚇するような大きな声を発し、身構えるようにして、二人の前へと現れたのは、サファイであった。二人の姿を見て、サファイが、気の抜けた様子で肩を落とす。

「私の邪魔はしないでって、言っただじゃない」

「別に、邪魔しようと思って、来たわけじゃないって。俺らは、悲鳴が聞こえたから、慌てて……」

『キヤアアア!』

マルクとサファイが会話をしていた矢先、またしても女性の悲鳴が、二つ重なるようにして、森の中へと響き渡る。その悲鳴に、三人の表情が一気に強張る。

「向こうか!」

「あっちね!」

「へ? あ、お、おい! ちょっと、待って!」

すぐさま、悲鳴の聞こえてきた方へと駆け出していくルビィネルとサファイを、マルクが慌てて追っていく。勢いよく森の奥へと、

三人が駆け抜けていくと、やがて、木々のない、少しひらけた場所へと辿り着いた。そこに、倒れている人影が見える。

「お、おい！ 大丈夫か！？」

倒れている人影へと、慌てて駆け寄るマルクたち。その場に倒れているのは、全部で三人。すべて、最終選考に残った魔女たちであった。魔女は皆、全身に細かい切り傷を負っており、そこから多少の血を流している。意識を失っているのか、深く目は閉じたままだが、外傷を見る限り、そうひどい怪我ではない。

「一体、何が……」

「とりあえず、森の外まで運ぼう！」

眉をひそめるルビィネルに、マルクが魔女を抱え上げようとしながら、呼びかける。

「ブラッドスにも連絡して、選考中止にしてもらわないと！」

「中止！？」

マルクのその言葉に、批判的な声をあげたのはサファイであった。「冗談じゃないわよ！ 中止になんてしたら、パートナーはどうすんのよ！？」

「怪我人が出てるのに、続けられないだろ！？」

強く怒鳴りあげるサファイだったが、マルクも必死に主張するうちに、声を張り上げる。

「それに、お前は必死なのかも知れないけど、シリングにとっては、こんな選考つ……」

「あ！」

睨みつけるようにマルクを見ていたサファイが、マルクの背後から迫る、握り拳大ほどの黒い影に気付き、大きく目を見開く。

「後ろ……！」

「へ？」

指を突き刺し、叫ぶサファイに、マルクが戸惑うように後方を振り返る。その黒い影は、カブトムシのような形をした、虫のようではあるが、見たことはない薄気味悪い生物で、不気味な赤い瞳を光

らせ、大きく羽根を広げ、マルクへと襲いかかった。

「マルク！」

「痛でででで！」

ルビィネルが慌ててマルクの元へと駆け寄り、マルクの右手を左手で掴むと、マルクの手を後ろへと思いきり捻り上げ、二人の手の先を、やって来る虫へと向ける。

「目醒めよ、我が赤炎！ “赤煉火”！」

せきれんか

ルビィネルがすぐさま、自身の魔炎を解放し、重ね合わされた二人の手の先に、赤炎を集めると、それを向かって来ていた虫へと放った。赤々と燃えたぎる炎に焼かれ、虫は一瞬にして、灰となって消える。

「ふう、間一髪だな」

「脱臼するかと思った……」

マルクの手から自身の手を離し、ホツと一息つくルビィネル。思いきり捻り上げられ、痛む右肩を押さえながら、マルクが力なく咳く。そんな二人の様子を見つめながら、サファイアがどこか、啞然とした表情を見せる。大きく開かれたサファイアの瞳が映し出すのは、マルクとルビィネルの、それぞれの手の甲に刻まれた、黒い紋様であつた。

「魔紋？」

サファイアの声を聞き、ルビィネルがサファイアの方を振り向く。

「本結で、契約したの？」

「魔紋があるのだから、聞かなくとも、わかるだろう」

「そんなことして、あんた……！」

「今は、そのようなことを話している場合ではない」

非難するようなサファイアの声、ルビィネルが強い口調で、勢よく遮る。向けられるルビィネルの強い瞳に、サファイアはそれ以上、何も言えずに、静かに俯いた。

「今のは、魔蟲まぢゅうだな」

「魔蟲？　って、トウーパの時に見た？」

「あれとはまた、別の種類のものだ。確か、小さな竜巻を起こし、人を襲うという……」

「じゃあ、魔女たちは」

「ああ。恐らくは、あの魔蟲に襲われたのだろっ」

マルクの問いかけに答えながら、ルビィネルが周囲を見回し、そつと眉をひそめる。いつの間にか、完全に日が落ち、森には、深い暗闇が訪れていた。

「やはり、森からはすぐに出た方がいいな」

「出られたら、いいけど」

ルビィネルの言葉に、サファイがどこか、棘のある言葉を返す。

「お前、まだ、選考諦めっ……！」

「違っわよ。アレ」

「あれ？」

あつさりと否定し、マルクの後方の上空あたりを指差すサファイ。サファイの指先を追い、マルクがゆっくりと後ろを振り返る。

「んな！？」

そこに見えるのは、暗くなった空一面に浮かぶ、先程の魔蟲の群れであった。皆、闇に赤々とその瞳を輝かせ、獲物を狙うようにマルクたちを見下ろしている。

「あの群れ相手に、早々簡単に、森から出してもらえと思うっ？」

「うわぁー！ 俺の人生、終わったぁー！」

サファイの言葉にあつさりと生存を諦め、頭を抱えて、嘆き散らすマルク。

「虫に刺されて、終わる人生なんて、嫌だぁー！」

「で、どうする気？」

誰にともなく叫んでいるマルクを無視し、サファイが真剣な表情で、ルビィネルのもとへと歩み寄る。

「私はパートナー居ないから、魔炎使えても精々、二発程度だし、あんたもあの出来悪そうな魔士とじゃ、使える炎技なんて、限られてんでしょ？」

「ああ、そうだな」

的確なサファイの言葉を受け、ルビィネルが気難しい表情を見せる。

「せめて、赤炎ではなく、あちらの炎を使えば……」

そう呟いたルビィネルの表情に、迷いが浮かぶ。だがすでに、魔蟲の群れは、ルビィネルたちを射程圏内に入れ、攻撃態勢を取っていた。

「考えている暇はないか。マルク！ ん？」

ルビィネルが魔紋の刻まれた左手を伸ばし、マルクの方へと向けようとしていたその時、暗い森の中を漂う、白い霧のようなものが視界に入り、ルビィネルは途端に、眉をひそめた。霧のようなそれは、徐々に濃さを増し、マルクやルビィネルたちの身を隠すように、辺りを包み込んでいく。

「これは、炎……？」

白い霧をまじまじと見つめ、ルビィネルが戸惑うように首を傾げる。

「これではらくは、魔蟲を攪乱出来る」

聞こえてくる冷静な声に、ルビィネルたちが一斉に振り向く。

「今のうちに移動するんだ」

「シリング！」

その場に現れたのは、休憩所で本を読んでいたはずのシリングであった。シリングの姿を見た途端、サファイが嬉しそうに目を輝かせる。だが、そんなサファイを気に掛けることなく、シリングは、ルビィネルのもとへと歩み寄った。

「この霧は、そなたが？」

「ああ。その辺の魔女が落としたのか、丁度近くに、疑似炎が転がっていたからな」

「疑似、炎？」

シリングの答えに、ルビィネルはさらに、疑問を深めたような表情となる。

「それより移動だ。早くしろ」

「あ、ああ。マルク」

「へ？」

嘆いていたあまり、状況の理解出来ない様子のマルクであったが、説明するよりも先に、ルビィネルがマルクの右手を取る。魔紋が重ね合わさり、淡い赤色の炎が漏れる。

「“移り火”」

ルビィネルがそつと言葉を落とすと、その場から、マルクたち全員が姿が消えた。

全身を包み込む淡い赤色の炎が消えると、そこは、先程とは別の場所であった。だが、相変わらず周囲は木々が並び、明かりもなく暗い。どうやら、森の外には出ていないようである。

「で、どこまで逃げて来たわけ？」

「さあ？」

「わからないの！？」

「一応、広場を目指して、飛んだつもりだったのだが」

「まだ全然、森の中じゃない！ 相変わらず、方向音痴ね！」

大きく首を傾げるルビィネルに、サファイが勢いよく、怒鳴りあげる。移動を、極度の方向音痴であるルビィネルに任せてしまったのは、どうやら失敗だったようだ。共に移動してきた、負傷した魔女たちを、近くの平地に寝かせながら、マルクが深々と溜息を吐く。
「まあ、いいんじゃないの？ 虫さんたちからは、無事、逃げられたわけだし」

「じゃあ、これからどうすんのよ？ いつ魔蟲が来るかもわからないここで、ビクビクしてるわけ？」

ルビィネルを擁護するように言うマルクに、サファイが鋭い視線を送る。

「適当に炎打ち上げれば、ブラッドスが気付いてくれるんじゃないの？」

「ブラッドス先生の前に、魔蟲に気付かれそうだがな」

「うっ」

シリングからの指摘に、思わず口ごもるマルク。

「どうせ、俺は頭悪いよ！」

「別に、そこまで言っていないだろう……？」

どこか泣き出しそうな表情で怒鳴ってくるマルクに、シリングが呆れた様子で、肩を落とす。

「ある程度、時間が経つても、誰も戻らねば、ブラッドスも異変に気付くはずだ。仕方がないから、それまでは大人しく、ここに……」

「ニャア」

「にゃあ？」

自身の考えを皆へと話していたルビィネルが、どこからか聞こえてくる、愛らしいその鳴き声に、首を傾げ、ゆっくりと右方を振り向く。鳴き声を辿っていくと、一本の木の枝の上に、先程の魔蟲とはまた異なる、小さな生き物の姿があった。

「あれは、魔猫！？」

思わず、大きな声をあげるマルク。木の枝の上に横たわり、マルクたちを見下ろしているのは、ブラッドスが見せた写真に写し出されていた、最終選考の標的でもある、あの魔猫であった。

「こんな所に居たのか」

「ニャア」

「あっ」

マルクたちが一斉に視線を集めたからか、魔猫は急に起き上がり、軽々とその身を翻して、すぐ近くの木々を移動していく。どんどんと遠ざかっていく魔猫を見て、少し考え込むように、目を細めるサファイ。だがすぐに思い立ったように顔を上げ、サファイが足を踏み出していく。

「私、捕まえてくる！　すぐに戻るから、ここに居て！」

「ええ！？」

思いがけないサファイの言葉に、マルクが驚きの表情を見せる。

「危ないって、やめるよ！　だいたい、こんな状況なんだ！　今更、魔猫なんか捕まえたって……！」

「一応よ、一応！　それに、魔猫が魔蟲に襲われちゃったら、困るでしょ」

「あ……！」

マルクが止めるのも聞かず、サファイはそのまま、魔猫を追って森の向こうへと消えていった。何か嫌な予感がし、浮かない表情を見せたマルクが、ルビィネルの方を振り向く。

「やっぱり、一人は危ない気がする！　ルビィネル、俺たちも追った方が……！」

「放っておけ」

ルビィネルへと訴えかけようとしたマルクに、冷たく答えを示したのは、シリリングであった。

「けど！」

「勝手な行動をして、輪を乱す奴が悪いんだ。そんな奴に合わせて全員襲われでもしたら、ただの間抜けだ」

シリリングの冷め切った言葉に、表情をしかめるマルク。ルビィネルもまた目を細め、厳しい表情で、シリリングを見つめる。

「そんな言い方、ないだろ？　サファイは、お前のパートナーになるために、必死に……！」

「あの魔女がパートナーにしたいのは、俺じゃなく、魔士としての俺の技能だろう？」

身を乗り出し、声を荒げるマルクに対し、シリリングは冷静な口調のままではあるが、マルクには負けない迫力を持って、はっきりと言いつつ。

「“最上級魔士”なんていう肩書きに、ただ、群がってきた魔女共に、情をうつす必要はない」

「……っ」

シリングから放たれる冷たい言葉に、マルクがまた強く、唇を噛み締め、拳を握り締める。

「お前にとって、魔女はただの道具なのかも知れないけど……」

俯いたまま、低い声を発するマルクに、シリングが少し、眉をひそめる。シリングとルビィネルが見つめる中、マルクは勢いよく顔を上げ、大きく口を開いた。

「俺にとっては、魔女も人間も関係ない！ 皆、同じ命だ！」

マルクが大きく両手を広げ、自身の主張を言葉にする。

「情とか関係ない！ そこに助けられる命があつたら、助けるのが、“当たり前”だ！」

力強く伝えられるマルクのその言葉に、圧倒されるように、思わず目を見開くシリング。シリングにそう言い放つと、マルクはすぐにシリングに背を向け、サファイを追うように、森の向こうへと駆け去っていった。マルクの去っていった方向を見つめ、シリングがしばらくの間、茫然と立ち尽くす。

「どうだ？」

ルビィネルに話しかけられ、シリングが茫然としていたところを、ハツとなつて振り向く。

「なかなか、面白いだろう？ 我が最下級魔士は」

「追わなくていいのか？ お前が行かないと、あれは、ただの馬鹿だろう」

「ああ、すぐ追う」

皮肉めいたシリングの言葉を否定することもなく、素直に頷いたルビィネルが、シリングへと穏やかな笑みを向ける。

「“最上級魔士”か」

シリングの持つ呼び名を口にするルビィネルに、シリングが少し眉をひそめ、視線を向ける。

「確かにそなたは、あらゆる点において、最下級魔士であるマルクに、優^{まさ}っているのかも知れないが」

ルビィネルがさらに口角を上げ、得意げに笑う。

「一つ、とても大事な点が、劣っている」

ルビィネルのその言葉に、シリリングの表情が、わずかに動く。

「私は、そう思うぞ」

どこか挑戦的に微笑みかけると、ルビィネルもまた、シリリングに背を向け、マルクの後を追っていった。気を失っている魔女たち以外は、その場にシリリングだけが残り、辺りを静けさが包み込む。

「劣ってる、か……」

小さく呟き、シリリングはそっと俯いた。

「逃げられちゃったの？ 仕方ないなあ」

魔蟲の群れに右手を伸ばし、青年が困ったように呟く。暗い森の中、木の枝に器用に立った青年に、月明かりが降り注ぎ、その大きな金色の瞳を、さらに輝かせている。

「探す？ ううん、君たちは、もういいよ。どうせ見つけても、また逃げられるだけだろうし」

青年に見切りをつけたような言葉を向けられると、魔蟲たちは自然に群れを崩し、散り散りになって、空へと飛び出していく。

「さあーで、次は、どうやって遊ぼうかなあ」

「ニャア」

「ん？」

考えを巡らせるべく、首を捻った青年が、足元から聞こえてくる、小さな声に気付き、視線を下方へと向ける。いつの間にか、青年と同じ枝の上へとやって来ていた魔猫が、青年に懐いた様子で、青年の左足にその身を擦り寄せている。その魔猫の様子を見て、青年は何か思いついたように、含んだ笑みを浮かべた。

「君も、一緒に遊ぶかい？」

「ニャア？」

魔猫を持ち上げ、そっと問いかける青年。言葉の意味を理解する

はずもなく、ただ無邪気なその瞳を向ける魔猫の額に、青年が右手を当てる。

「起きてよ、僕の茜炎^{せんえん}」

魔猫の額に当てた青年の右手から、夕焼けによく似た、赤色の炎が生じた。

「ええーっと、確か、こっちの方に……」

マルクたちから離れ、単身、魔猫を捜すサファイが、暗い森の中を、わずかな月明かりを頼りに、何とか進む。思っていたよりも魔猫の動きは素早く、その姿を、すっかり見失ってしまった。

「あいつを捕まえれば、私は、シリングのパートナーに……」

自分自身へ言い聞かせるように呟き、サファイが、気合いを表すように、拳を握り締める。

「よし！ ん？」

気合いの入った声を漏らしたサファイが、木が揺れ動き、葉が擦れ合うような、そんな音を耳に入れ、ふと眉をひそめる。それは明らかに、何者かが、こちらへと近付いてくる音であった。

「何っ……あ！」

やがて、その音の主の姿を見つけ、サファイが大きく目を見開く。

「キャアアアア！」

「……！ サファイ！？」

サファイのものらしき悲鳴を聞き、サファイの後を追って、森の中を歩いていたマルクが、焦ったような表情で顔を上げる。すぐさま足を走らせ、悲鳴の聞こえてきた方へと急ぐマルク。焦りと不安から、その表情は、引きつっていた。

「サファイ！？ サファイ！」

「うるさいわねえ」

「うお！」

すぐ傍から返って来る声に、マルクが思わず胸を押さえ、驚く。足を止めたマルクが振り向くと、そこには、地面に蹲るようにして、しゃがみ込んでいる、サファイの姿があった。

「何回も呼ばなくなつて、聞こえてるわよ」

「ご、ごめん。って、サファイ、怪我!？」

きつい口調で言い放つサファイに、素直に謝ったマルクが、サファイの右腕から流れ落ちる赤々とした血に気付き、大きく目を見開く。よく見れば、サファイの白い右腕に、爪で引つ搔かれたような大きな切り傷があり、そこからどんと血が滴り落ちていた。見るからに痛そうな傷に、マルクが思わず表情をしかめる。

「どうしたんだよ？ その傷」

「あいつにやられたの」

「あいつ？」

顎で前方を指し示すサファイに、マルクが視線を、そちらへと移す。

「ぎゃああああ！」

前方を見た途端、激しい悲鳴をあげるマルク。二人の前に立っていたのは、マルクの背丈の軽く三倍はあるであろう、巨大な、虎のような、四本足の生物であった。逆立った体毛は茶色く、鋭い赤目は、目が合っただけで震えが来る。鋭い爪は地面を自然と抉っており、口からはみ出した牙からは、涎が滴り落ちていた。その額には、赤い菱形の宝石のようなものが、埋め込まれている。

「な、なななな何だよ？ あれっ」

「さあ？ 魔虎^{まこ}か何かじゃない？ まあ、あんなでっかい魔物、私はフレイヤでも見たことないけど」

「俺やつぱ、今日ここで、死ぬんだあー！」

サファイの言葉に絶望したマルクが、頭を抱え、激しく嘆く。

「冗談。誰がこんなところで……って、あんた、ルビィネルは？」

「へ？ あ、置いてきた」

「何やってんのよ！ あんたみたいな無能魔士、ルビィネルが一緒じゃなきゃ、何の役にも立たないじゃない！」

「どうせ俺は、死ぬまで役立たずなんだよおー！」

責め立てるサファイに、さらに落ち込みを深くし、嘆きを大きく

するマルク。

「ガアアアア！」

『あつ………！』

勢いよくその場を飛び出した魔虎らしき巨大生物が、二人に向け、勢いよく前足を振り上げる。遙か上空から振り落ちてくる鋭い爪に、大きく目を見開くマルクとサファイ。

「クー！」

「もう、死んだあー！」

険しい表情を見せるサファイの横で、マルクが諦めるように叫ぶ。
「そう簡単に諦めるなど、何度も言っているだろう？」

どこからか凜とした声が入ってくると、頭を抱えていたマルクの右手が、横からさらわれるようにして、前方へと向けられる。

「“赤爆火”^{せきばくか}！」

「ゲワアア！」

マルクの右手をさらい、自身の左手と共に前へと向け、放った赤い炎を勢いよく爆発させ、向かって来ていた魔虎を吹き飛ばしたのは、勿論、ルビィネルであった。現れたルビィネルに、マルクがホツとした様子で、体中の力を抜く。

「方向音痴にしては、いいタイミングじゃない」

「魔紋で繋がっているからな、マルクの位置だけは正確にわかるんだ」

振り向いたルビィネルが、サファイへ笑顔を向ける。だが、そのルビィネルの笑顔はすぐに消え去り、再び前方を見たルビィネルは、険しい表情を作った。ルビィネルの炎により、後方へと吹き飛ばされた魔虎が、ゆっくりとその巨体を起こす。体毛の先が、わずかに焦げたりはしているが、魔虎自体は、一切傷を負っていない様子であった。

「あの程度の魔炎では効かぬ、か」

何ら様子に変化ない魔虎を見つめ、眉をひそめるルビィネル。

「魔蟲の次は、巨大魔虎。一体、どうなってんのかしらね、ホント」

「……………」

うんざりしたような、サファイのその言葉に、ルビィネルが少し、表情を曇らせる。

「とにかく、隙を作って逃げよう。今の私たちで、どうにか出来る相手ではない」

「隙を作るって……」

「行くぞ、マルク」

「やっぱいいい!？」

強くマルクの右手を握り締め、前方へと歩き出して行くルビィネルに、マルクは泣き出しそうな表情を見せながら、前へと引つ張られて行く。

「サファイは、そこに居ろ!」

負傷したサファイに力強くそう言っで、ルビィネルはマルクを引っ張りながら、魔虎へと駆け込んでいく。魔虎も向かってくる二人に気付き、その赤い眼光を鋭くし、またしても勢いよく、右前足を振り上げる。

「飛ぶぞ、マルク」

「へ? 飛ぶって?」

「“脚火”!」
きやくび

「どわああああ!」

ルビィネルがマルクの右手を掴んだまま、強く左手を振り下ろすと、二人の足元を赤い炎が包み込み、ルビィネルがその場を思いきり蹴り上げると、マルク共々、勢いよく空中へと飛び上がる。引つ張られるようにして上空に上がったマルクは、悲鳴にも似た声を発した。

「もう嫌だあー! 高いとこ、怖ええー!」

「つべこべ言わずに、右手をあやつに向ける!」

泣き言を漏らすマルクに、叱りつけるように言い放つルビィネル。マルクが大人しくルビィネルの指示に従い、空中に浮き上がった二人が、互いに重ね合わせた手を、下方に見える魔虎へと向ける。

『“赤煉火”！』

二人が声を揃え、赤い炎の塊を、魔虎の顔面に目がけて放つ。

「カア！」

「あ……！」

だが、魔虎は大きく口を開き、そこから強い衝撃波のようなものを放つと、二人の放った炎を、あつという間に掻き消してしまふ。

風に流れて消える炎に、驚きの表情を見せるマルク。魔院に通う魔女たちの中でも、強力な方であるルビィネルの魔炎であるというのに、魔虎には浴びせることすら出来ない。

「やはり、この程度の炎では通用しないか」

驚いているマルクとは対照的に、ルビィネルは冷静に呟く。

「あの魔士がパートナーじゃ、あれくらいの威力が限度か」

戦況を見つめ、サファイも厳しい表情を見せる。

「あれじゃあ、ルビィネルの力は、ほとんど出し切れない。このままじゃ……」

焦りからか、サファイの額から、一筋の汗が流れ落ちる。

「あああ！ 今日ここで、俺は、トラの血肉と化すんだあー！」

「だから、そう簡単に諦めるなど、何度……」

「カアア！」

「あ……！」

嘆くマルクを、ルビィネルが宥めようとしていたその時、魔虎が再び大きく口を開き、上空の二人へ向け、先程、魔炎を掻き消した、強烈な衝撃波を放つ。それに気付いたルビィネルは、またマルクの手を握り、向かってくる衝撃波へと突き出した。

「我が身を守れ、“せきへきか赤壁火”！」

ルビィネルが素早く防御の炎技を使い、二人の前に、赤い炎の壁を作つて、衝撃波を受け止める。

『ううう！』

だが、衝撃波が炎壁に当たった途端、突き出した手から、強い重みが伝わり、二人が同時に顔をしかめる。少しでも気を抜けば、指

など簡単に折れてしまいそうなほどの圧を感じる。

「痛つてええ……！」

「耐えろ、マルク！」

険しい表情を見せるマルクに、必死に声を掛けるルビィネル。だが、今までに感じたことのない圧を前に、マルクはどう耐えていいのかすら、わからなかった。

「む、無理！」

「あ！」

マルクが諦めるように言葉を吐き、右手から力を抜いたその瞬間、二人の前に張られていた炎の壁に、大きく亀裂が入る。炎の壁を砕き、二人へと迫る衝撃波に、ルビィネルが大きく目を見開いた。

「青流火^{せいりゅうか}」！

「うっう！」

二人に衝撃波が当たる直前、横から介入した青色の炎が衝撃波を直撃し、空の彼方へと吹き飛ばす。目の前で起きた衝突の余波で、マルクとルビィネルが、地面へと落ちる。

「痛たたたた」

地面に落ちたマルクが、打ちつけた腰を押さえながら、ゆっくりと起き上がる。

「さっきの炎は？」

「サファイだ」

戸惑うように問いかけたマルクに、ルビィネルがすぐさま答える。

「サファイの青炎^{せいえん}」

「そつか。そりゃあ、助かつ……」

「ハア、ハア……うっう！」

「サファイ！？」

助けてくれたサファイに笑みを向けようと、サファイの方を振り向いたマルクの視界に飛び込んできたのは、苦しげに呼吸を漏らし、力なく左手を地面へとつくサファイであった。先程までよりも多く汗をかき、顔色も悪い。

「あんな傷を負った状態で、魔炎を使えば、一気に相当の体力を消耗する」

「そんな！」

冷静に解説をするルビィネルに、焦りの表情で振り向くマルク。だが、口調は冷静であったルビィネルも、その表情には、確かな焦りが浮かんでいた。サファイの状態が良くない上に、マルクとルビィネルの魔炎は、魔虎には効かない。最早、隙を作って逃げることにすら、厳しい状況である。

「ガアアア！」

「あ！」

見るからに動けぬ状態であるサファイに目をつけたのか、サファイの流す血の匂いに惹かれてか、魔虎が、先程まで交戦していたマルクたちではなく、サファイに向かって、勢いよく走り出していく。向かってくる魔虎を見て、サファイは険しい顔を見せるが、逃げる術など残っていない。

「サファイ！」

居ても立ってもいられず、その場から駆け出し、サファイのもとへと向かっていくマルク。

「ま、待て！ マル……！ うう！」

慌ててマルクの後を追おうとしたルビィネルが、足に走る痛みに、立ち上がろうとしたところを、またすぐにしゃがみ込む。視線を痛みの走る右足へと向ければ、そこには擦ったような傷ができ、赤い血が滲んでいた。どうやら、先程の衝撃波とサファイの青炎の衝突の際に、傷を負ってしまったようである。

「クソっ……」

ルビィネルが険しい表情で、遠ざかっていくマルクの背を見送る。
「サファイ！」

勢いよく駆け込んで来たマルクが、しゃがみ込んだままのサファイを庇うように立ち、向かってくる魔虎と相対する。目の前に立ったマルクを見て、驚きの表情を見せるサファイ。

「馬鹿！ 何やって……！」

「ガアアア！」

サファイが止める間もなく、サファイの前へと飛び出たマルクに、振り上げられた魔虎の鋭い爪が迫った。

「マルク！」

思わず声を張り上げ、マルクの名を呼ぶサファイ。ルビィネルも動けぬ状態のまま、必死に身を乗り出す。

「ク……！」

強く目を閉じたマルクが、必死に身を守るように、顔の前で両手を交差させ、前へと突き出す。だが、次の瞬間、マルクを襲ったのは、激しい痛みでも、重い圧でもなく、ほんの小さな衝撃であった。「へ？」

予想していたものとは違う衝撃の訪れに、マルクが戸惑いながら、ゆつくりと目を開く。開いた途端、マルクは開いたその瞳を、さらに大きく見開いた。目の前に広がっていたのは、自分でも信じられない光景。振り下ろされた魔虎の巨大な爪を、マルクの顔の前の交差した両手が、軽々と受け止めていたのであった。

「え？ えええ？」

この光景が理解出来ず、マルクがどこか、間の抜けた声を漏らす。「あれは……」

魔虎の爪を受け止めるマルクの姿を見つめ、目を細めるルビィネル。よく見ると、マルクの全身は、赤い、ほのかな光に包まれており、爪を受け止めている両手は、特にその光が強く、まるで炎のように輝いている。

——体内を流れる魔炎を活性化させ、自身の体を強化する炎技だ——

「あれは、“燃烧”」

先日、マルクへと向けた言葉を思い出し、ルビィネルが確信を持つて呟く。

「グ！ グ……！」

どれほど力を込めても、まったく前に進まない自身の前足に、魔虎が戸惑った様子を見せる。自分よりも遥かに小さく、弱々しくしか見えない細い腕に、自分の爪が止められている意味など、魔虎に

はわからないだろう。

「え、ええーっと、ここから、どうすればいいと思う?。」

「私に聞かないでよ」

助けを求めるように、問いかけてくるマルクに、サファイが呆れた表情を見せる。

「そのまま、じっとしている」

「え?」

横からマルクたちのものではない声が入って来たかと思うと、魔虎の爪を受け止めているマルクの右手首が、勢いよく掴まれる。

「お前、シリング!」

マルクが掴んだその手の方を振り向くと、そこには、相変わらず落ち着いた表情を見せた、シリングが立っていた。シリングが力強くマルクの手首を掴み、そのまま、魔虎の方へと、思いきり突き出す。

「うわわ!」

「グアアア!」

シリングに引っ張られると、マルクは前のめりになり、前方に倒れ込みそうになるが、それと同時に、マルクの両手に、振り下ろしていた爪を押し返された魔虎が、勢いよく後方へと吹き飛ばされた。ただ引っ張られただけで、強く押した覚えもないというのに、十数メートル先まで、吹き飛んでいった魔虎に、マルクが啞然とした表情を見せる。

「な、何がどうなって……」

「なかなかの“燃烧”だな。最下級魔士のわりに、やるじゃないか」マルクから手を離しながら、シリングが感心したように、マルクへと言葉を向ける。だが、シリングの誉めるようなその言葉に、マルクは喜ぶのではなく、思いきり顔をしかめた。

「どうせ、俺は、放ちもろくに使えないよ!」

「俺、誉めただろ……?」

八つ当たりのように叫ぶマルクに、シリングが呆れた表情を見せ

る。

「結局、そなたも来たのか」

そこへ、傷を負った右足を引きずりながら、ルビィネルが歩み寄って来る。ルビィネルの言葉に、そつと目を細め、また冷めた表情を作るシリング。

「ああ。俺のために実施された講義で、死人でも出たら、俺の名に傷がつくからな」

「お前はまた、そういう言い方を……」

相変わらず棘のある言い方をするシリングに、マルクが困ったように頭を抱える。シリングはゆっくりと振り返り、その鋭い視線を、後ろでしゃがみ込んだままのサファイアへと向けた。

「お前の勝手な行動が、招いた結果だ」

冷たく突き刺すような言葉を、シリングがサファイアへと向ける。

「お前が“最上級魔士”なんて肩書きに群がって、馬鹿みたいに必死に、俺のパートナーになろうとするから、こんなことになった」

「お前なあ……！」

「いいわ」

あまりのシリングの言葉に、思わず言い返そうとしたマルクを止めたのは、責められているサファイア本人であった。

「勝手に夢を抱いて、理想を押しつけてた、こっちだって悪いんだもの」

サファイアが悟ったような、穏やかな笑みを浮かべる。

「あなたが魔女を道具としか思っていない、とっても酷い性格の男でも、私に責める権利はない」

向けられるサファイアの笑みに、シリングが少し目を細める。

「今は、誰が悪いのだと、話している場合ではない」

そんなシリングとサファイアの間、ルビィネルが冷静に割って入る。

「私とマルクが魔虎を引きつけるから、シリングは、サファイアを連れて、ブラッドスのところまで逃げる」

「また、引きつけ役か……」

「馬鹿言わないで」

ルビィネルの言葉に、マルクががっくりと肩を落とす横で、サファイが批判的な声をあげる。

「あんなたちの魔炎は、ろくにあの魔虎には通じなかったのよ？
引きつけなんて、出来るわけないでしょ」

「まあ、何とかなるさ」

鋭く言い放つサファイに、ルビィネルは軽く笑みを向けた。向けられるルビィネルの笑みに、サファイは不快そうに、顔をしかめる。
「では頼む、シリング。行くぞ、マルク」

「ふあい……」

ルビィネルの言葉にやる気のない返事をして、マルクが、ルビィネルと共に、まだ倒れた状態の魔虎のもとへと、駆け出していく。
二人の後ろ姿を見送り、そっと目を細めるシリング。

「まったく」

同じように見送るサファイが、呆れたような声を漏らす。

「目指すものがあるくせに、他人のために、平気で命懸けちゃうとこまで、相変わらずなんだから」

困ったように言いながら、サファイが、短パンのポケットから取り出したハンカチで、魔虎の爪により切り裂かれた、右手の傷を覆う。解けないよう、腕に、固くハンカチを縛りつけると、サファイは重たそうに体を起こし、ゆっくりと立ち上がった。

「あなたは、ルビィネルの言ったように、ブラッドスって人のところまで行つて」

「加勢する気か？」

「大丈夫。むざむざ死んで、あなたの名前に傷をつけるような真似はしないから」

眉間に皺を寄せ、問いかけるシリングに、サファイがそっと、微笑みかける。数歩進み、シリングよりも少し前に出ると、サファイが足を止めた。

「そうだ、一つだけ」

言い忘れたこともあるのか、笑みを浮かべたまま振り返るサファイアを、シリリングが戸惑うように見る。

「私ね、まだ子供の頃、フレイヤの貴族の屋敷のパーティーで、同じような年頃の、人間の男の子に会ったの」

突然のサファイアの話に、シリリングが怪訝そうな表情を見せる。

「大人ばかりの中で、同年代の子なんて他に居なかったから、私、その子にすぐに声を掛けたわ。『友達になろう』って」

シリリングの冷たい瞳をまっすぐに見つめ、サファイアが話しを続ける。

「そしたら、その子は言った。『魔女は、魔士の僕にとっては、ただの道具。だから、君と友達になる気はない』って」

その言葉を聞いたシリリングが、どこかハツとした表情となって、サファイアを見つめる。

「とつても冷たくて、とつてもまっすぐで、とつても寂しそうだった、その男の子が気になって、私、その時に決めたの。ああ、この子のパートナーになってやろうって」

笑みを浮かべたサファイアの瞳が少し細まり、まるで、懐かしいものでも見るように、シリリングを見つめる。

「それが、私とシリリング・ウェーガットとの出会い」

シリリングを見つめるサファイアが、さらに笑みを深くする。

「あなたが、『最上級魔士』になる、ずっと前の話」

「……っ」

サファイアのその言葉に、シリリングが険しい表情を見せる。

——「最上級魔士」なんていう肩書きに、ただ、群がってきた魔女共に、情をうつす必要はない——

それは、先程のシリリングの言葉が、真実ではないことを示す、言葉であつた。

「ごめんなさい。何となく、これだけは言っておきたかったの。じやあ」

軽い別れの挨拶を口にして、サファイはあっさりとシリングに背を向け、マルクたちの元へ行こうと、再び足を前へと進めていく。どんどんと前へと進んでいくサファイの背中を見つめ、どこか戸惑うような表情で首を横に振った後、深々と俯くシリング。俯いたシリングが、強く唇を噛み締めた後、勢いよく顔を上げた。

「魔女」

シリングからの、名前でも何でも無い、その呼びかけに、サファイが足を止め、振り返る。振り返ったサファイを見つめ、シリングが真剣な表情を見せる。

「俺と、パートナー契約をしろ」

思ってもみなかったシリングの言葉に、サファイが、驚きの表情を見せた後、すぐに、真剣な顔となる。

「私にとっては、願ってもない申し出だけど、でも、それは無理だわ」

サファイが眉間に皺を寄せ、難しい表情となる。

「“偽結”の魔唱には、結構な時間がかかるの。最速でも五分。そんなことしてる間に、ルビィネルたちが……」

「ああ、わかってる。だから」

サファイの説明に、当然理解している様子で言葉を返し、シリングが、すぐ傍に落ちていた、細い木の枝を拾い上げる。サファイが戸惑うように見つめる中、シリングは、枝の尖ったその先を、自身の左腕へと向けた。

「本結でいい」

「……っ！」

はつきりとそう言い放ち、シリングが枝の先で、自らの左腕を切り裂く。魔士の制服が破けると、その下から見える肌に、赤い血が滲んだ。本結に、血があると知っての行動だろう。シリングのその行動に、サファイが益々、険しい表情となる。

「後悔、するわよ……?」

どこか引き止めるように、サファイがシリングへと問う。サファイのその言葉を受けたシリングは、冷え切っていたその表情を崩し、サファイの前で、初めて微笑んだ。

「後悔なら、この場に来た時から、とっくにしている」

シリングのその言葉に、サファイはどこか、困ったような笑みを浮かべた。

「ぎゃああああ！　うわあああ！」

一方、魔虎と交戦中のマルクは、向けられた爪を、悲鳴をあげながらも受け止め、叫び声をあげながら、それを魔虎へと押し返していた。声だけ聞いていれば、マルクが圧倒的にやられているように思えるが、見た目ではなかなか、いい勝負をしている。これも、マルクの全身を包む赤い炎、“燃焼”の効果あつてのことだろう。

「これほどに、“燃焼”を持続させられるとはな。昨日は微塵も片鱗がなかったが、なかなか、才能があるのかも知れないぞ」

マルクの奮闘振りを眺めながら、ルビィネルがどこか感心したように言う。爪を押し返し、魔虎を追い払ったマルクが、そんなルビィネルから、少し離れた場所へと降りてくる。

「ま、まあ、俺にも一個くらい、人より秀でた才能があるってもんで……！」

「ま、攻撃を受け止めて、押し返すだけでは、何の打開策にもならないがな」

「最後まで誉める気がないなら、最初っから誉めないでくれるかな……?」

折角芽生えたマルクの自信を、あっさりと打ち崩すルビィネルの発言に、マルクが最早、嘆くこともなく、力なく呟く。

「カアアア！」

マルクに押し返された魔虎が、二人が話している間に、いつの間にか起き上がり、大きく口を開いて、再び、二人へと衝撃波を放つ。

「あ！ マ、マル……！ ううう」

迫り来る衝撃波に気付き、ルビィネルが焦った表情で、マルクのもとへと駆け寄ろうとする。だが、慌てて足を踏み出したため、右足の傷が痛んだルビィネルは、苦しい声漏らし、その場にしゃがみ込んでしまう。

「ルビィネ……！ あ！」

しゃがみ込んでしまったルビィネルの姿を見て、マルクがルビィネルの元へと駆け寄ろうとするが、二人の距離が詰まる前に、魔虎の放った衝撃波が、二人へと襲いかかった。

「うああああ！」

もろに衝撃波を食らい、全身を激しく切り裂かれたマルクが、勢いよく吹き飛ばされ、地面へと叩きつけられる。すぐ近くに、同じように吹き飛ばされたルビィネルが、傷ついたその体で、力なく倒れ込んだ。苦しい表情で、倒れた状態のまま、ほとんど動かないルビィネルの様子を見た後、徐々にこちらへとやって来る魔虎の姿を見て、マルクがそっと目を細める。

「マズいなあ、ホントに」

マルク自身もルビィネル同様、すぐに動けるような状態ではない。本当に追い込まれ、マルクは嘆くことなく、ただ、そっと微笑む。

「我が炎の神、マフルよ」

「え……？」

絶望に満ち始めたマルクの耳に、何の音に邪魔されることもなく、まっすぐに入って来る声。

「今、ここに、血と血の契約を行う」

響くその声は、サファイヤのものであり、サファイヤはシリングと共に、その場に立ち尽くし、特に逃げるような仕草は見せていなかった。二人が逃げていないことよりも、聞き覚えのあるその魔唱に、マルクが眉をひそめる。

「あれは、本結の……」

マルクと同じように、ルビィネルもまた、サファイヤとシリングへ、

まっすぐに視線を向ける。

「汝の偉大なる炎により、我が身に宿りし青炎を、我が選びし者に託せ」

胸の前で赤い血のついた両手を重ね合わせたサファイアが、徐々にその声を大きくさせていく。

「今ここに、我がパートナーを決する」

はつきりと目を見開き、重ね合わせていた両手を、天高く、空へと掲げるサファイア。

「その者の名は、シリング・ウェーガット！」

サファイが声を張り上げ、堂々とシリングの名を呼んだ途端、サファイが掲げた両手から、見るも美しい青色の炎が、暗い空へと飛び出したかと思うと、炎は空中で二つに分かれ、それぞれ、サファイとシリング、二人の手の甲へと降り落ちる。落ちて来た炎を、シリングが恐れることなく受け止めると、シリングの右手の甲に、五角形の中に波のような模様の描かれた、白色の紋様が刻まれた。紋様の刻まれた右手を握り締め、シリングが、サファイのすぐ傍へと歩み寄っていく。

「名前は何だ？ 魔女」

「サファイよ」

「サファイ」

聞いたばかりのサファイの名を呼び、シリングが、魔紋の刻まれた右手を、サファイの方へと向ける。そのシリングを見て、そっと笑みを浮かべると、サファイは、シリングと同じ魔紋の刻まれた左手を、シリングの右手と重ね合わせる。

「目醒めて、私の青炎」

サファイの言葉が放たれると、サファイの左手から青い炎が生じ、その炎が、重ね合わされたサファイの手から、シリングの手へと伝わっていく。魔炎を共有したことを確認すると、シリングは、サファイから手を離し、倒れたままのマルクとルビィネルの元へと近付いている、魔虎の方を振り向いた。

「炎技の補助、しましょうか？」

「誰にものを言っている」

悪戯っぽく問いかけるサファイに、すぐさま、はつきりと答えるシリング。シリングは、先程、血を流すため、自身の腕を傷つけた木の枝を持ち直した。シリングの魔紋が光ると、シリングの持つ木の枝が、青い炎に包まれる。炎に包まれているのに、枝はまったく

燃えていない。それは、不思議な光景であった。

「あれは……」

「装纏そうてん」

戸惑うマルクに、いつの間にか体を起こしたルビィネルが、答えるように呟く。

「剣や槍に魔炎を纏わせ、攻撃力を飛躍的にあげる技。六つの炎技の中でも、最も難易度が高いとされる技だ」

「装、纏……」

ルビィネルの説明を聞きながらも、マルクは、一瞬もルビィネルや他に視線を移すことなく、魅入られたかのように、まっすぐにシリリングを見つめる。

「クウ！」

シリリングの醸し出す、溢れんばかりの力に気付いたのか、マルクとルビィネルに向かっていた魔虎も、体の向きを変え、ゆっくりとした足取りで近付いてくるシリリングと相對する。シリリングを見つめ、威嚇するように、唸り声をあげる魔虎。だがシリリングは、その威嚇にも眉一つ動かさず、その場でそっと、足を止めた。

「来い」

誘うように言い放ち、シリリングが炎を纏った枝を、まるで剣のように、身構える。

「カアア！」

シリリングの誘いに乗るように、魔虎がその場から勢いよく飛び出し、シリリングめがけて、思いきり前足を振り下ろす。振り落ちてくる鋭い爪を見上げ、シリリングは目つきを鋭くし、素早く、枝を振った。

「ギャアアアア！」

次の瞬間、響き渡る魔虎の叫び声。青い炎に包まれた魔虎の鋭い爪が、宙を舞い、少し離れた地面へと落ちる。

「あのでっかいトラの爪を切ったあ！？」

倒れていたはずのマルクが、気付けば体を起こし、身を乗り出す

ようにして、シリリングの戦いを見つめている。

「グ……！ カアアアア！」

爪を切り落とされた魔虎が、表情を陰しく変えながらも、大きく口を開き、シリリングへと衝撃波を放った。

「脚火」

素早く足に青炎を纏わせ、その場を飛び上がって、衝撃波を避けるシリリング。空中へと飛び上がったシリリングが、魔虎の額に埋め込まれた、赤い宝石のようなものに狙いを定め、枝を構える。

「せいざんか 青斬火」

空中のシリリングが、まるで舞うように、その枝を振り払うと、枝から放たれた青炎が、一直線に魔虎の額の宝石へと突き当たった。

「ギアアアア！」

シリリングの放った炎により、額の宝石を砕かれ、魔虎が激しい悲鳴をあげながら、全身から強い白光を発すると、その巨体が消えていく。

「圧倒、的……」

「サファイの青炎も、確かに強力だが、それ以上の力を発揮している。さすがは、“最上級魔士”だな」

呆然と呟くマルクの横で、ルビィネルが感心するような笑みを浮かべる。

「ふう」

地面へと降り立ったシリリングが、ホツとした様子で肩を落とす。

包んでいた青炎が消えると、枝は命尽きたのか、灰となって地面に落ちた。

「ニヤア」

「ん？」

聞こえてくる小さな鳴き声に、シリリングが戸惑うように振り向く。

「お前は……」

「ニヤア？」

先程まで、巨大な魔虎の居たそこに、ちょこんと小さく座ってい

るのは、魔猫であった。シリングからの視線を受けた魔猫が、不思議そうに首を傾げる。

「えええ！？ さっきのトラさんの正体、こいつだったのかあ！？」
傷だらけの体を引きずりながら、その場へとやって来たマルクが、シリングと同じように、魔猫の姿を見つけ、驚きの声をあげる。

「すごい進化っぷりだなあ、お前」

「進化とはちよっと、違う気がするけど」

感心するマルクに指摘を入れながら、サファイもまた、マルクたちのもとへとやって来る。

「だいたい、魔猫が魔虎になるなんて話、聞いたことないわよ」

「まあ、もう元に戻ったんだし、いいんじゃない？」

「軽いわねえ、あんた」

「……っ」

マルクとサファイの言葉を聞きながら、ルビィネルがそっと、表情を曇らせる。

「あれ？ 額から血が出てんな。さっき、シリングに切られたところか？」

魔猫を持ち上げたマルクが、魔猫の額の傷に気付き、首を傾げる。

「ったく、可愛いネコさん相手に、容赦ないよなあ」

「容赦してたら、死んでたからな。お前」

嫌味たっぷりに言うマルクに、シリングが鋭く突っ込みを入れる。

「ええーっと、絆創膏、絆創膏っ」

魔猫に貼る絆創膏を探し、制服のポケットを漁るマルクを、物珍しそうに見つめるシリング。そのシリングの視線に気付き、マルクが仏頂面で振り向く。

「何だよ？」

「いや、自分の方が重傷なのに、猫の手当てから先にするんだと思っ
って」

「へ？」

シリングの言葉に、マルクが目丸くする。

「あ、そうだ！ 俺の方が、重傷だった！」

今、気付いたとばかりに叫ぶマルクを見て、シリングが肩透かしを食らったかのように、力なく、体を傾ける。今更慌てるマルクの姿に、シリングの口元が緩み、自然と笑みが零れた。

「変わった奴だな、お前」

笑みを見せながら言うシリングに、マルクが少し、驚いたような表情を見せる。だがすぐに、マルクの顔は、悲しげな顔へと変化した。

「どうせ俺は、お前と比べれば、何の取柄もない男だよー！ クソォー！」

「誰もそんなこと、言ってないだろ……？」

嘆き叫ぶマルクを見つめ、シリングは呆れ果てた表情を見せた。

「ああゝあ、ゲームセツトかあ」

魔虎との交戦を終えたマルクたちを、遙か上空から見下ろし、青年がどこか、つまらなさそうな声を漏らす。

「そろそろサードニック様がうるさいし、次は本気でいかないとなあ」

面倒臭そうに言いながら、青年は鋭く、金色の瞳を細めた。

翌日、レイル聖魔院。

「ったく、何で俺だけ、お叱りを受けなきゃならないんだよ！」

院長室を出た後、すぐさま、文句を言い放ったのは、ブラッドスであった。

「監督不十分だったからだろう？」

「そうだよねえ。ブラッドス、俺たちがピンチだっていうのに、ちっとも現れなかったし」

怒るブラッドスの後方から、口々に言葉を投げかけるマルクとルビネル。二人の腕や足には、所々、白い包帯が巻かれており、顔にも絆創膏が貼られている。昨夜、魔虎と戦った際に負った傷の、治療の跡である。

「あれは、お前等が勝手に場外乱闘起こして、お前等が勝手に本結契約したんだろっが！」

振り返ったブラッドスが、不機嫌極まりない表情で、マルクとルビネルよりも少し後ろを歩く、シリングとサファイを指差す。シリングのパートナーを決める予定だった特別講義は、マルクたちを含め、数名の負傷者を出した上、シリングがサファイと本結での契約を行ってしまったため、結局、無駄となり、それに関して、ブラッドスは、院長から直々にお叱りを受けたのであった。

「そうですね。確かに、俺たちが勝手に判断してしまったことです。反省しています」

ブラッドスの言葉に、シリングが素直に、申し訳なさそうな表情を見せる。

「まあ、先生が駆けつけて下さっていれば、あのような決断、しなくて済んだのですがね」

「うっ」

涼しげな表情で、鋭い言葉を投げかけるシリングに、反論することもある、思わず押し黙るブラッドス。

「ああ、減俸かあ」

シリングの言葉に、自分の非を認めざるを得なくなったブラッドスは、怒りを収め、急に大人しくなると、再び前方を向いて、深々と肩を落とした。

「性格悪っ」

「誉め言葉として、受け取っておく」

少し非難するような表情で振り向くマルクに、シリングが素っ気なく答える。

「んじゃあ、俺は講義行くから。お前等は、安静を取って、今日は

一日ゆっくりしてる」

「はぁーい」

ブラッドスからの指示に、マルクが代表して、あまりやる気の無い返事をする。

「あ、後、サファイ。編入手続きの書類、早めにな」

「了解」

「編入？」

ブラッドスが廊下の奥へと去っていく中、ブラッドスの残した言葉に引っ掛かったルビィネルが、戸惑った表情で、サファイの方を振り返る。

「何だ。そなた、結局、編入するのか？」

「当然でしょ。私は、シリングのパートナーなんだから」

ルビィネルの問いかけに、サファイがどこか得意げな笑みを浮かべる。

「パートナーは常に一緒に居ないと。ね？ シリング！」

ウキウキとした笑みで、サファイがシリングの方を振り向く。

「本結で契約したからといって、調子に乗るなよ」

そんなウキウキとしているサファイとは対照的に、とても冷え切った声と表情で、シリングはサファイに答えた。

「パートナーとして、使えないと思ったら、すぐにでも切り捨てるからな」

「えっ……」

凍えるような言葉だけを残して、足早にその場を去っていくシリングに、サファイが笑みを止め、しばらくの間、固まる。

「ちょ、ちょっと待ってよ！ シリングー！」

固まっていたサファイが、やっと正気を取り戻し、去っていったシリングの後を、慌てて追っていく。そんなサファイの背を、マルクとルビィネルは、静かに見送った。

「全然変わってないな、あいつ」

「ああ、そうだな」

呆れたように肩を落とすマルクの横で、ルビィネルはどこか、楽しげな笑みを浮かべる。

「でも、まあ」

「シリング〜！」

追って来たサファイアと合流し、うんざりしたような表情を見せるシリングを見て、ルビィネルが少し目を細める。

「変わっては、いけるかも知れないな」

未来を見据えるような瞳で、ルビィネルはそっと、呟いた。

シリングのパートナー選出のための特別講義が行われてから、三日の時間が流れていた。

レイル聖魔院、第五演習室。

「ホントに“ねんしょう燃焼”だけは、完璧に使えてんな」

どこか感心したように言うブラッドス。そのブラッドスの前には、淡い光のような赤炎を全身に纏った、マルクの姿があった。

「何かコツでも掴んだのか？」

「んー、コツとかはよくわかんないけど、この状態で結構自然な感じ。疲労感もないし」

「赤炎は五元炎ごげんえんの中でも、攻撃性の強い炎だから、“放出”には向いても、“燃焼”には不向きのはずなんだけどなあ」

自分でもよくわかっていない様子で答えるマルクに、ブラッドスが戸惑うように大きく、首を傾げる。特別講義中、魔猫まびょうから進化した魔虎まこに襲われたマルクは、土壇場で、炎技の一つ、“燃焼”を身につけたのである。トウーパの時に使った“放出”は、未だに使いこなせていないが、“燃焼”の方はすっかり使いこなし、他の魔士たちに並ぶほどとなっていた。

「ま、よっぽど赤炎が、体に馴染んだんだろ。良かったじゃねえか、取り柄が一つ出来て」

「どうせ俺は、他に取り柄なんてないよ！」

誉めるブラッドスに対し、相変わらず陰気な雰囲気で、一方的に言い返すマルク。

「けど、どうせなら、“燃焼”みたいな地味な炎技じゃなくて、もっと派手なの、特意になりたかったなあ。あいつみたいに“装纏そうてん”とかさ」

「あいつ？」

「“装纏”は、炎技の中でも、最も難易度の高い技だと言っただろう？」

不思議そうに聞き返すブラッドスの横から、ルビィネルが冷静に言葉を発する。

「“最上級魔士”であるシリリングには使えても、“最下級魔士”であるそなたには、まず無理だ」

「はつきり言い切るな！ もうちょっと濁して言えよ！」

断言するルビィネルに、マルクが泣き出しそうな表情となって怒鳴りあげる。

「ああ、あいつってシリリング・ウェーガットのことが」

二人の会話を聞いたブラッドスが、納得したように頷く。

「けどお前、“燃焼”が得意ってんなら、あの技をつ……」

『きやああああ！ シリリングくうーん！』

マルクに何かを伝えようとしたブラッドスの声が、演習室中に響き渡るほど大きな、黄色い声援により、あっさりと掻き消される。耳触りなほどの声に、マルクたちが少し顔をしかめながら振り向くと、そこには、何やら興奮気味の魔女たちの集団がある。魔女たちは皆、同じ方向を見つめており、その視線の先には、マルクと同じように、燃焼の演習を行っているシリリングの姿があった。

「相変わらず人気だな、最上級魔士は」

「ああ。あいつが演習に参加するようになってから、外野がうるさくて、しょうがねえ」

感心するルビィネルの横で、ブラッドスが不快な表情を見せる。

特別講義の結果、色々あったものの、パートナーを得たシリリングは、パートナーである魔士と魔女が二人一組で参加する、この炎技演習の授業にも、つい先日から、参加し始めたのである。

「あいつ、パートナー出来ちゃったのに、まだ魔女たちから人気あるのか？」

「危機に陥った魔院の仲間を救うため、自分のことなど顧みず、パートナー契約を行ったって噂が流れたのよ」

その場に姿を現し、マルクの疑問に答えたのは、アメジエスであつた。

「その噂を聞いた魔女たちが、“なんてカッコイイの、シリリングくん” ってなって、また人気が上がったんですって」

「まあ、ニューアンス的には、そう間違つてもないけどさ……」

アメジエスの言葉を聞いたマルクが、どこか引きつった表情を見せる。確かに、シリリングがパートナー契約を行ったお陰で、マルクもルビィネルも皆、助かったわけだが、シリリングだけがヒーローのように扱われることには、多少不満が残る。

「ちよつと！ シリリングは今、演習中なのよ！ 大きな声出して、シリリングの集中力、乱さないでくれない！？」

シリリングのすぐ近くに居たサファイアが、シリリングへと熱い視線を向けている魔女たちの前へ出て、しかめた表情で強く言い放つ。

「何よ、パートナーになつたからって、偉そうに」

「嫌よねえ。たまたま近くに居たから、パートナーになれただけなのに、自分が選ばれたって顔しちゃって」

「シリリングくんも災難よねえー。あんな魔女と、本結契約しちゃつて」

「何ですつてえ！？」

次々と悪口を零す魔女たちに、サファイアは落ち込むことなく、正面から勢いよく怒鳴りあげる。あれこれと揉め始めるサファイアと、他の魔女たちを見て、演習中のシリリングは、呆れかえつたように、深々と息を吐いた。

「大変だな、サファイアも」

「ルビィネルが一生、味わうことのない大変さよね」

「まあな」

「うるさいな、お前等！」

会話でさり気なく、マルクをけなすルビィネルとアメジエスに、マルクが敏感に気付き、怒鳴り返す。

「あ、そっぴや、マルク・クラウド」

思い出したような様子のブラッドスに名を呼ばれ、マルクがゆっくりと振り向く。

「お前、最近、ポンド・アラールと連絡取ってつか？」

「ポンド？」

ブラッドスからポンドの名を聞き、マルクが目を丸くする。

「特に取ってないけど、なんで？」

「あいつ最近、魔院の講義に出てねえんだよ。俺の炎技演習はともかく、他の基礎講義や、魔士の専門講義も全部」

「そう言われてみると、最近全然、見かけてないかも」

ここ数日の講義での風景を思い出し、マルクがポツリと呟く。いつもであれば、ポンドが居ないことくらい、すぐに気付いただろうが、最近、トゥーパやフランが共に講義を受けるようになり、さらにはシリングとサファイのこともあったので、ポンドの存在を、すっかり失念していた。

「アメジエスは？」

「私も見てないわね」

問いかけるマルクに、アメジエスが眉をひそめる。

「けど、ポンドが講義をサボるなんて、よくあることなんじゃ」

「まあ、そうなんだけど、今回はもう十日になる上、魔院に何の連絡も来てねえからさ」

アメジエスの問いに、ブラッドスが難しい表情を見せながら、答える。ポンドは、まだパートナーがいないこともあり、演習には参加していないが、他の単独で受ける講義も、定期的な感覚で休むことがよくある。それに明確な理由はなく、面倒臭いと言っていることが多々だ。

「そんなに気に掛けなくても、どうせまた、心に決めた、たった一人の魔女でも、口説きに行ってるんだろお？」

「そういえば、前から気になっていたのだが、その、ポンドが心に決めている、たった一人の魔女とは一体、どこの誰なのだ？」

「……………」

「ん？」

自分の問いかけに答えず、動きすらも止めるマルクを見て、ルビネルが首を傾げる。

「マルク？」

「そういえば、誰なんだろう」

「は？ 知らないのか？」

眉をひそめ、首を捻るマルクに、ルビネルが思わず、呆れたような声を出す。

「アメジエス、知ってる？」

「いいえ、知らないわ。私も、マルクは知ってると思ってたんだけれど」

「いや、だって、別に、改めて聞くようなことでもないし……」

アメジエスの言葉に、マルクが少し困った表情を見せる。そんなマルクを見て、アメジエスも考え込むように俯いた。二人を包む、気まずい雰囲気、ルビネルがそっと、肩を落とす。

「まあ、どうせ、この魔院の魔女なのだろう？ 魔女科クラスの者に適当に聞けば、わかるのではないか？」

「そ、そうだな」

気まずい空気を打破するように言うルビネルに、マルクが笑みを作って頷く。

「ま、何かわかったら、俺にも連絡くれ」

「あ、うん」

マルクの返事を確認すると、ブラッドスが、演習中の他の魔士のもとへと歩き去っていく。

「ポンドのたった一人の魔女、か……」

誰も知らぬその魔女のことを考え、マルクは、真剣な表情を見せた。

昼休み。中庭、ベンチ広場。

「他のクラスの子たちにも聞いたけれど、誰も知らなかったわよ。ポンドが口説いてる魔女なんて」

「トウーパも聞いてあげたけど、皆、知らないってえ」

「私もだ」

「そっか」

次々と言うアメジエス、トウーパ、ルビィネルに、マルクがそつと肩を落とす。ルビィネルたちは皆、魔女科でもクラスが違う上、アメジエスやトウーパは、他のクラスにも顔が広い。魔女たちは、誰が誰のパートナーになったのという話題には敏感であるし、噂も好きだから、これだけ聞いても誰も知らないということは、その魔女が、誰にも話していないか、その魔女が、この魔院に居る魔女ではないということだろう。

「魔院外の魔女かあ？ でもそうだったら、調べようが……」

「ハッハッハ！ 待たせたねえ、我が魔女よ！」

マルクが首を捻っているところへ、高らかと響き渡る笑い声と共に、体をくるくると回転させながら、フランがやって来た。フランが現れた途端、マルクたちが皆、うんざりとした表情となる。

「風のように軽やかに、波のように穏やかに、この僕が、レイールの貴族であるパパに頼んで、調べてもらったところだねえ」

「父親の力、借りただけかよ」

フランの言葉を聞き、マルクが思わず突っ込みを入れる。

「このレイールの魔院外の魔女で、ポンド・アラーネルに、パートナーを申し込まれたような人物は、居ないとのことだったよ！」

「そう、ご苦労様」

「なあゝに！ パートナーである、君のためなら！」

「調子よく、使われているな」

アメジエスの素っ気ない一言にも、嬉しさ全開で体を跳ね上げらせるフランを、ルビィネルがどこか、憐れみの目で見つめる。

「魔院外の魔女でもないとなるとあ、もしかして、フレイヤ？」

「それはないと思うわよ。ポンドは魔士とはいえ、ただの人間だか

ら、フレイヤには入国も出来ないだろうし」

提案するトゥーパに、アメジエスが冷静に答える。

「じゃあ一体、誰なわけえ？」

「さあ？ ポンドは昔から、肝心なところで秘密主義になる癖みたいなものがあるから」

トゥーパの問いに答えながら、困ったように肩を落とすアメジエス。

「親しみやすい雰囲気装っておいで、結局は誰も、近付けさせないのよねえ」

「君の近くには、この綿のようにフワフワで、麻のように涼しげな、僕がいるよ！ 我が魔女！」

「ハイハイ」

熱く身を乗り出してくるフランを、アメジエスが適当にあしらう。

「俺、帰りにポンドの家、寄ってみるよ」

「え？」

少し考え込むような表情を見せた後、そっと笑みを浮かべて言い放つマルク。そのマルクの言葉を聞いた途端、アメジエスが眉間に皺を寄せ、表情を曇らせる。

「けど、マルク」

「大丈夫、大丈夫。ポンドの様子だけ、チラッと確認したら、すぐ帰るから」

心配するように呼びかけるアメジエスと、アメジエスを安心させようと、笑顔を向けるマルク。そんな二人を見つめながら、ルビィネルは少し、戸惑うように首を傾げた。

「ポンドの家に、何かあるのか？」

「へ？」

一日の講義を終えたマルクは、ルビィネルと共に素早く魔院を出て、レイヤの川を渡り、魔族領のレイールから、人間領のヤールへと帰って来ていた。帰路での、いきなりのルビィネルの問いかけに、マルクが目を丸くする。

「ポンドの家に行くと言い出したそなたを、アメジエスが、ずっと心配していたようだったから」

「ああ。まあ、ちよつとね」

あまり浮かない笑みを見せるマルクに、ルビィネルが目を細める。

「もしや、“最下級魔士”は、家に入るのに、腹筋二百回、腕立て三百回、背筋五百回をしなければ、ならないとか……？」

「どんな家だ！ そんな差別、あつて堪るかよ！」

ルビィネルの突拍子もない発言に、マルクが勢いよく、声を張り上げる。

「ポンドのお父さんって、ヤールの領主さんなんだよ」

「領主？」

「うん。このヤールで、一番権力持つてる人ってこと」

「へえ。ではポンドは、ヤールで一番偉いところの、お坊ちゃんということか」

「まあ、そうは見えないけどな」

ルビィネルの言葉に頷きながら、マルクが少し楽しみに笑う。だが、マルクのその笑みはすぐに曇り、もとの浮かない表情へと戻った。

「で、ポンドのお父さんは、コーラルとすつごく、仲が悪いんだ」

「コーラルというと、確か、そなたの育て親だったな」

「うん。コーラルは魔族だから、人間領のヤールに勝手に入って、

住みついてるコーラルが、気に食わないんだろうね。昔からよく、コーラルに、ヤールを出て行けって抗議してた」

過去を思い出すように目を細めながら、マルクが言葉を続ける。

「それで、コーラルが育ててる俺も、嫌われてるってわけ」

「成程な」

マルクの話聞き終えたルビィネルが、納得したように頷く。レイヤは、人間と魔族が共存する、この世界唯一の国。それだけ聞けば、二つの種族が交ざり合う、平和な国を想像することも出来るが、共存するからこそ、二つの種族の確執は、より深いものなのだろう。「それなのに、そなたとポンドは、仲が良いのだな」

微笑みかけたルビィネルに対し、マルクは笑みを浮かべたまま、静かに、視線だけを落とす。

「対抗心、かな」

「え？」

マルクのその答えに、ルビィネルが戸惑うように首を傾げる。

「あ、着いたよ」

大通りを進んでいると、不意に、マルクが足を止める。マルクにつられ、ルビィネルもすぐに足を止めた。二人の目の前にあるのは、大通りに面した、巨大な屋敷。白を基調とした上品な壁作りの、まさに城のような屋敷で、縦は二階までしかないが、横幅が非常に長く、首を完全に左右に向けないと、屋敷の終わりが見えないほどだ。分厚い黒色の門に覆われており、屋敷と門の間には、魔院のグラウンド以上の広さの庭が広がっている。

「確かに、ヤール一番の金持ちでは、あるようだな」

「いつ来ても、圧倒されるよ」

感心するように言うルビィネルの隣で、マルクが少し引きつった表情を見せる。黒い正門の前に立っていた、警備の者らしき男に声を掛け、勝手口を開けてもらうと、マルクとルビィネルは、ポンドの家の敷地内へと入った。噴水や、造形物もある、広大な庭を通り、やっと屋敷の玄関口へと辿り着く。取り付けられたベルを鳴らすと、

玄関の大きな木製の扉が開き、そこから、メイド服を着た、若い女性^{せい}が姿を現した。

「ポンドお坊ちゃまは、外出されております」

マルクが長々と名を名乗り、状況を説明し、その上で問いかけたというのに、メイドから返って来た返事は、たったの一言であった。抑揚のない声に、感情のない表情を見せるメイドに、マルクが一気に、困ったような表情となる。

「あ、あの、どこに行っただんでしょうか？」

「お教えすることは、出来ません」

「け、けど、俺たち一応、魔院の講師にも依頼されて、ポンドの様子^{ようし}の確認に……」

「お教え出来ません」

再度、はつきりと言い放つ、頑なな態度のメイドに、マルクが肩を落とす。これ以上、問いかけたところで、メイドから答えは聞き出せそうもなかった。

「何だ、客人か」

「あつ」

屋敷の中から、メイドのすぐ後方へと姿を見せたその人物を見て、マルクが少し驚いた表情となる。現れたのは、黒い髪に、黒い髭をたくわえた、鋭い緑色の瞳の、四十代から五十代くらいの、立派な体躯の男であった。いかにも高貴な者が着るような、金の刺繍の入った服を纏っており、醸し出す雰囲気は貫録たつぷりである。

「これは、旦那様」

現れたその男に対し、メイドが慌てて、深々と頭を下げる。

「んん？」

男の鋭い瞳が、玄関前に立つマルクへと向けられる。

「これはこれは。どこの魔士かと思えば、あの魔女のところの子供ではないか」

「ご無沙汰しております、デイルハム様」

棘のある言い方をしてみせるその男、デイルハムに対し、マルク

は表情一つ変えずに、メイドと同じように、深々と頭を下げた。

「ん……？」

ディルハムの後ろから、ディルハムに続くようにして、屋敷から出て来る、真つ黒な法衣を纏った不気味な男に気付き、ルビィネルが眉をひそめる。頭から法衣を被っているため、はつきりと表情は見えないが、鈍く輝く深紅の瞳は確認出来た。その瞳に、どこか見覚えがあるような気がして、ルビィネルが考え込むような表情を見せる。

「随分と大きくなったな」

ルビィネルが法衣の男に気を取られている間に、ディルハムはマルクとの間の距離を縮め、マルクをよく知っている様子で声を掛けた。

「それほどに魔女の寵愛は、心地よいかね？」

挑発するような発言を見せるディルハムに、マルクが様子を変えることはなかったが、マルクの隣に立つルビィネルが、法衣の男からディルハムへ視線を移し、あからさまに表情をしかめる。そのルビィネルの、敵対するような視線に気付いたのか、ディルハムが今度は、そちらを向く。

「そちらは？」

「私のパートナーとなった、赤炎の魔女ルビィネルです」

「魔女、ねえ」

マルクからの紹介を受けたディルハムが、細めた冷たい瞳で、まっすぐにルビィネルを見る。

「やはり魔女の子は、魔女と共に居る方が落ち着くのかな？」

その冷たい瞳が、また、マルクへと向けられる。

「レイルで何をしようと自由だが、このヤールには、あまり魔女を連れ込まないでもらえないか？ 魔女の毒気に、ヤールが侵されてしまう」

「な……！」

身を乗り出し、抗議しようとしたルビィネルの前に、マルクがす

ぐさま右手を差し出し、それを制す。

「君を育てた、あの魔女にも、早くヤールを出て行くよう、伝えておいてくれ」

マルクにそう言い放つと、デイルハムが、法衣の男を初め、数名の従者を連れ、マルクの横を通り過ぎて、正門の方へと歩き出していく。

「君のせいで、ヤールが穢れる」とね」

振り向きざまに残したデイルハムの言葉に、マルクがそつと眉をひそめる。

「コーラルは」

マルクに背を向け、正門へと歩き出していたデイルハムが、背中に届く声に気付き、ゆっくりと振り返る。玄関先に立ったマルクは、真剣な眼差しを、デイルハムへと向けていた。

「コーラルは、ヤールを穢したりしません」

「それは、君の主観だよ。マルク・クラウド」

はつきりと答えるマルクを、デイルハムがあっさりと笑い飛ばす。
「失礼」

短く挨拶の言葉を落とすと、デイルハムはまた背を向け、今度は振り返ることなく、正門へと歩いていった。正門の前に待機していた火車に、従者と共に乗り込んでいく。

「マルク」

「へ？ うっ」

デイルハムの様子を見つめていたマルクが、横から名を呼ばれ振り向くと、そこには、見るからに不機嫌極まりない表情を見せた、ルビィネルの姿があった。

「右手を貸せ、マルク。あやつを燃やそう」

「ダメに決まってるだろ！ あの人、ポンドのお父さんなんだから！」

「そんなことは、関係ない」

「関係あるって！」

怒りに身を震わせているルビィネルを、必死に宥めるマルク。余程、先程のデイルハムの言動が、気に食わなかったのだろう。マルクとしても、デイルハムの言動は、怒りを感じないわけではないが、今、ルビィネルに魔炎を使わせては、デイルハムの命にも係わる。

「それより今は、ポンドを……！」

「ポンドお坊ちゃまは、いらっしやいません。お引き取り下さい」「あつ」

ルビィネルを宥めているマルクに、再度、冷たく言い放つと、メイドはそのまま、屋敷内へと戻り、あっさりと扉を閉めた。扉の閉まる音が響き、マルクが呆然と、声を漏らす。

「閉められちゃった……」

「燃やすか？」

「燃やさないってば」

ルビィネルの問いに答えながら、マルクは困ったように、頭を抱えた。

メイドに扉を閉められてしまった以上、玄関先に突っ立っていても仕方ないということで、マルクとルビィネルは正門を出て、屋敷を一周しようと塀沿いを歩き、屋敷の裏手の方までやって来ていた。何も情報を得られないまま、大人しく帰ることもし辛く、他に誰か、屋敷の者でも見当たらないかと思つての行為であつた。

「裏庭とか散歩してないかなあ？ ポンド」

「ポンドは、出掛けているのだろう？」

「メイドさんの言葉が、事実だったらね」

高い塀を、背伸びするようにして覗き込むマルクに、その後ろを歩くルビィネルが問う。どこか含みのある答えを返すマルクに、ルビィネルはそつと眉をひそめる。

「事実を教えてもらえないほどに、嫌われているということか」

「まあ、その可能性はある、かな」

ルビィネルの言葉に頷きながら、マルクが困ったように笑う。

「私も、あそこまでとは思わなかった」

先程のデイルハムの言動の数々を思い出し、ルビィネルが少し呆れたように肩を落とす。

「魔女は、人よりも強大な力を持っている。毛嫌いされても、文句は言えぬが、それにしても、あのような言い方はあんまりではないか？」

「仕方ないよ。あの人には、このヤールを守るっていう、義務があるんだからさ」

「だからって……あのような言葉を向けられて、そなたは、腹が立たぬのか？」

「立つよ」

ルビィネルからの問いかけに、マルクはあっさりと頷いた。あまりにも素直に答えが返って来て、ルビィネルが少し驚いたように、目を丸くする。

「ならっ……」

「俺さ、昔、同じようなこと言われて、腹立てて、あの人に勢いよく怒鳴り返したことがあったんだ」

何故、怒らなかったのか、とルビィネルが問う前に、マルクはその問いを読んだのだろうか、過去のことを話し始めた。

「そしたら、“魔女が育てただけあって、ろくな子供じゃない”って、コーラルが散々、けなされた」

マルクの言葉を受け、ルビィネルが眉間に皺を寄せる。

「その時、気付いたんだ。俺が腹立てて、怒ったって、コーラルの立場を悪くするだけなんだって」

どこか悟ったような表情を見せるマルクを見て、ルビィネルがそっと目を細める。

「だから、もう何言われても、無暗に怒鳴り返したりとか、そういうことはしないようにしようって、決めた。その方がずっと、コーラルのためになるから」

少し視線を落とし、決意のこもったような、いつもよりも低めの声を落とすマルク。

「大事なのだな。そのコーラルとやらが」

「まあ、家族だからね」

「家族、か……」

マルクの発した言葉を繰り返し、ルビィネルがどこか、考え込むような表情を見せる。

「それより、今はポンドをつ……」

「あした、の、前は、今日。きのうの前は、おととい。一昨日の、前は、何……？」

「ん？」

話題を切り替えようとしたマルクが、どこからか聞こえてくる、妙な歌声に気付き、眉をひそめる。歌声は途切れ途切れで、歌詞の意味もよくわからない。だが、その歌声は透き通ったように美しく、自然と耳に馴染んだ。歌声を探し、マルクが大きく背伸びをして、ポンドの家の敷地内にある、これまた大きな裏庭を覗き込む。

「あつ」

「一昨日の、前は、先おととい。先おととい、少し、言にくい……」

ただの独り言としか思えぬ歌詞で、歌声を響かせていたのは、一人の少女だった。肩ほどまで伸びた、緩いウェーブの、青緑色の髪。大きな瞳は、桃色だ。空を見上げる視点は、あまり定まっておらず、全体的にどこか、力の抜けたような、そんな空気を纏っている。表情も、特に無く、感情が浮かんでいない。年頃は、マルクとそう変わらないように見えるが、橙色のワンピースが、もう少し幼く見せる。裏庭の草地に座り込み、空へ向けて、その美しい歌声を響かせていた。

「魔、女……？」

「……っ」

小さく呟いたマルクのその声に、少女は敏感に反応し、歌声を止

めて、勢いよくマルクの方を振り向いた。いきなり振り向いた少女に、マルクが思わず焦ったような表情となる。

「あ、えと、こ、こんにちは」

「不審、人、物。略して、フジン……」

よくわからぬ言葉を落としながら、草地から立ち上がった少女が、いかにも怪しい者を見る目つきで、マルクの方を見る。

「や、俺は別に、不審人物とかじゃ……！」

「裏庭を覗き込んでいる時点で、なかなか、不審だと思うが」

「うるさいなあ！」

必死に弁解しようとするマルクを、逆に落とし込むような発言をするルビィネルに、マルクが勢いよく怒鳴りあげる。

「どうせ俺は、裏庭覗くほどの価値もない男なんだよぉー！」

「どんな価値だ」

頭を抱え、嘆き始めるマルクに、ルビィネルが呆れた表情を見せる。

「やっぱり、フジン……」

突然、叫び出したマルクに、さらに訝しむような瞳を向ける少女。

「マルク、ネガティブになっていないで、ちゃんと説明を……」

「マル、ク？」

ルビィネルが呼びかけたマルクの名に、少女がはつきりとした反応を示す。大きな瞳をまっすぐにマルクへと向け、今までの無表情から少し動かし、興味を示すような様子を見せる。

「あなた、マル、ク……？」

「へ？ あ、う、うん。そう、だけど？」

少女からの問いかけに、マルクが少し戸惑いながらも頷く。

「じゃあ、あなた、ポンドの、友、達……？ 略して、ポント？」

「略す意味が、よくわからないけど……けど君、ポンドのこと、知ってるの？」

少女の言葉を受け、マルクが堀越しに身を乗り出し、少女へと問いかける。ポンドの屋敷に居るのだから、ポンドのことを知っている。

ることは当たり前かも知れないが、マルクの名を知っていると、相当に近い者ということになる。

「そ、そう。俺、ポンドの友達なんだ。最近、魔院にポンドがずっと来ないから、心配になって、ここまで来たんだけど」

「心、配……」

マルクの発した言葉を繰り返し、少女がどこか、考え込むような表情を見せる。

「じゃあ、あなた、ポンドの、味、方……？ 略して、ポンミ？」

「へ？ あ、うん。敵、ではないと思うけど」

少女の問いの意図がわからず、戸惑いながら答えるマルク。マルクの答えを聞いた少女が、そっと目を細め、塀の向こうに居るマルクたちの方へと、ゆっくりと歩み寄って来る。

「なら、あなたを……ポンドのところ、略してポントに、連れて行く……」

「さっきの友達と、略語一緒だけど、でもまあ、案内してくれるなら、細かいことはいいや！ ありがとう！」

少女の申し出に、素直に喜ぶマルク。そんなマルクの横で、ルビィネルはそっと、表情を曇らせた。

ポンドの家でもある、アラールネルの屋敷は、外観では一つの横長の建物に見えるが、実際、中は三つの棟に分かれている。正門からまっすぐ向かった先にある、表玄関のある棟が本棟。その両脇にそれぞれ、左棟と右棟がある。本棟にはいくつもの客間や、大広間が並んでおり、左棟は大食堂や調理場などがある。そして右棟には、屋敷の住人たちの部屋があつた。その右棟二階の最も奥に、ポンドの部屋はあつた。

「はあゝあ」

部屋に取り付けられた大きな出窓から、屋敷の外に広がるヤールの町並みを見つめながら、自室に一人、退屈な時間を持て余しているポンドは、深々と溜息を吐いた。

「こう毎日、部屋にこもりつきりだと、全身が腐りそうだなあ」

ポンドがうんざりと呟きながら、出窓から部屋へと視線を移し、肩を落とす。ポンドの部屋は、一人部屋にしてはかなり広く、寝台や机、本棚など、家具もすべて、高級感が溢れている。見た目では完全に、何不自由ない、金持ちの息子の部屋であろう。だが、そんな部屋に居ても、ポンドの表情は、何一つ満ち足りている様子がない。

「魔院、行ってねえなあ。皆、心配してつかなあ。アメジエスは、心配してねえだろうなあ」

あれこれとボヤきながら、ポンドが再び、窓から外の景色を見つめる。ヤールの町並みの向こうに見える、レイヤ川。その向こうには、ポンドが毎日のように通っていた、レールがある。

「マルク、ルビィネルちゃんと、上手くやってつかな……」

どこか案じるように、ポツリと呟くポンド。その時、部屋の扉をノックする音が響き、ポンドが扉の方を振り向いた。

「晩飯には早いし……メルかあ？」

問いかけながら、ポンドがゆっくりと扉を開く。

「ポンド！」

「うおっ」

ポンドが扉を開けると、すぐ目の前に、マルクが立っていた。今しがた、丁度考えていたマルクが目の前に現れ、ポンドが驚きの表情を見せる。心臓の鼓動を静まらせるように、ポンドが左胸に左手を当てる。

「な、なんだってマルクがここにっ……」

「わたしが、連れて、来た……」

「メル」

マルクの隣に並んだ、先程の青緑色の髪の少女が答えると、ポンドがそちらを振り向く。

「何、勝手なことしてんだよ」

「この人、マル、ク……ポンド、よく話す、ポンドの、ポントで、ポンミ、でしょう……？」

「そう、ポンポン言われたって、わかんねえって」

正確な意味の取りづらい、メルと呼ばれた少女の言葉に、困ったように肩を落とすポンド。

「お前も、ホイホイ付いてくんなよ。親父にでも見つかったら、どうする気だ？」

ポンドが視線をマルクへと移し、ついで、マルクのすぐ横に立つルビィネルへと移す。

「うちに魔女まで連れ込んで……また、“魔女の子供は、ろくなことをしない”とか何とか、嫌味言われるぞお？」

「そんなのは、別にいいよ」

忠告のようなポンドの言葉に、マルクは、少し怒った様子で答える。

「ねえ、ポンド、なんで魔院に来ないの？」

「……っ」

マルクの問いかけに、ポンドがすぐさま、眉をひそめる。

「見た感じ、元気そうだし、病気じゃないよね？ 病気なら、メイドさんも、“ポンドは居ない”とか、嘘つかないだろうし」

次々と言葉を発し、マルクがどこか問い詰めるように、ポンドを見る。

「ねえ、ポンド。何かあったの？」

真剣な表情を作り、マルクがポンドへと問いかける。ポンドは、マルクから逃げるように視線を逸らし、俯くと、どこか考え込むような表情を見せた。

「別に、何でもねえよ」

「ウソだ」

すぐさま否定するマルクに、ポンドが表情をしかめる。

「あのさあ」

呆れたように言い放って、ポンドが顔を上げ、マルクへと冷たい視線を投げかける。

「何かあったとして、んで、お前に言ったところで、何になの？ たかが、最下級魔士に相談したところで、何の解決にもっ……」

「どうせ俺は、最下級魔士だよ」

馬鹿にしたようなポンドの言葉を、マルクが勢いよく遮る。

「出来ることなんて、ほんのちよびつともない」

「だったら」

「けど、大事な友達が困ってたなら、どうにかして助けたいって気持ちくらい、最下級魔士にもあるんだよ」

「……っ！」

力強く放たれるマルクの言葉に、ポンドが思わず、目を見開く。

そんな二人の様子を、メルは真剣な表情で、ルビィネルは穏やかな表情で見つめる。マルクの言葉を受け、そっと俯いたポンドは、少しの間を置いた後、困ったように笑みを零した。

「ああゝあ、やっぱり敵わねえや。お前には」

「へ？」

お手上げするように、そっと言葉を落とすポンドに、マルクがよ

く意味が理解出来ず、首を傾げる。ポンドは部屋の扉から顔を出し、周囲を確認すると、手招きをして、マルクたち三人を、部屋の中へと入れた。もう一度確認を行って、ポンドが部屋の扉を閉じ、鍵をかける。再度、部屋の外の音を確認すると、ポンドは、部屋の中へと入れた、マルクたちの方を振り向いた。

「俺、今、この部屋に軟禁されてんだよね」

「軟禁!？」

ポンドの言葉に、マルクが勢いよく驚く。

「誰に!？」

「んな悪趣味なことすんの、うちの親父に決まってるだろ」

「親父って、デイルハム様が？」

「そっ」

聞き返したマルクに、ポンドは特に動揺なく答えたが、マルクは動揺を隠すことは出来なかった。マルクに親というものは居ないため、感覚でしかないが、親が子供を軟禁するというのは、相当な事態ではないのだろうか。だがポンドは、ごく自然に話をしている。

「なんで？」

「ん、まあ一言では答えにくいんだけど、親父、今、頭イカれちゃっててさ」

率直に問いかけるマルクに、言葉を選んでいるのか、ポンドが困ったように、頭を掻く。

「まあ前からイカれてんだけど、半年前、あいつが来てからは、特にねえ」

徐々に陰しくなっていく、ポンドの表情。ポンドのすぐ傍で、メルと呼ばれた少女もまた、どこか厳しい表情を見せる。

「あいつって？」

「自称、魔炎研究家とかいう男。全身に真っ黒な法衣被っててさあ、もう見るからに怪しいの何のって」

「法衣? あっ」

ポンドの説明を聞いたマルクが、先程、玄関先でデイルハムと遭

遇した際、真つ黒な法衣を纏った男が、従者として共に居たことを思い出す。確かに、あの姿は明らかに異様で、他の従者に比べると目立っていた。

「法衣の人なら、さつきデイルハム様と一緒に居るとこ、見たよ」

「最近は、あいつ等、ベツタリだからな。つたく、なんであんな怪しい男を、疑いもせずに傍になんか置くなねえ。親父も」

マルクに答えながら、ポンドが呆れたように肩を落とす。

「魔炎、研究者……あ、そうか。思い出した」

突然、声を挟むルビィネルに、マルクとポンドが同時に振り向く。

「あの男、モルダバ」

「モルダバ？」

「モルダバの野郎を知ってんのか？ ルビィネルちゃん」

一つの名を発したルビィネルに、マルクが首を傾げ、ポンドが驚いた表情を見せる。問いかけたポンドに、ルビィネルは真剣な表情で頷いた。

「どこか見覚えがあると、思っていたのだが、あの男は元々、フレイヤの、魔炎研究の先駆者だ」

「フレイヤの？ じゃあ、魔族ってこと？」

「ああ。数十年前、魔炎の仕組みや特徴などを、次々と明らかにし、フレイヤ中の関心を集めた。だが、魔炎強化の研究に取りつかれてからは、次々と違法実験を進めて、実験台となった魔女や魔族を、何人も犠牲にしたのだ」

「犠牲っ……」

ルビィネルの説明を聞き、マルクが険しい表情を見せる。

「フレイヤを追放されてからは、まったく名を聞かなくなったのだが、まさか、人間領のヤールに身を寄せていたとはな」

「違法実験ねえ。やつば曲者だったか、あの野郎」

少し考えるように俯きながら、こちらもマルク同様、険しい表情を見せるポンド。

「じゃあ、ポンド、もしかして、そのモルダバって奴のことを、何

とかしようとして……」

「ああ。尻尾掴んでやろうと思って、研究所忍び込んで、あれこれと物色してたところを見つかって、それで今、軟禁状態ってわけ」
軽い口調で、軽くはない内容を、さらりと話すポンド。

「何回か忍び込んでるけど、さすがに軟禁されたのは、初めてだった」

「一人で無茶するなあ」

「仕方ねえだろ。怪しげな奴にいつまでも、自分の家、うろつかれたくもねえし。それに」

呆れたような視線を向けるマルクに、ポンドが真剣な表情を見せながら、すぐ近くに立つ、メルの方を見る。

「こいつのことも、あつたしな」

振り向いたポンドを、メルは無い表情のまま、まっすぐに見つめ返す。

「そういえば、その子、誰なんだ？」

「こいつは、エメラルディア。通称、メル。魔女だ」

「魔女、にしては、何かが足りないような……」

何が足りないのかわからず、マルクが眉をひそめながら、じつくりとエメラルディアを見つめる。

「首のリボンだろう」

「ああ、そうそう！ リボンがない！」

ルビィネルの言葉に、マルクが納得した様子で、大きく手を叩く。ルビィネルの首元に、赤いリボンが巻かれているように、魔女は本来であれば、持って生まれた魔炎の色と同じ色のリボンを、首元に巻いている。それが昔からの習わしであると、養成学校時代に習った記憶もある。だが、エメラルディアの首元には、何色のリボンも巻かれていなかった。

「巻き忘れたのかあ？」

「アホ」

暢気に問いかけるマルクの横から、ルビィネルが鋭く言い放つ。

「どうせ俺は、アホだよ！ バカだよ！」

「このリボンは、フレイヤやレイールなどの国から、公式魔女に与えられる、身分証のようなものだ」

嘆いているマルクのは気にせず、自身の首元の、赤色のリボンを軽くつまんで、説明を始めるルビィネル。

「公式魔女？」

「まあつまり、真つ当な家柄出身で、魔院にも普通に通えるような魔女たちのことだな」

ルビィネルの言葉を受け、マルクが魔院に通っている魔女たちの姿を思い出してみるが、確かに皆、首元にリボンを巻いており、巻いていない魔女の姿などは、正直、見たことがなかった。

「だが、世の中には、真つ当な家柄に生まれず、国からの身分証も貰うことの出来ない、“非公式の魔女”が存在する」

鋭いルビィネルの視線が、エメラルディアへと注がれる。

「非公式の魔女は、国からも存在が確認されていないため、違法行為や国の勢力争いなどに、その魔炎の力を使われることが多々ある」
「使っつて、そんな酷いこと……」

「何とかしようという国の動きもあるが、何とも出来ていないのが、今の実情だ」

悲しげな表情を見せるマルクに対し、ルビィネルは冷静に言い放った。

「じゃあ、エメラルディア、は」

「ああ、ルビィネルちゃんの言う通り、“非公式の魔女”だ。んで、モルダバの、今の魔炎強化研究の実験台」

ポンドの言葉に、マルクがより一層、険しい表情を見せる。先程までのルビィネルの話を聞いていれば、エメラルディアが、モルダバによる違法実験の実験台であることは、容易に想像がつく。マルクとそう年も変わらないように見えるエメラルディアが、そのような目に遭っているのかと思うと、マルクの胸は、ひどく軋んだ。

「モルダバの野郎、とっ捕まえて、とつとこいつを、自由にして

やりたかったんだけどなあ」

エメラルディアを見つめるポンドの瞳が、どこか切なげに瞬く。ポンドとエメラルディアの様子を見つめ、真剣な表情を見せたマルクが、気合いを込めるように、きつく右拳を握り締めた。

「モルダバの研究所に行こう、ポンド」

「は？」

いきなりのマルクの言葉に、ポンドが間の抜けた声を漏らす。

「証拠見つけて、デイルハム様に見せて、モルダバ捕まえて、エメラルディアを自由にしよう！」

「あのなら」

決意に満ちた表情で、次々と言葉を繰り出すマルクに、ポンドが困ったような表情を向ける。

「お前、自分の立場、わかってんのか？　んなことして、もし親父に見つかったら、今度こそお前、コーラルさんと一緒にヤールを出されるぞ？」

「それでもいいよ」

ポンドの問いかけに、マルクは間髪入れずに答えた。

「コーラルもきつと、“いい”って言うと思う」

「……っ」

迷いのない、晴れやかな笑顔を見せるマルクを見て、ポンドが困ったようなその表情から、口元を緩め、つられるようにして、笑う。「やっぱ、敵わねえや。お前には」

微笑んだポンドは、マルクに聞こえないほどの、小さな声で呟いた。

ヤールの郊外、アラール家が持っているという広大な土地の一角に、今はモルダバが魔炎研究に使っているという、大きな研究施設があつた。真つ白な壁には、最小限の窓しかなく、その窓の内にも黒いカーテンがかかっており、建物内部を極端に見えにくくしている。鉄の格子で周囲を囲っており、厳戒態勢に見えた。

「ここが、モルダバの研究所」

「見張りの者も居るようだな」

鉄格子の外側の、少し離れた木の陰から、内部の様子を見つめ、ルビィネルがそつと眉をひそめる。

「けど、エメラルディアだけ、屋敷に残してきて良かったの？」

「ああ。メルの子、研究所に来ると、嫌そうな顔するし。たぶん、いい思い出がないんだろうな」

マルクの問いかけに、ポンドが少し難しい表情で答える。研究所に行くことを決め、屋敷の者に見つからないように、ひっそりと部屋を出たマルクたちであつたが、ポンドがエメラルディアに、ポンドの部屋に残るよう指示したのである。

「ま、あいつ、常に無表情だから、それに気付くのに、数ヶ月かかったけど」

ポンドの言葉を聞きながら、マルクが目を細める。

「エメラルディアが、ポンドが心に決めた、“たった一人の魔女”？」

遠慮がちに問いかけるマルクに対し、ポンドが一瞬、表情を曇らせた後、穏やかな笑みを浮かべる。

「最初、モルダバと一緒に屋敷に現れた時は、あいつもモルダバの仲間だと思つてたんだよ。あいつ、表情無いし、言葉も変だし、怪しいっちゃ怪しかったから」

過去のことを思い返し、ポンドが懐かしそうに笑う。

「けど、モルダバが来て一ヶ月後くらいに、モルダバの研究所忍び込んだ時に、研究記録見つけてさ」

「研究記録？」

「ああ、魔炎強化研究の記録。実験台の名前のところには、メルの名前があつた」

続くポンドの話に、マルクは徐々に、その表情を曇らせていく。

「そこに、書かれてたんだ。“魔炎強化実験後、笑顔見られず。実験の影響で、感情表現能力を損失したもよう”って」

その言葉に、マルクとルビィネルが同時に、厳しい表情を見せる。「たった二行で、すっげえ簡潔に書いてあつたけど、俺、それ読んだ時、頭真っ白になっちまってさ」

ポンドがわずかに声を震わせ、自嘲するような笑みを浮かべる。

「あいつは、感情が損失しちまうほどの実験やらされてたのに、なのに俺は、何も知らずに、無表情で無愛想で、ただの怪しい奴だと思つてたんだと思うと、自分に腹立つてさ……」

「ポンド」

悔いるように言葉を続けるポンドを、マルクがどこか、心配するように見つめる。

「だから俺が、何とかしてやりたいんだよね。もう一度、あいつが、笑えるようにしてやりたい」

優しく微笑みながら、それでも並々ならぬ決意を滲ませるポンドを見つめ、マルクがそつと笑みを浮かべる。

「それに、勿体ないだろお？ 折角の可愛い女の子が、笑顔も作れないなんてさあ」

「意外とフェミニストなのだな、そなた」

「俺はいつでも、女の子の味方よお？ ルビィネルちゃん」

いつもの軽い調子の言葉遣いに戻り、ルビィネルと気さくなやり取りをして見せるポンドを見て、安心したように微笑むマルク。エメルディアのことで、思い悩んではいるものの、追い詰められていない様子はないようだ。

「んじゃ、早速、潜入するか」

「うん。ポンドはいつつも、どうやって潜入してるの？」

「鉄格子乗り越えて」

「普通だな」

ポンドの言葉に、マルクが思わず呆れた表情となる。

「けど、今回は三人だからなあ。三人で乗り越えてたら、いくら何でも目立つよなあ」

「“移り火”を使えば、すぐに建物内部に入れる」

「あ、そつか。あ、いや、でも」

ルビィネルの言葉に一度は頷いたマルクだが、すぐさま気難しい表情となつて、考え込む。

「お前、方向音痴じゃん？ 下手に“移り火”使つて、思いっきり違う場所に出ちゃったりしたら、ヤバいだろ」

「何を言っている。私は、方向音痴ではない」

「いやいやいやいや、お前が何言つてんの？」

自信を持つて主張するルビィネルに、引きつった表情を向けるマルク。

「じゃあ、マルクが誘導すればいいんじゃないの？」

「へ？」

突然のポンドの言葉に、マルクが目を丸くする。

「小つせえ頃、一回、一緒に研究所入ったこと、あつただろ？ だから、マルクが誘導すれば、上手いこと、中まで移動出来るんじゃない？」

「それは、俺が並みの魔士だったらの話だろ？」

提案するポンドに、どこか非難するような目を向けるマルク。

「最下級魔士の俺に、そんな器用な芸当、出来るはずが……」

「いや、可能性はあるな」

思い当たつたように言うルビィネルに、マルクとポンドの視線が集まる。

「“燃烧”を使うんだ」

「燃焼を？」

「ブラッドスが言っていただろう？ 赤炎は、そなたの体に馴染んでいるのだと。燃焼を使った状態で、そなたが建物内部を意識し、そこに私が補助して、移り火を使う。そうすれば、もしかすれば」

「そんな賭けみたいなこと」

「今、私たちがやろうとしていること自体、賭けのようなものではないのか？」

「それは……」

ルビィネルの鋭い問いかけに、思わず口ごもるマルク。フレイヤを追放されたほどの魔族を相手に、その尻尾を、たかが魔士が掴もうとしているのだ。確かに、これは、賭けに近い。

「たまには、自分を信じてみたらどうだ？ マルク・クラウド」

自信に満ちたルビィネルの笑みが、マルクへと向けられる。共にマフレイヤに行こうと言われた時に、マルクが断ることの出来なかった、力強い笑みだ。

「わかったよ」

そう頷いて、マルクが、開き直ったような顔を見せる。

「その代わり、失敗しても文句言っなよな」

「そりや言っだろ」

「うん、言っな」

「言っなよ！」

ポンドとルビィネルに文句を言いながら、マルクが、自身の右手を、ルビィネルの差し出した左手へと向ける。魔紋の刻まれた二人の手が、静かに重なった。

「目醒めよ、我が赤炎」

ルビィネルが魔唱を口にし、二人が魔炎を共有する。

「燃焼だ、マルク」

「ああ」

ルビィネルの言葉に頷くと、マルクが目を閉じ、集中し始める。ほどなくして、マルクの全身に、淡い赤色の光が帯びた。その光景

を、ポンドが驚いた様子で見守る。

「いつの間に、こんなに……」

最下級魔士であるマルクの成長ぶりに、思わず目を見張るポンド。

「建物内部を強くイメージしろ、マルク」

「わかつてる」

目を閉じたままのマルクが、さらに集中しているのか、険しい表情を見せる。そんなマルクを見つめながら、ルビィネルもまた真剣な表情を見せ、重ね合わせていたマルクの右手を、強く握り締めた。

「行くぞ」

「ああ」

二人がしっかりと頷き合い、重ねた両手から溢れる炎を、強めていく。

「“移り火”」

赤い炎が三人を包むと、その場から、三人の姿が消えた。

赤い炎が辺りを包み込んだかと思うと、次の瞬間、視界に現れたのは、対照的な暗闇であった。薄明りに照らされた狭い部屋には、いくつもの棚が並んでおり、そこに並べられた箱は、大量の埃を被っている。

「ここ、は？」

「んー、見た感じ、地下倉庫っぽいな」

ルビィネルの問いに、周囲を見回し、棚に貼られたラベルや、箱の中身を確認しながら、ポンドが答える。

「人の気配もないし、なかなかナイスな誘導じゃねえの」

「昔、一緒に研究所入った時、中の人に見つかりそうになって、ここに隠れただろ？ その記憶が、残ってたからさ」

「成程ねえ。ガキの頃の悪戯も、役に立つことがあるわけだ」

マルクの答えに、ポンドが嬉しそうな笑顔を見せる。

「じゃ、とつとと行くか。見つからねえうちに」

ポンドの言葉に、マルクとルビィネルは、しっかりと頷いた。廊下に見張りが居ないことを確認し、地下倉庫を出ると、三人は素早く移動して、非常階段へと向かった。階段を音を立てずに上り、三階まで移動すると、また人の気配を確認して、廊下を進む。

「一体、どこに向かつてるんだ？」

「モルダバの部屋。最上階の最奥に、あいつ専用の部屋があるんだ」さすがは何度が忍び込んでいるだけあって、ポンドは勝手知った様子で迷いなく進み、やがて、重い鉄の扉で閉ざされた、一つの部屋の前へと辿り着いた。

「ここ。ここが、モルダバの部屋」

「けど」

マルクが、鉄の扉の横に設置されている機器のようなものを見つめ、眉をひそめる。明らかに、この機器で何かをしなければ、この扉は開かないように見えた。

「これは、魔力認証計。モルダバの魔力に反応して、扉が開くようになってる」

「では、どうするのだ？」

「大丈夫、大丈夫。ちゃんと準備、してきたから」

「準備？」

マルクたちが戸惑いの表情を見せる中、ポンドがズボンのポケットを探り、シンプルなデザインの、金色のリングを取り出す。

「何、それ？」

「模倣環^{もほうかん}。記憶させた魔族の魔力を、一瞬だけ使えるっていう代物」リングを自身の指に通したポンドが、リングをした右手で、扉の横の機器へと触れる。

「こういうこともあるだろうと思って、この前、うちに闇商人が売り込みに来た時、買つていたんだよなあ」

「何か俺、ちよつと、お前が怖いよ……」

何の躊躇いもなく話すポンドに、マルクが少し引きつった表情を見せる。闇商人が家に来ることも、その闇商人から物を買うことも、

普通の人間にはなかなかない経験だろう。マルクが引いている間にも、機器がリングからモルダバの魔力を察知し、短い機械音の後にゆっくりと重い扉が開いていく。

「よっしゃ」

リングを外しながら、開いたばかりの扉から、部屋の中へと入っていくポンド。ポンドの後に続くようにして、マルクとルビィネルも、部屋へと侵入する。三人が入ると、部屋の扉は、重い音を立てて、またゆっくりと閉まった。一定時間が立てば、閉まるようになっていくのだろう。

「ここが、モルダバの部屋か」

周囲を見回しながら、ルビィネルが真剣な表情を見せる。そう狭い部屋ではないのだろうか、両面の壁には本棚がきちきちに並べられており、その間には、いくつもの机が並び、その机の上すべてに山盛りの本やら紙やらが積み上がっているためか、その部屋は、妙に窮屈に見えた。窓もなく、薄暗いため、ポンドが、机の上に置かれた、小さな照明灯を点ける。

「この中から何か、違法研究の証拠を見つけられればいいんだよね？」

「ああ。モルダバは親父と出掛けたみてえだし、数時間くらいは大丈夫だと思うけど、長居は出来ない」

「そうだな。とにかく、手分けして探そう」

互いに頷き合うと、三人は部屋に散り散りに分かれた。マルクは左右の壁の本棚をあたり、ポンドとルビィネルは、数ある机の上に乗っかっている、本やら書類やらに、次々と目を通していく。莫大な数の資料のすべては、魔炎に関するものであった。聖魔院の図書室にすら置いていないような本や、貴重とされている古書まで、幅広く置かれている。その一つひとつを確認していくうちに、どんどん時間は流れ、すべての資料に目を通していき間に、二時間程が経っていた。

「確かに、魔炎研究や、その実験に関する書類は、山ほどあるが…

…」

手に持っていた書類を、机の上へと戻し、ルビィネルが険しい表情を見せる。

「違法研究のデータや、その証拠となるようなものは、一切ないな」
ルビィネルの言葉に、同様の結果を得ていたのか、ポンドもまた、厳しい表情となる。

「ここまでないとすると、証拠となるものはすべて、別にして、他の場所に隠している可能性の方が高いのではないか？」

「だよなあ、やっぱ」

困ったように頭を抱え、ポンドが深々と肩を落とす。

「あ、そういえば、ポンドが見つけたっていう、エメラルディアが対象の研究記録。あれは？ 違法研究の証拠になるんじゃない？」

「あの記録も、あくまでメルを観察記録で、実験方法やら結果については、一切記載がなかったんだ」

「そっか」

ポンドの言葉を受け、マルクも困った表情となる。

「けど、他に隠すって言ったって、一体、どこに……」

「何の相談かね？」

「……っ！」

突然入って来る、三人の者ではない声に、マルクたちの表情が強張る。緊張感を走らせた表情で、マルクたちが一斉に振り向くと、重い鉄の扉が、ゆっくりと開き始めた。開いていくその扉の向こうから、黒い法衣を纏った、不気味な男の姿が現れる。

「モルダバ……」

男の名を口にし、ポンドは額から、一筋の汗を流した。

黒い法衣を纏ったモルダバは、昼間遭遇した時のように、頭から法衣は被っていないかった。よく見えるようになったその顔を見れば、モルダバは、思っていたよりも年老いている。髪は白く、顔にはいくつも皺が入っており、首も細い。だが、その赤く輝く瞳は、相手を気圧すような、そんな力を持っていた。見つめられているだけで、居心地の悪くなる瞳だ。モルダバが目の前に現れてから、マルクたちは、一言も発することが出来ず、ただ、その場に立ち尽くしていた。

「懲りないお坊ちゃんだ。何度、父上の顔を潰せば、気が済むのかね？」

「親父の顔、潰してんのは、そっちだろ」

落ち着いた口調のモルダバに、ポンドも負けじと言葉を返すが、その表情は強張ったままで、明らかに気圧されているのがわかる状態だった。

「私は、君のお父上に、協力しているだけだよ」

そんなポンドを見透かすかのように、モルダバがそつと微笑む。

「君のお父上は、私の魔炎強化の研究に、非常に興味を持たれている。強い魔炎の力を手にし、ヤールに潜む魔族たちを排除したいそうだ」

モルダバの言葉に、一気に厳しい顔つきとなるマルク。デイルハムは昔から、ヤールから魔族をすべて追い出そうとしていた。マルクの屋敷にも、何度も、従者を送り込んで来てはいたが、言葉で出て行けと言っただけで、実力行使をすることはなかった。

「その為には、いくらでも資金援助するとも言ってくれている」

「くだらねえ」

不快感を露にし、吐き捨てるように言うポンド。

「今、捕まっただってなあ、俺は絶対、諦めねえぞ！ 何度だって忍

び込んで、いつか必ず、お前の尻尾を掴んでやる！」

「ほお」

身を乗り出し、堂々と叫びあげるポンドを、モルダバが感心するように見る。

「ではそろそろ、消しておかねばならないね」

「え……？」

そう言つて、ポンドへと右手を突き出すモルダバ。モルダバの右手から巻き上がる赤炎に、ポンドの表情が凍りつく。

「せきとつか
赤突火”」

大きな赤炎の塊が、まっすぐにポンドへと飛んで行く。

「ルビィネル！」

「ああ！」

互いに頷き合い、ポンドの前へとやって来たマルクとルビィネルが、魔紋の刻まれたそれぞれの手を重ね、向かってくる炎へと突き出す。

「せきへきか
赤壁火”！」

赤い炎の壁を張り巡らせ、やって来たモルダバの赤炎を、跳ね返すマルクとルビィネル。モルダバは落ち着いた様子で、戻って来た自身の炎を、右手を絡めるようにして掻き消した。

「ほお、魔女か」

興味深く、モルダバがルビィネルを見つめる。

「どうだい？ 私の研究材料にならないか？」

「丁重にお断りしよう」

モルダバからの誘いを、ルビィネルが大きく笑つて、あっさりと断る。そのまま二人は、重ね合わせた手を掲げた。

「“移り火”！」

赤い炎が包み込むと、そのまま、部屋の中から、三人の姿が消える。静まり返った部屋に一人残り、モルダバはそっと、眉をひそめた。

「逃がしは、しないよ」

「つて、ここ、まだ研究所の中じゃないかよお！」

建物の外は外であるが、鉄格子に阻まれた、研究所領域の内部に居ることを確認し、マルクが非難するように声をあげる。

「おかしいな。私の予定では、ポンドの家まで飛ぶはずだったのだが」

「この方向音痴！」

首を傾げるルビィネルに、マルクが強く怒鳴りあげる。

「ああー、俺は今日、ここで捕まるんだあ！ 実験台にされたりしたら、どうしようおー！」

「最下級魔士じゃ、実験台にもならぬだろう」

「どうせ俺は、実験する価値もない奴なんだよおー！」

マルクとルビィネルが、騒々しいやり取りを繰り返す中、共に移動してきたポンドは、どこか深刻そうな表情で、深々と俯いていた。

「悪い……」

ポンドの口からそつと零れ落ちた言葉に、マルクが嘆きを止めて、振り向く。

「ヤールを追い出されるくらいじゃ、済まなくなっちゃった……」

モルダバから追われる立場となったことに、責任を感じているのか、厳しい表情を見せるポンドを見て、マルクがそつと目を細める。

「そうだね、どうしようか」

軽く頷いて、笑みを浮かべるマルク。その笑みは、決して悲観したものではなかった。ルビィネルも、マルクと同じように、笑顔を見せる。

「魔炎で攻撃されたのだ。悪意ある証拠には、ならぬか？」

「んー、先に部屋に侵入したの、こっちだからなあ。正統防衛になるんじゃない？」

追い詰められた状況であるというのに、特に焦った様子もなく、

のんびりと会話を続けるマルクとルビィネルを、ポンドが、どこか茫然と見つめる。ルビィネルはともかく、ネガティブなマルクであれば、このような状況になれば、ひたすら頭を抱え、嘆くのが普通である。それが、ポンドの知っている、マルクという人間だ。

「もう俺は、死ぬしかないんだあ」とか、言わねえのか？ マルク」

「ん？ ああ、何か最近、色々あり過ぎて、この程度じゃ、あんまり焦らなくなってきたよ」

「どんな“最近”を、過ごしてたんだよ……」

惚けたように笑うマルクに、思わず突っ込みを入れるポンド。

「何だ。まだ、こんなところに居たのか」

聞こえてくる声に、一瞬にして険しい表情となるマルクたち三人。すぐさま声の方を振り向くと、そこには、モルダバと、モルダバと同じように黒い法衣を纏った、数名の男たちが立っていた。男たちは皆、一切表情が無かった。

「とつくに外に出たと思って、捜索隊を出してしまったよ」

「そうだろうと思い、内に潜む作戦だったのだ」

「嘘をつけ」

得意げに話すルビィネルに、マルクが冷たい視線を送る。

「まあ、助かったよ。これで、死体を運ばずに済む」

物騒な発言をするモルダバに、マルクとルビィネルが険しい表情を見せる。モルダバが軽く右手を挙げると、それが合図だったのか、モルダバと共にやって来た男たちが、一斉に右手を、マルクたちへと向けた。

「目覚めよ、赤炎」

「青炎」

「紫炎……」

男たちは次々と魔唱を口にし、それぞれの色の魔炎を目覚めさせる。

「あいつ等、皆、魔族かよ」

「魔族追い出すために、こんだけ大勢の魔族に侵入されてちゃ、親父も形無しだな」

魔炎を持つ男たちを見て、驚いたように言い放つマルク。その横でポンドが、父を嘲笑うかのような言葉を吐く。だが、その表情は険しく、少しも笑ってはいなかった。

「やれ」

モルダバの合図と共に、男たちが一斉に、色取り取りの魔炎の塊を、マルクたちへと放ってくる。マルクはすぐさま、ルビィネルと手を重ね、前方へと突き出した。

「“赤壁火”！」

赤い炎の壁を作り、やって来た魔炎のすべてを受け止めるマルクたち。

「う……！」

「マルクっ」

魔炎が壁へと当たった瞬間、マルクの右手に、大きな衝撃が走った。思わず表情をしかめるマルクを、ポンドが心配するように見る。

「重っ」

ポツリと言葉を落とすマルク。確かに、数名の者の魔炎を受け止めたことなど、今までにないが、やって来た魔炎の一つひとつが、非常に重く押し掛かってきた。トゥーパの全力の放出を止めた時も、ここまでの衝撃はなかった。あの魔虎と戦った時の、衝撃波ほどの重さである。

「俺、もうそんなにもたないよ！ ルビィネル！」

「わかってる」

自己申告するマルクに、ルビィネルはすでに理解している様子で頷いた。ルビィネルも、受け止めている魔炎の重さには気付いているようで、その表情は険しい。

「衝撃に備えろ。蹴散らすぞ」

「え？」

ルビィネルの言葉に、マルクは嫌な予感でも走ったのか、その表

情を曇らせたが、ルビィネルはそんなことは気にせずに、左手に魔炎を集中させた。

「せきはいつか赤爆火”！」

「うわ！」

壁のすぐ後ろで炎を爆発させ、ルビィネルが自身で張っていた壁もろとも、受け止めていた男たちの魔炎を、辺りへと吹き飛ばす。だが、その爆発は、魔炎だけでなく、マルクたちまでも吹き飛ばした。吹き飛んだマルクたち三人が、力なく地面に倒れ込む。

「痛たたたた」

「マルク！」

右肩を押さえながら起き上がったマルクに、すぐ傍で起き上がったポンドが、駆け寄っていく。爆発の瞬間、マルクはポンドを庇い、爆発の影響を受けたのだ。

「ポンド、大丈夫？」

「俺は無傷だ。どう見ても、お前の方が大丈夫じゃねえだろうがっ」
問いかけるマルクに、ポンドが少し怒った様子で答える。マルクが庇ったため、ポンドは傷一つ負っていないが、マルクの右肩からは、赤い血が流れ落ちていた。

「あんな爆発に、どう備えろって言うんだよ」

「魔炎を食らうよりは、マシだろう」

文句を言いながら、右横を振り向くマルク。二人の右横には、マルクと同じように、左腕に傷を負ったルビィネルが座り込んでいた。傷を負ってもなお、冷静に会話を続けるマルクとルビィネルに、ポンドがどこか、置き去りにされてしまったような心情で、眉をひそめる。

「今の魔炎、ただの魔炎ではないな」

その場で膝を立たせながら、鋭い視線を、モルダバへと向けるルビィネル。

「魔炎から、異質な魔力を感じた。“放出”にしては、威力も異常だしな」

「ほお。なかなか有能な魔女だ」

ルビィネルの言葉を聞き、モルダバが感心したような笑みを浮かべる。

「そう。この者たちこそ、我が魔炎強化研究の、偉大なる研究結果だよ」

モルダバが得意げに胸を張り、両手を広げ、男たちを紹介する。だが、ルビィネルとモルダバの会話を聞いていても、男たちは皆、眉一つ、動かさない。まるで、会話が聞こえていないようだ。その姿に、ポンドが、エメラルディアのことを思い出した。

「そいつ等の感情も、消したのかよっ……」

わずかに声を震わせながら、ポンドが必死に、言葉を発する。

「メルみたいに、そいつ等の感情も笑顔も、お前のくだらない研究のために消したのかよ!？」

「ポンド……」

立ち上がり、声を荒げるポンドを、マルクは険しい表情で見上げる。

「ああ、あの魔女の観察記録を読んだのか。まったく、つくづく抜け目がないねえ、君は」

ポンドの言葉を受け、モルダバが困ったように肩を落とす。

「くだらない、とは心外だね。魔炎強化は、この世で最も尊い研究だよ」

冷たく微笑んだモルダバが、一瞬も自分の言葉を疑うことなく、主張を始める。

「その尊い研究の材料となれるんだ。感情の一つや二つ、別に失くしたところで問題はないだろう」

モルダバのその言葉に、ポンドが大きく目を見開く。

「ふざけんじゃねえ!!」

研究所中に届くのではないかと思えるほどの大きな声で、ポンドが勢いよく怒鳴りあげる。

「メルもそいつ等も、お前の玩具じゃねえんだぞ!？」

ポンドが身を乗り出し、モルダバへと必死に言葉を向ける。

「なんで、そんなっ……そんな、お前のくだらない研究なんかのためにつ……！」

「くだらない」……」

ポンドが放った言葉を繰り返し、モルダバがそつと、声を低くする。

「また、言ったね。実に心外だよ」

冷たい表情で、モルダバが右手の人差し指を、ポンドへと向ける。

「赤突火」

モルダバの右手から放たれた赤炎が、まっすぐにポンドを貫いた。
「……っ！」

その光景を目の前で見て、マルクが大きく目を見開く。赤炎に焼かれたポンドは、叫び声をあげることもなく、静かに、後方へと倒れ込む。

「ポン、ド……？」

茫然とした表情で、倒れたポンドへと、ゆっくりと視線を移していくマルク。全身にひどい火傷を負ったポンドは、深く目を閉じたまま、指一本、動かすことはなかった。すぐさま、ルビィネルがポンドのもとへと駆け寄り、厳しい面持ちで、様子を確認する。

「マズイな。魔療水をつ……」

ルビィネルが、服のポケットから、透明な液体の入った瓶を取り出すと、中の液体を、ポンドの火傷した部分へとかけていく。液体がかかると、すぐさま火傷した皮膚が修復され、傷が塞がり始めた。
「一旦、退こう、マルク。もう一度、移り火を」

「……っ」

「マルク？」

ルビィネルの言葉など、聞こえていないかの様子で、立ち上がったマルクが、ゆっくりと前方へと歩き出していく。ルビィネルは止めたかったが、ポンドの治療を止めることも出来ず、ただ戸惑うように、マルクの背を見つめた。

「三人まとめて、燃やし尽くせ」

モルダバが指示を出すと、男たちがまた一斉に右手を前へと突き出し、色取り取りの魔炎を放った。放たれた魔炎は、まっすぐに、マルクへと向かっていく。

「マルク！」

魔炎の迫るマルクに、思わず身を乗り出すルビィネル。だが、マルクは、その場から逃れることはせず、表情もまるで崩さずに、ただ、その場でそっと、魔紋の刻まれた右手を振り払った。

『うわあああ!』

「え……?」

マルクが右手を振り払った途端、マルクへと向かっていた魔炎たちが、マルクの右手に弾かれるようにして、放った本人のもとへと戻っていく。戻ってきた自らの魔炎を受けた男たちは、あつという間に全員、後方へと吹き飛ばされた。あまりに一瞬の、だが予想もしていなかった出来事に、ルビィネルとモルダバがそれぞれ、驚きの表情を見せる。

「な、何だ……?」

後方の、倒れ込んだ男たちの方を振り返り、戸惑いの声を漏らすモルダバ。

「“燃烧”で弾き返した、のか……? それにしたって、あんな強い魔炎を、何個も同時になんて……」

ルビィネルも戸惑うように、マルクの背を見つめる。

「まあいい。所詮は、ただの試作実験の結果共だ」

切り捨てるように言い放ち、モルダバが再び、マルクの方を見る。その間にも、マルクは歩を進めており、モルダバとの距離を数メートルとしたところで、その足を止めた。マルクが向けるまっすぐな視線を受け、モルダバがあらさまに表情をしかめる。

「君も、私の尊い研究の邪魔をする気かね?」

「あんたに、何が尊いかなんて、わかるはずがない」

試すように問いかけるモルダバに対し、マルクは、はっきりとした口調で言い放つ。

「あんたには、この世で一番尊いものが、見えてないんだから」

マルクのその言葉に、モルダバが眉をひそめる。

「まったく、生意気なお坊ちゃんの間は、同じように生意気というわけか」

そつと微笑むモルダバであつたが、その表情は明らかに引きつっていた。前方に立つマルクへと鋭い視線を向け、モルダバが右手を、前へと突き出す。

「では仲良く、灰になるといい」

モルダバの口元が、そつと歪む。

「“赤突火”！」

真つ赤な炎が、マルクへと迫り来る。

「……っ」

だがマルクはまた、逃げることなく、向かってくる魔炎を迎えに行くように、自分の右手を突き出した。マルクの右手が、モルダバの赤炎に接触した瞬間、炎が強く瞬いたかと思うと、次の瞬間、魔炎が、マルクの味方をするように、マルクの右手に纏わりつく。

「何！？」

「あれはっ」

その光景に、同時に目を見張るルビィネルとモルダバ。モルダバの放った魔炎を、逆に右手に纏ったマルクは、勢いよくその場を駆け出していき、まっすぐにモルダバへと向かつていく。

「グ……！」

「モルダバあああ……！！！」

次の魔炎を放とうと身構えるモルダバに、マルクが、魔炎を纏った右手を、勢いよく繰り出す。

「ぐ、ぐあああああ！」

モルダバが次の魔炎を放つ前に、マルクの炎を纏った拳が、モルダバの左頬へと直撃する。拳の威力が相当のものだったのか、モルダバは、すでに倒れている男たちよりも遙か後方まで、あつという間に吹き飛ばされていった。

「ハア、ハア」

赤炎の消えた拳を下ろし、マルクが少し、乱れた呼吸を零す。

「今、のは“てんが転化”に、“しんたいそうてん身体装纏”っ……？」

そんなマルクの様子を、どこか茫然とした表情で見つめるルビィ

ネル。

「高難易度の炎技を、二つも？ 奇跡、か……？」

「んんっ」

「あっ」

戸惑いきった表情で、首を傾げていたルビィネルが、下方から漏れ聞こえてくる声に気付き、視線を落とす。ルビィネルのすぐ傍の地面に倒れ込んでいたポンドが、ゆっくりとその瞳を開いたのだった。

「あれ？ 俺っ……」

「気が付いたか」

「ルビィネルちゃん」

声を掛けたルビィネルを、ポンドが戸惑うように見上げる。

「モルダバの魔炎による傷は、魔療水で塞いだ。もう大丈夫だ」

「ありがとう。助かったよ」

ルビィネルへと笑顔を見せながら、ポンドがゆっくりと体を起こす。起こした途端、ポンドは、目の前に広がる光景に、何度も目を瞬かせた。

「え、えっ！？ マルクが倒したのか！？」

「んー、まあ、私も原理は、よくわからぬのだが……」

驚きの表情で問いかけるポンドに、ルビィネルが歯切れ悪く答える。

「ク、クソっ……」

マルクに殴られ、左頬を真っ赤に腫れ上がらせたモルダバが、今までで最も険しい表情を見せながら、その場で体を起こす。起き上がったモルダバを見て、眉をひそめるマルク。

「小癪な魔士が！」

「あやつ、まだっ……」

同じようにモルダバを見つめ、ルビィネルが、警戒するように身構える。

「最早、手加減はせん！ ここで全員、燃やし尽くしてやつ……！」

「そこまでだ、モルダバ」

モルダバが再びマルクを攻撃するため、立ち上がるうとしたその瞬間、凜々しく声が響き渡ったかと思うと、モルダバの周囲に何人もの人間が現れ、あっという間にモルダバを拘束した。

『あっ！』

数名の従者を連れ、その場へと現れたその人物に、マルクたちが皆、大きく目を見開く。

「お、親父！？」

その場へと姿を見せたのは、ポンドの父、デイルハムであった。
「な、なんで親父が、ここにっ……」

戸惑うポンドになど見向きもせずに、デイルハムが、拘束されたモルダバのすぐ前へと歩み寄り、高々とモルダバを見下ろす。

「貴様の違法実験の数々、その証拠品はすべて、我々が押収した。この品共々、貴様を、フレイヤへ引き渡す」

「デイルハムっ……！」

モルダバが必死に顔を上げ、デイルハムを睨みつける。

「何故だ！？ お前は……！」

「すべては、貴様の尻尾を掴むため、資金援助をする振りをしていただけだ。私は貴様のことなど、初めから、一瞬も、信用などしていない」

「グ……！」

はつきりと言い放つデイルハムに、反論の言葉も持たず、モルダバが黙り込み、唇を噛み締める。

「連れて行け」

『はっ！』

デイルハムの言葉に頷くと、従者たちは、拘束したままモルダバを連行していった。倒れていたモルダバの研究結果である魔族の男たちも、従者により運ばれていく。その光景を、どこか啞然とした表情で見つめるポンド。

「まったく、また勝手に家を抜け出して。こちらの計画が、お前の

せいで狂っただろう」

非難するような目で、ポンドの方を振り返るデイルハム。

「お前が部屋で大人しくしておけば、すべては順調に片付いたんだ」

「だ、だって俺、親父がモルダバに誑かされて、トチ狂ったんだと思っ……！」

「馬鹿を言っな」

身を乗り出して訴えるポンドの言葉を、デイルハムがそつと遮る。

「私が、魔族など、信用するはずがないだろう」

デイルハムが、何の迷いもなく、はっきりと断言する。

「じゃあ、ポンドを軟禁したのは……」

「これに、これ以上、勝手なことをさせないためだ。モルダバの奴もいい加減、痺れを切らす頃だろうと思っ……いたからな」

マルクの問いかけに、デイルハムが振り向くことなく答える。

「痺れを切らせたのは、予想通りだったな。まったく、本当に、手を煩わせてくれる」

「す、すみません……」

呆れ果てた様子で言い放つデイルハムに、ポンドはただ、大人しく謝った。デイルハムが視線を動かし、マルクと、いつの間にかマルクの傍まで歩み寄って来ていたルビィネルの方を見る。傷を負っている二人を見つめ、そつと目を細めるデイルハム。

「息子が世話になったようだな。礼を言う」

「え……？」

デイルハムの思いがけない言葉に、マルクが戸惑ったような声を漏らす。

「だが、あの魔女に、ヤールから出て行けと伝えることは、忘れないように」

釘を刺すようにそう言うと、デイルハムはあっさり二人に背を向け、その場を立ち去っていった。従者もデイルハムの後に続き、その場に、マルクたち三人だけが取り残される。

「俺、ポンドの親父さんに対する見方、変わったかも」

「お、俺も……」

思わず呟いたマルクに、しみじみと賛同するポンドであった。

翌日。アラールネル家、デイルハム自室。

「じゃあ、モルダバはもう、フレイヤに引き渡したのか？」

「ああ。フレイヤで、正式に処罰されるだろう。実験台にされていた者たちも皆、フレイヤ政府が保護するそうだ」

「そっか」

事の顛末を聞きにきたポンドが、デイルハムの言葉に、ホツとしたように肩を落とす。これで、モルダバの研究も終わり、犠牲となる者も居なくなるだろう。

「これに懲りて、これからはずっと、私の言うことを聞くんだな」

「悪かったって思ってるよ、今回は。反省してる」

デイルハムからの小言に、ポンドがうんざりした表情を見せる。

「じゃあ俺、行くわ。もう、魔院に行ってもいいんだろ？」

「ああ」

ポンドがデイルハムに背を向け、デイルハムの部屋を出て行くこととする。

「ポンド」

「ん？」

扉を開けようとしたところで呼び止められ、ポンドがゆっくりと振り返る。

「お前が魔士になるというのであれば、それを止めはしない。だが、友人は選べ」

デイルハムの言葉に、ポンドが眉をひそめる。

「マルクの、こと？」

「あれは、魔女の子だ。魔族も同然。魔族に関わると、ろくなことにはならん」

はつきりと言い放つデイルハムの、その頑なな発言に、ポンドがどこか困ったように肩を落とす。

「俺、最初、マルクと仲良くしたの、親父への反発だったんだよね」
懐かしむように微笑むポンドに、デイルハムが訝しむように、眉間に皺を寄せる。

「あれこれ、うるさい親父の言うことを、とにかく聞きたくなくて、そんな対抗心で、俺は、マルクと友達になった」

――俺、ポンド！ 俺と友達になろうぜ？ マルク！――

――えっ……？――

くだらない対抗心から、始まった友達。

「けどマルクは、そんな俺の、くだらない対抗心に、あっさり気付いて、なのに変わず、ずっと友達で居てくれた」

ポンドがまっすぐにデイルハムを見つめ、そして、誇らしく笑う。
「だからあいつは、今の俺の、最高の友達なんだ！」

何を気にすることもなく、堂々と言い放つポンドのその笑顔を見て、デイルハムが少し目を細める。

「ってわけで、行ってきます！」

笑顔のまま、軽く手を振り上げ、挨拶を済ませると、ポンドはデイルハムの部屋を出て行った。部屋に一人残ったデイルハムが、深々と肩を落とす。

「まったく、仕方のない息子だ」

デイルハムのその言葉は、困ったような、諦めたような、そんな呟きであった。

同刻。アラールネル家、正門前。

「へえー、じゃあ正式に、レイルから承認してもらったんだ」

「うん……」

マルクの言葉に、小さく頷いたのは、エメラルディアであった。その首元には、今までなかったはずの緑色のリボンが、しっかりと巻かれている。そのリボンは、エメラルディアが“非公式の魔女”から、“公式魔女”になった証であった。

「魔院、にも……通、える……」

「へえー、良かったな」

「ルビィ、頼んでくれた、お陰……」

「ルビィネルがあ？」

エメラルディアの言葉を聞いたマルクが、戸惑うように、すぐ横に立つルビィネルを振り向く。

「一日でそこまで手続き済ませるなんて、お前、どんなパイプライン、持ってたんだよ」

「ま、まあな。ハハハっ」

少し疑うような視線を向けてくるマルクに対し、乾いた笑いを見せるルビィネル。

「けど、本当に良かったね」

「うん。良かった……」

マルクからの呼びかけに、エメラルディアが深々と頷く。

「マルクたちの、お陰……あの時、マルクたち、ポンドのとき、ポントに、連れて行って、正解、だった……」

「そっぴや、何で、俺たちを連れてってくれたんだ？ ポンドから聞いたって言っても、話聞いたくらいじゃあ」

「マルクの話、する、時……」

戸惑うマルクに、エメラルディアがゆっくりと、言葉を紡いでいく。

「ポンド……一番、楽しそうな顔、してた、から……」

「……っ」

思いがけないエメラルディアの言葉に、マルクが思わず、口ごもる。

「清き友情だな」

「うるさい」

からかうように微笑みかけるルビィネルに、マルクが少し照れ臭そうに言い返す。

「今朝、ポンド……すごく、嬉しそうだった。マルクの、お陰、だと思う……だから」

エメラルディアがまっすぐに、マルクを見つめる。

「ありがとう、マルク」

「え……？」

優しい微笑みを浮かべるエメラルディアに、マルクが思わず、目を見開く。それは、感情を損失したはずのエメラルディアが見せた、初めての笑顔で、その笑顔は、何とも美しかった。

「あ、いや！ あ、そのっ……！」

無表情からの笑顔が、何とも美しく、マルクは頬を赤く染め、言葉をさまよわせる。

「あああー！！」

そこへ、屋敷から出て来たばかりのポンドの絶叫が、割って入った。

「なんで！ なんで、初めての笑顔が、俺にじゃなくて、マルクになんだよおー！！」

「え……？」

すぐに笑顔から、もとの無表情へと戻って、少し不思議そうに首を傾げるエメラルディア。頭を抱え込んだポンドは、相当ショックだったのか、玄関先で座り込んでいる。

「俺、結構、頑張ったのよお！？ 俺の一途は、どこで報われたら、いいのぉ！？」

「あの、ポンド、その、何か、ごめん」

嘆くポンドに、少し呆れつつも、謝罪の言葉を向けるマルク。

「ポンド……何、落ち込んで……？」

「さあな」

エメラルディアに問いかけられ、ルビィネルはどこか、楽しげに

微笑んだ。

「どうも……ポンド、のパートナー、略して、ポンパ、になりました、エメラルディア、です……」

昼休みの中庭で、相変わらずの無表情のまま、自己紹介をしながら、深々と頭を下げたのは、エメラルディアであった。

「ポンドの、友達……ポントの皆さん、よろしく、お願いします……略して、ヨネガ……」

「はあ……」

謎めいた部分の多い発言を繰り広げるエメラルディアを見つめ、どこか呆れた表情を見せたアメジエスが、まだ頭を下げているエメラルディアから、すぐ隣に立つポンドへと視線を移す。

「ま、まあ、さすがは、ポンドのたった一人の魔女ね。その、何てゆーか、個性的過ぎるというか」

「お前の趣味だって、十分、個性的だろ？」

「夏のように熱く、冬のように美しい、君の魔士が、今来たよ！アメジエス！」

くるくると回りながら、こちらへと歩いて来ているフランを指差し、ポンドが言い返す。その言葉を受けた途端、アメジエスの表情が大きく引きつられる。

「断っておくけれど、パートナーになったのは成り行きであって、あれは、私の趣味じゃないわ」

「流された時点で、負けだろ」

「燃やされたいのかしら……？」

「まあまあ」

軽口を叩くポンドに対し、脅迫めいた言葉を発するアメジエス。今にも衝突の始まりそうな二人の間に、マルクが慌てて、割って入

る。

「こうして俺たち三人共、無事、パートナーが得られたわけだし、良かったじゃん！」

マルクが明るい笑顔を作って、ポンドとアメジエスに笑いかける。
「そうね。私たちはともかく、マルクなんて奇跡に近かったものね」
「どうせ俺が、パートナー得られたのなんて、奇跡だよ！ ミラクルだよ！」

鋭く言葉を挟むアメジエスに対し、マルクはいつものように陰気な空気を出して、怒鳴りあげる。

「これでやっと、皆、同じ講義に参加して、切磋琢磨していけるってものだよ。うんうん」

「そりゃ、どうかなあ」

「へ？」

満足げに頷いていたマルクが、ポンドのどこか不穏な言葉に、首を傾げる。

「何？ ポンド、転校でもするの？」

「他に魔院もないのに、どこに転校するってんだよ。ってか、お前、この前の回覧、読んでねえだろ？」

「回覧？」

目を丸くするマルクに対し、ポンドが少し溜息を吐いた後、制服の懷から、一枚の紙を取り出し、マルクへと差し出す。

「ん？」

マルクのすぐ横から、マルクが見ている紙の内容を覗き込むルビイネル。紙の一番上には、“連絡事項”と書かれていた。徐々に視線を落とし、紙に書かれた文面を、読み進めていくマルク。読み進めていく内に、どんどん、マルクの顔色が悪くなっていく。

「え、ええええええ！」

思わず声を引っくり返し、大きな声をあげるマルク。

「何の紙なの？」

「上級、中級、下級魔士で、それぞれ講義の内容を変えるから、来

期からは階級ごとに、別講義の受講になりますよってお知らせ」

「ああ。そういえば、魔女科でも説明あったわね」

問いかけたアメジエスが、ポンドからの説明を聞き、納得したように頷く。魔院に通う魔士は、その実力により、いくつかの階級に分けられている。マルクの呼び名である“最下級魔士”というのは、あくまであだ名であり、実際に“最下級”という階級はない。実際は上級、中級、下級の三つの階級に分かれており、マルクは勿論、下級に位置づけられている。

「べ、別講義って……何だって、今更っ……」

「いい魔士育てんのに、その方が効率いいからだろお？ そろそろ、次の“彩炎の魔女”選びが、本格化してるって噂も聞くし」

「……っ」

ポンドの口から“彩炎の魔女”の単語が出て、ルビィネルがそつと眉をひそめる。

「では、上級魔士のパートナーの中から、“彩炎の魔女”候補を選ぶと？」

「ま、普通に考えて、下級魔士のパートナーからは、選ばないっしょ」

確かめるように問うルビィネルに、はつきりと答えるポンド。そのポンドの答えを聞いたルビィネルが、益々、厳しい表情となる。

「というわけで、上級魔士であるこの僕と、最下級魔士である君とは、来期から別講義だ！ 清々するよ！」

「いや、清々は、俺もするけど」

大きな動作で、人差し指を突き刺してくるフランの方を、見もせず冷たく言い放つマルク。

「じゃあ、シリングとも別講義か……」

最上級魔士の姿が浮かび、マルクがどこか、落ち込むように肩を落とす。共に講義を受けるようになって、やっと少しは横に並ぶことが出来たと感じていたというのに、それもあつという間に終わってしまう。

「あ、でも、ポンドは同じ講義だよな？　よく一緒に補習受けてたし、ポンドも下級だろ？」

「へ？」

縋るように問われ、ポンドが一瞬、目を丸くする。そして、少しの間を置いた後、ポンドは困ったように、頭を掻き始めた。

「ああー、俺、よく講義サボるからさ、補習は常連なんだけど、階級は上級なんだよなあ！　実は！」

「え……？」

笑顔で答えるポンドに、マルクがしばらくの間、固まる。

「ポンドも、上、級っ……」

マルクが勢いよくテーブルの上に顎を落とし、そのまま顔をテーブルへと沈める。

「うううー、じゃあ俺だけ、別講義ってことかよお」

「悪いなあ、マルク！」

情けない声を漏らすマルクの背中を、ポンドが大きな笑顔を見せて、遠慮なく強めに叩く。

「はあーあ。折角、皆で同じ講義受けられると思ったのに、寂しいよなあ」

「寂しいとか、そういった問題ではない！」

ボヤクように呟いたマルクのすぐ隣で、大きな声を発したルビィネルが、椅子を押しつけ、勢いよく立ち上がる。その少し怒ったような声に驚き、沈めていた顔を上げて、ルビィネルの方を見上げるマルク。

「このままでは、私は、“彩炎の魔女”の候補にもなれぬということではないか！」

「そりゃ、お前、俺をパートナーにした時点で、候補からは外れるだろ」

強く指摘するルビィネルに対し、マルクが困ったように眉尻を下げる。

「そんなことで、どうする！」

「うわっ」

両手で強くテーブルを叩くルビィネルに、驚きの声を漏らすマルク。

「こうなればマルク、そなた、来期までに上級魔士になれ！」

「なれるかあ！ 来期たつて、後十日もないんだぞ！？」

「百日あつたつて、無理だと思っけれど」

「どうせ俺は、魔院入ってから数ヶ月間、ずっと下級だよ！ いったも下級だよ！」

ひっそりと口を挟むアメジェスに、マルクが嘆くように怒鳴り返す。そのマルクの言葉を聞きながらも、ルビィネルはほとんど表情を険しくしていき、テーブルから上げた両手を震わせる。

「わかった。直談判してくる」

声色を落ち着かせると、ルビィネルはあっさりと皆に背を向け、足早にどこかへと歩き去っていった。遠ざかっていくルビィネルの背を見つめながら、マルクが少し肩を落とす。

「いいのかあ？ 追っかけなくて」

「いいよ」

ポンドの問いに、すぐさま答えるマルク。

「誰のどこ行くつもりか知らないけど、どうせ直談判なんて、通るはずないんだから」

マルクはどこか呆れた表情で言い放ち、ルビィネルの背から視線を逸らした。

マルクたちの元を去ったルビィネルが、まっすぐに向かったその先は、レイール聖魔院の院長室であった。

「マルク・クラウドを、上級魔士にしる？」

「ああ」

ひどく引きつった表情で聞き返した院長に、ルビィネルは何の躊

躊躇いもなく、頷き返した。

「ご冗談を」

「私は、そなたを相手に冗談を言う趣味はない」

はつきりと言い放つルビィネルに、院長が眉をひそめる。

「では私も、真剣にお答えしましょう」

椅子に腰を掛け、机に両肘を付いた状態のまま、院長がゆつくりと顔を上げ、真剣な表情で、まっすぐにルビィネルを見つめる。

「マルク・クラウドは、下級魔士の中でも、その実力は最も下層。

“最下級魔士”というのは、確かに、彼の実力を現す呼び名なので
す」

院長の冷たい瞳が、突き刺すように、ルビィネルを見る。

「そのような下層の魔士を、上級魔士になど、することは出来ません」

「マルク・クラウドの力は、今、まさに、成長過程の途中にある」
院長が言い終えたすぐ後に、少しの間も置かずに、ルビィネルが
言葉を発する。

「今、その成長の途中だからこそ、自分よりも実力が上の者の中で、
揉まれる必要があるのだ。だから……！」

「成長なら、下級魔士たちの講義でも十分、出来るでしょう」

「そんな悠長にやっている時間はない！」

「それは、あなたの時間でしょう？」

「……っ」

院長の鋭い問いかけに、強い主張を続けていたルビィネルが、思わず口ごもる。院長の視線がさらに冷たいものへと変わり、まるで睨みつけるように、ルビィネルを見た。

「いささか、勝手が過ぎるのではありませんか？ ルビィネル殿」

ゆつくりと立ち上がった院長が、ルビィネルより視線を高くし、

今度は、上から見下ろすように見つめる。

「昨日も、非公式の魔女を、公式魔女に承認し、魔院への通院を許可したばかり」

エメラルディアのことを思い出し、ルビィネルがそつと、院長から視線を逸らす。

「こちらとしても、そう何度も、あなたの我が儘を聞くわけにはいかないのですがね」

「……これは、我が儘ではない」

院長から視線を逸らしたまま、ルビィネルが、少し低い声を発する。ルビィネルがゆつくりと顔を上げ、院長にも見劣りしない、鋭い視線を、院長へと向けた。

「命令だ」

まっすぐに院長を見つめ、はっきりと言い放つルビィネル。しばらく睨み合いが続いた後、院長は静かに視線を落とし、どこか呆れたように肩を落とす。

「わかりました。命令というのであれば、聞きましょう」

半ば諦めさえ滲む声で、言い放つ院長。

「ただし、条件があります」

「条件？」

「ええ。来期の始まる前の日に、マルク・クラウドには、実力試験を受けていただきます」

「試験？」

院長の言葉に、思わず顔をしかめるルビィネル。試験と名のつくものすべてに対し、マルクがだいたい、最下位の成績を取っていることを知るルビィネルは、思わず苦い表情を見せた。

「何、簡単な試験ですよ。六つの基礎炎技のうち、どれか四つを使えれば合格。上級魔士には出来ませんが、上級魔士の講義参加は認めましょう」

院長が試すような笑みを、ルビィネルへと向ける。

「ですが、四つ使えなければ不合格。マルク・クラウドとあなたには、大人しく、下級魔士の講義を受けていただきます。いかがです？」

「基礎炎技を、四つ……」

試験の内容を繰り返し、ルビィネルが気難しい表情を見せる。だが悩む時間も早々に、ルビィネルはすぐさま、顔を上げた。

「わかった。その条件、呑もう」

まるで挑むように、ルビィネルが院長へと言い放つ。

「約束だ。違^{たが}うなよ」

「勿論です」

釘を刺すようにそう言うと、ルビィネルは特に何の挨拶もなく、院長へと背を向け、足早に院長室を出て行こうとする。

「ああ、ルビィネル殿」

部屋を出て行こうとする寸前で呼び止められ、ルビィネルが戸惑うように振り返る。

「この間の、演習室の照明が落ちて来たという件と、シリング・ウエーガットのパートナー選出の特別講義の件」

また突き刺すような瞳で、院長がルビィネルを見る。

「どちらも、レイルでは滅多に出ない、魔物の関与があつたとのことですが、何かお心当たりは？」

院長のその問いかけに、ルビィネルがあからさまに表情をしかめる。ルビィネルの表情の変化を見つめ、院長はどこか、見透かすように微笑んだ。

「あるはずがないだろう」

「そうですか。それは失礼しました」

「ああ」

短く言葉を返すと、ルビィネルはそのまま、院長室を後にする。

「やはり、このまま野放しにしておくわけには、いかないな」

部屋に残った院長が、小さく、低い声を落とす。

「そろそろ、フレイヤに連絡を取るか」

隣国の名を口にし、院長は重々しく呟いた。

一方、院長室を出たルビィネルは、怖いとさえ思えるほどの厳し

い表情で、廊下を突き進んでいた。先程の院長の、試すような言葉が脳裏を過ぎり、ルビィネルはそつと眉をひそめる。

「そつ、時間はない、か……」

ルビィネルの表情が、どこか悲しげに曇る。

「ん？」

廊下を進んでいたルビィネルが、前方に見えるトゥーパの姿に足を止める。中庭で、皆が集まっているというのに姿を見せなかったトゥーパは、何やらうかがうような様子で、講義室の一つを覗き込んでいた。

「何をしている？ ここの講義室、次は魔士たちの講義だろう？」

「あ、ルビィネル」

ルビィネルに声を掛けられ、トゥーパが笑顔で振り向く。

「ほら、来期から階級ごとの別講義が始まるじゃない？ だからあ、マルクと一緒に講義受けるためにもお、下級魔士でもナンパしよっかなあと思って」

ウキウキと答えるトゥーパを見て、ルビィネルがそつと、目を細める。

「ナンパするなら、上級魔士にしておけ」

「はあ？」

短く言い残し、そのまま廊下の向こうへと去っていくルビィネルの背を見つめ、トゥーパは大きく、首を傾げた。

「は？ 何だつて？」

目を大きく見開いたマルクが、見るからにわけがわからないといった表情で、聞き返す。

「今期最終日まで、六つの基礎炎技中、どれか四つが出来れば、特別に上級魔士の講義を受けられるだつてえ！？」

「何だ。ちゃんと、聞こえているではないか」

ルビィネルの話した内容を、聞き返したわりには、一度で正確に把握しているマルクに、ルビィネルがどこか感心したような声を漏らす。院長室から戻ったルビィネルは、再び中庭に戻り、マルクと合流していた。ポンドたちは皆、午後から別講義が入っていたようで、その場には、マルクとルビィネルの二人だけである。

「どうやったら、そんな約束、取りつけてこれるんだよ」

「まあ、ちよつとな」

疑うような視線を向けるマルクに、ルビィネルが目を逸らして答える。

「だが、まあ、これでそなたも無事、皆と同じ講義に出っ……」

「ま、四つの炎技なんて、無理に決まってるし、そんな約束、あつてもなくても、一緒だけど」

「……っ」

耳に入るマルクの言葉に、ルビィネルが勢いよく表情を引きつる。
「痛だただだ！」

しかめっ面を見せたルビィネルが、マルクの唇を思いつきり、引っ張りあげる。

「な、何するんだよ！？」

「この口をどう縫いつければ、“無理”だの“駄目”だのと、言わないようになるのかと思つてなあ……」

引っ張られたことによる痛みからか、目に少し涙を浮かべて、怒

鳴りあげるマルクに対し、ルビィネルが冷たい笑みを向ける。

「だ、だって、普通に考えて、無理だろ！？　俺、炎技とか、今のところ、“燃烧”の一つしか使えないし！」

「また、“無理”と言ったな！」

「痛い痛い痛い！」

ルビィネルがマルクの唇を引つ張る手に、さらに力を入れ、ついにマルクの瞳から、涙が零れ落ちる。

「そなたは、マフレイヤに行きたいのだろう！？　炎技の一つや二つで、足を止める気か！？」

「足は止めないよ！」

必死に両手を振り回し、マルクが何とか、唇を引つ張っていたルビィネルの手を振り払う。ルビィネルの手が離れたマルクの唇は、相当強い力で引つ張られたのか、赤く腫れていた。腫れた口元を気にしながらも、マルクがまっすぐに、ルビィネルを見つめる。

「足を止める気はないけど、でも、そんな、いきなり上級魔士とか……もうちょっと、ゆっくり進ませてくれたって、いいだろ？」

「そんな時間っ……」

マルクの言葉を聞いたルビィネルが、険しい表情を作る。

——何かお心当たりは？——

思い出される、うかがうような院長の言葉。

「そんな時間、私にはないっ……」

「へ？」

小さく落とされたルビィネルの言葉が耳に届かず、マルクが戸惑うように、首を傾げる。

「何？　今、何て言っ……」

「私は、すぐにでも彩炎の魔女になりたい！　ならねば、ならぬのだ！」

「……っ」

あまりに強く叫びあげるルビィネルに、マルクが少し驚いたように身を引く。ルビィネルのその表情はあまりにも必死で、見ていると、どこか痛々しくさえ思えた。

「だから、そなたは今すぐにでも、上級魔士になる必要がある！」
「なっ！」

あまりのルビィネルの言葉に、マルクが怒りを露にする。

「何だよ、それ！ 自分の都合、ばかり。人のこと、何だと思っ
……！」

「そなたは、私のパートナーだろう！？ ならば、私が彩炎の魔女になるために協力しろ！」

「何々だよ。彩炎の魔女、彩炎の魔女って」

いつもは落ち着いているルビィネルが、初めて見せる物凄い剣幕に、マルクが困惑した表情を見せながらも、きつくルビィネルを睨みつける。

「前から思ってたけど、お前、彩炎の魔女にこだわら過ぎ！ 異常なんだよ！ おかしいんじゃないの！？」

批判的なマルクの言葉に、ルビィネルが一瞬、表情を曇らせ、口ごもる。

「固執し過ぎていることも、自分勝手なことも、わかっている……」
今までとは異なり、少し落ち着いた口調で、言葉を発するルビィネル。

「それでも私は、“彩炎の魔女”になりたい！」

切実な声に、言葉に、表情に、マルクがそつと目を細め、苦々しい表情を見せる。

「そんなになりたいなら、なんで俺なんかっ……」

マルクが少し頭を抱えるような動作を見せながら、目の前のルビィネルにも、届かぬほどに小さな声で、問いかける。

「今期最終日なんて、後七日しかないんだぞ？ 炎技四つなんて、だいたい、一番簡単な“放出”だって使えないのに、そんなのっ……」

“無理”という言葉を口にしようとして、腫れた唇に触れたマルクが、思わず言葉を止める。今、その言葉を口にすれば、さらに、ルビィネルを怒り狂わせてしまいそうな、そんな気がした。だが、他に言葉が見つからず、マルクが深々と俯く。

「どう考えても、“無理”だよ……」

「無理ではない」

「だから！」

すぐさま否定するルビィネルに、マルクは怒りを滲ませ、顔を上げる。

「もつと、現実を見ろって言ってるんだよ！」

「夢を見ているのだ！」

怒鳴るマルクに、負けじと大きな声で言い放つルビィネル。

「現実ばかり、見ていられるか！」

「……っ！」

ルビィネルが放ったその言葉に、まるで目が覚めたかのように、マルクが大きく目を見開く。ルビィネルの必死の思いが、言葉を通して、マルクの胸に突き刺さるようであった。動かされたというよりは、観念したような、元気ない様子で、マルクが顔を沈め、身を屈める。

「……わかったよ」

小さく落とされたその声に、ルビィネルが戸惑うように、首を傾げる。

「わかったよ！ やればいいんだろ、やれば！」

「マルク！」

若干、自棄とも取れるマルクの言い方だが、それでも嬉しかったのか、ルビィネルが満面の笑みを浮かべる。

「よく言った！ さすがは、我がパートナーだ！」

「調子いいなあ」

先ほどまで唇を引つ張りあげていたその手で、何度も強く、マルクの背を叩くルビィネル。頷き一つで、ここまであっさりと機嫌を

変えられてしまったては、マルクとしても、最早、呆れるしかない。

「とりあえず七日間、一生懸命はやるから、それでも無理だったら、もう文句言つなよ?」

「いや、言つ」

「言つなよ!」

すぐさま否定するルビィネルに、思わず怒鳴りあげるマルク。

「心配するな」

不満げな表情を見せるマルクに対し、ルビィネルは満面の笑みのまま、自信を持って答える。

「私が居れば、そなたに、“無理”なことなど、なくなる」

「どれだけ自信あるんだよっ」

何の迷いもなく答えるルビィネルに、マルクが呆れた表情で肩を落とす。

「では早速、今日から夜十二時まで夜練、明日、朝四時から朝練、昼休み、昼食後すぐ、昼練な」

「はっ?」

当たり前のように告げられるその言葉に、大きく口を開いたマルクが、間の抜けた顔を見せる。

「ああ、いや、そのスパルタはちよつと、どうだろ?」

「大丈夫! 私に任せておけ、マルク!」

「え、えええ?」

やる気満々で言い放つルビィネルに、マルクは、一気にやる気を失い、情けない声を発した。

ルビィネルの言葉通り、その日の夜から、マルクとルビィネルの炎技練習が始まった。朝、日の昇り始める前から、昼、昼食もそこそこに、夜、日付が変わるまで、ひたすら練習に励む日々は、すでに、三日も流れていた。

「ぶつはあゝ」

「疲れてんねえ」

朝一の魔士のための講義に参加しながらも、机の上にだらりとその身を投げ出し、深々と息を吐くマルクを隣の席から見つめ、ポンドが困ったように肩を落とす。

「今日も朝練？」

「うん」

「毎日毎日、よくやるよなあ」

感心するような、呆れたような声を発するポンド。

「で、その練習の成果は、どうなのよ？ 今日で四日目だから、試験の今期最終日まで、後三日だろ？」

「まだ“燃焼”だけ。進みナシ」

「あららっ」

マルクの答えを聞き、ポンドが思わず顔を歪める。

「まあ、そりやそうだよなあ。たかが七日で、炎技四つなんて。養成学校時代から、十年以上学んでのに、出来てないんだぜえ？」

大きく広げた両手を、顔の両脇へと持っていていき、ポンドが長々と語り出す。

「最下級魔士のマルクくんには、到底、無理な話なんだって」

「……っ」

ポンドの言葉に、机に顔を沈めたままのマルクが、眉をひそめ、険しい表情を見せる。ポンドの放ったその言葉は、マルク自身もよく、口にしてきた言葉だったが、今のマルクには、妙に腹立たしく聞こえた。

「そんなの、やってみなきゃ、わからないだろ」

顔を上げたマルクが、口を尖らせ、不機嫌面で言い放つ。そんなマルクを見つめ、しばらくの間、固まるポンド。

「ブハハハハ！」

「んな！？」

大声をあげて笑うポンドに、マルクがショックを受けた様子で、

顔を引きつる。

「な、何だよ！ 笑うことないだろ！？ そ、そりゃ、どうせ俺は、最下級魔士だけど……！」

「違う違う！ そこに笑ったんじゃないよ」

「へ？」

ポンドが大きく手を横に振って、否定すると、マルクが途端に、目を丸くする。

「“絶対無理”、“もうダメ”、“出来るわけない”が口癖のマルくんが、“やってみなきゃ、わかんない”なんてこと、言う日が来るとは、思ってもみなかったからさあ」

ポンドにそう言われ、マルクが自分でも驚いたような表情を見せ、自分が口にした言葉を確かめるように、右手を口元へと持つていく。後ろめいたことばかりが口癖だったマルクは、確かに、今のようない前向きな言葉を言ったのは、初めてであった。

「モルダバのことあった時も思ったけど、マルク、やっぱり変わったよな」

「そ、そう？」

「うん、変わったよ。会ったばかりなのに、メルを自由にしようとか、いきなり、気合い十分に張り切っちゃってさあ」

「悪かったなあ」

「ううん」

ポンドの言葉を皮肉と受け取ったのか、少し顔をしかめたマルクに対し、ポンドが軽く首を横に振り、穏やかな笑みを浮かべ、マルクの方を振り向く。

「すっげえ、背中押された」

ポンドの素直なその言葉に、マルクは一瞬、きよとした表情を見せた後、少し照れるように、ポンドから視線を逸らした。

「前向いてる感じするよ。前より、ずっと」

前方へと視線を流し、ポンドがどこか、しみじみと呟く。その言葉を聞きながら、そっと目を細めるマルク。幼い頃からずっと、友

達として傍に居たポンドが、言っているのだから、前を向けてきているのかも知れない。

「ルビィネルちゃん、様様だな」

「俺が自ら奮起して変わった、とは思わないの？」

「自ら奮起してるとは、思うけどねえ。でも、それって、ルビィネルちゃんと出会ったからだろ？」

見透かすように微笑んだポンドが、再びマルクの方を振り向く。

「ルビィネルちゃんの“彩炎の魔女”になりたいって、強い熱意に応えたいから、マルクは今、そんなに頑張ってたんだろ？」

ポンドのその問いかけに、マルクは、答えることが出来ず、ただ驚いたような表情で、口ごもった。それから、答えとなる言葉を探したが、その問いへの答えはまだ、マルクの中にも存在していないようだった。何故、今、自分が、寝る間も惜しんで頑張っているのか、その理由は、マルク自身にもわからなかった。

「そういえば、なんで俺、こんなに頑張ってたんだろ……」

「そりゃ、あれだ。ズバリ、恋！ くうく、いいねえ。一途ってのはあー！」

「違ってたば」

一人盛り上がり始めたポンドに、冷静な呟きを落とすマルク。マルクが考えを巡らせながら、窓の外の景色を見つめる。

「……だって」

——それでも私は、“彩炎の魔女”になりたい！——

「何か、泣きそうだったし……」

必死に叫んでいたルビィネルの姿を思い出し、マルクが、誰にともなく呟く。

「うるさいですよ、ポンド・アラ―ネル！」

「はい、先生！ 一途ですいません！」

講師へと謝るポンドの声を聞きながら、マルクはそっと、目を細

めた。

三日後。今期最終日、マルクの実力試験、当日。第五演習室。

「何だつて、俺が、お前の試験の試験官をしなきゃ、いけねえんだよ！ 面倒臭せえ！」

「知らないよ」

「それが、そなたの仕事だろう」

嘆くように叫ぶブラッドスに、マルクとルビィネルが、それぞれ手短かに、冷たく答える。どうやら、ブラッドスは、院長から試験官を命じられたようだが、本人は相当に不満げであった。現在は昼休みであり、試験は正午からと決まっている。貴重な休みが潰れてしまったことも、ブラッドスの苛立ちの原因なのだろう。演習室には、午後からブラッドスの講義を受ける者たちが集まり始めており、その中には、ポンドやアメジェス、トゥーパの姿もあった。

「つたく、もう正午かあ？」

「まだ二分あるわよ」

誰にともなく問いかけたブラッドスに、アメジェスが時計を見ながら答える。

「まあ、わざわざ、時間きっちり始めなきゃいけねえような、価値のある試験じゃねえんだし、とつとと始めるか」

「どうせ、俺の試験には、大した価値なんかないよ！」

面倒臭そうに頭を掻くブラッドスに、マルクが陰気な空気で言い返す。

「んーと、基礎炎技が四つ出来れば、合格とかだっけ？ じゃあ早速、見せてもら……」

「一つ、提案がある」

「は？」

遮るルビィネルの声に、ブラッドスが眉をひそめながら、聞き返す。

「この試験、実戦形式にしてみたい」

ルビィネルからの提案に、曇るブラッドスの表情。演習室に集まっている魔士や魔女からも、多少ざわめきが起こる。

「理由は？」

「我がパートナーは、その方が集中出来るからだ」

ルビィネルの答えを聞いたブラッドスが、ルビィネルから、ルビィネルのすぐ横に立つマルクへと視線を移す。マルクは特に、何を訴える様子もなく、ルビィネルに任せているといった状態で、ブラッドスを見ていた。

「わかった。認めよう」

「恩に着る」

頷くブラッドスに、ルビィネルが鋭く笑みを返す。

「けど、実戦にするとなると、相手がいるなあ」

少し首を捻ったブラッドスが、部屋に集まっている魔士たちを見つめる。

「おおーい、お前等の中の誰か！ こいつの試験の、相手になってやってくんねえかあ！？」

ブラッドスが大きな声で、皆へと呼びかける。

「じゃあねえなあ」

アメジエスが呆れたように見つめる中、ポンドが髪を掻き上げ、皆よりも一歩前へと出る。

「ここはいつちよ、俺がつ……！」

「仕方無い！　そこまで言うなら、晴れの日のように暑苦しく、雨の日のように鬱陶しい、この僕が相手になろう！」

「いや、今は俺が出て行くところだ……って、自分で鬱陶しいって自覚あんだな、お前」

「俺がやる」

「へ？」

名乗り出ようとしたポンドの横から、同じように大きな振る舞いで名乗り出たフランに、ポンドが思わず突っ込みを入れる。その間

に、ポンドとフランの横を通り過ぎ、マルクたちの方へと歩み寄っていく人物がいた。その人物を見て、ポンドが思わず、驚きの表情を見せる。

「シリング」

歩み寄って来たその人物の名を、マルクが口にする。

「うつそ！ シリングくん！？」

「シリングくんがなんで、わざわざ、最下級魔士の相手なんかあ！」

「でも、実戦が見れちゃうとか、ラッキーじゃない？」

前へと出て行くシリングの姿に、集まっていた魔女たちが、一気に色めき立つ。

「ちえー、折角、俺が相手になって、何とか誤魔化して、マルクを合格にしてやろうと思ったのに」

「ポンド、せこい……略して、ボンセ……」

残念がるポンドの横で、エメラルディアがポツリと呟く。

「相手は、俺でも構いませんか？ ブラッドス先生」

「最上級魔士相手に、文句つける講師がいるかよっ」

謙遜するように問いかけるシリングに、ブラッドスがしかめっ面のまま答える。ブラッドスからの許可をもらうと、シリングは体の向きを変え、今度はマルクの方を向き直った。

「そっとうわけだ。よろしく頼む」

「シリング、お前……」

まっすぐにシリングを見つめ、マルクがそつと目を細める。

「圧倒的实力差を見せて、俺を、皆の笑い者にする気だろ！ そうだろ！」

「お前、本当、捻くれてるよな……」

勢いよく非難してくるマルクに、シリングが呆れ切った表情を向ける。

「マルク」

シリングへと被害妄想を炸裂させていたマルクに、ルビィネルが真剣な表情を見せ、声を掛ける。

「見ての通り、相手にとって、不足はない」

ルビィネルの鋭い瞳が、まっすぐにシリリングを捉える。ルビィネルの真剣さが伝わったのか、マルクもすぐに緊張感を持った面持ちとなる。

「遠慮することなどない。思いきり行け」

「うん」

力づけるようなルビィネルの言葉に、マルクが笑顔となって、しっかりと頷く。

「言ってくれるじゃない？ 最下級魔士のくせに」

二人へと得意げに声を張り上げたのは、いつの間にかシリリングの横に並んでいる、サファイであった。サファイもどうやら、集まっている魔女集団の中に紛れていたようである。

「最上級魔士との格の違いを、見せつけてやりましょ！ シリリング

！」

「……………」

親指を突き立て、満面の笑みを向けるサファイを見て、シリリングが無表情のまま、しばらく固まる。

「早速、始めるか」

「え、無視っ！？」

特に何の答えも返さずに、ブラッドスへと視線を移すシリリングに、サファイがシヨックを受ける。

「じゃあ、関係ない奴らは、もうちょい下がれえ」

演習室の演習場中央に、マルクたち四人を残し、ブラッドスも自らその場を離れながら、他の者たちへ指示を送る。入口側へとポンドやアメジェス、その他の魔士たちが下がり、マルクたちとの距離を作る。ギャラリーの先頭に立つと、ブラッドスはその目つきを鋭くした。

「これより、マルク・クラウドの、上級魔士講義参加資格を賭けた、試験を行う」

ブラッドスの声が響くと、向き合ったマルクとシリリングが、それ

ぞれ真剣な表情を見せる。

「始め！」

「ルビィネル！」

「ああ」

「サファイ」

「ええ！」

ブラッドスの合図と共に、それぞれ、ルビィネルとサファイの方へと、魔紋の刻まれた右手を差し出すマルクとシリング。二人の魔女はその呼びかけに頷き、同じ魔紋の刻まれた左手を、それぞれのパートナーの右手へと重ね合わせる。

「目醒めよ、我が赤炎！」

「目醒めて、私の青炎！」

ルビィネルとサファイの魔唱が響き、二人が自身の魔炎を解放する。解放と同時に、パートナーとの共有が始まり、マルクの体を赤い炎が、シリングの体を青い炎が、淡く包み込んでいく。

「“本結”パートナー同士の戦い、か」

四人の手の甲に刻まれた魔紋を見つめ、ブラッドスが鋭く目を細める。

「サファイ」

「はいはい」

再び呼びかけたシリングに、サファイが胸のポケットから、手のひらで包み込めるほどの大きさの、短い白色の筒のようなものを取り出す。サファイがその筒を一振りすると、それは、一本の長い棒へと変化した。変化した白色の棒を、サファイがシリングへと手渡す。特に両端にもどこにも細工のない、本当にシンプルな、ただの棒だ。

「何だ？ あれ」

「魔刀だ」

「魔刀？」

「ああ。魔炎を吸収し、攻撃力を増す、魔炎使い専用の武器」

首を傾げたマルクに、ルビィネルが冷静に解説をする。

「纏え^{まと}」

マルクが戸惑うように見つめる中、シリリングが右手で強く魔刀を握り締めると、あっという間に青い炎が魔刀の周囲を取り囲んでいく。炎に包まれながらも、燃えない魔刀の、その不思議な光景は、魔虎との戦いの際見たものと同じであつた。青炎を纏った魔刀を、シリリングが素早く構える。

「装纏^{そうてん}」だ。来るぞ、マルク！」

「わかつてる！」

マルクの炎技試験のため、補助することを禁じられているルビィネルが、マルクと手を離し、後方へと下がりながらも、強く叫ぶ。そのルビィネルの言葉にしっかりと答えながら、マルクは勢いよく右手を突き出した。そこへ、魔刀を振りかぶったシリリングが、攻め込んで来る。

「ク……！」

シリリングの振り下ろした魔刀を、素手でしっかりと受け止めるマルク。受け止めたマルクの右手は、赤々とした強い炎が包み込んでいる。

「燃焼^{ねんしょう}」

そのマルクの様子を見て、サファイが小さく声を落とす。

「俺の攻撃を止めるとは、なかなかの“燃焼”だ」

「どうせ、馬鹿の一つ覚えとか、思ってるんだろ！ この野郎！」
「捻くれも、ここまで来ると大したものだな」

一方的に怒鳴りあげてくるマルクに、困ったような表情を見せながら、シリリングが、魔刀を持っていない左手を、足に向けて、振り払う。

「脚火」

「あつ」

青炎を纏った足で飛び上がり、空中へと移動するシリリング。受け止めていた魔刀がなくなり、マルクが少し体のバランスを崩す。

「青流火^{せいりゅうか}」

上空に舞い上がったシリングが、魔刀を振り下ろし、下方にいるマルク目がけて、青い炎の塊を放つ。

「放出^{はうしゅつ}」か」

ルビィネルが冷静に呟く中、マルクは、落ちてくる青炎に向けて、何の躊躇いもなく、右手を伸ばした。

「こっの！」

右手で思いきり、振り払うようにして、青炎の軌道を変えるマルク。軌道を変えられた青炎は、演習室の奥、誰もいない地面の上へと降り落ちた。

「“燃烧”で“放出”も弾くか。だが、この“放出”ならどうだ？」

今度は、魔刀を持っていない左手を、下方にいるマルクへと向けるシリング。

「青散炎^{せいさんえん}」！」

シリングの左手から、先程同様、青い炎の塊が放たれたかと思うと、その塊が、空中を落下していく間に細かく分かれ、小さな無数の雨粒となって、一斉に下方のマルクへと降り注ぐ。

「あれじゃ、手で全部、弾けねえぞ!？」

「マルクっ……」

見守るポンドとアメジエスが、不安げな表情となる。だが、二人が見つめる当のマルクは、降り落ちてくる雨粒の青炎に焦ることなく、鋭く、目を細めた。

「我が身を守れ」

マルクが力強く、右手を上方へと突き出す。

「赤壁火^{せきへきか}」！」

勇ましいマルクの声と共に、マルクの上方に、赤い炎の壁が現れ、降り注いだ青炎の雨粒を、一つ残らず受け止める。

「“防御”！」

「やるじゃん、マルク！ これで二つ目！」

防御でシリングの炎を防いだマルクに、ポンドとアメジエスの表

情が、一瞬にして明るくなる。

「おっし、こつちも“放出”で攻撃だ！ マルク！」

俄然、気合いの入ったポンドが、右手を突き上げ、マルクへと攻撃の指示を送る。だが、マルクはポンドの言葉に体を動かすことなく、防御壁を解くと、攻撃する素振りも見せずに、ただ、その場に立ち尽くした。

「あ、あれ？ マルク？」

「使えないんじゃない？ “放出”」

「ええっ！？」

首を傾げるポンドに、アメジエスが冷静に言い放つと、ポンドは途端に驚きの声をあげた。

「使えるなら、はじめから使っつわよ。相手は空中に居て、ただでさえ、狙いやすいんだから」

「マジかよ。“放出”使えないんじゃない、合格出来っこねえじゃん」

「どう、して……？」

ポンドの言葉に疑問を持ったのか、エメラルディアが不思議そうに問いかける。

「炎技、後三つ、ある……放出使え、なくても……他に二つ、出来れば、マルク、は……」

「放出以外、残ってる炎技は全部、高難易度だ。最下級魔士のマルクに、出来るはずねえよ」

厳しい表情を見せたポンドが、どこか諦めたように呟く。

「せめて、“放出”合わせて三つ使えてりゃあ、おまけ合格くらいあるかなあと思っただけだなあ」

「ねえぞ。おまけ合格なんか」

ポンドの声を聞いていたらしきブラッドスが、鋭く言葉を挟んでくる。

「あ、じゃあ、どの道、無理だったか」

今度は諦めきった声を発するポンドの横で、アメジエスが気難しい表情を見せる。

「どうするつもり……？ ルビィネル」

真剣な表情を見せたアメジェスが、マルクの後方から、マルクをまっすぐに見つめるルビィネルの方へと視線を移す。

「“防御”を覚えた程度か」

空中から地面へと降下してきながら、シリリングが、どこか期待外れの表情で肩を落とす。

「もう少し、楽しめるかと思ったが」

「シリリング」

「持っている、サファイ」

「へ？」

シリリングは地面へと降り立つと、歩み寄って来たサファイに、右手に構えていた魔刀を投げ渡した。シリリングの手を離れると、魔刀を纏っていた青炎が消える。

「何？ 使わないの？」

「ああ、“装纏”はもういい」

戸惑うように問いかけるサファイに、シリリングが短く答える。

「これは、炎技の試験。折角、これだけ観衆もいるんだ。他の技も披露すべきだろう？」

「え？」

シリリングのその言葉に、サファイがどこか、不安げな表情を見せる。サファイや皆が見つめる中、シリリングは自由になった両手を、胸の前に伸ばし、ゆっくりと重ね合わせた。右手に刻まれた魔紋が輝くと、シリリングの両手を真つ青な炎が覆っていく。

「ま、まさか……」

徐々に膨れ上がっていく、シリリングの両手を囲む炎に、眉をひそめるサファイ。膨れ上がった青炎は、シリリングの両手を離れ、上空でゆっくりと、その姿を変えていく。

「せいおうか 青鷹火”……」

「なっ……！？」

静かなシリリングの声のすぐ後に、演習室中の者たちから、驚きの

声が漏れる。シリリングの前方に生まれたのは、青い炎で象られた、巨大な鷹。人一人くらいであれば、平気で乗れそうなほどの巨体と、青い炎で出来たその幻想的な美しさに、皆が圧倒され、目を見張る。向き合ったマルクとルビィネルも、同じように、大きく見開いた目で、その炎の鷹を見つめていた。

「あれは、“具現”^{ぐげん}」

ルビィネルがまっすぐに鷹を見つめ、言葉を落とす。

「六つの炎技の中で、最も難易度の高い技。しかもあれは、具現の中でも、最高に難しいとされる“生物具現”」

「さすがは、最上級魔士様ってところか」

説明するように呟くアメジエスの横で、ポンドが一筋の汗を流す。
「ちょ、ちょっと待ってよ、シリリング！ それ、やり過ぎ！ そんなの、最下級魔士なんかに向けたら……！」

「俺は、誰が相手であっても、手加減はしない」

必死に止めようとするサファイに冷たく言い放ち、シリリングがゆつくりと、右手を掲げる。

「行けっ」

「あ……！」

サファイが止めるのも聞かず、シリリングが勢いよく右手を振り下ろし、それを合図として、炎の鷹が、まっすぐにマルクへと飛び込んでいく。

「避けるのよ、避けなさい！ マルク・クラウド！」

最早、鷹は止められないと踏んだサファイが、今度は前方のマルクへ向けて、必死に身を乗り出し、叫ぶ。サファイの焦りの表情を見れば、その鷹を食らうことが、どれほど致命的なことであるのかは、容易に想像が出来た。皆が焦ったように見つめる中、鷹の向かう先に立つマルクは、そこに立ったまま、特に避ける様子は見せていない。

「マルク？」

避ける素振りすらないマルクに、アメジエスが戸惑うように眉を

ひそめる。

「まさか、腰とか抜かしてんじゃねえだろうなあ！？ あいつ！」

「最下級魔士の人生も、ここまでのようだね」

ポンドが焦ったように言い、フランが諦めきったように言うと、アメジエスの表情が、益々厳しいものへと変わる。拳を強く握り締めたアメジエスが、急いで歩を進め、一番先頭に立つブラッドスのもとへと歩いていく。

「止めて」

簡潔なアメジエスの言葉に、振り向いたブラッドスが、眉間に皺を寄せる。

「なんで？」

「このままじゃ、マルクが焼け死ぬわ！」

「そうそう。シリングに止めるよう、言つてよ、先生！ マルクが黒焦げになっちゃう！」

慌てて駆け寄って来たポンドが、アメジエスに続くように訴える。マルクの身を案じる二人を見つめ、ブラッドスが真剣な表情で目を細める。

「お前等が、先に諦めんのか？」

ブラッドスが落ち着いた口調で、二人へと問いかける。

「珍しく、あのネガティブバカが、諦めてねえのに」

「えっ？」

ブラッドスの言葉に、戸惑いの表情を見せた二人が、再び、マルクの方へと視線を向けた。

「……………」

悲鳴にも似た、焦りと不安が入り交じった声が、いくつも聞こえてくるというのに、不思議と、マルクの耳には、その言葉の一つひとつは、一個も入って来なかった。焦る観衆も、不安げに見つめるポンドやアメジエスも、まるで、別の世界のもののように、遠くに見える。マルクの視界に映るのは、今、まさに、目の前に迫り来ようとしている、青い炎の鷹だけであった。魔物と相對した時のよう

に焦ることもなく、マルクが静かに右手を、向かってくる鷹の方へと突き出す。

「なんで避けないのよ！」

動こうとしないマルクに、サファイが不満げに表情をしかめる。

「とつとと避けさせなさい、ルビィネル！ パートナーを死なせたいの！？」

サファイが今度は、マルクの後方に立つルビィネルへ向けて叫ぶ。その叫びは届いているだろうが、ルビィネルはマルク同様、特にその場から動く様子は見せなかった。

「見せつけてやれ、マルク」

一人、落ち着いた笑みで、ルビィネルが見守る。

「我らの炎を！」

ルビィネルの自信に満ちた声が、堂々と発せられる。

「青き炎よ」

マルクが静かに言葉を落とすと同時に、マルクの右手の魔紋が、強く輝く。

「我が、赤き炎へと染まれ」

目つきを鋭くし、マルクが鷹を睨みつける。

「せきせんか 赤染火”！」

マルクが大きく声を張り上げた途端、マルクの右手から赤色の強い光が放たれ、マルクへと向かってきていた鷹を包み込む。

「ああっ……！」

赤い光に包まれたその瞬間、幻想的な美しさの、青い炎で象られた鷹が、一気に、赤い炎の塊へと姿を変える。あまりに一瞬の、だが衝撃的な出来事に、皆が、シリリングが鷹を生み出した時以上に大きく、目を見開き、驚きの表情を見せる。

「あれは、“てんか 転化”。他者の魔炎を自身の魔炎に変える、“具現”と並ぶ最高難易度の炎技」

「マルクの奴、いつの間に、あんなっ……」

シリリングの青炎を、自身の赤炎へと変えたマルクのその姿を見て、

ポンドとアメジエスが、思わず啞然とした表情を見せる。

「“転化”、だと……？」

自らの炎を染め上げられたシリリングも、険しい表情で、マルクを見つめる。

「やはり、オがある」

皆とは違い、驚きではなく自信に満ちた表情で、ルビィネルもまた、マルクを見る。

——モルダバああ……！！——

「モルダバの魔炎を吸収してみせた、あの時の力。“燃焼”といい、マルクは、魔炎を自らの味方に取り込むことには、一際、長けている」

確信を持ったその言葉と共に、ルビィネルが口角を上げ、笑みを浮かべる。

「行け、マルク！」

皆が茫然とする中、笑顔を見せたルビィネルが、力強く指示を送る。

「ああ！」

ルビィネルの言葉に大きく頷いたマルクが、シリリングの魔炎から、変えたばかりの赤い炎の中へ、何の躊躇いもなく、自身の右手を突っ込む。すると、突っ込まれたマルクの右手に、赤い炎が自ら動くようにして纏わりついていく。

「あれは“装纏”」

シリリングの後方から、木刀を持ったままのサファイが、険しい表情で眉をひそめる。

「それも、シリリングの使った“武具装纏”より難易度の高い、“身体装纏”っ」

サファイも見つめる中、赤い大きな炎を右手に纏ったマルクが、体をまっすぐに前へと向け、正面のシリリングと向き直る。鋭い表情

を見せたマルクは、少しも臆することなく、堂々とシリリングを見つめていた。

「これが俺の炎だ！」

自信すら含んだ、力強い声を響かせたマルクが、勢いよく右手を振りかぶる。

「喰らえ！ “せきしょうか赤掌火”！」

マルクが右手を勢いよく突き出すと、マルクの右手に纏わりついてきた赤い炎が、一気に飛び出し、空中でその激しさを増しながら、一つの大きな塊となって、まっすぐにシリリングへと向かっていく。

「シリリング……！」

焦ったようにシリリングの名を呼んだサファイアが、すぐさま、シリリングのもとへと駆け寄っていく。

「シリリング！」

「魔刀だ、サファイア」

「え？ あ、え、ええ！」

焦るサファイアとは対照的に、どこまでも冷静なシリリングの声に、少し驚きながらも、サファイアが、シリリングへと魔刀を投げ渡す。再び魔刀を手にしたシリリングは、手にした途端に、魔刀に青炎を纏わせ、無駄な動き一つなく、素早く棒を振るった。

「せいざんか青斬火”！」

シリリングの振り下ろした魔刀から、青い炎の塊が放たれ、マルクの放った赤い炎と、正面からぶつかり合う。

『クっ……！』

ぶつかり合った途端、互いの炎の重みを感じたのか、同時に顔をしかめるマルクとシリリング。だが両者とも一步も譲らず、互いの右手に、全身の力を込める。そして、しばらくせめぎ合いが続いた後、激しい炎のぶつかり合いは、爆発のように一瞬、皆の視界を白く染め上げ、演習室中の空気を揺らした。地割れのような衝突音が止むと、演習室に、静寂が訪れる。

「……………」

冷たい表情で、静かにその場に立ち尽くすシリリング。右手に持った魔刀を、包み込んでいた青炎の姿はすででない。そして、バキッと、鈍い音が響いたかと思うと、シリリングの持つ魔刀が、中央から真つ二つに砕け、先端が力なく地面へと落ちた。

「お、折れた？ シリリング・ウエーガットの、魔刀、が？」

「最上級魔士と、相打ちってこと？」

瞳を丸くし、戸惑うように呟くポンドとアメジェス。二人の言葉を背中に受けながら、ブラッドスはゆっくりと歩を進め、激しいぶつかり合いを見せた、マルクとシリリングの方へと歩み寄っていく。

「“ 燃烧 ” “ 防御 ” “ 転化 ” “ 装纏 ”、四つの炎技、確かに見せてもらった」

歩み寄って来たブラッドスが、振り向いたマルクを、まっすぐに見つめる。

「よって、炎技試験合格。マルク・クラウドの、上級魔士講義参加を認める」

『おおっ！』

ブラッドスの言葉に、演習室中から、歓声が上がる。初めは、ただの野次馬であつた見物人たちも、皆、戦いを見ているうちに、真剣になり、手に汗握ってしまったのだらう。全員がマルクの合格を、喜んでいる様子であつた。

「マルク」

「こりゃ、あいつのこと、もう、最下級魔士とか呼べねえかもな」
ホツとしたように肩を落とすアメジェスの横で、ポンドもまた、嬉しそうに笑う。

「シリリング」

皆がマルクの合格を喜び、シリリングにとっては、どこか居辛いような空気が流れる中、サファイが少し不安げに、シリリングの方を覗き込む。

「だ、大丈夫よ、シリリング！ 相手が最下級だからって、ちょっと油断しちゃっただけよ、きつと！」

「ん？ 何か言ったか？」

「また無視！？」

必死に励ましたサファイであったが、シリングに軽く流され、シヨックを受ける。

「よくやった、マルク！」

それぞれのやり取りが続く中、誰よりも嬉しそうな笑顔を見せ、ルビィネルがマルクへと声を掛ける。

「これで、そなたも上級につ……！」

「……っ」

「えっ……？」

後方へと倒れ込んでいくマルクに、ルビィネルが、途中で言葉を止める。ルビィネルが目を見開く中、深く目を閉じたマルクは、静かに、地面へと倒れ込んだ。

「マルク？ マルク！」

倒れたマルクへと、ルビィネルが慌てて駆け寄る。

「マルク……！」

大きなルビィネルの呼びかけにも、マルクが瞳を開くことはなかった。

レイール聖魔院、医務室。

「んっ……」

「気が付いたか」

医務室に並んだ寝台の一つに横になり、眠っていたマルクが、ゆつくりとその赤い瞳を開く。マルクが目を開けると、寝台の横に置かれた椅子に腰かけていたルビィネルが、マルクの顔を覗き込むように身を乗り出し、そつと微笑みかけた。ルビィネルの笑みと、周りの景色を少し眺め、マルクが戸惑った表情を見せる。

「あれ、俺っ……」

「試験後に倒れたのだ。ポンドたちに手伝ってもらって、医務室に運んだ。原因は過労だそうだ」

「そっか」

ルビィネルの説明を受け、マルクが納得したように頷く。ここ数日、炎技の特訓ばかりで、ろくに食事も睡眠も取っていなかった。余程、疲労が溜まっていたのだろう。試験が終わり、気持ち解放されたことで、その疲れが、どつと出てしまったのかも知れない。

「まあ、あんだだけ練習すれば、倒れもするよなあ」

しみじみと呟くマルクを見つめ、ルビィネルがどこか暗い表情で、目を細める。

「すまぬ」

「へ？」

突然のルビィネルの謝罪に、天井を見つめていたマルクが、ルビィネルの方へと首を向ける。少し俯いたルビィネルは、申し訳なさそうな表情を見せていた。

「私の勝手に、無茶をさせた。反省している」

「ルビィ、ネル？」

謝るルビィネルのその言葉の意味がわからず、不思議そうな顔で

名を呼びかけるマルク。その呼びかけに、ルビィネルがゆっくりと顔を上げ、まっすぐにマルクの方を見る。

「私は、ただ、自分の希望を叶えるために必死で、それ以外に何も見えていなくて……そなたの体に無理を強いていたことにも、全然、気付いていなかった」

まるで自分自身を責めるような、ルビィネルの言葉に、マルクが少し目を細める。

「すまない」

「俺、さ」

もう一度、ルビィネルが謝罪したところで、マルクがゆっくりと口を開く。

「ポンドに“なんでそんなに頑張ってるんだ”みたいなこと言われて、答えられなくて、それからずっと、考えてたんだよね」

マルクがルビィネルから、再び天井へと、視線を移す。

「なんで俺、こんなに必死に頑張ってるんだろうって……」

話を続けるマルクを、ルビィネルが真剣な表情で、まっすぐに見つめる。

「で、思ったんだ。こんなに頑張ってるのは、きっと、充実してるからだって」

「充実？」

「うん。お前とずっと練習してきて、そりゃあ、すっかり疲れたけど、でも何か、前に進めてる感じがした」

言葉の通り、前を見つめたマルクが、どこか嬉しそうに笑う。

「ほんの少し、ちょっとずつだけど、でも、一歩ずつ、確実に」

マルクの言葉を聞き、ルビィネルが少し目を細める。

「俺さ、昔っから何やってもダメで、挑んでも挑んでも、一個も上手く出来なくて、周りにもバカにされて……、そしたら何か、いつの間にか、挑むことが、怖くなっちゃってさ」

過去を思い返しているのか、マルクが懐かしむような表情を見せる。

「挑む勇氣も持てなくて、なのに、何もしない自分に腹立って……、狭い部屋で、一人、ずっともがいてるような、そんな気がして、苦しかった」

「マルク」

「何にもしてなかったけど、あの頃の方が、今より、ずっとしんどかったなあ。ずっと、疲れた」

天井を見ていたマルクが、またゆっくりと視線を動かし、再び、ルビィネルの方を見た。顔を上げたルビィネルと、まっすぐに視線を突き合わせる。

「だから、ありがとう。ルビィネル」

「え……？」

伝えられる言葉に、ルビィネルが戸惑いの表情を見せる。

「まだちゃんとお礼、言ってなかったからさ」

戸惑うルビィネルに、マルクはもう一度、穏やかに微笑みかける。「ありがとう。俺と、パートナーになってくれて」

「マルク……」

向けられるその微笑みに、ルビィネルが何か、眩しいものでも見るかのように、目を細める。

「ルビィネル、俺、ねっ……」

まだ続くかと思われたマルクの言葉であつたが、それは途中で途切れ、マルクの赤色の瞳が、またゆっくりと閉じられた。数秒としないうちに、規則正しい寝息が聞こえてくる。どうやらマルクは、再び眠ってしまったようだ。

「寝たのか」

瞳を閉じたマルクの顔を眺めながら、ルビィネルが、魔紋の刻まれた左手で、そっと、マルクの頬へと触れる。

「マルク……私は、そなたに礼を言ってもらう資格など、ないのだ」マルクの頬を撫で、ルビィネルが物悲しい表情を浮かべる。

「私は……」

眠っているマルクに、何かを語りかけようとしたルビィネルであ

つたが、医務室の扉を開ける音が聞こえ、すぐに言葉を止めると、鋭い表情となつて振り向いた。

「ポンドか？」

「俺だ」

「ブラッドス」

薄い緑色のカーテンを開き、その場へと姿を現したのは、ブラッドスであつた。

「どうだ？」

「先程、一度、目を覚ました。ゆっくり休めば、問題ないだろう」
「そうか」

ルビィネルの答えに、ブラッドスが少し安心したように肩を落とす。だが、ホツとした表情を見せたのも束の間、ブラッドスはすぐに厳しい表情となり、まるで射るように、ルビィネルを見つめた。

「お前、これから、どうする気だ？」

ブラッドスから向けられるその問いに、ルビィネルが眉をひそめる。

「どう、とは？」

「魔院がお前のことを黙認したのは、お前がパートナーにしたのが、
“最下級魔士” だったからだ」

質問の意味がわからないといった様子で、聞き返したルビィネルに対し、ブラッドスは間髪入れず、鋭い言葉を向ける。

「だが、この数日での、そいつの成長は異常。その成長に、お前が関わっていることは、明らかだ」

突き刺すようなその視線を、眠るマルクへと向けるブラッドスに、ルビィネルが表情を曇らせる。

「そいつが“最下級魔士”のままなら、別に良かった。だが、これ以上、そいつが成長するようなら、これはもう、茶番じゃすまねえ」
ブラッドスがまた、射るような視線を、ルビィネルへと向ける。

「俺の言葉の意味が、わかるな？」

確かめるように問いかけるブラッドスに、ルビィネルが皮肉を含

んだ笑みを浮かべる。

「わかるはずがなかるう？　もう少し、はっきりと言ったらどうだ？」

挑戦的なルビィネルの発言に、ブラッドスが顔をしかめる。

「なら、はっきりと言ってやる」

ブラッドスが歩を進め、ルビィネルとの距離を縮めて、椅子に腰掛けたままのルビィネルを、高々と見下ろす。

「これ以上、好き勝手するようなら、魔院もフレイヤも、黙っちゃいねえってことだ」

「……っ」

確かにはつきりとしたブラッドスの言葉に、ルビィネルの表情は、隠そうとはしていたが、隠しきれないほどに揺れ動く。

「俺だって、俺の生徒を、危険な目には遭わせたくねえ。だから、もう、勝手な真似はすんな」

冷たく言い放つと、ブラッドスはあつさりルビィネルに背を向け、そのまま、医務室を去っていった。静かになった医務室に残され、ルビィネルがそっと、俯く。

「警告にしては、上出来だな」

ルビィネルがどこか、ブラッドスを誉めるように呟く。

「だが」

魔紋の刻まれた左手を、右手で力強く握み、ルビィネルが真剣な表情を見せる。

「それでも、私は……」

切実なその声が、静まり返った医務室へと落とされた。

「あ、もしもおーし？　フレイヤのサードニック様ですかあ？」

レイール聖魔院から少し離れた森の奥で、魔士の制服を纏った一人の青年が、小型の電話機を片手に、明るい声を響かせている。茶

色の髪に、大きな金色の瞳のその青年は、魔蟲を使い、ルビィネルたちを襲ったあの青年だ。

「こちら、リラ・ヒューズベルです」

青年が自らの名を、リラと名乗る。

「すみませ〜ん、連絡遅れちゃって。そんな怒らないで下さいよお〜。こつちだつて別に、遊んでたわけじゃ、ないんですからあ」

電話機の方こうから聞こえてくる怒声に、リラが少しうんざりした顔となる。

「わかってます、わかってますってえ〜」

本当にわかってているのかも怪しい、あまり氣の入っていない声を発するリラ。

「ちゃんと、次でぜえ〜んぶ、終わらせてきますよ」

言葉を発したリラが、どこか冷たい笑みを浮かべる。

「逃亡魔女の、くだらない茶番。ぜえ〜んぶをねっ」

レイル聖魔院は、新しい期を迎え、魔士の階級別の講義が始まっていた。

「マルク・クラウド！ 次の講義に使うもん、書いといたから、この通りに準備しとけ！」

「ふぁーい」

聖魔院の講師ブラッドスから、小さなメモを受け取ったマルクが、やる気の一切見られない返事をする。リストを確認した後、大きな広場の隅に設置されたテントへと行き、たくさん置かれた道具の中から、リストに書かれたものを探すマルク。その背からも、やる気はまったく感じられず、見ていたブラッドスが、深々と肩を落とす。

「あんまネガティブオーラ、出すなよ。こつちまで、根暗になつたら、どうしてくれんだ」

「ろくに講義にも参加出来ずに、雑用ばっか、させられてるのに、どうやってたら明るくなれるんだよ」

ブラッドスからの言葉に、マルクが振り向きながら、どこか刺々しく答える。炎技試験に合格し、上級魔士になれるわけではないが、上級魔士の講義参加を認められたマルクであったが、実際、階級ごとの授業が始まると、担当講師のブラッドスから講義参加を許可されず、その代わり、講義の準備や片付けなど、雑用を任される日々を送っているのであった。

「仕方ねえだろ？ 下手に最下級魔士参加させたら、怪我じゃ済まないような演習ばっかしてんだから」

「けど俺、ちゃんと、炎技試験受かったよ？」

「上級の講義じゃ、基礎炎技なんて、出来て当たり前なんだよ」

強めに訴えるマルクに、ブラッドスがしかめた表情を向ける。

「こつちは、もっとクソ難しい演習ばっかやってんだ。付いて来れる自信あるかあ？ 最下級魔士」

「ないです」

どこか脅すように問いかけるブラッドスに、マルクが素直に首を横に振る。

「心配すんな。お前もちゃんとスキルアップ出来るよう、別演習、考えてきてやったから」

「え？」

ブラッドスが、マルクへと、先程のメモよりは一回り大きい紙が、数枚束ねられた、冊子のようなものを手渡す。マルクが軽く頁をめくると、そこにはびっしりと、炎技や魔炎についての説明、技術的な指導が書かれていた。

「これから、雑用がない時は、その演習をやつてろ。俺は本講義もあるから、ずつとは見てられねえけど、適当に様子は見に来るから」
「あ、ど、どうも」

少し面食らったような表情となつて、頷くマルク。愛想のない口調とは対照的に、伝えられたその言葉は、とても丁寧なものであった。

「ブラッドスって、見た目と違って、親切だよな」

「誰がだ、コラ」

素直な言葉を漏らしたマルクであつたが、ブラッドスはその素直過ぎる言葉が引つ掛かり、勢いよく顔をしかめる。

「ま、今後のためにも、お前は強くしといた方がいい気するしな」

「へ？」

「いや、何でもない」

小さく呟かれたブラッドスの言葉が、マルクの耳に届くことはなく、聞き返したマルクに、ブラッドスはすぐさま、首を横に振った。
「んじゃ、講義の準備、頼むぞ」

「あ、うん」

マルクにそう言うと、ブラッドスは、演習を続けている上級魔士たちの居る広場へと、去っていった。去ったその背と、手元の冊子を交互に見た後、マルクが冊子を丁寧にすぐ傍のベンチの上に置き、

再びメモを見て、講義の準備を始める。

「今日も雑用か？」

随分と聞き慣れてきたその声を耳に入れ、マルクが顔を上げる。先程、マルクが冊子を置いたベンチに、いつの間にか、ルビィネルが腰掛けていた。

「うん。でも、雑用がない時は、そこに書かれた別演習、やってていいって」

マルクが冊子を指差すと、ルビィネルがすぐさま、横にあった冊子を手に取り、書かれた内容に目を通す。

「成程な。よく出来ている」

「ブラッドスって、結構いい先生だよな」

感心するようにルビィネルが呟くと、マルクが先程のブラッドスの姿を思い出しながら、そっと笑みを零す。

「あ、そうだ。お前も、雑用手伝えよ？ そしたら、その演習やる時間が増えっ……」

「……………」

「ルビィネル？」

冊子に書かれた内容を読みながら、いつになく、険しい表情を見せているルビィネルを不審に思い、マルクが言葉を途中で止め、首を傾げる。

「どうかしたかあ？」

「あ、いや」

問いかけるマルクに、顔を上げたルビィネルが、慌てて首を横に振る。

「まあ、そんなに焦って、やることもないだろう。また無理をして、この前みたいに倒れても困るしな」

「とか言って、お前、実は雑用手伝いたくないだけじゃないの？」

「その通りだ」

「あっさり認めたな！」

素直に頷くルビィネルに、マルクが怒るよりも先に、驚く。

「ぶっはぁ、疲れたぁ」

「あ、ポンド」

後方から勢いよく聞こえてきた声に、マルクが振り返ると、そこには、疲れきった様子のポンドが立っていた。ポンドの横にはエメラルディア、それにアメジエスの姿もある。

「休憩？」

「うん。五分だけだけど」

マルクの問いに答えながら、ポンドがルビィネルのすぐ横へと腰掛ける。マルクが広場へと視線を移すと、先程まで演習を行っていた魔女や魔士が、散り散りとなっていた。上級魔士に分類される魔士は、その数は居ない。ポンド、フラン、それにシリング、その他に十名ほどだ。パートナーである魔女と合わせても、三十人に満たないほどの者しか、この講義には参加していなかった。

「白のように汚れなく、黒のように力強い、この僕のために、お茶を淹れたまえ！ 最下級魔士！」

「自分で淹れる。ってか、名前で呼べ」

アメジエスのすぐ横から現れ、偉そうに指示を出してくるフランに、マルクがきっぱりと言い放つ。

「フラン、お茶」

「任せてくれたまえ、我が魔女！」

アメジエスがにこやかに、短く言葉を投げかけると、フランはすぐさま頷き、颯爽とその場を駆け出していった。遠ざかっていくフランの背を見つめ、マルクが呆れ切った表情を見せる。

「相変わらずだな、お前等」

「いいパートナー関係でしょう？」

得意げに微笑むアメジエスに、マルクはさらに、困ったように肩を落とした。

「ふわぁ、しんどいっ」

「ポンド、しんどい……略して、ボンシ……」

略語を作りながらも、エメラルディアが、ベンチに腰掛けている

ポンドへと、タオルを手渡す。ポンドは、受け取ったタオルで、顔や首筋の汗を拭う。そんなポンドを、興味深く見つめるマルク。元々、ポンドが真面目に講義には参加しないためもあってか、マルクは、講義により、ここまで疲れきったポンドを見たことがなかった。参加出来ないとはいえ、自然と、講義の内容に興味が湧く。

「今、何の演習やってるの？」

「ん？ 基礎炎技の合成による、新しい炎技の創生と、魔炎使用による身体影響に関する考察」

「あ、そう……」

聞くからに難しそうな演習内容に、マルクが、がっくりと肩を落とす。今のマルクでは、理解出来そうもない。ブラッドスが参加を認めない理由が、わかった気がした。

「マルクは？ まだ演習、参加出来ないの？」

「うん。別演習のメニユーももらったから、たぶん、しばらくは個人的にやる感じだと思う」

「そう」

マルクの答えを聞いたアメジエスが、少し残念そうに肩を落とす。「別メニユーやるんなら、わざわざ、上級魔士講義になんて、参加しなくて良かったんじゃないの？」

妙に鼻につく、高い声が聞こえ、マルクたちが皆、一斉に振り返る。

「サファイ」

そこに立っていたのは、サファイであった。

「大人しく、下級魔士講義受けとけば良かったのよ。あんたなんて、底辺魔士なんだから」

「どうせ俺は、底辺だよ。底の底だよ」

サファイの容赦ない言葉に傷つき、いつものように肩を落として、唇を尖らせるマルク。

「その底辺魔士に負けたのは、お前んとこのパートナーだろお？」

サファイの発言が気に入らなかったのか、少し眉間に皺を寄せた

ポンドが、嫌味のようにサファイへと言葉を向ける。

「な！ シ、シリングは別に、負けちゃいないわよ！ 魔刀を折られたのだって、ちょおつと油断したからで……！」

「サファイ」

割って入ってくる強い呼びかけに、サファイの言葉が止まる。呼びかけたのは、サファイより後方、まだ広場の中に居る、シリングであった。

「くだらない言い合いはするな。俺の価値が下がる」

「ハイ。かしこまりました」

シリングに冷え切った鋭い視線を向けられ、サファイが、まるで命令されたかのように、大人しく頷く。そのやり取りを見ていたマルクが、ふとシリングへ視線を移すと、一瞬、シリングと目が合った。だがすぐに視線は逸れ、シリングはそれ以上は何も言わず、足早に広場を去っていった。遠ざかっていく背中を見ながら、マルクが軽く息を吐く。

「随分と虐げられているな」

「うっさいわね！」

からかうように口を挟んだルビィネルに、サファイが勢いよく怒鳴り返す。

「あの冷え切った態度こそ、パートナーとしての愛情の裏返しなのよ！」

「とても、そうは見えぬが」

強く主張するサファイに、ルビィネルが呆れ切った表情を見せる。

「っていつか、あんたは、人のこと、とやかく口出す前に、自分の……！ ん？」

文句を続けようとしたサファイが、妙に曇ったルビィネルの表情に気付き、戸惑うように首を傾げる。

「何？ 何かあったの？」

「別に」

「……っ」

短い答えを落とすルビィネルを見て、サファイが少し眉をひそめる。

「ルビィネっ……」

「おおーし、休憩終わり！」

サファイがルビィネルへと言葉を掛けようとしたその時、広場の中央から、ブラッドスの大きな声が響き渡った。五分という、短い休憩時間が、どうやら終わったようだ。

「はあゝあ。しゃあねえけど、行くかあ」

「ポンド、しゃあねえ……略して、ポンシャ……」

「我が魔女、アメジェスよ！ 君の魔士が今、お茶を買って、帰還したよ！」

「いらないから、あなたにあげるわ」

「そうかい！？ なんて心優しいんだ！ 我が魔女よ！」

それぞれに言葉を交わしながら、ポンドとエメラルディア、フランとアメジェスが、広場の方へと戻っていく。サファイは少しルビィネルへと視線を残しながらも、やがて背を向け、皆と同じように、広場へと戻っていった。

「いいなあ」

「そう焦るな。そなたはそなたで、じっくり進めばいい」

「何だよ？ ついこないだまで、今すぐ上級魔士になれとか言って、散々焦ってたのは、そっちだろ？」

数日前とは随分と様子の違うルビィネルに、マルクが不思議そうに問いかける。

「別に」

ルビィネルが、ブラッドスの作った冊子をベンチの上へと戻し、そつと肩を落とす。

「どんなに急いでも、どうにもならないことだつてある」

ルビィネルのその言葉を聞き、マルクが目を丸くする。

「何か、お前っぽくない言葉だな」

「え？」

「ん、何か、こう」

戸惑うようにルビィネルが振り向くと、マルクは首を捻り、考えを巡らせていた。

「ネガティブ？」

「プッ」

マルクの自分でも曖昧なその答えに、ルビィネルが思わず吹き出す。

「そなたにネガティブと言われては、終わりだな」

「どうせ俺は、お前よりもネガティブだよ！ 根暗だよ！ 陰険だよ！」

笑みを零しながら言うルビィネルに、マルクがムキになって怒鳴り返す。

「そなたにネガティブ呼ばわりされては、一生の恥だしな。とつとと、この別演習とやらを始めるか」

「普通、そこまで言うかな……？」

容赦ないルビィネルの言葉に、傷ついた表情を見せるマルク。

「早く、講義の準備とやらを終わらせろ」

「じゃあ、手伝えよ！」

「嫌だ」

「嫌なのかよ！」

自己主張をはっきりとしたルビィネルに、マルクが困ったように、息を吐く。

「はあ、まあいいや。とりあえず準備、準備つと」

マルクが再び準備に取り掛かるべく、テントの中へと入っていく。
「……………」

そんなマルクの方を振り向きながら、ルビィネルはどこか考え込むように、目を細めた。

無事、講義の準備を終えたマルクは、上級魔士たちの講義の邪魔にならぬよう、広場の隅の方で、ルビィネルと共に、ブラッドスの作成してきた別演習を行っていた。

「うーん、やつぱり出来ないなあ。 “放出”」

赤い炎を帯びた自身の右手を見つめながら、マルクが少し困ったように、眉をひそめる。

「そなたは、魔炎を取り込む炎技の方を、得意としている。 “放出”は、魔炎を放つ技。 “燃烧”に “装纏”、そなたの得意としている炎技とは、まるで逆の仕組みだからな」

ブラッドスの作った冊子を見ながら、ルビィネルがマルクへと言葉を掛ける。

「 “放出”でも用いる、魔炎の集中は、戦いの基本。出来るに越したことはないのだがな」

「けど俺、 “転化”使えるし、 “転化”で相手の魔炎を貰っちゃえば、別に、魔炎集めなくていいんじゃないの？」

「すべての魔炎を、転化できるとは限らない」

マルクの問いかけに、ルビィネルが鋭い表情を見せる。

「五元炎ごげんえんならともかく、特火とつか相手では、転化はまず無理だ」
「特火？」

ルビィネルの言葉に、マルクが首を傾げる。

「特火って？」

「その名の通り、特別な魔炎だ」

マルクの問いに、簡潔に答えるルビィネル。

「五元炎、つまり、赤炎、青炎、黄炎、緑炎、紫炎以外の色の魔炎、それが、特火だ」

「へえ、五元炎以外の色の魔炎か。見たことないかも」

「当然だろう」

興味を示すマルクに対し、少し厳しい口調で、言葉を続けるルビネル。

「私たち魔女や、その他の魔族の中には、まれに特火を持った者が存在する。だが、その数はわずか。フレイヤでもそうは居ない」

「まねって、どれくらい？」

「一万人に一人、居るか居ないかだ」

「そんなに少ないの！？ そりゃあ見たことないはずだあ」

ルビネルの解説に、マルクが納得した様子で、何回か頷く。

「特火を持つ者たちは、“特火保持者”と呼ばれ、どの国の者であっても、フレイヤ政府で一括管理されている」

「管理？　なんで？」

「特火が、五元炎とは比べものにならないほどの、強力な魔炎だからだ」

すぐさま返って来たルビネルの答えに、マルクの表情が少し曇る。

「特火保持者を特定し、居場所を把握し、その者を管理しておかねばならぬほどに、特火は、この世界の脅威と成り得る、ということだ」

「へ、へえ」

少し表情を引きつりながら、ルビネルに相槌を返すマルク。

「何か、ちよつと怖い、な」

素直なマルクの言葉に、ルビネルがそつと、目を細める。

「……だろうな」

ルビネルが、マルクには聞こえぬ小さな声を落とす。

「そろそろ、日も落ちる。今日はここまでにするか」

「そうだね。ポンドたち、終わってるかなあ？」

マルクとルビネルが言葉を交わしながら、広場の中央へと歩いていく。広場の中央部には、疲れ切った様子で地面に横たわっている魔士や、しゃがみ込んでいる魔女が、多く見られた。だが、そこに、ポンドやアメジエスの姿はない。首を傾げたマルクが、少し離

れた場所で、固く腕組みをし、立っているブラッドスの元へと歩み寄っていく。

「ブラッドス」

「ん？ ああ、お前等も終わったのか？ 悪いな、今日はろくに見に行けなくて」

「それは、別にいいけど。もう講義、終わったの？」

「もう終わりたいとこなんだけど、まだ、粘ってる奴らが居てよお」「粘る？」

ブラッドスの言葉に、マルクとルビィネルが同時に首を傾げる。

その時、広場に隣接された森の中から、何かがぶつかり合うような、かすかな衝撃音が聞こえた。

「森で、何かしているのか？」

「ああ。魔炎組み込み式の罠が張り巡らされた森の中で、何時間逃げ回れるかの耐久レース」

「すごいこと、やってるね……」

演習内容を聞いたマルクが、思わず表情を引きつる。

「ほとんどの奴は、リタイヤして、戻って来たんだけどよ」

「だから、皆、ヘバってるのか」

ひどく疲れた様子の魔士や魔女の様子を見て、納得したように頷くマルク。上級魔士に区分される魔士と、そのパートナーが、これほどにヘトヘトになってしまっているのだ。相当の罠が、森の中には張り巡らされていたのだろう。

「けど、まだ三組ほど、粘ってやがるから、講義終わりたくても、終われねえんだよなあ」

「三組って、ポンド、エメラルディアに、アメジェス、フランに、後は、シリングとサファイ？」

「ああ」

マルクがこの場に居ない者の名をあげると、ブラッドスが大きく頷く。

「シリング・ウェーガットはともかく、お前のダチ連中も、なかなか

かの実力だぞ。ありゃあ」

「……っ」

ポンドやアメジェスを誉める、ブラッドスのその言葉に、マルクは思わず表情を曇らせた。上級魔士たちの中でも、優れている仲間と、別演習しか行ふことの出来ない自分を、嫌でも比較させられる。「どうせ……どうせ俺なんて、最下級なんだよぉー！」

「うわっ。何だよ？ いきなり」

突如、頭を抱え、叫び声をあげるマルクに、ブラッドスは困り果てた表情を見せた。

一方、その頃。広場に隣接された、森の中。

「来た！」

かすかなスイッチ音と共に、木々の中から飛び込んでくる紫色の炎に、ポンドが目つきを鋭くする。

「メル！」

「私の、緑炎……起き、る……」

ポンドからの呼びかけに応え、エメラルディアが、胸の前でそつと、両手を合わせる。すると、ポンドの体を、淡い緑色の炎が包み込んだ。

「りよくへきえん緑壁炎”！」

ポンドが向かって来た紫炎へと右手を突き出し、力強く言葉を発すると、ポンドの前に、緑色の炎の壁が出来上がり、向かってきた紫炎を、空の方へと、勢いよく弾き飛ばした。

「りよくそつか緑草火”！」

続けてポンドが言葉を発すると、木々の奥に隠されていた、先程、紫炎を放ったと見られる、両手で抱えるには余るほどの大きさの、黒い装置の周囲で、まるで、草でも生えるかのように、緑色の炎が地面から突き上げ、あっという間に装置を燃やし尽くした。

「よしつ、一丁上がり！」

「ナイス、ポンド……略して、ナポン……」

得意げに右手を突き上げるポンドに、エメラルディアも親指を突き立てる。特に表情は無いが、恐らく、喜んでいるのだろう。

「けど、そろそろ疲れて来たなあ。暗くなってきたし。もう、このまま、帰っちまうかあ？　メル」

「サボる、ポンド……略して、サポン……」

「はあ」

答えになっていないエメラルディアの言葉を聞き、ポンドが少し、困ったように肩を落とす。ゆつくりと顔を上げ、空を見上げると、空は夕焼けにより、茜色に染まっていた。

「日が落ちれば、講義も終わんだろ。とりあえず、一旦、戻……」
空を見上げながら、言葉を続けていたポンドが、不意に眉をひそめる。

「ポン、ド？」

「逃げろ、メル！」

「え……？」

エメラルディアがポンドのその言葉の意味を問う前に、二人に、空の色と同じ、茜色の炎が、降り注いだ。

「紫閃火^{しせんか}」！

光線のように鋭い紫炎を右手から放ち、ポンドたちと同じように、森の中に隠された、魔炎を発生する黒い装置を燃やし尽くすフラン。装置が壊れたことを確認すると、フランが得意げな笑顔を作り、後方を振り返る。

「どうだい！？　見てくれたかい！？　我が魔女！」

「見てなかったわ。ごめんなさい」

明後日の方向を向いたまま、アメジエスが素っ気なく答える。近くの木を背もたれに、地面へと腰掛けたアメジエスは、退屈そうな

表情を見せていた。

「そ、そうかい。じゃあ、次こそ……！」

「ねえ、もうこの演習にも飽きたし、リタイヤしたってことにして、広場に帰らない？」

「それは出来ないよ！」

基本、何でもアメジェスの言うことであれば聞くフランであったが、今回の問いかけには、迷うことなく、勢いよく首を横に振った。「僕は、途中で投げ出すことが、一番、嫌いなんだ。常に、ネバーギブアップ！ 不屈の精神こそが、この僕だあー！」

「本当、無駄にポジティブ……」

夕焼けに染まった空へ向け、宣言するように堂々と叫びあげるフランを見つめ、アメジェスが困ったように肩を落とす。フランは本当に、何でもかんでも、すぐに諦めるマルクとは、まるで真逆の間である。

「でも、そろそろ日も落ち始めたし、講義終了を確かめくらいは……」

ゆっくりと立ち上がり、フランへと声を掛けようとしたアメジェスが、何かに気付き、目を見開く。

「フラン……！」

「え？」

アメジェスが必死に身を乗り出す中、フランへと、茜色の炎が落ちた。

「戻って来る気配もねえなあ」

すでにリタイヤし、広場にて座り込んでいた生徒たちを集め、講義終了の準備を始めたブラッドスであったが、再び森を振り返り、困ったように息を吐く。森から、ポンドやアメジェスが戻って来る様子はなく、それどころか、まだ、魔炎の衝突音が聞こえてくる。

「仕方ねえ。あいつ等は、俺が後で呼びに行くから、お前等は先に解散でっ……」

『うつつ』

「あ？」

ブラッドスが解散の指示を出そうと振り向いたその時、集まっていた魔士や魔女たちが突然、バタバタと地面に倒れていく。次々と倒れていく生徒たちに、眉をひそめるブラッドス。

「な、何っ……」

「マルク」

同じように戸惑ったマルクの右手を、ルビィネルが素早く、左手で握り締める。演習時の魔炎が途切れていなかったのか、二人は再び魔炎を共有し、マルクの体を淡い赤色の炎が包み込んだ。

「“燃烧”を使え」

「へ？」

「早く」

「あ、う、うん」

真剣な表情で言い放つルビィネルに圧倒されるようにして、マルクがその言葉通り、燃烧を使う。マルクの体を包む炎が、さらに赤く、強くなった。

「ちっ」

軽く舌打ちをしたブラッドスが、マルクと同じように、自身の体を、紫色の魔炎に包ませる。恐らくは、燃烧を使ったのだろう。ルビィネルも同じように、赤色の炎を纏う。いつの間にか、マルクたち三人以外の者すべてが倒れ、気を失ったように、深く目を閉じていた。

「ぎゃあああ！ 何か皆、倒れてるぅー！」

「うっせ」

両手で頭を抱え、焦りをそのまま叫び声へと変えるマルクに、ブラッドスがうんざりした表情で吐き捨てる。

「な、何だよ、これ！？ 一体、何がどうなってんの！？」

「^{げんえん}幻炎”だ」

「げん……？」

「その通りっ」

ルビィネルの言葉を、マルクが理解出来ていないそこへ、広場へと三人のものではない声が響き渡り、三人は一斉に振り向いた。

「あ……！」

「こんにちはあ」

森の入口にある高い木の上から、森と広場との境にある、わずかな平地へと飛び降り、その場へと姿を現したのは、魔士の制服を纏った、茶色い髪に金色の瞳の、一人の青年であった。リラである。

「もう、空も茜色に染まつてるし、こんばんはかなあ？」

大きく笑みを浮かべ、首を傾げるリラを見て、ブラッドスが険しい表情を見せる。

「誰だ、てめえは。ここは魔院の敷地内。部外者は、立ち入り禁止だぞ？」

「部外者って、ひどいなあ。ちゃんと制服着てるの、見えない？」

「俺は、生徒の顔は全員、覚えてる。お前は、うちの生徒じゃねえ」

「フフっ、カッコいいね、先生」

はつきりと断言するブラッドスに、リラが茶化すように笑みを向ける。

「僕の名前は、リラ・ヒューズベル」

右手を胸に当て、リラが自身の名を名乗る。

「“サードニックの手の者”って言えば、君にはわかってもらえるかなあ？ ルビィネル」

「……っ」

ブラッドスから視線を移し、どこか冷たい笑みを浮かべるリラに、ルビィネルが一際、厳しい表情を見せる。

「サードニックって、何か前、どっかで……」

——そなたもサードニックの手の者か！？——

「あつ」

聞き覚えのあるその名に、首を傾げていたマルクが、ハツとした表情を見せる。それは、初めて出会った時、ルビィネルが口にした名であった。マルクを、サードニツクの手の者と勘違いしたルビィネルは、マルクへと攻撃を仕掛けてきたのである。

「ルビィネル」

答えを求めるように、ルビィネルの方を振り向くマルクであったが、ルビィネルはリラの方を見つめたまま、マルクの方を見ようとはしなかった。

「君に、見て貰いたいものがあるんだ。ルビィネル」

さらに笑みを深くしたリラが、軽く右手をあげる。すると、リラのすぐ横に、大きな赤色の炎の塊が現れた。その炎が、細かく分解されるように枝分かれしていくと、中から、マルクたちもよく知った姿が現れる。

「ポンド！ アメジエス！ 皆！」

思わず身を乗り出すマルク。枝分かれした赤い炎の中、立ったまま、深く目を閉じているのは、ポンド、アメジエス、それにエメラルディア、フランの四人であった。四人を囲む炎は、まるで檻のようで、四人は、両手首を炎の鎖で繋がれ、檻の天井部分の炎から、体を吊り下げられている。

「そなた……！」

一気に険しい表情となり、リラの方を振り向くルビィネル。そのルビィネルの視線を受け、リラが楽しげに笑う。

「この子たちを無事、解放してほしいなら、僕の言う通りにしてよ。ルビィネル」

「……っ」

脅迫めいたリラの発言に、強く唇を噛み締めるルビィネル。

「ふざけんじゃねえっ」

その時、ルビィネルを庇うように、ルビィネルの前に、ブラッド

スが出た。すぐ前へと現れた背中を見て、ルビィネルが驚いたように目を開く。

「ブラッドス」

「人の講義に乱入した上に、人の生徒に勝手なマネしやがって」
鋭い目つきをさらに鋭くし、ブラッドスがリラを睨みつける。

「舐めてんじゃねえぞ、ガキが！」

ブラッドスが、紫色の炎を纏った右手を、まっすぐにリラへと向ける。はつきりと攻撃の意志を示すブラッドスに対し、リラはどうか、余裕めいた笑みを浮かべていた。

「ごめんね、先生」

「何？ うっ！」

謝るリラに、戸惑うように眉をひそめたブラッドスであったが、次の瞬間、ブラッドスが苦しげな声をあげ、力なく、その場に膝をつく。

「ブラッドス！？」

「あなたが一番、邪魔になると思って、こっそり付けといたんだ」
膝をついたブラッドスへと、慌てて駆け寄るルビィネル。

「魔蟲っ」

「な、に……？」

「これか！」

ルビィネルが、ブラッドスの後頸に張り付いた、小さな黒色の虫を見つけ、素早く右手で払う。

「無駄だよ。その魔蟲が持つ痺れ毒は、とっくに先生の体中に回ってる」

「ク、ソっ……」

微笑むリラに、悔しげな表情を見せながら、ブラッドスはそれ以上、目を開いていることも出来ずに、深く目を閉じ、その場に倒れ込んだ。倒れたブラッドスを、丁寧に地面に横たわらせながら、ルビィネルがさらに、険しい表情を見せる。

「る、ルビィネル、これって、もしかしくとも、すっごくピンチ

っていうやつじゃっ……」

「そなたにしては、察しがいいな」

「うえええ！？ やっぱいいい！？」

肯定するルビィネルに、マルクがさらに焦った様子で、頭を抱える。

「さあ、どうする？ ルビィネル」

リラからの問いかけに、ルビィネルが険しい表情のまま振り向く。

「み、皆っ……！」

その場に居ても立ってもいられず、マルクが、炎に囚われたポンドたちの元へと、駆け出していく。

「うわっ！」

だが、マルクたちの居る広場を囲うようにして、赤い炎の壁が噴き上げ、マルクは思わず足を止めた。その炎の壁は境界線となり、マルクと、ポンドたちを遮る。

「勝手に動かないでね、最下級魔士クン」

「うっ」

微笑みかけるリラに、マルクが少し、怯えた表情を見せる。

「ルビィネル、何とか……！ あっ」

皆を助ける術を求め、ルビィネルの方を振り向いたマルクであったが、思わず途中で、言葉を止めてしまう。ルビィネルは、今まで見たこともないほどに、追い詰められた表情を見せていた。今、ルビィネルに助けを求めても、どうにもならないことは、すぐに理解出来た。

「ルビィネル……」

強く唇を噛み締めたルビィネルを、今度は案じるように、マルクが小さく呼ぶ。

「僕が言いたいこと、頭のいい君にはもう、理解できてるよね？」

リラがどこか試すように、ルビィネルへと問いかける。

「さあ、ルビィネル。僕と一緒に、フレイヤにつ……」

「“青流火”せいりゅうか」

「……っ」

上空から降り落ちて来る何かに、リラが途中で言葉を止め、素早く後ろに跳ぶ。先程までリラの居た場所へと、青い炎が勢いよく落ちた。

「魔炎が見えたから、戻って来てみれば、随分な展開だな」

森の方から聞こえてくる声に、マルクたちが同時に振り向く。

「さすがは、上級魔士講義といったところか」

「シリング！」

「サファイ」

森の奥から、その場へと姿を現したのは、鋭い表情を見せた、シリングとサファイであった。現れたその姿に、マルクが思わず、ホツとしたような笑みを見せるが、ルビィネルは依然として、険しい表情のままである。

「何だ。まだ人が残ってたんだ」

リラはまた笑みを浮かべ、シリングとサファイの方を振り向く。

「一応、森の中は全部、探したつもりだったんだけど」

「飛んで来た魔蟲なら、すべて俺が、燃やし尽くした」

「あ、そう」

挑戦的に言い放つシリングであったが、リラは余裕の笑みでただ、頷くだけであった。

「この間の魔蟲やら魔虎やら、色々と変だと思ってたけど、全部、あんたの仕業だったのね！」

シリングの横から、サファイが強く、リラを指差す。

「へえー、^{へきお}碧王の娘は、結構なおバカだって噂で聞いてたけど、一応、頭回るんだね」

「何ですってえ！？」

天使のような、何の悪気もない、綺麗な笑みで微笑みかけるリラに、サファイが顔を引きつらせる。

「サファイ、くだらない挑発に乗るな。パートナーである、俺の価値まで下がる」

「クウー！」

シリングの言葉を受け、それ以上、怒鳴ることは止めたものの、悔しさを抑えることが出来ずに、サファイが両拳を握り締め、声にならない声を漏らす。

「魔蟲や魔虎って……じゃあ、特別講義や、トウーパの時の、あれは……」

「そう、ぜえーんぶ、僕の仕組んだことっ」

戸惑いの表情を見せたマルクの方を振り向いて、リラがまた、楽しげに笑う。

「色々と仕組んでみたんだけど、君や、その最上級魔士クンが、結構頑張ってくれちゃったから、失敗続きでさ。ついに、自分で出てきちゃったってわけ」

「なら今回も、失敗にしてやる」

事情を説明するリラに、シリングが強気に言い放つ。

「魔刀だ、サファイ」

まだ悔しげな表情を見せたまま、サファイがシリングへと、魔刀を手渡す。魔刀を伸ばしたシリングは、すぐさま、魔刀へと青い炎を纏わせた。

「何？ 僕の邪魔、するの？」

「俺には、お前の邪魔をしない理由がない」

「そっかあ」

一度笑みを止めたリラが、獲物を狙うように金色の瞳を輝かせ、冷たく微笑む。

「じゃあ、遠慮なくっ」

少し低い声を落とした後、リラがその場から姿を消す。そっと目を細めたシリングが、何の迷いもなく、上方を見る。

「それで隠れたつもりか？」

鋭く問いかけ、魔刀を振り上げるシリング。

「せいざんか青斬火”！」

上空へと振り上げられたシリングの魔刀から、青々とした炎の塊が放たれる。その炎の向かう先には、いつの間にか、上空へと飛び上がったいたらしい、リラの姿があった。迫り来る魔炎にも焦らず、リラが足元へと、右手を振り払う。

「“脚火”」

両足に赤い炎を纏わせ、炎の勢いで空中を駆け、向かって来たシリリングの青炎を避けるリラ。

「ああ、惜しい！」

炎を避けたリラを見て、マルクが悔しげに拳を振り抜く。

「でも、普段は嫌味な奴だけど、こういう時は頼りになるよなあ、あいつ」

先程までとは異なる、安心しきった笑みを浮かべるマルク。普段は、優れたシリリングに、劣等感を抱いてばかりであるが、今は緊急事態である。シリリングの強さが、逆に心強かった。

「……っ」

笑みを浮かべるマルクの横で、ルビィネルはまだ、浮かない、陰しい表情を見せている。

「逃すか。“脚火”」

シリリングも同じように、両足に青い炎を纏って、地面を蹴り、空中へと飛び出していく。

「よし、行け！ シリリング！」

飛び上がるシリリングを後押しするように叫び、右手を突き上げるマルク。

「駄目だ」

「へ？」

ルビィネルが呟いたその言葉に、マルクが戸惑うように振り向く。
「駄目だ、戦うな！ 逃げる、シリリング！」

身を持ち出したルビィネルが、空中へと飛び上がるシリリングへと叫んだのは、マルクとはまったく正反対の、ルビィネルらしからぬ言葉であった。

「ルビィネル？ 何、言っ……」

「戦うな、シリリング！ そなたでは、あの者には勝てぬ！」

マルクの問いかけも遮る、必死の叫びが、上空のシリリングにも届き、シリリングがかすかに、眉をひそめる。

「俺では、勝てない、だと？」

顔を上げたシリングが、さらに上空で、まるで挑発するように微笑んでいるリラを見て、さらに眉間に皺を寄せる。

「ふざけたことをっ」

吐き捨てるように呟き、さらに両足の炎の勢いを強めて、リラへと向かっていくシリング。

「シリング！」

そんなシリングの姿に、ルビィネルがさらに身を乗り出す。

「な、何、そんなに必死になってるんだよ？ 大丈夫だって！」

広場を囲う、炎の壁にすら飛び込んでいきそうな勢いのルビィネルを止めるように、マルクが、ルビィネルの右手を、左手で強く掴む。

「あいつ、最上級魔士だよ？ お前だって、知ってるだろ？ この前だって、あんなデッサイ魔虎をあっさりっ……」

「そんなレベルの話ではない！」

強い口調を発したルビィネルが、まるで睨むように、マルクを見る。

「あの者はっ……あの者は、“特火保持者”だ！」

「えっ……？」

切羽詰まったルビィネルの表情に、マルクの表情のまた、陰しく曇る。

「燃え尽きる」

リラと同じ高さまで飛び上がったシリングが、鋭く目を細め、何の躊躇いもなく、魔刀を振るう。

「“青斬火”！」

再びリラへと向けられた青い炎は、先程よりも、勢いを増している。だが、リラは、相変わらず焦りの色一つ見せずに、ゆっくりとした動作で、右手を前へと出した。

「起きてよ、僕の茜炎^{せんえん}」

前へと出されたリラの右手を、夕焼けによく似た、赤々とした炎が包み込む。炎を纏った右手を、リラが、シリングの炎へと向ける。

「茜熱^{せんねつ}」

リラの右手に纏われた炎が、リラの言葉と同時に勢いよく飛び出し、まるでマグマのように、激しく燃え盛って、目にも留まらぬ速さで空中を駆け抜け、シリングの青い炎へと衝突する。二色の炎は、ぶつかり合った途端、押し合いを繰り返すことなく、一瞬にして、シリングの青炎が掻き消えた。

「何？」

「えっ!？」

掻き消えた青炎に、シリングと、下方にいるサファイが、同時に驚きの表情を見せる。だが、驚き戸惑っている間もなく、青炎を消し去ったリラの炎が、まっすぐにシリングへと向かって来た。

「ク! “青壁火”!」

シリングが前方に青色の防御炎を張り、向かって来たリラの炎を受け止める。

「無駄だよ」

「何？」

はつきりと言い切るリラに、シリングが壁の向こうで、眉をひそめる。

「ただの青炎じゃ、僕の茜炎は、止められない」

リラの言葉を表すように、リラの炎は、その壁の青炎とも、ぶつかり合ったのも一瞬で、すぐさま、シリングの防御の炎を消し去ってしまった。

「な!？」

「シリング!」

シリングがさらに驚きの表情を見せる中、赤い炎が迫り行くシリングの姿に、サファイが下方から身を乗り出し、勢いよく左手を突き上げる。

「火嵐^{からん}」!

サファイが下方から、竜巻のように逆巻く、強い風を纏った青炎を放ち、シリングへと向かっていたリラの炎を、さらに上空へと弾

き飛ばす。

「僕の特火は、普通の五元炎じゃ消せないからって、遠くへ飛ばしたんだねえ。ナイス、判断っ」

弾き飛ばされていった青炎を見送り、リラが感心するように言う。

「でえもっ」

「うっう……！」

リラが目を細めると同時に、下方のサファイが、苦しげな声を漏らし、地面へと力なく膝をつく。

「ダメだよお？　今みたいな強い炎技、魔女が単体で使っちゃあ。寿命が縮んじやうっ」

「クっ……」

嘲笑うかのように言い放つリラに、サファイが顔だけを上げ、苦々しい表情を向ける。そんなサファイの表情を見て、さらに楽しげに微笑んだ後、リラがサファイへと、右手を向けた。

「大人しくしてなきゃ、ね？」

「あっ……！」

向けられる茜色の炎に、サファイが目を見開く。

「きゃああああ！」

「サファイ！」

リラから向けられた炎を直撃し、後方へと吹き飛ばされていくサファイに、シリングが上空から、思わず身を乗り出す。だが、シリングが何もしないままに、サファイは炎に焼かれ、深く目を閉じて、地面へと倒れ込んだ。サファイが倒れたと同時に、シリングの魔刀を包んでいた青炎が、そっと消える。

「あ、消えちゃったねえ。パートナーが、気絶しちゃったからかなあ？」

「貴様っ」

楽しげな笑みを浮かべるリラに、表情を険しくしたシリングが、勢いよくリラの元へと飛び出していき、もう炎を纏っていない魔刀を、リラへ向けて、振り上げる。

「魔炎もないのに、僕と戦うっていうの？」

「う……！」

馬鹿にするように、そう問いながら、リラが振り下ろされたシリングの魔刀を、右手の人差し指一本で、あっさりと受け止める。炎がないとはいえ、全力を込めた魔刀を、指一本で止められ、シリングの表情に、衝撃が走る。

「その勇気は感心するけどねえ」

リラの、魔刀を受け止めている指の先が、赤く光ると、指に触れている部分から、シリングの魔刀が、まるで溶かされるようにして砕けていく。魔刀が完全に砕け散り、丸腰となったシリングへと、リラが微笑みながら、右手を向けた。

「ちよつと無謀、だったかな？」

「うううあああ！」

リラの右手から放たれた茜炎が、至近距離で、シリングへと直撃する。

「シリング！」

炎に焼かれ、力なく上空から落下してくるシリングに、思わず身を乗り出すマルク。シリングはうつ伏せ状態で地面へと落ち、倒れ込んだそのまま、起き上がることはなかった。そこへ、ゆっくりと、リラも空から降りてくる。

「レイル聖魔院の最上級魔士も、この程度か。底が知れてるね」

「うつ……」

降りて来たリラに、魔紋の刻まれた右手を踏みつけられ、シリングの火傷を負った表情が、さらに苦しげに歪む。

「そんなん……あのシリングが、あっさりとっ……」

「クっ……」

驚きなどを通り越し、最早、啞然と立ち尽くすだけのマルクの横で、ルビィネルは険しく、そしてどこか、苦しげな表情を見せ、拳を強く握り締める。

「さあ」

シリングの体を蹴り上げ、少し離れた場所へと退かせると、リラが再び、ルビィネルの方を見る。

「交渉の時間だよ、ルビィネル」

リラがまっすぐにルビィネルの方を向き直り、誘うように笑う。

「僕の要求は一つ。君が今すぐ、僕と共に、フレイヤに戻ることに」
力強くルビィネルを指差し、リラがはっきりと言い放つ。

「フレイヤに戻ることで……」

リラの要求を聞き、戸惑いの表情を見せるマルク。

「何？　なんで？　だってお前、フレイヤの魔院から、レイールに転入してきたんじゃない？……」

「フフフ、そんな、くだらない嘘ついてたの？　ルビィネル」

マルクがルビィネルへと事実を確かめる前に、リラから来た言葉が、偽りを告げる。

「違うよ、最下級魔士くん。その魔女は、フレイヤから転入して来たんじゃない」

強く否定しながら、リラがまっすぐにルビィネルを見る。

「その魔女は逃げて来たんだ。フレイヤから、無断で、このレイールにね」

「逃げ、て？　あつ……」

——公共のものを使えば、見つかるだろう？——

——見つかるって、誰に？——

マルクが、初めて出会った日の、不自然だった会話を思い出す。

会ったばかりのマルクを、敵と認識し、攻撃を仕掛けたルビィネル確かに、逃げて来たのだとすれば、あの不自然だった態度や、言葉の数々もすべてが、合致する。合致するからこそ、リラの言葉を、すぐに、でたらめだと思うことは出来なかった。

「で、僕がわざわざ、フレイヤから捕まえに来たってわけっ」

丁寧に説明してあげたとばかりに、リラがマルクへと笑いかける。
「これで事情は、わかってもらえたかな？　わかってもらえたんな

ら、なるべく、邪魔はしないでね」

子供をあやすような言い方を見せるリラに、マルクが少し眉をひそめる。

「さあ、ルビィネル」

再びルビィネルへと、視線を移すリラ。

「まあもう、予想はついていると思うけど、すつごくノーマルに、悪役的なこと、言っちゃうね」

リラが目を細め、どこか無邪気に笑う。

「僕に従わないなら、この子たちを」

視線を横へと流したリラが、炎の檻に囚われた、ポンドたちを見る。

「燃やすよ」

「……っ！」

低く響いたリラの声と同時に、炎の檻の周りに、さらなる茜炎が逆巻く。予想出来ていたこととはいえ、そのあまりに強い炎と、炎に包まれた仲間の姿を前に、マルクもルビィネルも、平静ではいられなかった。

「ポンドっ……アમેジエス……皆！」

「マルク！」

止めようとするルビィネルの声も届かず、マルクがその場を飛び出し、燃焼により、ルビィネルの魔炎に包まれた両手を勢いよく、振り上げる。マルクの両手は、皆の捕まる檻と、マルクたちのいる広場とを区切る、リラが作り出した炎の壁へと向けられた。

「我が赤き炎へと染まれ！ “赤染火”！」

せきせんか

マルクが力強く叫び、両手を壁へと向けるが、壁の炎は少しも揺らめかず、マルクの炎となる様子は見せなかった。

「変われ、“赤染火”！」

「無駄だよ」

必死に叫ぶマルクに、壁の向こうから、リラがそつと微笑みかける。

「僕の炎は、茜炎と呼ばれる特火。君ごときが、“転化”出来るよ
うな炎じゃない」

微笑みの中で、視線だけが冷たく、マルクへと注がれる。

「最下級魔士クンが、どうにか出来るものじゃないんだよ」

「変わって、変われよ！」

リラの言葉を受けながら、それでも必死に叫び続けたマルクが、
まるで動かない分厚い炎の壁に、想いをぶつけるように、自身の両
手を叩きつけた。

「変わってよっ……！」

壁へと叩きつけられたマルクの手が、マルクの想いを汲み、壁を
通り抜けることはなく、むしろ、その手は、壁の炎により、焼かれ
る。だが、それでもマルクは、壁から手を引こうとはせず、そのま
ま力なく、その場に膝をついた。

「クソおっ……！」

「マルク」

深く目を閉じ、俯いて、悲痛な声を漏らすマルクを見つめ、ルビ
イネルがそっと、目を細める。

「ああゝあ、可哀想っ」

まるで他人事のような呟きを落とすリラに、ルビイネルが強く表
情を歪め、鋭い視線で振り向く。

「ふざけるな！ そなたが、用があるのは、私であるう！？」

「うん、そうだよ」

怒声を響かせるルビイネルに対し、リラは笑顔のまま、難なく頷
く。

「ならば、関係のない者を、巻き込むようなまねっ……！」

「うん。こんなマネ、するつもり、なかったんだけどね」

「何？」

遮るリラのその言葉に、ルビイネルが戸惑うように、眉をひそめ
る。

「でも、仕方ないじゃない？」

試すように問うリラの笑みが、冷たくなる。

「君が、関係のない人たちを、巻き込んだじゃったんだから」

「……っ！」

はつきりと放たれるリラの言葉に、ルビィネルが、大きく目を見開く。

「最初に、関係のない、善良な魔士をパートナーにして、関係のない善良な、彼の友達を巻き込んだのは、君っ」

告げられる言葉に、ルビィネルの表情が、陰しく変わる。

「今、こんなことになっちゃってる原因は、ぜえ〜んぶ、君だよ。ルビィネル」

「わ、たしっ……」

リラの言葉に、ルビィネルが声を震わせ、明らかな動揺を見せる。「さあーてと、このままじゃ埒明かない感じだし、試しに一人くらい、燃やしておこうかぁ」

軽々とそう言ったリラが、右手をあげると、四人を包む炎が、より一層、強く逆巻く。

『うっうっ』

「皆！」

炎の中で、苦しげな声を漏らすポンドたちに、マルクが再び目を開き、勢いよく立ち上がる。

「ポンド！ アメジエス！ みんな、みんなああ！！」

「マルク！」

壁を叩き続けるマルクの手が、黒く焼け焦げていくその姿に、ルビィネルが眉をひそめ、慌ててマルクの元へと駆け寄っていく。

「やめろ！ そなたの手が、使いものにならなくなる！」

「うう！」

ルビィネルに勢いよく引かれ、やっとのことで、壁から手を離すマルク。壁を叩くことすら、許されなくなったマルクは、涙の浮かんだ両目で、リラの方を振り向いた。

「やめて、やめてよ！ 皆を殺さないで！」

「フフフ」

ただ縋りつくように、必死に懇願するマルクを見て、リラがただ、楽しそうに笑う。

「嫌っ」

「……っ！」

あつさりと断るリラに、マルクの表情が、絶望の色へと染まる。

『うっうっ！』

「あっ……っ！」

さらに苦しい声漏らす仲間たちを振り向き、一層、険しい表情となるマルク。だがもう、壁を叩く力すら持てずに、マルクは力なく、その場に座り込んだ。

「なんでっ……なんで俺には、皆を助ける力がないんだっ……」

頭を抱え込み、マルクが嘆くように、言葉を落とす。

「なんで俺はっ、最下級魔士なんだよっ……！」

「マルク」

力のない自分を嘆き、血が滲むほど強く、唇を噛み締めるマルク。そんな痛々しいまでのマルクの姿に、ルビィネルは掛ける言葉も見つけられず、ただ苦しげに眉をひそめる。

「大丈夫だよ、一瞬で燃やしてあげるから。君のお友達は、苦しむこともない」

俯いたままのマルクに、何の救いにもならない言葉を向けるリラ。「最初は、そうだなあ。あの茶髪の魔士クンにしようかな」

「……っ！」

四人の中から、ポンドへと狙いを定めるリラに、マルクが大きく目を見開き、勢いよく顔を上げる。

「ダメだ！ やめろ、やめろ……！」

「だから、やめないってばあ」

必死に叫ぶマルクに、当たり前のように答え、リラが右手に茜色の炎を纏う。

「見てられないなら、下を向いてればいいよ。ああ、でも、ちよっ

と見てほしいかなあ」

少し首を傾け、リラが、無邪気に笑う。

「人が燃えるところって、とっても綺麗なんだよあ」

「……っ」

残酷なまでに無邪気なその言葉に、マルクが、自身の手を掴んでいたルビィネルの腕を、逆に強く、掴み返す。

「マルク？」

マルクの手には掴まれ、ルビィネルが戸惑うように、マルクを見下ろす。

「なん、でっ……」

「え？」

小さな、弱々しいその声に、ルビィネルが耳を傾ける。

「なんで、俺たちが……こんな目に、遭うの……？」

声を、肩を震わせ、マルクが静かに、問いかける。

「俺たちが、一体、何をしたっていうの……？」

「……っ」

ゆっくりと顔を上げたマルクの、その赤い瞳からは、涙が溢れ落ちていた。その涙と、答えることの出来ない問いかけを向けられ、ルビィネルが、息すら出来ないような、そんな苦しい表情を見せる。

「マルクっ……」

「ああ、あ、可哀想っ」

マルクの方を向いていたルビィネルの背に、非難するような声が飛んでくる。

「逃亡魔女のくだらない茶番なんかに、巻き込まれちゃったせいで、こんな目にい。本当、可哀想な子たちだなあ」

「……」

その言葉が、ルビィネルの心を揺さぶるための挑発であることなど、容易に理解出来たが、それでもルビィネルは、大きく心を揺れ動かさずにはいらなかった。

—— ルビィネルちゃん！ ——
—— おはよう、ルビィネル ——

ルビィネルが、炎の中に囚われた、皆の姿を見つめながら、何の躊躇いもなく、笑顔に向けてくれた、ポンドやアメジェスの姿を思い出す。

—— ありがとう、ルビィネル。俺と、パートナーになってくれて ——

ルビィネルが、今、目の前で泣いているマルクを見つめながら、何の疑念もなく、ただ嬉しそうに笑顔に向けて、礼を言ってくれたマルクの姿を思い出す。少しの間の後、ルビィネルの表情から、苦しみや焦りの色が、すっと、抜け落ちるようにして、消えていく。
「マルク」

ゆつくりと、マルクの前にしゃがみ込んだルビィネルが、地面に力なく置かれたマルクの右手に、自身の左手を重ね合わせる。

「そなたの、望みはなんだ？」

涙を流すマルクの顔を覗き込むようにして、ルビィネルが静かにマルクへと問う。

「望、み？」

「ああ」

聞き返したマルクに、大きく頷きかけながら、ルビィネルが優しい微笑みを浮かべる。

「俺、俺はっ……」

そのルビィネルの笑みに導かれるように、ゆつくりと、言葉を落とすマルク。

「俺は、友達を、仲間を、誰一人、死なせたくないっ……」

震えた声で、出来る限りの想いを込めて、マルクがそっと、言葉

を紡ぐ。

「俺、俺はっ、皆を守れるだけの、力が欲しいっ……！」

切実なその言葉を、ルビィネルが正面から、まっすぐに受け止める。

「わかった」

ルビィネルが笑みを浮かべたまま、何の躊躇いもなく、頷く。

「そなたの望みは」

ルビィネルが、重ね合わせた左手で、力強くマルクの右手を握り締め、マルクの右手を引っ張るようにして、ゆっくりと左手を、胸の前まで持ち上げる。

「私が叶えるっ……」

二人の間で、握り締められた二人の手の魔紋が、強く輝きを放つ。

「目醒めよ」

瞳を鋭くし、ルビィネルは高々と、その手を上げた。

「我が、“朱炎”^{しゅえん}！」

——
パアアアン！

「うっ！」

あまりにも強烈な光が、瞳の中へと飛び込んできて、リラが思わず目を伏せ、光から逃げるように、身を屈める。光の残像がまだ目に残る中、徐々に、うかがうように、ゆっくりと、再び、その瞳を開いていくリラ。

「何っ……あっ」

開いたばかりのリラの瞳が、大きく見開かれる。リラの張った、茜色の炎の壁の向こう、広場の中から、もうすっかり日の落ちた、暗闇の空へと突き上げられている、真っ赤な炎。それは、ただの赤色ではない。橙色にも似た、もっと鮮烈な赤。朱色の炎であった。

「特火をつ……？」

突き上げられた、その鮮烈な朱色の炎を見上げながら、リラがそつと眉をひそめる。だが、そのリラの視線は、何かがひび割れるような、甲高い音により、再び下方へと下げられた。リラがまっすぐに前方を見ると、リラの張った茜炎の壁に、大きくヒビが入る。やがてヒビは、壁全体に広がり、高く響く音を合図とするようにして、粉々に砕け散った。

「……っ」

鉄壁であるはずの、自身の防御壁が砕かれ、リラが益々、表情を曇らせる。

「お前は」

砕けた壁の向こうから、立ち上がる人影。

「お前だけは」

少しの恐れも迷いもない、勇ましいとさえ、思える声が響き渡る。

「絶対に、許さない！」

リラへとそう叫びあげたのは、朱色の炎を右手に纏った、マルクであつた。

<特火保持反応！ 特火保持反応！>

ブザー音と共に響き渡る、機械的な女性の声。忙しないブザー音よりも、さらに慌ただしく、廊下をいくつもの足音が駆け巡る。

「サードニック様」

廊下から聞こえるたくさんの足音を聞きながら、部屋の中に居たその男は、扉を開き、入って来る、女性の声に、顔を上げた。やって来たその若い女性は、聖魔院の魔士の制服によく似た、赤を基調とし、黒いラインの入った、軍服のような服を着ている。顔には、いかにも知的そうな、赤い縁取りの眼鏡を掛けていた。

「レイル中央部にて、特火保持反応が二つ、観測されました。一

つは、リラ・ヒューズベルの茜炎と判明しておりますが、もう一つの反応は不明です」

「そうか」

女性の報告に、腰掛けたままの男が、ゆっくりと答える。

「ようやく、見つけたか」

天井を見上げた男が、その鋭い青色の瞳を、そつと細める。
「ルビィネル」

夕焼けによく似た茜色の炎で張られた壁が、大きくヒビ割れ、粉々に砕けていく。崩れゆくその茜色は、暗闇に吞まれていく夕焼け空のようであった。茜色が完全に消え去り、暗闇の空へと燃え上がったのは、朱色の炎。暗闇に一層映える、その朱色に、リラも一瞬、思わず目を奪われてしまうほどであった。だが、すぐに笑みを浮かべたリラが、立ち上がったマルクのすぐ後方に立つ、ルビィネルの方を見る。

「ああゝあ、使っちゃったね。特火^{とつか}」

残念とばかりに、深々と肩を落とすリラ。

「これで君の居場所は、知れた。じきに、フレイヤから、わんさと人がやって来るよ」

リラが、あまり嬉しくなさそうに、首を横に振る。

「君の逃亡劇も、ここまでだ」

言葉を続けるリラと、真正面から、視線を交わらせるルビィネル。その表情は非常に落ち着いており、先程までの動揺した様子は見られない。

「つてことは、僕の任務も、これで終わりかあ。それはそれで、残念かもあ」

困ったように、眉をひそめるリラ。

「折角、もう少し、レイルで遊んで行こうと思ってたのになあ」

「いつまで、私に話しかけているつもりだ？」

「え？」

忠告するようなルビィネルの言葉に、リラが不思議そうに首を傾げる。

「そなたの相手は、私ではない」

ルビィネルがはつきりと告げたと同時に、全身に朱色の炎を纏ったマルクが、壁が崩れ落ち、境界のなくなった広場を飛び出して、

まっすぐにリラのもとへと向かっていく。

「正気？ さっき僕の炎に焼かれて、ろくに腕も動かせないくせにっ……」

リラが馬鹿にしたような笑みを浮かべる中、リラへと向かうマルクが、その場で小さく両腕を振り払う。強い朱色の炎に両腕が包まれると、大きな火傷を負っていたマルクの腕が、見る見るうちに回復していく。

「な！？」

高速で火傷の治っていくマルクの両腕に、思わず驚きの表情を見せるリラ。

「炎で、炎で負った傷の治療を？」

火傷が癒えると、マルクはそのまま、朱炎を纏った右手を、まっすぐにリラへと突き出す。

「ク！」

珍しく表情をしかめたリラが、両腕を茜炎で纏って、マルクの右手を受け止めるように、交差させながら前へと持っていく。

「う、うああああ！」

二人の炎を纏った手がぶつかり合った瞬間、リラが勢いよく、後方へと吹き飛ばされた。背中から地面へと倒れ込んだリラが、打ちつけたのか、後頭部を押さえながら、すぐに体を起こす。

「まったく、最下級魔士クンのくせに、調子乗り過ぎ！」

リラが、まだ地面に腰をついたまま、右手だけをマルクへと向け、そこから、燃え盛る茜色の炎の塊を放つ。

「……っ」

向かってくる茜炎に対し、マルクは避ける素振りも見せず、朱炎に覆われた右手を振るい、やって来た茜炎をあつさりと弾き飛ばした。弾き返ってきた茜炎が、まだ起き上がれていなかったリラのもとへと、舞い戻る。

「な！？ う、うう！」

横へと転がり込むようにして、自身の炎を避けたリラであったが、

わずかに右肩に炎が掠り、苦しげな表情を零す。

「何、なのっ……」

右肩に負った火傷を押さえながら、リラが今までにない、険しい表情で、前方に立つマルクを睨みつける。

「いくら特火を解放したからって、僕だって、同じ特火保持者なのにつ……！」

「魔女は、他の魔族と比べ、誰よりも強い魔炎を、その身に宿している」

リラの誰へとでもない叫びに、静かに答えたのは、ルビィネルであつた。

「自らが使えば、命を縮めてしまうほどに強き魔炎だ。そなたの特火と、私の特火とは、物が違う」

「クっ……！」

ルビィネルにはつきりと断言され、リラが悔しげに唇を噛み締める。

「それで？ 余裕のつもり？」

引きつった表情のまま、口元だけで笑みを作るリラ。

「わ、忘れてんじゃないの？ こっちには、人質がっ……！」

「マルク」

リラの言葉を遮るようにして、ルビィネルが力強く、マルクの名を呼ぶ。ルビィネルの振り向いた方を、リラが目で追うと、先程まで、リラと相對していたマルクは、いつの間にか、炎の檻に包まれたポンドたちのすぐ近くまで、移動していた。

「我が、朱の炎へと染まれ」

マルクがそつと呟き、自身の両手を、炎の檻へと向ける。

「“朱染火”！」

マルクが言葉を発した途端、ポンドたちを包んでいた炎の檻が、その色を、茜色から朱色へと変え、色を変えると同時に形を崩し、炎の檻から、ポンドたちを解放する。魔炎から解放されたポンドたち四人は、深く目を閉じたまま、その場に倒れ込んだ。

「ルビィネル、皆を頼む」

「わかった」

マルクの言葉にしっかりと頷き、ルビィネルが、倒れているポンドたちのもとへと駆け寄る。

「纏え」

ルビィネルが皆のもとへと駆けつける一方で、マルクは、檻より変化した朱色の炎の塊を、右手が見えなくなるまで覆うようにして、その周囲に纏い始める。そしてゆっくりと振り向き、射るような視線を、リラへと向けた。向けられるマルクの鋭い視線に、リラが思わず、顔をしかめる。

「何？」

リラが、どこかはぐらかすように、マルクへと問う。

「仲間は解放したんだし、もう、僕に用事はないんじゃないの？」

「言っただけだ」

微笑んでみせるリラに、マルクは厳しい表情を向ける。

「お前だけは、絶対に許さないって」

「フフフ」

宣言するように言い放つマルクに、リラが楽しげに笑みを零す。

「ちよつと、ルビィネルの特火を得たからって、あんまり調子に乗らないでよね！ 最下級魔士クン！」

すぐにその笑顔を崩し、少し怒ったような表情となって、リラがマルクへと右手を振り上げる。

「“茜熱”！」

茜色の炎の塊を放つリラに対し、マルクは、朱炎を纏った右手を、一旦後ろへと引き、そして勢いよく、前へと突き出した。

「“朱掌火”！」
しゅしょうか

繰り出されたマルクの右手から、纏わりついていた朱炎が、一気に飛び出していく。燃え盛る朱炎は、やがて大きな一つの炎光へと変化し、目にも留まらぬ速さで、空中を駆け抜けていく。空中を走る朱炎が、正面からやって来たリラの茜炎と、まっすぐにぶつかり

合う。

「いいねえっ、とっても綺麗だ」

ぶつかり合う二つの炎を見つめ、うつとりしたように言いながら、リラが両足に炎を纏わせ、地面を蹴って、勢いよく飛び上がる。

「茜熱線^{せんねつせん}」

空中を舞ったリラが、下方に居るマルクへと、無数の光線のような、鋭い炎の塊を放つ。

「朱壁火^{しゅへきか}」！

自身の上方に朱色の炎の壁を張り、マルクが、降り注ぐ光線の炎を受け止める。

「グー」

だが、その光線のすべては受け止めきれず、何個かは壁を潜り抜け、マルクの腕や足を掠めた。炎を受けた箇所から伝わる、痛いほどの熱に、マルクが思わず表情を歪める。

「我が、朱の炎へとっ……染まれ！」

痛みを唇を噛み締め、堪えながら、マルクが受け止めたリラの茜炎を、自らの朱炎へと変化させる。

「逆火^{さかび}」！

朱炎へと染まった光線の炎が、今度は逆に、マルクからリラへ、地上から空中へと戻るようにして、飛び出していく。

「クっ……！」

空中と舞うリラが、足に纏った炎を調節し、空中での位置を変え、色を変え、戻って来た炎を避けるが、すべてを避け切ることは出来ずに、マルク同様、何個かを体に掠め受ける。

「やるなあ。フッフ、面白っ」

「ハア、ハア、ハア」

傷を負いながらも、楽しげに微笑むリラに対し、マルクは少し苦しそうに、肩で息をする。

「マルク……」

リラの茜炎により、火傷を負っていたポンドたちに、魔療水によ

る治療を施していたルビィネルが、そつと顔を上げ、戦っているマルクの様子を見つめる。

「朱炎を使っているとはいえ、魔炎での戦闘は、まだ初心者。だといふのに、あの者と互角に戦えている……」

ルビィネルが目を細め、厳しい表情で、マルクを見る。

「天性、か」

そつと呟きを落とし、ルビィネルが表情を曇らせた。

「君の“転化”は立派なものだよ、最下級魔士クン。僕の茜炎を転化出来る奴なんて、ウチの団にも、そうはいないからねえ」

「団？」

空中から地面へと降りながらの、リラのその言葉に、マルクが戸惑うように首を傾げる。

「たかだか聖魔院の生徒だったら、合格点なのかなあ？ けつど」
笑みを浮かべていたリラの表情が、急に鋭いものへと変わる。

「いくら高難易度の基礎炎技が出来たって、僕には勝てないよっ」
再び微笑んだリラが、まっすぐに右手を、マルクへと向ける。

「“茜熱”！」

リラがまた、右手から、茜色の炎の塊を放つ。

「“朱染火”！」

マルクも右手を出し、向かって来たリラの炎を、自分の炎へと変える。

「フフ、やっぱり変えるだけ、か」

色を変えた朱色の炎を纏うマルクを見つめ、リラが鋭く、目を細める。

「“茜熱”！」

「え？」

まだ、転化により変えた炎を纏っている最中に、再びやって来る茜色の炎に、マルクが思わず戸惑いの声を漏らす。

「うっう……！」

完全に炎を纏えていない右手を突き出し、何とか茜炎を受け止め

るマルク。

「君、他人の炎は変えられるけど、自分の炎は撃てないんでしょ？」
茜炎を受け止めながら、聞こえてくるリラの言葉に、マルクがそつと眉をひそめる。マルクは、転化は出来ても、放出は出来ない。それは、リラが現れる前に、ルビィネルとも話していたことだ。戦いの基本となる放出が出来なければ、いくら転化が出来ても、自ら仕掛けることは出来ず、相手が攻撃してくれることを待つことしか出来ない。

「それに転化も、いくらでも出来るわけじゃないっ」

リラの微笑みが、冷たいものへと変わる。

「“茜熱”！」

「あっ……うううう！」

さらに後方からやって来た茜炎が、マルクが今、受け止めている茜炎と合流し、合わさって勢いを増し、一気にマルクを押し始める。苦しげな声を漏らしたマルクの両足が、地面を削るようにして、後ろへと押しのけられる。

「魔院では合格点でも、戦いでは不合格だよ。最下級魔士クン」

リラの低い声が、そつと落ちる。

「さあ、僕が、君を燃やし尽くしてあげるよ。燃えてる人間の美しさを、君自身で体験させてあげる！」

狂ったような笑顔を見せ、大きく叫んだリラが、さらに右手に力を込め、茜炎の勢いを増加させる。

「ク………！」

もっとと激しく逆巻き始めた茜炎に押され、少し苦しげに表情を歪めるマルク。

「マルク！」

ポンドたちの治療にあたっていたルビィネルが、マルクのその様子に気付き、思わずその場で立ち上がる。

「フッフ、フッフ！ 灰にしてあげるよ、最下級魔士クン！」

「これじゃあっ………」

の方向から攻められたリラに、最早、逃げ場などなかった。

「うつ……うああああ!!」

一面を覆い尽くすほどの、巨大な朱炎に焼かれ、リラが、激しい叫び声をあげながら、森の向こうまで、吹き飛ばされていく。

「凄い」

まだ目に残る、朱色の炎の残像を見つめながら、ルビィネルが圧倒されたように、声を漏らす。

「私の朱炎を、一度で、あそこまで……」

「ハア、ハア、ハアっ」

ルビィネルが見つめる中、リラが森の向こうへと吹き飛んでいき、逆巻いていた朱炎も収まり始めた中、戦いの場に一人、残ったマルクが、肩を大きく上下させ、苦しげに呼吸音を漏らす。

「う、うううっ」

「あ！」

力なくその場に膝をつき、前のめりにゆっくりと倒れ込んでいくマルクに、ルビィネルが焦ったように身を乗り出す。

「やはり、特火を使った影響が出たかつ」

厳しい表情を見せながら、ルビィネルが、マルクのもとへ行こうと、その足を踏み出す。

「マルっ……！」

「その場から、動かないで下さい」

「……っ」

だが、マルクへと向かおうとしていたルビィネルのその足は、ルビィネルの首元に突き付けられた、鋭い刃により、止められてしまった。そつと視線を落とし、向けられた刃の鋭さを確認した後、ルビィネルが目を細め、冷たいとさえ思えるほどの無表情となる。

「手足はそのまま、魔炎の解放を、止めて下さい」

ルビィネルの喉元へと、細い剣の剣先を向け、そう指示したのは、長い青色の髪を一つにまとめあげ、赤い縁取りの眼鏡の向こうで、鋭くその瞳を光らせた、見るからに知的そうな、二十代半ば頃の女性であった。赤色に、黒いラインの入った、軍服のようなものを纏

っている。右胸には、“フレイヤ”と書かれた、金色の刺繍が施されていた。

「ヘリオドルか」

「ご無沙汰しております、ルビィネル様」

刃を向け、向けられた状態のまま、よく知った様子で、互いの名を呼び合う、ルビィネルとヘリオドル。

「大人しく従っていただかねば、こちらも、それ相応の対応をさせていただきます」

そのヘリオドルの言葉を合図とするように、ヘリオドルと同じ、赤色の軍服を纏った男たちが数名、姿を見せ、先程までルビィネルが看ていた、気を失ったままのポンドたちを取り囲む。その様子を横目で見て、ルビィネルがそっと目を細める。

「眠れ、我が朱炎」

ルビィネルが短く言葉を落とすと、マルクの体を包み込んでいた、朱色の炎が消える。マルクもどうやら、気を失っているようで、深く目を閉じ、倒れた状態のまま、魔炎が消えたことには反応を示さなかった。

「これで良いのだろうか？」

「ええ」

ルビィネルが魔炎の解放を止めたことを確認すると、ヘリオドルは、ルビィネルの喉元から、剣先を引っ込めた。だが、依然として剣はルビィネルに向けたまま、言葉を続ける。

「朱炎の魔女、ルビィネル」

まっすぐにルビィネルを見つめ、改めて名を呼ぶヘリオドル。

「フレイヤ無断出国の罪により、あなたを拘束、フレイヤへ連行致します」

「……………」

ヘリオドルから向けられる言葉に、ルビィネルがより一層、厳しい表情を見せる。

「ふわぁ、熱い熱いつ」

森の方から聞こえてくる、この場の緊張感にはそぐわない、暢気なその声に、ヘリオドルが眉をひそめ、ルビィネルに剣を向けたまま、少しだけ後方を振り返る。

「あれれ？ ヘリオ、もう来てたのお？」

森から姿を見せたのは、リラであった。魔士の制服の袖や裾は燃え落ち、そこから剥き出しになった腕や足には相当の火傷を負っているが、当の本人は、平気そうな顔をしている。

「特火保持反応追って来たにしても、随分、早くない？」

「あなた一人には任せておけぬので、予め、このレイルに程近い場所で、待機していましたから」

「ええ？ 何、それえ」

ヘリオドルの言葉に、リラが不満げに口を尖らせる。

「僕、結構、頑張ってたんだよお？ ねえ？」

ルビィネルへと笑顔を向け、同意を求めるリラであったが、ルビィネルは何も答えることなく、静かにリラから視線を逸らした。

「どうせ、最初の二回程は、本気も出さずに、魔蟲などを使って遊んでいたでしょう」

「うわっ、すっごい。よくわかるねえ、ヘリオ」

「はあ」

否定することもなく、誉めるように笑みを浮かべるリラに、ヘリオドルが深々と溜息を吐く。

「だいたい、何です？ その格好は」

「魔士の制服」。似合ってるでしょ？」

「まったく。他国の、よりもよって、魔士如きの制服を纏うとはあなたには、騎士としてのプライドがないのですか？」

「まあ、ないっちゃんないかなあ」

呆れたような物言いを見せるヘリオドルを、気にすることなく、リラが、制服についた土埃を両手で払っていく。

「フレイヤに次策、すべて報告していただきますので、そのつもりで」

「えええ〜？　すべてなんて報告したら、またサードニック様にお叱り、受けまくりじゃ〜ん」

リラが眉をひそめ、困ったような声をあげる。

「嘘つこっかなあ」

「それは無意味かと」

「なんでえ？」

「サードニック様が、この場に来ておられるからです」

「……っ」

ヘリオドールのその言葉に、表情を揺れ動かしたのは、リラではなく、ルビィネルであった。耳に入る足音に、ルビィネルが震える唇を噛み締め、恐る恐る、ゆっくりと、後方を振り返る。

「……………」

静かに足音を響かせながら、その場へと姿を見せたのは、ヘリオドールと同じ、赤色の軍服を纏った、一人の男であった。年は、ヘリオドール同様、二十代半ばくらいであろうか。若くも見えるが、ひどく落ち着いたその雰囲気は、そこそこの年齢を感じさせる。同じ赤色の軍服であるが、入っているラインの色が白く、ヘリオドールや、他の男たちのように黒色ではない。金色の短い髪が、褐色の肌によく映えている。深い青色の瞳は冷たく、突き刺すように、ルビィネルを捉える。

「サードニック……」

ルビィネルが小さく口を動かして、その男の名を呼ぶ。

「うわぁー、レイール来ちゃったのお？　フレイヤ聖騎士団の、赤炎騎士団長ともあるうお方があ」

ルビィネルと同じように、サードニックの方を見て、呆れたような声を漏らすリラ。

「よく出国許可出たよねえ。騎士団も暇だなあとか、思われてんじやなあ〜い？」

「リラ」

「はぁーい。無駄口は、慎みまぁーす」

気圧すように名を呼ぶサードニックに、リラが素直に頷き、両手で自身の口元を押さえ込む。

「ようやく見つけたぞ、ルビィネル」

サードニックに名を呼ばれ、ルビィネルの表情に、さらに緊張感が走る。だが、ルビィネルは、固まるうとしていた口元を無理やり緩め、少し引きつった笑みを浮かべた。

「見つかってしまったか、残念だ」

笑みを浮かべるルビィネルを見つめ、サードニックがそっと、目を細める。

「今回の逃亡は、我ながら、なかなか上手くいったと思ったんだがな」

ルビィネルが、不自然とさえ思えるほど、饒舌な口調で、言葉を続ける。

「だが、見つかってしまったものは仕方がない。今回は大人しく負けを認め、フレイヤへ戻っ……」

「ルビィネル」

サードニックの、決して大きくはないが、圧のあるその声が、ルビィネルの言葉を遮らせる。

「パートナーを得たそうだな」

「……っ」

サードニックのその言葉に、途端に、ルビィネルの表情が曇る。

魔紋の刻まれた左手を、右手で覆い隠すようにして、ルビィネルがまた、笑みを浮かべる。

「何のことだ？ 私には、パートナーなどっ……」

「惚けても無駄だ。すでに、レイール聖魔院、院長からの報告を受けている」

口止めを要求していた院長から、情報が漏れていることを知り、ルビィネルが少し表情を歪める。

「しかも、本結で契約を行ったそうじゃないか」

静かなサードニックの言葉に、責め立てられていくように、ルビ

イネルの表情が、どんどん険しいものへと変わっていく。

「そのパートナー、この場に居るのか？」

問い詰めるような言葉に、ルビィネルがきつく、唇を噛み締める。
「いるよぉ、居る居る」

答えようとしないうるビィネルに代わり、答えたのは、リラであった。

「さっきまで、僕と戦ってたんだよぉ。ルビィネルってば、自分の特火まで使わせちゃってさぁ」

リラが歩を進め、倒れているマルクの方へと歩み寄っていく。

「こんな最下級魔士クンの、何にそんなに、入れ込んでるんだかあ
っ」

倒れたマルクのすぐ傍に立ち、大きく見下ろすようにして、笑みを浮かべたリラが、気を失ったままのマルクの背中へと、足を振り上げ、勢いよく、振り下ろそうとする。

「火発ひばち」

「うわあぁっ」

マルクを踏みつけようとしたリラが、飛んで来た炎を避けようとして、バランスを崩し、その場に思いきり、尻持ちをつく。

「痛たたたた」

「愚かですね」

痛がるリラを見つめ、ヘリオドルが呆れ切った様子で息を吐く。

「もう、いきなり危ないなあ」

「ふざけたマネはするな」

非難するように顔を上げたリラに、ルビィネルは、突き刺すような、鋭い視線を向けた。

「燃やすぞ」

怖いとさえ思えるほどの、厳しい表情を作って、ルビィネルが、リラへと警告する。

「目え、本気過ぎっ」

呆れたように肩を落とすと、リラはその場に座り込んだまま、そ

れ以上、マルクに何かしようとする動きは見せなかった。リラが動きを止めたことを確認すると、ルビィネルが厳しい表情のまま、再びサードニックの方を振り返る。

「そなたと共に、フレイヤに戻る。だから、この場に居る者すべてに、これ以上、手出しはしないと約束しろ」

条件を叩きつける、強い口調を見せるルビィネル。

「何を勝手な。あなたに、そのようなことを決める権利は」

「私は、サードニックと話しているのだ。口を出すな」

「……っ」

口を挟んだヘリオドルが、ルビィネルの強い言葉に、思わず口ごもる。

「私がフレイヤに戻れば、そなたは、それで満足であろう？ サードニック」

ゆつくりと両手を左右に広げ、ルビィネルが、答えを導くような言い方を見せる。

「嫌だと、言ったら？」

試すような口調で、サードニックが静かに問う。

「命続く限り、魔炎を使い、そなたから逃げる」

その問いかけに、少しの間を置くこともなく、ルビィネルは答えた。はつきりとした口調は、何の迷いも、偽りもない。その言葉が、本気であることを伝える。

「そういうところは、姉とそっくりだな」

サードニックが、少し呆れたように肩を落とす。

「わかった。この場に居る者すべてに、これ以上の手出しはしない」

「サードニック様……！」

「ただし」

非難めいたヘリオドルの呼びかけを遮り、サードニックが言葉を付け加える。

「それは、この場でのみ、だ」

強調するように言い放つサードニックに、ルビィネルが眉をひそ

める。

「もし次に、何らかの形で、この者たちが俺の前に現れた時は、見逃すことはしない」

その冷たい言葉に、ルビィネルは険しい表情を見せるが、それ以上、言葉を返すことはしなかった。何を言ったところで、今の状況が悪くしかならないことは、すでに理解していた。

「フレイヤに戻る。ルビィネルを連れて来い、ヘリオドル」

「了解いたしました！」

背を向けながら指示を出すサードニツクに、ヘリオドルがしっかりと返事をする。

「お前は、帰ったらすぐに報告だ。逃げるなよ、リラ」

「はあゝい」

リラに忠告するようにそう言うと、サードニツクはそのまま歩を進め、足早に広場を去っていった。

「憂鬱だなあ、報告」

「ヒューズベル様、お手当てを」

「あ、いいよいいよお。あっち戻ってからでえ」

手を貸そうとする男の言葉を断りながら、リラも他の男たちと共に、サードニツクの後を追うようにして、その場から歩き出していく。

「ルビィネル様、失礼いたします」

丁寧に断った後、ヘリオドルが、ルビィネルの両手首へと、鎖を掛ける。

「魔炎封じが施されております。無理に使えば、腕を燃やし尽くす可能性もありますので、ご了承を」

「知っている。よく掛けられているからな」

ヘリオドルの説明に、皮肉めいた答えを返すルビィネル。

「では、参りましょうか」

「少しだけ、いいか？」

「構いませんが？」

ルビィネルの申し出に、少し戸惑った表情を見せながらも、頷きを返すヘリオドル。ヘリオドルからの了解を得ると、ルビィネルは足早に移動し、倒れているマルクのすぐ横へと、しゃがみ込んだ。

「マルク……」

倒れ込み、深く目を閉じたままのマルクの顔を覗き込み、ルビィネルがそっと、目を細める。

「すまなかった」

両手を拘束された状態のまま、口元を、マルクの耳元へと寄せ、ルビィネルが謝罪の言葉を漏らす。再び顔を離すと、ルビィネルは悲しげに微笑んだ。

「ありがとう」

切なさのこもった礼を残し、ルビィネルがまた立ち上がって、ヘリオドルのもとへと戻っていく。

「よろしいですか？」

「ああ」

「では、参りましょう」

短く言葉を交わすと、ヘリオドルに背を押されるようにして、ルビィネルは静かに、その場を去っていった。

——— ありがとう…………———

「んっ…………」

遠く、だが、耳に近い場所から聞こえてくる、聞き覚えのあるその声に、呼ばれるようにして、マルクはゆっくりと、その赤色の瞳を開いた。開いた先に広がるのは、よく見慣れた天井。

「俺…………」

「マルク様ああー!!」

「うわあっ」

すぐ横から激しく響き渡る自らの名に、マルクが思わず耳を塞ぐ。その大声のお陰か、まだ半分ほど眠っていた意識も、あっという間に覚醒した。

「お気付きになられたんですねえ！ 良かった、良かったですう！」

「ラ、ラピス？」

マルクが首を横へと向けると、そこには、涙を流しながら、嬉しそうに笑みを零す、マルクの屋敷の世話係、ラピスラズの姿があった。激しく感動している様子のラピスラズを見つめ、マルクが戸惑った表情となる。

「コーラル様の留守中に、マルク様に何かあつては、このラピスラズ、コーラル様の前で切腹しても許されぬところでしたよお！」

「ま、まあ、コーラルなら、切腹とか、本当に有り得そうだけど…………」

必死に叫ぶラピスラズに、呆れた表情を見せながら、マルクがゆっくりと体を起こしていく。体はかなり重たいが、どこかが強く痛むということとはなかった。両腕を見ると、怪我をしたところに、丁寧に治療が施されている。自身の様子を確認した後、マルクが今度は、周囲を見回す。マルクが居るのは、寝台の上で、そこは、マル

クもよく知る、ヤールの屋敷の、マルクの部屋であった。

「ここ、俺の部屋？」

「はい。聖魔院の医務室で治療を受けた後、担当の先生が、ここまで送ってきて下さったのですよ」

「治療って、何でっ……」

——人が燃えるところって、とっても綺麗なんだよ——

——みんな、みんなぁ……！！——

「あっ」

何があつたのかを思い出していたマルクの脳裏に、茜色の炎に包まれた仲間たちと、リラの残酷な笑みが蘇る。マルクは急に青ざめた表情となり、寝台の上から身を乗り出した。

「みんな……皆はっ!？」

マルクが食ってかかるように、ラピスラズへと問いかける。

「んなに心配しなくても、俺たちなら、無事だぜっ」

その時、マルクの部屋の扉が開き、部屋の外から、ポンドとアメジエスが姿を現した。

「ポンド、アメジエスっ」

特に怪我を負っている様子もない、元気そうな二人の姿に、マルクがホッとしたように笑顔を見せる。

「メルも無事だ」

「フランなんて、殺したって死なないくらい元気よ」

マルクを安心させるように、穏やかな笑みを浮かべながら、ポンドとアメジエスが部屋の中へと進んでくる。二人がやって来ると、ラピスラズは寝台の横に置いてあった、椅子の上から立ち上がり、マルクのすぐ傍へと、二人を誘導した。

「シリングとサファイの怪我も、そう大したもんじゃなかったってさ」

「そ、そっか。良かった」

胸を撫で下ろしたマルクが、鼓動を落ち着かせるように、胸元へと右手を当てる。

「ありがとう、マルク」

「へ？」

「マルクが、襲われた私たちを、助けてくれたんでしょ？」

「あ、いや、俺は何もっ……」

笑みを向けるアメジースに、マルクが少し困ったように俯く。シリングすら手も足も出ない、圧倒的な強さを見せるリラの前に、マルクが出来たことと言えば、ただ叫び、喚き、泣き散らすことだけであつた。

——そなたの望みは、私が叶える——

「俺は本当に何にもしてなくて、全部、ルビィネルの、あいつのお陰なんだ」

心強い笑みを、言葉をくれ、そして、マルクに、リラに勝てるだけの力をくれたルビィネルの姿を思い出し、マルクがそつと笑う。

「そういえば、ルビィネルは？」

顔を上げたマルクが、部屋の中を見回すが、ルビィネルの姿はない。パートナーとなつてから、常にマルクと共に居たルビィネルの姿がなく、マルクは不思議そうな表情を見せる。

「ルビィネルは？」

「……っ」

「ポンド？」

マルクが問いかけた途端に、その表情を曇らせ、俯くポンドとアメジースの様子に、マルクが戸惑い、眉をひそめる。

「どう、したの？ ルビィネルに何か……」

「それは、俺から話す」

「え？」

マルクがポンドたちに、その曇った表情の理由を問いかけようと

したその時、再び、部屋の扉が開き、新たな声が入って来た。

「ブラッドス」

マルクの部屋へと姿を見せたのは、ブラッドスであった。どうやらブラッドスも、無事であったらしい。だが、その表情はいつになく険しく、マルクもそれにつられるようにして、真剣な表情となる。

「まず、結論から言う」

扉付近に立ち、ブラッドスがまっすぐに、マルクを見つめる。

「お前のパートナーだった、赤炎の魔女ルビィネルは、もうここには居ない。フレイヤに戻った」

「えっ……？」

ブラッドスの言葉に、マルクが衝撃を走らせる。

「お前も多少は、聞いたんだろう？ あいつが本当は、フレイヤからの転入魔女じゃないってこと」

その問いに、眉をひそめ、表情を曇らせるマルク。

「フレイヤから、逃げて来たって……」

「そうだ。あいつは、国外逃亡者。だから奴等、フレイヤ政府直属の、フレイヤ聖騎士団から追われていた」

ルビィネルを追って来たというリラの姿を思い出し、マルクが少し俯く。

「何故？」

話を続けるブラッドスに、アメジェスが口を挟むようにして、問いかける。

「いくら無断でフレイヤを出たとはいえ、たかが魔女一人のために、国が、聖騎士団が動くなんて、おかしくない？」

「それは、あいつがただの魔女じゃないからだ」

問いかけに間を置くことなく、ブラッドスがすぐさま答える。

「あいつは、本当は、赤炎の魔女ではなく、朱炎の魔女。特火保持者だ」

ブラッドスが再び、視線をマルクへと移す。

「特火？」

「五元炎ではない、特別な魔炎。その力は、五元炎よりも遥かに強大だ」

少し首を傾げたポンドに、ブラッドスが手短に説明する。特火の説明は、ルビィネルから聞いただけでなく、実際にリラの茜炎が、シリリングの青炎を圧倒するところも見たので、マルクは、十分に理解出来ていた。

「お前は、その手で使ったな？ あいつの朱炎を」

「うん……」

マルクが浮かぬ表情のまま、小さく頷く。

「朱炎は、数ある特火の中でも、最も危険とされる強力な魔炎だ」

「危険で、そんなつ」

「最下級魔士のお前でも、使えば、聖騎士団の奴を倒せる程の魔炎だ。危険に違いないだろう」

「……っ」

反論しようとしたマルクが、向けられるブラッドスの鋭い言葉に、思わず口ごもる。ルビィネルの魔炎がいかに強力なものなのか、それは、マルク自身がリラを圧倒したことで、証明したも同然なのだ。「フレイヤ政府は、聖騎士団に、朱炎の、あいつの“絶対管理”の命を出していた」

「フレイヤ政府が、そんな命を出す程の魔炎を、ルビィネルが……」
ブラッドスの言葉に、アメジェスが、表情をあからさまに動かしてはしないが、驚いた様子を見せる。

「だが、あいつは、その絶対管理下のもとを抜け出し、このレイヤへとやって来た」

ブラッドスがまた視線を動かし、部屋の窓から、外の景色を眺める。外は明るく日が差し、美しい山の様子が覗いていた。

「自身の夢を、叶えるために」

「夢って……」

ブラッドスの言葉に、マルクがゆっくりと顔を上げる。

「“彩炎の魔女”？」

「ああ。あいつは、フレイヤで管理されていた頃から、“彩炎の魔女”になることを、ただひたすらに、夢見ていたそうだ」

マルクが見つめる中、ブラッドスが言葉を続ける。

「だが、あいつには、彩炎の魔女どころか、パートナーを得ることさえ、許されていなかった」

「え？」

その言葉に、マルクが目丸くする。

「パートナーを得ては、いけない？」

「ああ。その強い魔炎の力を、みすみす、人間なんかに渡すことになるからな」

「成程ね。確かに魔族的には、面白くないだろうな」

父のこともあり、魔族と人間との確執をよく理解しているポンドは、鋭く目を細め、納得したように頷きを漏らす。

「だから、あいつはフレイヤを飛び出し、転入生として、レイル聖魔院にやって来たんだ。パートナーを得るために」

戸惑いの表情を見せるマルクを、ブラッドスが睨むように、まっすぐに見つめる。

「そして、あいつは、お前に目を付けた」

ブラッドスの表情が、より厳しいものへと変わる。

「最下級魔士である、お前に」

射るような視線を向けられ、走る緊張感に、マルクが思わず唾を呑み込む。

「なんで？ 彩炎の魔女になりてえんなら、もつと優秀な、それこそ、シリングみたいな奴を、パートナーにした方が良かったんじゃないの？」

「いや、ルビィネルにとっては、こいつの方が良かったんだ」

横から問いかけたポンドに、ブラッドスはすぐさま、首を横に振る。

「何人もの魔女に、パートナーを断られ続けていたこいつなら、自分の何を疑うこともなく、この手を取ると、そう確信していただろ

うからな」

「……っ」

ブラッドスのその言葉に、マルクが思わず、表情を険しくする。それは、マルクにとっては、とても残酷な言葉だった。マルクの表情の変化に気付きながらも、それでもブラッドスは、止めることなく、言葉を続ける。

「あいつの予想通り、お前は差し伸べられた、その手を取った。契約は本結。これで誰も、パートナー契約を解除出来ない」

一言一言が、マルクの胸に、全身に、棘のように、突き刺さっていく。

「後は、お前の成長を促し、彩炎の魔女となる。それが、あいつの計画だった。わかるな？」

確認するように、ブラッドスがマルクへと問う。

「お前は、あの魔女に利用されたんだよ」

簡潔なブラッドスの言葉が、マルクの頭の中に、大きく響き渡る。「ま、聖騎士団はすでに、あいつの場所を特定していたし、お前の成長があまりにも著しかったから、黙認していた魔院も、フレイヤに連絡を入れたがな」

ブラッドスの視線がマルクから逸れ、ゆっくりと下に落ちる。

「元々あいつに、逃げ場なんて無かったのさ」

その言葉は、ルビィネルを嘲笑うようには聞こえず、むしろ憐れみにも似た、切ない響きを持っていた。

「これが、俺の知ってる、あいつのすべてだ」

「ルビィネルは」

ブラッドスが話し終えたところで、タイミングを計るようにして、アメジエスが口を開く。

「ルビィネルは、これから、どうなるの？」

「さあな」

どこか興味なく、ブラッドスが答える。

「まあまた、絶対管理下のもとで、監視されるんだらう。彩炎の魔

女も、聖地マフレイヤも、もう、夢見ることすら出来はしない」

「……っ」

ブラッドスの言葉に、マルクがかすかに、表情を動かす。

——夢を見ているのだ！ 現実ばかり見ていられるか！——

どうして、あれほどまで必死に、彩炎の魔女を目指そうとしていたのか。ずっと疑問だったルビィネルの執着の、その理由が、少しだけ、わかったような気がしていた。

「何にせよ、あの魔女が、お前たちの前に現れることは、もう二度とない」

断言されたその言葉が、耳に強く響く。

「本結が解けることはないが、その状態でも、他の魔女との偽結は可能だ」

ブラッドスに指差され、マルクが、右手の甲に刻まれた、本結の証である黒い魔紋を見つめる。

「今のお前なら、パートナーになってもいいって魔女の一人や二人、居るだろう。魔士としての生活は、十分に送れる」

誉めるような言葉にも、胸が浮き立つことはない。

「あの魔女とのことは、とんだ災難だったと思って、とっとと忘れるんだな」

「そんな言い方……！」

「いいから、忘れる」

反論しようとしたアメジエスの声を、ブラッドスが庄のある口調で、強く遮る。

「これ以上、介入すれば、今度は、無事で済む保証はねえ」

警告するような冷たい視線を、ブラッドスがマルクへと向ける。

「あの魔女は、お前等、ただの魔士や魔女が、関わっていいような、そんな容易な存在じゃねえんだ」

それは、ただ悪戯に警告する言葉ではなく、マルクたちの身を案

じるような言葉であった。ブラッドスは、自分の立場を気にしているわけではなく、ただ、マルクたちのことを考え、言葉を向けてくれているのだらう。それがわかるからこそ、アメジエスもそれ以上、反論しようとはしなかった。

「わかったな」

最後に確かめるようにそう言うと、ブラッドスはラピスラズに一礼をし、素早く、マルクの部屋を出て行った。ブラッドスを送るためか、ラピスラズもすぐに、後を追って出て行く。二人が出て行くのと、部屋にマルク、ポンド、アメジエスの三人だけが残された。

「マルク……」

アメジエスがどこか、心配するように、マルクを見つめる。

「……………」

マルクは、手の甲に刻まれた魔紋を見つめ、どこか、悲しげな表情を見せていた。

翌日。朱炎を使ったことによる、体のたるさも取れたマルクは、いつも通り、魔院に行くことにした。部屋で眠っていても、あれこれ考えを巡らせては、気持ちが塞ぎ込むばかりだったので、外に出たかったという気持ちもあった。

「あれ？ 今のつて、最下級魔士じゃね？」

「珍しいな。今日はパートナーの、あの魔女と一緒にじゃねえんだ」

「今日、炎技演習にも出てなかったぜえ？ 休みなんじゃねえのお？」

マルクと廊下で擦れ違った魔士たちの会話が、徐々に離れていくマルクの背中に届く。

「それが、最下級魔士に飽きて、フレイヤに帰っちまったとか？」

「おっ前、それ酷でえ！」

「聞こえたら、どうすんだよ！ ほら、行くぞ！」

足早に去っていく、その足音たちが小さくなっていくと、マルクがその場に立ち止まり、ゆっくりと後方を振り返る。遠ざかっていく魔士たちの背中を見つめながら、マルクはそっと、目を細めた。怒りが沸くことはない。嘲りの言葉など、マルクには、慣れたものであった。

——困ったものだな——

慣れたと言ったマルクに、いつか、ルビィネルが言っていた言葉を思い出す。呆れたように、だが、案じるように、ルビィネルはその言葉をマルクへと向けた。

「あいつが居たら、言い返したりとか、したのかな……」

小さな呟きを落とすと、マルクはまた体の向きを変え、廊下を歩いて行った。

レイル聖魔院、第二講義室。

「マルクは？」

次の講義を受けるため、講義室へとやって来たアメジスは、講義室の窓側後方に席を陣取ったポンドのもとへと歩み寄り、挨拶よりも先に、そう問いかけた。ポンドの横に、エメラルディアの姿はあるが、いつも共に居るはずのマルクの姿はない。

「さあ？」

「さあつて……マルク、今日は魔院に来てるんでしょう？」

「ああ。朝、見かけたから、居ることは居ると思うけど」

眉をひそめるアメジスに対し、特に興味のなさそうな様子を見せるポンド。

「サボリじゃねえ？ 朝の炎技演習にも来なかったし」

「サボリ？ マフレイヤ概論を？ あのマルクが？」

ポンドの言葉に、アメジスが益々、眉間に皺を寄せる。幼い頃から、聖地マフレイヤに憧れていたマルクは、他のどの講義をサボっても、マフレイヤ概論だけは、欠かさず出席していた。

「案外、プツツリ憧れが途切れちゃったのかもなあ。ルビィネルちゃんのこともあったし」

悟ったように言うポンドに、アメジスが複雑そうに、表情をかめる。

「やつぱり、傍で、付いててあげた方が、いいんじゃない？」

「一人で考えたいこともあるさ」

アメジスの言葉を遮るようにして、ポンドがそっと、目を細める。

「一人で、決めなきゃいけないこともな」

窓の外へと目を向けたポンドは、どこか、遠くを見るような瞳を見せていた。

講義に出る気分でもなかったマルクは、魔院の建物の一つの、屋上へと来ていた。この場所で言われた、ルビィネルの言葉を思い出す。勝手に本結の契約を結び、何故そんなことをしたのだと、責めるように言ったマルクに、ルビィネルは何の迷いもなく、笑顔で言い放った。自身の夢を叶えるため、マルクを利用するただけの、言葉であつたのかも知れないが、あの言葉は鮮烈に、マルクの脳裏に刻まれている。右手の甲の、魔紋と同じように。

「マルク！」

「……っ」

呼ばれる名に、マルクが大きく目を見開く。

——マルク！——

柵にもたれかかっていたマルクは、すぐさま体を起こし、勢いよく後ろを振り返った。そこに、赤い髪の魔女の姿を求めるように。

「あっ……」

だが、そこに居たのは、赤い髪の魔女ではなかった。

「トウーパ」

「何よお？ あからさまにがっかりした顔しないでよ」

屋上の出入口から現れた、金色の髪の魔女は、振り返ったマルクを見て、不満げに表情をしかめる。マルク自身は、そういうつもりはなかったが、どうやら、思いのほか、表情に出ているらしい。

「また私のプライド、傷つけたわね？」

「ご、ごめん」

口を尖らせながら、歩み寄って来るトウーパに、マルクが少し困ったような顔をしながら、謝る。

「サボリ？」

「うん。トウーパも？」

「私は空き時間。はい、これ。トウーパ特製、元気とやる気と正気が漲るジューズ！」

「正気は漲らなくても、元から保っておくものじゃない？」

トウーパの説明に、少し呆れたように微笑みながら、マルクがトウーパから、クリーム色をしたジューズの入った瓶を受け取る。

「どうしたの？ 今、マフレイヤ概論でしょ？ マルクが聖地マフレイヤの講義サボるなんて、珍しいじゃない」

「うん……」

ジューズを一口、飲みながら、マルクが歯切れの悪い、答えを返す。

「何か今、ちょっと、マフレイヤのこととか、考えたい気分じゃなくさ」

—— 私がそなたの夢も、一緒に叶えてやる！ ——

—— 私と共に、マフレイヤに行こう！ マルク・クラウド——

共に行こうと言ってくれた、ルビィネル。誰もが笑ったマルクの夢を、一緒に叶えると宣言してみせた、ルビィネル。夢を叶えることもなく、フレイヤへと連れ戻されていった、ルビィネル。今は、ただ純粹に、マフレイヤに憧れ、マフレイヤを目指す心境では、正直なかった。

「ルビィネルのこと？」

トウーパが、マルクの横に並びながら、マルクへと問いかける。

その問いかけは、すべてを知っているような、わかっているような言葉であった。恐らく、アメジエスか誰かから、事情を聞いたのだろう。

「不思議なんだ」

「え？」

マルクの言葉に戸惑うように、トゥーパが少し首を傾げる。

「あいつの言葉が、姿が、まるで炎みたいに鮮烈に、瞼の裏に焼きついて、消えないのに」

ゆっくりと顔を上げ、空を見上げるマルク。青い空を見上げていても、赤々と燃え盛る炎は、すぐに思い出せる。もうこの手に纏う炎はなくとも、ルビネルの魔炎に包まれた時のぬくもりは、消えることなく、憶えている。

「何の跡形もなく、あっという間に、消えてしまうような、そんな気がして……」

そのマルクの言葉を聞き、トゥーパがそつと、目を細める。

「ルビネルのこと、全部、夢だったと思えば、思えなくてもいいかなあとか、思ったりもしちゃって」

マルクが屋上から、遠く広がるレイールの景色を眺めながら、口元を緩め、そつと目を細める。

「あいつ来てから、色々、ぶっ飛んだことばかりだったし、現実というよりむしろ、夢見てたって方が納得するっていうかさ」

話を続けるマルクの声の音調が、徐々に低くなっていく。

「このまま、時間が流れていけば、俺の中で、ルビネルのことが、その内、全部、無かったことになるんじゃないかって……」

「怖い？」

トゥーパの問いかけに、マルクの表情が曇る。

「それは、喪失感？」

少し鋭い口調で、トゥーパがマルクの恐れの原因を問う。

「それとも、罪悪感？」

「……っ」

別の言葉を投げかけるトゥーパに、曇ったマルクの表情が、さらに揺れ動いた。忘れてしまうことが、恐ろしいのではない。忘れてしまう自分が、何事もなかったことにしてしまう自分が、無責任なように思えて、許されないような気がして、怖いのだ。

「別にいいんじゃない？」

「え？」

今のマルクを肯定するような、その言葉に、空を見上げていたマルクが、少し焦ったように、トゥーパの方を振り向く。

「無かったことにしたって」

「け、けどっ……」

「でも私は、無かったことになんてしないから」

「へ？」

遮るようなトゥーパの言葉に、マルクが戸惑うように、目を丸くする。

「私の目の前で、マルクがルビィネルとパートナーになった時の、あの悔しいって気持ちも、魔蟲に取りつかれて、二人を襲った時の、あの情けないって気持ちも」

過去を思い出すように目を細め、トゥーパが言葉を続ける。

「本当プライド、ずったずた。忘れなくても、忘れられる気、しないもの」

トゥーパが困ったような笑みを浮かべ、マルクの方を振り返る。

「私はきつと、ずっと憶えてる」

何の躊躇いもなく、晴れやかに、トゥーパが笑う。

「だから」

トゥーパの青色の瞳が、強く光る。

「例え、あなたの中で、無かったことになったって、この私が、無かったことになって、させないわよ。マルク・クラウド」

「トゥーパ」

釘を刺すように言い放ったトゥーパに、マルクが見せたのは、困った表情ではなく、どこか、安心したような笑顔だった。

「無かったことに、なら、ない？」

「当たり前！ 人のプライド傷つけといて、誰がキレイサッパリなんて、流してやるもんですかつ」

「そっか」

当然とばかりに言い放つトゥーパに、マルクがまた、その笑みを

大きくする。

「無かったことに、しなくていいんだ……」

そつと頷いたマルクは、どこか晴れやかな笑みを浮かべ、広がる景色へと、視線を移した。

一日の講義を終える、というよりも、ほとんど参加することなく、一日を終えたマルクは、空が徐々に茜色に染まる中、レイール聖魔院から、ヤールの屋敷へと帰って来た。

「ただいま」

「あ、お帰りなさいませ！ マルク様！」

マルクが魔士の制服のまま、リビングへと入っていくと、キッチンで、エプロン姿のラピスラズが、夕食の準備であるうか、あれこれと忙しそうに手を動かしていた。マルクの声に気付いたラピスラズが、火を止め、野菜のいっぱい入ったカゴを両手で抱えて、キッチンから出てくる。

「見て下さいませ。お隣の農家から、たっぷりのお野菜をいただきました。今日は、これで、野菜たっぷりのシチューをつ」

「ラピス」

「はい？」

ラピスラズの言葉を遮るようにして、名前を呼びかけるマルク。話の途中であつたが、ラピスラズは大きく笑顔を見せ、マルクの顔を覗き込んだ。

「あの、さ、聞きたいことがあるんだけど」

「はい、何でもございましょう？ 何なりと、聞いて下さいませっ」

少し躊躇いがちに呟いたマルクに、ラピスラズが迎え入れるように、満面の笑みを浮かべる。

「あの」

「はい！」

「フレイヤって、どうやって行くの？」

「はっ……？」

マルクの質問に、表情を固まらせたラピスラズの両手から、勢いよくカゴが落ち、床に大量の野菜がバラ卷かれる。

「あ、ああ、すみません！ 思わず、動揺がっ……！」

「うん。俺こそ、いきなり、ごめん」

慌ててその場にしゃがみ込み、野菜を拾い上げ、カゴの中へと戻していくラピスラズ。マルクも同じようにしゃがみ込み、その作業を手伝う。

「ラピス、魔族だから、もしかしてって思ったんだけど、よくよく考えたら、俺が物心ついた時から、ずっとヤールだし、フレイヤへの行き方なんて、知らないよね」

「いえ、そこに動揺したのではなくてですね」

結論付けたように言うマルクに、ラピスラズが野菜を拾う手を止め、少し困った表情を見せる。

「あの、マルク様」

「ん？」

「もし、このラピスラズが、フレイヤに行く方法をお教え出来れば、マルク様は、フレイヤに行かれるおつもりですか？」

「うん、一応」

「……………」

あっさりと頷くマルクに、ラピスラズが啞然とした表情を見せる。
「それは、ルビィネル様に会いに行くため、と解釈して、よろしいのですか？」

「うん、一応」

またも頷くマルクに、またも、啞然とするラピスラズ。

「“俺に出来るわけない”、“俺には無理だ”、“俺は何をやってもダメなんだ”、の、マルク様が？」

「俺、そんなネガティブなことばかり、言ってたかな？」

マルクの口癖をマネするようにして、問いかけるラピスラズに、

マルクが思わず、呆れた表情を見せる。

「変だよ。俺、捻くれてるし、根暗だし、何に対しても、後ろ向きなのにさ」

最後の野菜をカゴの中へと戻し、マルクが手を止める。

「でも」

顔を上げ、ラピスラズの方を見たマルクが、そっと笑みを浮かべる。

「すごい何回も考えたけど、“このまま忘れよう”って、選択肢には、一回も辿り着かなかったんだ」

そう言って微笑むマルクを見つめ、ラピスラズが目を細める。

「パートナーいないから、魔炎も使えないし、行ったところで、最下級魔士の俺に、何が出来るのかなんて、わからないけど」

少し視線を落とした後、またマルクが、顔を上げる。

「でも俺、フレイヤに行きたい。行かなきゃいけない、気がするんだ」

「マルク様」

少しの後ろ暗さもなく、穏やかに微笑むマルクに、ラピスラズもつられるように、笑みを浮かべる。

「わかりました」

「え？」

受け止めるように、大きく頷くラピスラズに、マルクが少し首を傾げる。

「お教えしましょう。フレイヤへの、行き方を」

「ラピスっ」

ラピスラズのその言葉に、マルクが嬉しそうに笑みを零す。

「よっしゃ！　そうと決まれば、善は急げだあ！」

「うわっ」

リビングへと勢いよく入って来る声に、マルクが驚き、左手で胸を押さえつける。

「ポンドっ」

「かあゝ！ あのネガネガマルクに、あそこまで言わせるとはねえゝ！ ビバ、一途！」

「一人で盛り上がらないの」

「アメジエスも」

屋敷の住人でもないのに、ごく自然とリビングに姿を現したのは、ポンドとアメジエスであった。ゆっくりと立ち上がったマルクが、戸惑うように二人を見つめる。

「何？ 二人とも、どうしたの？ 何か用？」

「私たちも一緒に、フレイヤに行こうと思って」

「え！？」

アメジエスの言葉に、マルクが大きな声で驚く。

「な、なんで！？」

「なんでじゃねえよ。お前みたいな、トロくさ、不器用、無能魔士一人で行ったところで、聖騎士団相手に、どうにか出来るわけねえだろお？」

「どうせ俺は、トロいし、不器用だし、無能だよ……」

折角、前向きになってきていたというのに、ポンドの容赦ない発言に、マルクがまた、陰気な空気を纏い始める。

「俺らが、バーンと、サポートしてやるって！ な！？」

「私……マルクの助け、なる……略して、マルタ……」

「ハッハッハ！ この矛盾のように力強く、盾のように安心感のある僕が、付いて行くんだ！ 大船に乗った気でいたまえ、最下級魔士！」

「ウザっ」

ポンドたちに続くようにして、エメラルディア、フラン、トゥーパの三人も姿を見せる。

「みんなっ……」

「あなたは最下級魔士かも知れないけれど、でも一人じゃないのよ。マルク」

驚きのあまり、茫然とするマルクに、アメジエスが優しく、微笑

みかける。

「ルビィネルの炎がないというのなら、私たちが、あなたの炎になるわ」

「アメジエス」

力強いアメジエスのその言葉に、マルクの表情から、笑みが零れた。

「ありがとう、みんな」

マルクが噛み締めるように、皆へと礼を言う。

「行こう、フレイヤへ！」

マルクの大きな呼びかけに、皆が、明るく頷いた。

人間領ヤール山奥、マルクの住む屋敷前。

「はあ、行ってしまわれましたねえ」

マルクと仲間たちの去っていった、山を下りる道を見つめ、皆を見送った後、一人その場に残ったラピスラズは、少し困ったように肩を落とした。

「コーラル様に知れたら、何と言われるか」

「まあ、半殺しくらいには、なるんじゃないかねえかあ？」

答えるように、横から入って来る声に、ラピスラズが戸惑いの表情で振り向く。森の奥、木々の間から、その場へと姿を見せたのは、ブラッドスであった。

「ブラッドスさん」

「マルク・クラウドが、今日の講義に一つも出て来なかったから、どんな調子かと、様子を見に来たんだがなあ」

ラピスラズのすぐ近くまで歩を進めると、立ち止まり、ブラッドスが頭を掻く。

「手遅れだったか」

「ええ」

ブラッドスの言葉に、ラピスラズがそっと微笑み、答える。

「何で行かせたあ？ フレイヤなんか行ったら、どう転んだって無事にはっ……」

「パートナーを大切に思う気持ちは」

どこか責めるようなブラッドスの言葉を、ラピスラズが、柔らかく遮る。

「あなたの方が、よく、おわかりになるのではありませんか？」

穏やかな笑みで、ラピスラズがブラッドスの方を見る。

「バーツさん」

「……っ」

呼ばれるその名に、ブラッドスの表情が、あからさまに曇る。

「止める。その名前で呼ぶな」

何度か首を横に振り、強く拒絶するように、ブラッドスが言う。

「俺はもう、人間で在ることを、やめたんだ」

ブラッドスのその言葉に、ラピスラズがどこか悲しげに、視線を落とす。

「別の未来を探しているから、かも知れません」

「ああ？」

突然のラピスラズの言葉に、ブラッドスが顔をしかめ、聞き返す。

「何故、行かせたか」の、答えです」

「……くだらねえ」

どこか吐き捨てるように、ブラッドスが呟く。

「俺はどうなっても、知らねえからなっ」

突き放すように言うと、ブラッドスはあっさりと、ラピスラズに背を向け、足早にその場を去っていった。その背を見つめ、ラピスラズが少し、困ったような笑みを浮かべる。

「マルク様」

ゆつくりと空を見上げ、ラピスラズは案じるように、マルクの名を呼んだ。

連れ戻されたルビィネルを忘れ去ることはなく、もう一度、出会うために、フレイヤに行くことを決めたマルクは、一緒に行くと言ってくれたポンド、アメジエス、そのパートナーであるエメラルディア、フラン、そしてトゥーパと共に、フレイヤへと向かうべく、ヤールの外れ、レイヤの国境付近へと来ていた。

「このコーラルの名前入りの通行証があれば、フレイヤの国門をパス出来るんだってさ」

「まあ、コーラル様の名前使えば、それくらい出来るでしょうね」

ラピスラズから預かった通行証を、アメジェスへと見せるマルク。フレイヤに行きたいと願ったマルクに、ラピスラズは快く、この通行証を手渡してくれたのであった。

——ただし一つ、約束して下さい。マルク様。必ず、このヤールに戻って来ると——

「……っ」

願うようなラピスラズの言葉を思い出し、マルクがそつと笑みを浮かべる。

「ねえ、トウーパ、思ったんだけどお」

口を挟むトウーパに、マルクが笑みを消し、振り向く。

「何？ トウーパ」

「その通行証でフレイヤには入れるとしてえ、レイヤは、どうやって出るの？ 確か、出国許可いるでしょ？」

「あつ」

トウーパからの指摘に、今気付いたとばかりの声を漏らすマルク。

「忘れてた」

「トンだ間抜けだねえ、最下級魔士！」

「パートナー、辞めるわよ……？」

「誰しもミスはするものさ！ ドンマイだよ、最下級魔士！」

アメジェスにパートナー契約解除を迫られ、マルクを責めていたフランが、あつという間に態度を翻す。

「どうしよう……レイヤを出れないんじゃない、いくらフレイヤへの通行証もらったって……」

「まあ、そこは心配すんなって！」

「え？」

がつくりと肩を落としたマルクの、その肩に手を置き、軽い笑みを向けてくるポンドに、マルクが戸惑うように首を傾げる。

「俺が親父の名前盗んで、ちゃんと、ニセの出国許可証作って来て

やったから！」

得意げな笑顔でポンドが、出国許可証を提示する。確かに、そこには、ヤール領主であるポンドの父、デイルハムの名が刻まれており、デイルハムのサインも入っていた。

「ポンド、有り難いけど、それ犯罪じゃ……」

「まあまあ、細かいこと、気にすんなって！」

「いや、全然細かいくないんだけど……」

「ポンド、気にしない……略して、ポキナ……」

まるで悪びれた様子のないポンドの横で、エメラルディアがひっそりと呟きを漏らす。

「まあ、いいじゃない？ ご厚意に甘えましょ、マルク。どうせ、罰せられるのはポンドなんだし」

「うわっ、ひつでえ言い方」

爽やかな笑みを、マルクへと向けるアメジースに、ポンドが思わず表情をしかめる。

「トウーパ、またまた思ったんだけどお」

そこへ、先程と同じように、トウーパが口を挟む。

「何？」

「レイヤとフレイヤの間って、でっかい山脈があるじゃない？ それ、どうやって越えるの？」

新たなトウーパの問いかけに、マルクがまた、首を捻る。

「ええーっと、歩いて、とか？」

「ええー？ トウーパ、山登りとか無理い」

「じゃあ、帰りなさいよ」

「嫌よお。私だって、マルクと一緒に行きたいものお」

わがままばかり言うトウーパに、アメジースがあからさまに表情を歪める。

「んー、でも実際、山越えてたら、それだけで二日はかかるよなあ」
「ハッハッハッハ！」

山脈を越えることを考え、首を捻らせていたマルクが、すぐ横か

ら聞こえてくる高笑いに気付き、ゆつくりと振り向く。その高笑いの発声者であるフランは、大きな動作で髪を振り払い、やたら格好をつけた態度を見せていた。

「この、王のように気高く、神のように尊い存在である僕が、山登りなど、すると思うかい!？」

「あ、じゃあ、お前も帰る？ 良かったあゝ、丁度、鬱陶しいと思つてたんだよね」

「違うよ！ 最下級魔士のくせに、失礼だね！」

ホッとしたような笑顔を見せるマルクに、フランが勢いよく声を荒げる。

「折角、この僕が、レイル貴族である父に頼んで、二人乗りの火車を三台、用意させたっていうのにさ！」

「え？ 火車を？」

フランのその言葉に、マルクが驚きの表情を見せる。火車とは、その名の通り、魔炎を動力源とした車で、レイヤ、特に人間領のヤールでは、ポンドの家のような、裕福な家しか持つことの出来ない、滅多にお目にかかれない乗り物であった。

「そうだよ。すでに家の者に指示して、僕らが今から行く、国門の近くに待機させている」

「ホント!？ すっごい助かるよ、フラン！」

「ハッハッハ！ そうだろう？ 存分に感謝したまえ！」

「父親の力使っただけなんだから、別に感謝なんてしなくていいわよ、マルク」

得意げなフランのすぐ横から、満面の笑みで、水を差すようなことを言い放つアメジース。

「あ、でも火車って、魔力で運転するんだっけ？ だと俺、運転出来ないかも」

「だなあ。マルク、魔力、微塵もねえし」

「どうせ俺の魔力は、魔力測定でも測れないほどしかないよ……」
大きく頷くポンドの横で、マルクが元氣なく俯く。

「大丈夫よつ、私が運転したげるから！ だから、二人つきりで乗りましようね？ マルクっ」

「あ、う、うん。ありがとう」

ウキウキとした笑顔を向けるトゥーパに、マルクが少し、体を引きながら、答える。

「別に運転なんて、皆出来るんだから、あなたがマルクと乗らなくたって」

「あんたは、あのウっざい男と乗りなさいよ。パートナーでしょ？」

「あのねえ……」

言葉を交わしていくうちに、徐々に、アメジースとトゥーパを包む空気が、険悪なものへとなっていく。

「何か、雲行き怪しい？」

「放つとけ、放つとけ。一途は時に、人を狂わせるってなあ」

「はあ？」

一人、納得した様子で頷いているポンドに、マルクがよくわからないといった表情で、大きく首を傾げる。

「とにかく今、お前は、ルビィネルちゃんのこととか、ルビィネルちゃんのこととか、ルビィネルちゃんのこととか、考えとけばいいんだよ」

「ルビィネルのこと、ばっかじゃなか」

熱く言い放つポンドに、マルクが少し呆れたように肩を落とす。

「……っ」

少し視線を落としたマルクは、右手の甲に刻まれた魔紋を見つめ、真剣な表情を見せた。

——逃げねば、ならない。

「呪われた血と炎を受け継ぎし、魔女。何と汚らわしい」

重苦しい、この世界から。狭苦しい、この世界から。

「お前は何を夢見ることもなく、ただこの場所で生き、朽ちていけば良いのだ」

何の希望もない、この世界から。

「逃げた！ あの魔女が逃げたぞ！ 追え！」

逃げ場など、どこでもいい。ここでないのなら、どこでもいい。

「ハア、ハア、ハア！」

ただ夢を、夢を見られる世界へ。

「誰だ！？」

「魔、女？」

少し間の抜けた、でもまっすぐな、偽りのない瞳。自分を、汚らわしいものとして見ない、透明な瞳。

「俺も、行ってみたかったな……」

そんな顔をするな。あの重苦しい世界を思い出させるような、そんな、諦めきった顔をするな。

「お前、彩炎の魔女になるんだろ！？ だったら、なんで、俺をパートナーになんかつ……！」

自分の言葉に、傷つくな。自分を傷つけるような言葉ばかりを、口にするな。

「俺、なんかつ……」

大丈夫。諦めなくていい。大丈夫。

一緒に、夢を見よう……——

「マルクっ……」

ルビィネルがゆっくりと瞳を開く。開いた瞳の先には、無機質な、白い天井が広がっていた。そこは何もない部屋だった。壁も天井も

白一色で、妙に寒々しい。窓すらもなく、鉄の扉が一枚、あるだけだ。ゆつくりと上半身を起こしたルビィネルは、何も無いその部屋を見回し、そっと肩を落とした。この部屋に入れられて、どのくらいの時が経つのか。時計もないため、確かめようもないが、いつの間にか、眠ってしまったようだ。

「夢にまで見たか」

先ほどまで見ていた夢の、その中に出てきた者の姿を思い出し、ルビィネルがそっと目を細めながら、自身の左手の甲に刻まれた、黒い魔紋を見つめる。

「出会って、たったの十数日で」

——ルビィネル！——

一瞬、目を閉じたルビィネルが、大きな笑顔で名を呼びかけるマルクの姿を思い出す。

「随分と、焦がれたものだ……」

自嘲するような笑みを浮かべて、ルビィネルはその左手の甲に、そっと、口付けを落とした。

マルクたちの住むレイヤの隣、隣国といっても、その間には広大な山脈があり、ちよつとやそつとでは行くことの出来ない場所に存在するのが、魔族のみの国、フレイヤであつた。魔族領レイールと人間領ヤールのあるレイヤよりも、五倍ほどの領土を誇っており、この世界では、一番の大国である。また、歴史も古く、聖地マフレイヤが生まれた、そのすぐ後に出来た国が、フレイヤと言われている。

そのフレイヤの中心部、首都フレジュアに、フレイヤ政府本部と並ぶようにして、フレイヤ聖騎士団の本部があつた。

いくつもの白い建物が並ぶ本部で、一際目を引く、真つ赤な四角い、大きな建物。鉄製の、頑丈そうな建物が、聖騎士団の小団の一つ、赤炎騎士団が所持する赤炎棟であつた。

—— 赤炎棟、七階。団長室。

「失礼致します」

短めのノックと共に、部屋へと現れたのは、ヘリオドルであつた。机に向かい、山積みになった書類のチェックを行っていたサードニックが、入って来たヘリオドルに、ゆっくりと顔を上げる。

「何だ？」

「罪人の件ですが」

ヘリオドルの口から出た、“罪人”という言葉に、サードニックが少し目を細める。誰かを問うまでもなく、ルビィネルのことであらう。

「一先ず、地下特別室に収容しておりますが、政府の決定が下るまで、このままでよろしいでしょうか？」

「ああ、問題ない」

すぐに冷徹な表情となつたサードニックが、興味なく答え、書類

へと視線を戻す。

「政府には？」

「すでに連絡を取っております。二、三日で、指示が来るかと」

「わかった。それと、ヘリオドール」

「はい」

書類を見たまま、ヘリオドールとの会話を続けるサードニック。

「リラ・ヒューズベルに、報告を急がせる。特に、あれのパートナーについては、詳細に報告するよう指示を送れ」

「かしこまりました」

サードニックの言葉に、ヘリオドールが深々と頭を下げる。

「それから……」

「団長おお！」

言葉が続けようとしたサードニックの声を、勢いよく遮り、壊れるのではないかと思うほど、思いきり扉を開け放って、一人の男が、団長室へと入って来る。入って来たのは、背の高い、がっしりとした体格の、サードニックやヘリオドールより、少し若い年齢の男だった。銀色の髪には紺色のバンダナのようなものを巻きつけており、紅い瞳は、少年のように輝きを放っている。右耳にだけ、いくつもの金色のピアスをしていた。サードニックたちと同じデザインの手服を着ているが、その色は紫紺で、同じデザインでも、まるで違う服に見える。

「団長、団長、団長おお！」

「うるさい……」

部屋の中へと足を進めながら、何度も呼びかけてくるその男に、サードニックが思いきり表情を歪め、うんざりした様子を見せる。

「オニクス」

「ん？」

ほとんどサードニックの座る机の前まで進んでいった男が、部屋の横側に立っていたヘリオドールに名を呼ばれ、暢気な表情で振り向く。そんな男、オニクスの様子を見て、ヘリオドールは少し肩

を落とした。

「あなたは今や、紫炎騎士団の団長。もう我等、赤炎騎士団の一員ではないのです。サードニック様を、“団長”と呼ぶのは、間違っているかと」

「固いこと、言わないで下さいよお。俺だって、いきなり紫炎軍行けって言われて、寂しい思いしてるんすよお？」

厳しく指摘するヘリオドールに、オニキスは、緩い笑顔を向ける。
「紫炎騎士団の連中、陰険で根暗な奴ばかりで、俺もっ、うんざりなんですからあ。ああゝあ、赤炎軍のまんまが良かったなあ」

「本部の決定なのです。仕方がないでしょう？」

ボヤクように言うオニキスに、ヘリオドールが鋭く言葉を投げかける。

「紫炎騎士団は元々、人手が足りていないのです。あなたのような若輩者が、団長の任を授かるくらいですからね」

「うはあー、厳しいお言葉でっ」

ヘリオドールの容赦ない発言に、オニキスが思わず、額を手のひらで叩く。

「まあ、団長は有り難く、やらせていただきますよお。だから、いつしょお？ たまあに、こっちに顔出すくらい」

強請るような、笑顔を見せるオニキス。

「ほら、里帰りのな？」

「あなたには、団長としての自覚が、まるで足りていないようですね」

軽い口調を見せるオニキスに、ヘリオドールが呆れ切った表情を見せる。

「よろしいですか？ オニキス。団長というのは、騎士としての誇りを持ち、団員の皆から尊敬されるべき存在でっ……」

「そんなことより、団長！」

「んな!？」

説き伏せようとしたヘリオドールをあっさりと無視し、サードニ

ツクへと視線を向けるオニキスに、ヘリオドルが思わず、表情を引きつる。

「オニキス！」

「ねえ、団長。ルビィネルが帰って来たって、マジ？」

ヘリオドルが怒り叫んでいるのも無視し、オニキスがサードニツクへと問いかける。オニキスのその問いに、サードニツクが少し眉をひそめた。

「帰って来たのではない。連れ戻して来たのだ」

「あ、やっぱ帰って来てんだ！」

言葉を訂正したサードニツクを気にする様子も見せず、オニキスが、嬉しそうな笑顔を見せる。

「おし、会いに行つて来よう。で、ルビィネル、どこに居るんスカあ？」

「面会は禁止だ」

「えええ！？」

冷たく言い放つサードニツクに、オニキスが驚きの声をあげる。

「なんでえ！？」

「あれは罪人だ。他団の者に早々、面会などさせられるか」

非難するように問いかけてくるオニキスに、サードニツクが当然とばかりに答える。

「けどけどお、俺は特別に、とかないんスカあ！？」

「何故、貴様を特別扱いせねばならない？」

「それは俺があ、ルビィネルと未来を約束し合った、運命の人っていうかあ、だからあ」

どこか照れたように、頬を赤く染めながら、言葉を発するオニキスに、サードニツクが大きく表情を引きつらせる。

「面会は禁止だ。とつとつ、自分の団に戻れ」

「ブー、ケチい」

もう一度、念を押すように言い放つサードニツクに、オニキスが拗ねたように、口を尖らせる。

「相変わらずの溺愛っぷりですねえ」

「誰がだ」

オニキスが感心したように言うと、サードニックが顔を上げ、すかさず否定する。

「まあ、そういう恋の障害がある方が、俺的には燃えるっていうかあ！」

「俺が燃やしてやろうか……？」

ウキウキと体を弾ませるオニキスに、冷たい言葉を投げかけるサードニック。

「ハイハイ。恋の炎はともかく、団長の炎に焼かれるのはきついで、大人しく帰りますよお」

「とつとと帰れ」

「あ、そういえばっ」

やつとので、サードニックへと背を向けたオニキスであったが、思い出したようにそう言って、再びサードニックの方を振り向く。

「ルビィネルがパートナー得たって話、マジ？」

「……っ」

どこか鋭い瞳を見せ、問いかけるオニキスに、サードニックの表情が、あからさまに曇る。そのサードニックの変化に気付き、オニキスは目を細め、そつと口元を緩めた。

「マジなんだ」

どこか楽しむように、オニキスが呟く。

「そりゃあ、由々しき事態っすねえ。団長っ」

「わかってるなら、俺の邪魔をするな」

「ハイハイ」

睨みつけるような視線を送るサードニックに、オニキスが軽い返事を送る。

「まあ、何かあったら言って下さいよ。ルビィネルのためなら、この紫炎騎士団長オニキス、いつでも協力しますんで！」

「俺が、貴様の助けなど、借りると思うか？」

「思わないけど、一応言ってみただけっスよ。カッコいいでしょ？俺っ」

サードニックへと得意げな笑みを浮かべながら、オニキスが、部屋の出口へと向かっていく。

「じゃあ団長、あんまり思い詰めて、暴走しないようにして下さいね！ んではっ」

軽く手を振り上げ、忠告するように言うと、オニキスは部屋を後にした。また、壊れそうなほどに勢いよく扉が閉まると、部屋の中に平穏が戻って来る。

「相変わらず、癪に障る奴だ」

「まったくです」

思わず呟いたサードニックの言葉に、ヘリオドルがしみじみと頷く。

「サードニック様」

「何だ？」

「いえ、先程、何か指示を出す途中だったのではないかと」

「ああ、そうだった」

ヘリオドルの言葉に、思い出したように頷くサードニック。オニキスが乱入して来たため、指示が途中で終わってしまっていたのだが、オニキスの印象があまりに強く、途中で終わっていたことすらも忘れてしまっていた。

「国門を守る騎士たちに、警戒を厳にするよう、伝えろ」

そのサードニックの指示に、ヘリオドルが途端に、困惑の表情を見せる。

「警戒を厳に？ 何者かが、我が国にやって来ると？」

戸惑ったヘリオドルの脳裏に、すぐさま浮かんだのは、ルビィネルが別れを惜しむように、そっと礼を送っていた、マルクの姿であつた。

「まさか、あの者たちがっ……？」

眉をひそめたヘリオドルが、サードニックへと問いを向ける。
「サードニック様、それは、いくら何でも、考えすぎなのでは？
あの者たちは、所詮、魔士。まさか、このフレイヤに来ることなど
……」

「絶対にない、と言い切れるのか？」

鋭く問いかけるサードニックに、ヘリオドルが思わず、口ごも
る。

「我々魔族には、到底理解出来ぬ、愚かしいことをするのだ。人間
という生き物は」

サードニックの表情が、さらに冷たいものへと変わる。

「あの男が、ガーネットにしたことのような」

「……………」

悲しみにも似た、憎しみのこもったその言葉を聞きながら、ヘリ
オドルがそつと視線を落とす。

「不審な者は誰一人、見逃さぬよう、伝えろ」

「かしこまりました」

視線を落としたまま、ヘリオドルは静かに頷いた。

その頃、フレイヤ西の国門。

「彼のコーラル様の使者の方々であられますか！ ようこそ、我が
フレイヤへ！」

「どうぞ、お入り下さいませ！」

「は、はあ。どうも……」

警戒を厳にするどころか、快く出迎えられるようにして、マルク
たちは、フレイヤへと入国していた。あまりにも笑顔で迎えられ、
マルクは逆に居心地が悪くなってしまう。

「ちよつと聞きたいんだけどお、フレイヤ聖騎士団の本部って、ど
こにあんのぉ？」

「聖騎士団、でありますか？」

通行証を持ったマルクの横から、顔を出したポンドが、図々しく、国門の門兵たちへと問いかける。突然の問いかけに、門兵たちも、訝しむような表情を見せる。

「そお。詳しくは言えないんだけどお、俺たち実は、コーラル様の用事で、聖騎士団の本部に行かなきゃいけないくつてさあ」

「そうでありますか！ 御苦労さまです！」

「聖騎士団の本部は、フレイヤ北西部にある首都フレジュアの、中央都市を抜けた東南地区にございます！」

「ふむふむ、首都フレジュアねえ」

衛兵たちからの言葉を、すらすらとメモしていくポンド。

「あんがと。真面目な素晴らしい門兵だって、本部に伝えておくよ」
『ありがとうございます！』

深々と頭を下げた門兵たちに見送られ、マルクたちはまた火車に乗り込み、フレイヤの領土内へと入っていく。トウーパの運転する火車の、助手席に乗り込みながら、マルクが、すぐ隣の火車の運転席へと乗り込む、ポンドの方を振り向く。

「誰が、本部にも伝えておくつて？」

「アハハア、上手いこと言うでしょ？ 俺っ」

「本当、口の回りっぷりだけは、大したものよね」

フランと共に火車に乗り込みながら、アメジエスが感心したような、呆れたような声を漏らす。

「はあ。でも本当に、フレイヤに入れちゃったなあ」

マルクが通つて来た国門と、前方に広がるフレイヤという国を見つめ、浮かない表情を見せる。普通の人間では到底、足を踏み入れることは出来ない、魔族だけの国フレイヤに、マルクはいよいよ、足を踏み入れてしまったのである。

「何か急に、胃痛くなってきた……」

「チキンね」

「どうせ俺はチキンなんだよ……この世で一番の小心者なんだよ……」

…」

隣の席から一言、はつきりとした言葉を投げかけるトゥーパに、マルクが落ち込むように呟く。

「まだ騎士団にも、乗り込んでないっていうのに、先が思いやられるわね」

「ま、その方がマルクらしくって、俺はいいけどなあ」

困ったように肩を落とすアメジェスとは対照的に、ポンドはどこか、嬉しそうな笑みを浮かべる。

「何か、安心するし」

「俺がチキンだと安心するって、どういう心理だよ」

「まあまあ」

非難するように振り向くマルクに、ポンドが宥めるような声を掛ける。

「あ、そうだ。マルク。フレジュア入る前に、コレ、着替えとけ」

「何？ これ」

ポンドから白色の服のようなものを渡され、マルクがそれを広げながら、不思議そうに問いかける。

「ヒラ騎士団員の軍服」

「ええ！？」

返って来る答えに、大きく驚くマルク。確かに広げてみると、魔士の制服によく似てはいるが、右の胸元にフレイヤの文字の刺繍の入った、制服が現れた。

「魔士の服着てたら、すぐに人間てバレるし、軍本部には騎士がわんさかいるんだから、紛れるには都合いいだろお？」

「そりゃそうだけど、一体、どこで、こんな服っ……」

「この前、ウチに来た闇商人から、買つといた」

「俺、やつぱり、お前が怖いよ……」

自然な口調で答えるポンドに、マルクは思わず、表情を引きつった。

一方、その頃。今まさに、マルクたちが抜けてきた、フレイヤの国門。

「まさか、人間の分際で、コーラル様の通行証を持っているとはな」
「どうせ偽物だろう。それよりも、騎士団、サードニック様への連絡を急げ」

「ああ」

マルクたちに見せていた爽やかな笑顔とは真逆に、含みを持った、怪しげな笑みを浮かべた門兵たちが会話をし、一人が、連絡するためか、奥の部屋へと消えていく。

「自ら騎士団に乗り込んでいくなんて、馬鹿な人間だぜ」

門兵は吐き捨てるようにそう言うと、マルクたちから受け取った通行証を、破り捨てた。

国門から、火車を走らせること、一時間。いくつかの街を越え、マルクたちは、フレイヤの首都フレジュアへと辿り着いていた。

「火車はこちらにお願いしますだつてさ」

都の入口に作られた、火車専用の巨大駐車場に、マルク達も皆、乗って来た三台の火車を停める。レイヤでは滅多にお目にかかれなというのに、巨大駐車場には、所狭しと火車が並んでいた。レイヤで主流のモデルはそうなく、マルクが見たことのないデザインの火車の方が、多いくらいであった。

「さすがは、フレイヤの首都だな」

「街の入口に、特に門兵も居ないみたいだし、早く入りましょう」
「うん」

アメジェスの言葉に頷き、火車を降りたマルクが、皆と共に、首都フレジュアへと足を踏み入れる。マルク、ポンド、フランの三人は、すでに、魔士の黒い制服から、騎士団の白い軍服へと着替えていた。魔女三人は、そのままの格好である。

「うわっ……」

フレジュアへと足を踏み入れたマルクが、街並みを見つめ、思わず言葉を失う。街はまるで、要塞都市のように、分厚い白い壁で覆われており、壁と同じような白色の建物が、いくつも並んでいた。ここまで来る時に通って来た街よりも、物々しく、住宅街の雰囲気はまったくない。余分なもの一切置かれていない、灰色の塗装の道を歩く者たちも、よく見れば、マルクたちと同じ軍服を着た者ばかりだ。普通の格好の者の方が珍しいくらいである。

「あんまり首都って感じじゃないな」

「フレジュア、政府と騎士団だけで、成り立ってる街……関係者とその家族しか、住んで、ない……」

「へえ、そうなんだあ。でも、そんな感じかも」

エメラルディアの説明に、マルクが街を見回しながら、納得したように頷く。

「詳しいな、メル」

「モルダバに、聞いたこと……ある、から……」

エメラルディアの口から出るその名に、ポンドの表情が、あからさまに曇る。

「メル、思い出したくないことは、思い出さなくてもいいんだよ？」

「大丈夫……」

心配そうに問いかけたポンドに、エメラルディアは、ほとんどの表情を、少しだけ柔らかくする。

「皆の役、立てるの……嬉しい、から……」

「そっか」

小さくではあるが、はつきりと自分の意志を示すエメラルディアに、ポンドは優しく微笑みかけた。

「騎士団の本部が見えてきたわよ」

先頭を切って歩いていたトゥーパの言葉に、皆の表情が、一気に厳しいものへと変わる。皆の向かっていく先に、徐々に見え始める目的地。マルクの背丈の三倍はあるだろう、白い鉄格子に囲われた聖騎士団本部だ。街の東南地区にあるというよりは、街の東南地区全てが、騎士団の本部と言った方が正しいのではないかというほどに、敷地は広い。

「俺ん家の十倍はあるなあ」

「僕の家のおよそ五倍ほどだね！」

「俺の家の、ざっと一万倍くらいかな……」

ポンド、フランに続き、どこか悲しげな表情で呟くマルク。

「で、どうするのぉ？ まさか正門から、堂々と入ったりはしないわよね？」

「うーん、騎士団の連中には、顔が割れてる可能性もあるからなあ。それは確かに、危ねえかも」

「移り火は？」

首を捻ったポンドに、珍しくマルクが提案する。

「移り火で、この鉄格子の向こうまで行ければ、何とかなるんじゃない」
「マルク」

「え？ ダメ？」

「ダメではないわ。確かに、移り火を使えば、中には侵入出来る」
マルクの言葉を肯定しながらも、アメジエスが気難しい表情を見せる。

「問題は、誰が使うかよねえ」

「そう。移り火は、とても難易度の高い炎技なの。基礎炎技とは、比べものにならないくらい」

トウーパに頷きながら、アメジエスがマルクへと言葉を向ける。

「え？ でも、ルビィネルは」

「ルビィネルが簡単に使っていたものでも、私たちでは、早々、使えないということ」

「そ、そうなんだ……」

アメジエスの説明に、マルクが思わず肩を落とす。ルビィネルはあまりに自然に炎技を使っていたし、炎技についての知識があまりないマルクは、そんなに難しいものとは思ってもいなかった。

「ううーん。あんまり周り、ウロつくのも危険だし、どうすっかなあ」

「あ、じゃあさっ」

再び提案するように、声を発するマルク。

「俺が使うのは？」

「はっ？」

自分を指差したマルクに振り向かれ、ポンドが思わず、間の抜けた声を発する。

「お前が、移り火を？」

「うん」

「使えるの？ マルク」

「わかんないけど、ルビィネルと一緒に何回か使ったことあるし、

試すだけの価値はあるかなって」

不安げに問いかけたポンドとアメジエスに、マルクが、少しも諦めの滲んでいない笑顔を向ける。

「トゥーパ、俺と偽結してくれる？」

「モチロンよ！」

「……………」

ウキウキと頷いたトゥーパと共に、偽結の契約の準備を始めるマルクの姿を、どこか、啞然とした表情で見つめるポンドとアメジエス。マルクが自らの可能性を信じ、行動するところなど、長い付き合いのポンドとアメジエスでも、見たことはなかった。

「やっぱ変わったよなあ、マルク」

「そうねえ」

「成長は嬉しいんだけど、お父さんは、寂しいよ」

「誰がお父さんよ」

二人が会話をしている間に、トゥーパが長めの偽結の魔唱を言い終え、マルクと二人で契約の動作を交わすと、トゥーパが、自身の魔炎を目醒めさせる。

「起きて、私の黄炎っ」

トゥーパの解放した魔炎を、すぐにマルクが共有すると、マルクの全身をほのかに、金色の光が包み込んだ。マルクはすぐに燃烧を使い、体を包む魔炎を強める。皆が見つめる中、マルクは深く瞳を閉じ、集中力を高めた。トゥーパの魔炎との同調を、燃烧を使うことで強め、そして、鉄格子の向こうの、騎士団本部の敷地内を、鮮明にイメージする。後は、移り火の感覚を思い出すだけだ。

——行くぞ、マルク！——

ルビィネルに呼ばれるように、マルクはそっと口を開いた。

「“移り火”！」

マルクが言葉を発した途端、マルクたち六人を、黄色の強い炎が

包み込んだ。一瞬、視界がすべて、黄色で支配されたかと思うと、次の瞬間、六人が立っていたのは、白い鉄格子の内部、騎士団本部の敷地の中であつた。

「おお、本当に入れたようだね！」

「やるじゃん、マルク！」

「はあ、良かったあ」

感心したように言い放つフランとポンドのすぐ傍で、ホツとしたように胸を撫で下ろすマルク。

<魔炎反応有り！ 魔炎反応有り！>

「へ？」

しかし安心したのも束の間、鳴り響くブザー音と、無機質な女性の声の放送に、マルクが戸惑うように顔を上げる。

「勝手に敷地内に侵入した魔炎は、鉄格子の壁に仕掛けられた魔炎感知器に、キヤツチされちゃうみたいね」

「早く言えよ！」

「だって、気付かなかつたんだもの」

焦るマルクに対し、まったく焦っていない様子で答えるアメジェス。

『反応は、こちらからだ！』

「うわわっ、来たあああ！」

近付いてくる声に、マルクが頭を抱え、益々焦つたような表情となる。

「もう終わったあー！ 俺はここで捕まるためだけに、今日、ここに来たんだあー！」

「お、ネガティブスイッチ」

「あんまり変わってなかつたわね」

敵が近付いているというのに、配慮もなくただ叫ぶ、すでにいっぱいいっぱいの状態のマルクを見て、ポンドとアメジェスが呆れたような表情となる。

「んじゃま、ここは俺とメルが何とか時間稼ぐから、マルクはアメ

ジェスたちと行ってくれ」

「へっ？」

笑顔でそう言うポンドに、マルクが叫ぶことを止め、丸くした瞳で、ポンドを見つめる。

「何言ってるの？ 二人だけ置いてくなんて、そんなことっ」

「さっき、お前が情けないと、安心するって言ったろ？」

マルクの言葉を、ポンドが柔らかく、途中で遮る。

「俺は、お前がネガティブで、根暗で、何でもかんでもすぐに、諦めちゃう方がちよっと、嬉しいんだ」

戸惑いの表情を見せるマルクに、ポンドが優しく微笑みかける。

「その方が、俺が、お前の力になれるから」

「ポンド……」

ポンドの微笑みに、マルクがそっと目を細める。

「後、頼むぜ。アメジェス」

「ええ」

託すように言うポンドに、アメジェスが真剣な表情で、しっかりと頷く。

「ポンっ……」

「行くわよ、マルク！」

マルクは何かをポンドに話しかけようとしたが、強く腕を引くアメジェスにより、その言葉は、途中で遮られた。フランやトウパと共に、マルクが、敷地内の奥へと駆け去っていく。いつまでも後方を気にするように、振り返るマルクに、ポンドは微笑みかけた。やがて、皆の姿が見えなくなると、ポンドが前を見る。

「ふう〜。悪りいなあ、メル。お前にまで、付き合いさせちゃって」

「平気……」

振り向いたポンドに、エメラルディアはすぐさま、首を横に振った。

「マルクとルビィ、私、助けてくれた……だから今度、私、助ける番……」

「ああ、そうだな」

エメラルディアの拙い言葉に、ポンドが大きく頷く。

「今度は俺らが、助けてやんねえとな」

ポンドが強く拳を握り締め、真剣な表情を見せる。

「ポンド、カッコいい……略して、ポンカ……」

「嬉しいねえ。でも、そういうのは」

『居たぞ、ここだ！』

「出来れば、二人っきりの時に言つてっ」

わらわらとやって来る、赤色の軍服を纏った者たちを見ながら、ポンドが困ったような笑みを浮かべる。

「おい、お前たち！」

大勢でやって来た者たちの、先頭を走って来た大柄の男が、大股歩きで、ポンドとエメラルディアのもとへと歩み寄って来る。

「不審な者たちを見なかったか！？ 恐らくは黒い制服を着た者たちなのだが」

「ああ、魔士の制服着た連中なら、あっちの方向に慌てて、走つていくのを見ましたよ」

大柄の男の問いに、マルクたちが逃げた方とはまるで違う、完全な別方向を指差すポンド。

「そうか。あちらか。ん？ 魔士？」

ポンドの言葉に頷き、方向転換しようとした男であったが、不意にポンドが発した言葉を引つ掛け、眉をひそめると、再びポンドの方を振り向く。

「貴様、よく、黒い制服が魔士の制服だと知っているな」

「え？」

男の鋭いその言葉に、ポンドが少し、声を引っくり返す。

「あ、ああ。お、俺、レイルルの出身なんですよ。アハハハ」

「ほお、で、こんなところで、何をしている？ こんな場所に、騎士は用事はないはずだが」

何とか誤魔化そうとするポンドだが、男の鋭い視線は止まない。

「ちょ、ちよつと迷っちゃって！ 実は俺、騎士団入りたてなんですよねえ。だから、まだ道とか全然、わからなくて」

「では、我々が送って行ってやろう。どこの団だ？」

問いかけが徐々に、ポンドを追い詰めていく。

「えっと、赤炎騎士団、です」

少し躊躇いがちに、答えるポンド。

「ほお、そうか」

ポンドの答えを聞いた男が、満足げな笑みを浮かべる。

「いいことを教えてやろう。我が赤炎騎士団に、お前のような白い軍服を着た、ヒラ騎士はいない」

「ああ、そうなの？」

男のその言葉に、固かった表情を崩し、少し引きつった笑みを浮かべるポンド。

「じゃあ、赤い軍服、買つときや良かった」

「侵入者だ！」

男の掛け声に、後ろで控えていた者たちが一斉に、ポンドへと両手を向ける。

「メル！」

「起き、ろ……緑炎」

ポンドの呼びかけに、エメラルディアが、自らの魔炎を目醒めさせる。侵入前にすでに、偽結と魔炎共有の契約を済ませていたため、目醒めた魔炎はすぐに、ポンドの体に纏わりついた。

「我が赤炎領への侵入者！ 赤炎騎士団の名にかけ、決して、逃さん！」

「へえ、ここ、赤炎領なの？」

男の言葉を受け、右手に緑色の魔炎を纏ったポンドが、楽しげな笑みを零す。

「そいつは、朗報だっ」

「かれ！」

向かってくる者たちに、ポンドは笑みを消し、真剣な表情を見せた。

「ゆうえん
誘炎」」

「ここは、赤炎領。赤炎騎士団が有する場所です」

淡い紫色の炎に包まれた、赤い軍服を着た一人の騎士が、虚ろな瞳のまま、言わされている様子で、感情のない言葉を話す。ポンド、エメラルディアと分かれたマルクたちは、敷地内をさらに奥へと進み、たくさんの建物が立ち並ぶ、騎士団本部の中枢と見られる場所まで来ていた。

「ここ、赤炎騎士団の敷地なんだ」

「ルビィネルを捕らえたのは、赤炎騎士団。ルビィネルが、赤炎領に居る可能性は高いわ」

「へえ、随分と都合のいい展開ね」

感心した声を漏らすトゥーパの横で、アメジエスがそつと、目を細める。移り火は、使った本人の、一番印象深い場所へと、移動する炎技である。見たこともない騎士団本部には、マルクが印象深い場所などないだろう。だが、一番強くイメージしたであろう、ルビィネルの近くに、自然と移動してきたのかも知れない。そう考え、アメジエスが少し、複雑そうな表情を見せる。

「どちらにしろ、好都合だね。この赤炎領に、罪人が捕らえられているとしたら、それはどこかしら？」

「赤炎棟と呼ばれる、真つ赤な建物。団長や、上級騎士たちが、待機する場所。そこに、収容施設があります」

アメジエスの問いかけに、その騎士は、何の躊躇いもなく、丁寧に答えていく。

「赤炎棟ね」

しっかりと頷くと、アメジエスはその騎士の額に、人差し指を当てた。その指に弱く押されると、騎士はたちまち目を閉じ、その場に倒れ込んで、眠ってしまう。

「でも、さすがアメジエスだよなあ。歩いてた騎士捕まえて、幻惑して、情報もらっちゃうなんて」

「当然だろう。我が魔女は、素晴らしいのだよ！」

「紫炎は他の五元炎よりも、幻惑系の炎技に適した魔炎。威力は抜群ね」

自分のことのように得意げなフ란の横で、トゥーパもまた、感心の声を漏らす。

「真っ赤な建物……恐らく、あれね」

立ち上がり、周囲を見回したアメジエスが、白い建物の中で一際目立つ、壁一面真っ赤な、高い建物を見つける。

「行きましょう」

「うん」

アメジエスの言葉に、マルクはしっかりと頷いた。

「サードニック様」

扉を叩く音も短く、ヘリオドルが再び、サードニックの部屋へとやって来た。相変わらず、机に向かっていたサードニックが、何か予感めいたものを感じながら、顔を上げる。

「来たか」

「え？ あ、はい。赤炎領内に二名の侵入者を確認。ただいま、我が団の騎士たちが交戦しております」

わかっていたかのように答えを返すサードニックに、少し戸惑いつつも、ヘリオドルが手に持った紙を見ながら、報告を行う。

「国門門兵からの情報を加味しますと、恐らく後四名の侵入者が、この赤炎領内に存在するかと」

「赤炎軍、すべての騎士に、領内の探索と、この赤炎棟の警護に当たらせろ」

「かしこまりました」

サードニツクの指示に、ヘリオドルが大きく頷く。

「本部への連絡は、いかがなさいますか？」

「すべてが片付いてからでいい」

「え？　しかしそれでは、他軍への増援要請が……」

「増援？」

ヘリオドルの言葉に、サードニツクがあからさまに表情をしかめる。

「俺に、恥をかかせる気か？」

「い、いえ！　そんなつもりは！」

サードニツクの鋭い問いかけに、ヘリオドルが慌てて、首を横に振る。

「ただ、より確実に侵入者を捕縛するためにも、他軍に増援を送ってもらった方がよいのではないかと」

「我々の領内で起きたことは、我々が処理する」

ヘリオドルの言葉を、サードニツクはあっさり一蹴する。

「他軍の力など、借りる必要はない」

「かしこまりました」

強く言い放つサードニツクに、ヘリオドルが深々と頭を下げる。

「上級騎士にも、動くよう指示を出せ。捕まえられなかった場合は、始末しても構わない」

厳しいその言葉に、少し表情を曇らせるヘリオドル。

「奴等を二度と、ルビィネルに会わせてはならない」

「……はい」

力あるサードニツクの言葉に、ヘリオドルはただ、頷くことしか出来なかった。

サードニツクの指示に、赤炎領が慌ただしく動き始めた頃、マルクたちは、探索の目を盗み、何とか無事に、赤炎棟の前までやって

来ていた。だが赤炎棟の前には、赤い軍服を着た多くの騎士たちが集まり、警戒態勢を強めている。

「ま、侵入の目的はバレてるんだし、こうなってるのは当たり前だけどお」

別の建物の陰に隠れながら、トゥーパが溜息交じりに言葉を落とす。それほど大きくはない扉の前に、およそ三十人ほどの騎士たちが、所狭しと立ち並んでいる。どこからどう見ても、建物内部への侵入は不可能だろう。

「あれだけ警戒してるんだから、あの建物にルビィネルが居るのは、間違いなさそうだよな」

「マルクにしては、前向きな意見だけどお、どうやって入るわけえ？ 行ったこともない建物の中じゃあ、移り火だって無理だし」
「ううーん」

トゥーパの言葉に、マルクが思わず首を捻る。強行突破するにしても、人数が多い上に、集まっているのは皆、騎士だ。一人でも相手出来るかわからないというのに、あれほどの人数を、どうにか出来ると思えなかった。

「ダメだ。ネガティブなことしか、頭に浮かばない」

「大丈夫よ。この現状じゃあ、マルクじゃなくても、ネガティブにはなるから」

深々と俯いたマルクに、トゥーパが励ますように声を掛ける。そんなマルクを見て、赤炎棟内の騎士たちを見て、真剣な表情を見せるアメジエス。

「フラン」

「何だい？ 我が魔女」

「あそこに居る騎士たち全員に、一斉に、幻炎を見せることは可能かしら？」

アメジエスのその問いかけに、フランは一瞬、驚いたような表情を見せたが、すぐに表情を緩め、得意げに微笑んだ。

「水のように濁りなく、風のように軽やかなこの僕には、余裕のこ

とだよ。我が魔女」

「じゃあ、お願いするわ」

微笑んだフランに、アメジエスもまた笑顔で答える。

「トウーパ、あなた、速火そっかは使える？」

「ナメないでよ。私のプライド、傷つける気？」

「じゃあ、今すぐに用意して。あなたとマルクに」

「へ？」

アメジエスの言葉に、マルクが少し首を傾げる。

「任せなさい。ほら、マルク」

トウーパがマルクの手を取り、マルクと自身の両足に、黄色の淡い魔炎を囲わせる。

「アメジエス？ 何を……」

「マルク」

問いかけようとしたマルクの言葉を遮り、マルクの名を呼んだアメジエスが、マルクに優しく微笑みかける。

「あなたが諦めそうになった時、私とポンドは、絶対、力を貸すつて、そう決めて来たわ」

アメジエスの深い紺色の瞳が、まっすぐにマルクを捉える。

「だから、今ここで、あなたを前に進めるのは、私の役目。あなたをここで、諦めさせたりはしない」

「アメジエス」

「でも、ここから先は、ポンドも私も、力にはなってあげられないだから」

アメジエスが浮かべる笑みを、さらに大きなものへと変える。

「だから、ここから先は、諦めないでね。マルク」

「……わかった」

願うような、祈るような、アメジエスのその言葉に、マルクが真剣な面持ちとなって、しっかりと頷く。

「ルビィネルに会うまで、絶対、諦めない」

はつきりとしたマルクのその答えを聞き、アメジエスが満足そう

な笑みを浮かべる。

「目醒めて、私の紫炎」

アメジエスが魔炎を解放すると、フランがすぐさま、両手に紫炎を纏う。

「アメジエスのことは、この僕に任せたまえ。最下級魔士」

「フラン」

頷いたものの、不安げな表情の残るマルクに、自信を持って言い放ち、フランがそのまま、炎に包まれた両手を、赤炎棟の前に集まっている騎士たちへと向ける。

「この僕が付いている限り、我が魔女には、怪我一つさせないさ」

「ああっ」

得意げに笑うフランに、勇気づけられるようにして、マルクも笑う。

「フラン」

「ああ、“紫^{しげん}幻火”！」

フランが両手から紫色の炎を放つ。紫炎はまっすぐに、赤炎棟前に集まっていた騎士たちへと向かっていき、騎士たちを包み込むように大きく広がる。すると、紫炎に包まれた騎士たちが、次々と倒れ込んでいった。

「トウーパ！」

「わかってる！ 行くわよ、マルク！」

「うわわ、うわああああ！」

トウーパはアメジエスの呼びかけに、しっかりと頷くと、強くマルクの手を引き、黄炎に包まれた両足を動かして、目にも留まらぬ速さで駆け抜け、倒れた騎士たちを乗り越えて、赤炎棟の扉を突き破り、そのまま中へと侵入していった。

「さすがは速火。大したスピードだな」

「あれで行けるところまで、行ければいいんだけど」

両手を下ろしたフランの横で、アメジエスが少し浮かない表情を見せる。

「あ、ヘリオードールさんですかあ？」

「……っ！」

すぐ後方から聞こえてくる声に、アメジェスとフランが大きく目を見開き、距離を取って、身構えながら、勢いよく後ろを振り返る。「侵入者二名、赤炎棟に入られちゃったんで、後はよろしくお願いしまあーす」

小さな電話を片手に、恐らくはヘリオードールと連絡を取り合っているのであろう、その者は、派手なオレンジ色のモヒカン頭の、背の高い男であった。赤炎騎士団の証、赤色の制服を身に纏っている。髪も服も強めの暖色で、何とも派手な外見だ。

「ああ、はい。大丈夫です」

男が気のいい笑顔で、大きく頷く。

「後の二名は、こちらで始末しておきますんでっ」

突然、その笑みを冷たいものへと変える男に、険しい表情を見せるアメジェスとフラン。

「フラっ……」

「しへきえん“紫壁炎”」

「え？」

フランへと呼びかけようとしたアメジェスが、突然、アメジェスの周囲に、紫炎の壁を張り巡らせるフランに、戸惑うような声を漏らした。だが、その声が漏れるのと一秒も違わずに、張ったばかりの壁に、赤色の炎の塊が当たる。炎が壁にぶつかった、その大きな音に驚き、思わず目を見開くアメジェス。フランが壁を張っていなければ、アメジェスは今頃、赤い炎に焼かれていただろう。

「残念っ！ 防がれちゃったあ」

少し悔しげな表情を見せながら、その場へと現れたのは、男同様、騎士団の赤い制服を着た、茶色い巻き髪に、青色の大きな瞳の、愛らしい少女であった。少女は、巻き毛を指に巻きつけながら、ゆっくりとした足取りで、二人のもとへと歩いてくる。

「相手は魔士だって聞いたからあ、魔女から燃やしちゃえば早いと

思っただけどお」

「冗談じゃないよ」

アメジエスの周囲を包んだ紫炎の壁を消し去りながら、フランが少女へと言い放つ。

「何人たりとも、我が魔女に、手出しはさせない」

勇ましく、堂々と言い放つフランに、アメジエスが思わず、目を見張る。

「どうだい、我が魔女！　こんな素敵かつ無敵な僕に、惚れ直したかい！？」

「最初から惚れてないから、惚れ直しようがないわ」

大きく両手を広げながら、自信を持って問いかけてくるフランに、アメジエスが満面の笑みで、冷たく答える。

「サフィリン、君まで来たのか」

いつの間にか電話を切った様子の男が、少女と並ぶように、こちらへとやって来る。

「エヘヘっ」

「魔士と魔女の二人くらい、俺だけで平気だったのに」

「だってえ、折角の機会だったんだもの」

困ったように肩を落とす男に、少女が無邪気に微笑んでみせる。

「滅多にないじゃない？　私たち、上級騎士が動いてもいいだなんてえっ」

「まあね」

『……っ』

二人の会話を聞きながら、アメジエスとフランは互いに、厳しい表情を見せた。

赤炎棟、三階。団員会合室。

「赤炎棟前の二人は、パパラチャが相手しています。他の二人の侵

入者のもとへも、別の上級騎士を送りました。あなた方には、この赤炎棟に侵入した、残り二人の者の相手をつ……」

『うわああああ！』

手元の書類に目を落とし、集まった騎士たちに指示を送っていたヘリオドールが、突然響き渡る悲鳴に、眉をひそめ、顔を上げる。ヘリオドールが顔を上げると、集まっていた騎士たちが皆、全身に火傷を負った、痛々しい状態で倒れ込んでいた。

「リラ……」

ヘリオドールがうんざりとした表情で、部屋の入口付近に立った青年を見る。その場へと現れたリラは、昨日までの、魔士の黒い制服ではなく、騎士団の赤い軍服を身に纏っていた。マルクとの戦いで負った傷も、すっかり癒えているようである。

「何度も言っていますが、仲間である赤炎騎士団員に、悪戯に攻撃を仕掛けるのは、止めてください」

「僕をどうにかするよりい、この人たちをもっと、強くするとかした方がいいんじゃない？」

他人事のように話しながら、リラが倒れた騎士たちを容赦なく踏み越え、ヘリオドールのすぐ目の前へとやって来る。

「来たんでしょ？ 昨日の子たち。なんで僕に、連絡くれないわけ？」

幼さの残る笑顔を見せながら、それでも視線だけは鋭く、リラがヘリオドールを見つめる。

「僕、一応、この団の最上級騎士で、団長、副長に続いて偉い、騎士様のはずなんだけどお」

「あなたには、レイヤへの潜入任務をこなしていただいたばかりです。疲れているかと思ひまして」

「うわぁー、嘘臭っ」

極めて冷静に言い放つヘリオドールに、リラが楽しげな笑みを浮かべる。

「僕、全然疲れてないよ？ だから、出てもいいでしょ？ ヘリオ」

ねだられるように問われ、ヘリオドルがそつと、目を細める。

「あなたは一度、あの魔士と戦い、敗れています」

「大丈夫。次は絶対、負けないよっ」

リラがすぐさま、ヘリオドルの言葉を否定し、自信に満ちた笑みを見せる。

「だって今度は、殺していいんでしょ？」

わくわくと問いかけるリラに、険しい表情を見せるヘリオドル。

「どうぞ、好きなように」

「ありがとっ」

ヘリオドルからの言葉に、満足げに頷くと、リラはそのまま、足取りも軽やかに、ヘリオドルの居る部屋を後にする。

「まったく、誰が手当てすると思っているのか……」

床に倒れ込んでいる騎士たちを見下ろし、ヘリオドルは少し、頭を抱えた。

フレイヤ聖騎士団、赤炎騎士団所有地、赤炎領。赤炎棟、一階。
「ん？」

アメジェスとフランの魔炎により、見張りの騎士を眠らせたその隙に、トゥーパと共に、赤炎棟内へと一気に侵入したマルクが、棟の外から聞こえてくる、大きな衝撃音に気付き、廊下を駆け抜けながらも、ふと後方を振り返る。その衝撃音には、マルク自身も聞き覚えがあつた。魔炎と魔炎が、ぶつかり合う音だ。考えを巡らせ、マルクが眉をひそめる。

「見つかつちやつたかしらね」

マルクの考えを読むように、横からトゥーパがそつと呟く。

「あんな所で見つかったら、総攻撃されるよ！ 戻つて、二人の加勢した方がっ」

「じゃあルビィネルは？ どうすんの？」

「それはっ……」

前方を向いたまま、鋭く問いかけるトゥーパに、マルクが思わず口ごもる。

「でも、このままじゃアメジェスたちがっ」

「そうやって、逃げ場作る？」

「え？」

トゥーパのその言葉に、戸惑った表情を見せるマルク。

「“ルビィネルを助けられなかったのは、他の仲間たちを助けていたからだ” って」

突き刺さる言葉に、マルクが険しい表情となる。

「逃げ場作るのって、結構簡単なことだと思うわ。でもね」

前方を見ていたトゥーパが、振り向き、真剣な表情で、まっすぐにマルクの方を見つめる。

「ポンドもアメジェスも、あなたに、そんな逃げ場を作らせるため

に、付いて来たわけじゃないのよ」

マルクを見据え、トウーパが少し厳しい口調で言い放つ。

——— その方が、俺が、お前の力になれるから ———

——— だから、ここから先は、諦めないでね。マルク ———

「……っ」

ポンドとアメジェスから貰った言葉を思い出し、マルクが噛み締めるように、強く唇を噛む。

「そうだね」

険しかったマルクの表情に、そっと笑みが滲む。

「ごめん、トウーパ。行こう」

短く謝罪した後、マルクがトウーパへと微笑みかける。

「皆が作ってくれた道だ。後戻りなんて、出来ない」

「ええっ」

はつきりと言い放ったマルクの、その晴れやかな表情を見て、トウーパもまた、嬉しそうな笑顔を見せた。後ろを気にすることはやめ、二人が前方を目指し、さらに速度を上げる。

「でも、中は全然いないね。見張りとか」

「入口前で全員、止める気だったんでしょ。とりあえず上の階、行くわよ」

「へ？」

何の迷いもなく右へと曲がり、曲がってすぐのところにあった階段を、駆けあがっていくトウーパを、階段の前で止まったマルクが、戸惑った表情で見上げる。

「な、なんで上行くの？ まだ一階、全部見たわけじゃっ」

「偉そうな奴は大概、上の階で待機してるもんなの。ほら、とつとと行くわよ！」

「適当な理由だなあ」

トウーパの言葉に呆れつつも、どんどんと突き進んでいくトウー

パとはぐれるわけにもいかず、マルクも階段を駆け上がったいく。十数段ある階段を駆け上がり、踊り場を抜けて、また十数段、階段を上がると、そこで階段は終わり、無数の部屋があり、混み込みしていた一階とは違い、随分と開けた空間へと出た。

「講堂か何かなのかな？」

周囲を見回しながら、マルクが、すでに二階へと辿り着き、少し前方で立ち止まっているトゥーパの方へと歩み寄っていく。

「ねえ、トゥー……トゥーパ？」

マルクがすぐ横へと立つても、まったく反応を示さないトゥーパに気付き、マルクが戸惑うように呼びかける。マルクがトゥーパの方を振り向くと、トゥーパは今までにない、厳しい表情で、まっすぐに前方を見つめていた。その表情に眉をひそめ、トゥーパの視線を追うように、マルクもまた、前を見る。

「あつ」

前方を見た途端に、マルクの表情が、トゥーパ同様、厳しいものへと変わる。

「やあ、また会ったね」

笑顔でマルクへと、軽く手を振り上げたのは、リラであった。

「お前はっ……」

「リラ・ヒューズベルだよ。マルク・クラウド」

眉間に皺を寄せたマルクに、リラが改めて、名を名乗る。

「そっちの魔女さんも、久し振り。元気だったあ？」

親しげに声を掛けるリラに対し、トゥーパがあからさまに表情をしかめる。以前トゥーパは、リラの放った魔蟲により操られ、マルクとルビィネルを襲ったのであった。魔炎を幾度も使われ、殺されたかたといってもいいだろう。だがトゥーパは、しかめていた表情を振り払うようにして、堂々と笑う。

「どちら様、だったかしら？」

「フフ、相変わらず、プライド高そうだね」

強気に問いかけるトゥーパを見て、リラが楽しそうに笑う。

「でも君たちも、馬鹿だよな。折角、あの魔女が、体張って助けてくれたっていうのに、こんな所までノコノコ来ちゃうなんてさあ」言葉の通り、嘲笑うかのような表情を見せるリラ。

「まあでも、僕は嬉しいよ」

誘うように、リラがゆつくりと両手を広げる。

「今度こそ、僕の茜炎で、ちゃーんと燃やしてあげるねっ」

「……っ」

無邪気に冷たく微笑むリラに、マルクとトウーパは、厳しい表情となつて、身構えた。

「りょくじつが 緑実火”！」

『うわあああ！』

小さい実のような無数の緑炎を、両手から放ち、追つて来た赤炎騎士団の騎士たちへと向けるポンド。無数の緑炎を逃れることも出来ずに浴びた騎士たちが、その場で次々と倒れ込んでいく。

「ふいー！ 今日も相性バツチりだぜ、メル！」

「うん……」

両手を下ろしたポンドが、すぐ後方で待機していたエメラルディアの方を振り返り、得意げに親指を突き立てると、エメラルディアも無表情のままではあるが、同じ動作を返した。

「お、のれっ」

地面へと倒れ込んだ、騎士たちを仕切っていた大柄の男が、苦しげに顔を上げる。

「たかが魔士ごときに、我ら騎士が、遅れを取るとはっ」

「たかが魔士で悪かったな。こつ見えても一応、上級魔士って呼ばれてんのよ、俺っ」

ポンドがゆつくりと、倒れているその男のもとへと歩み寄り、顔を近づけるように、すぐ目の前でしゃがみ込む。

「さあ、大人しく、ルビィネルちゃんの居場所を教えっ……」

「ポン、ド……！」

「……っ！」

ポンドの言葉を遮るようにして、名を呼んだエメラルディアの声に気付き、表情を曇らせたポンドが、すぐさまその場から飛び上がって、エメラルディアのすぐ前まで移動する。すると、先程までポンドの居た場所に、赤々とした炎が、降り落ちた。

「逃しましたか」

落ちていた声を響かせながら、その場へと姿を現したのは、腰ほどまである長い白髪に、鋭い紫色の瞳の、長身の若い男であった。他の者同様、赤い軍服を身に纏っているところを見ると、この男も、赤炎騎士団の騎士であろう。だが、今までの騎士とは違う、鋭い空気を感じ、ポンドが少し厳しい表情を見せる。

「インディゴ、様っ……」

「引き止め、ご苦労でした。ここから先は、わたくしが請け負いましょう」

「申し訳、ありません」

「いいえ。我が同士を傷つけた者を許さぬとするは、当然のこと」
倒れた騎士たちの前に立ち、インディゴと呼ばれた男が、鋭い視線をポンドへと送る。

「我が赤炎領へと無断で足を踏み入れ、我が同士を傷つけた、愚かなる人間よ」

インディゴが右手を振り上げ、赤々とした炎を纏う。

「この上級騎士、インディゴが、お相手致しましょう」

「そいつは、どうもっ」

軽い口調で礼を言いながらも、ポンドはそっと、表情を曇らせた。

「よいしょお、“脚火”^{きゃくび}！」

両足に赤い炎を纏ったモヒカン男、パラチャが、勢いよく上空へと舞い上がる。

「赤雷火^{せきらいが}」！

空へと上がったパラチャが、振りかぶるように右手を下ろし、雷のようなほとばしる魔炎を、下方のフランへ向けて放つ。

「紫壁炎^{しへきえん}」！

フランが上空へと手をあげ、紫炎の壁を張って、パラチャの放った炎を受け止める。

「うう！」

受け止めた炎の重さに、フランが思わず顔をしかめる。

「下、ガラ空きい」

上方からの魔炎を受け止めているフランに対し、サフィリンが、素早く右手を向ける。

「赤鎖炎^{せきさえん}」！

「あつ……！」

上方の魔炎を受け止めるだけで精一杯のフランに対し、その横側から鎖状の赤炎を放つサフィリン。パラチャの炎を受け止めたままのフランに、サフィリンの炎まで受け止める術などなく、サフィリンの炎が正面から、フランの体に直撃する。

「えっ？」

だが、フランの体をサフィリンの魔炎が貫いた瞬間、フランの体が、紫色の炎と化して、辺りに飛び散った。受け止めていたフランの姿がなくなり、パラチャの放った魔炎も、勢いよく地面へと落下する。その光景に、同時に眉をひそめる、パラチャとサフィリン。

「紫幻火^{しげんか}」……」

煙のような紫色の炎が揺らめき、アメジエスのすぐ横に、無傷のフランが姿を現す。

「また幻か」

パラチャが地面へと降り立ちながら、そっと表情を曇らせる。

「幻惑の炎つてのは、思ってたより厄介だな」

パパラチャがゆっくりと歩を進め、サフィリンのすぐ近くまでやって来る。

「もうつ、また避けられちゃって、リンリン、悔しい〜！」

「気にすることないよ、リンリン！ 俺のリンリンは、いっつも最高なんだからあ！」

「いやあ〜ん、パーたあん！」

「……………」

突然、甘ったるい声を響かせながら、イチヤつき始めるパパラチャとサフィリンの二人に、アメジェスが呆れ切った表情で、冷たい視線を送る。

「でもでもお、パーたあんのさっきの攻撃、超力ツコ良かったあ〜！」

「やめるよ、照れるぜ！ 俺のリンリン！」

周りのことなど、目にも入っていない様子の二人のやりとりには、アメジェスの表情が、どんどん引きつられていく。

「何なのかしらね、これ」

「羨むことなどないよ、我が魔女！ さあ、僕のこと、遠慮なくフラたんとっ……………」

「燃やすわよ……………」

呆れているアメジェスに対し、何故か対抗しようとしているフランに、アメジェスが紫炎を纏った右手を掲げる。

「それより、もっと真面目に考えなさい。幻炎を使っただけじゃ、意味がないわ。もっとちゃんと、攻撃しないと」

「そうよねえ。でないと、いつまで経っても、勝てないものっ」

「……………」

すぐ背後から聞こえてくる声に、アメジェスが大きく目を見開く。いつの間にか、アメジェスのすぐ後ろに立ったサフィリンは、アメジェスが振り返るその前に、赤々とした炎を、アメジェスへと向けた。

「“赤鎖炎”！」

「う！」

至近距離から向けられる赤炎に、防ぐ術も避ける術もなく、アメジエスが厳しい表情を見せる。

「アメジエス！」

「あっ！」

フランが強くアメジエスの手を引き、アメジエスと入れ替わるようにして、赤炎の目の前へと立つ。

「うっうっ！」

「フラン！」

赤炎を浴び、苦しげな声をあげるフランに、アメジエス思わず身乗り出す。

「う、うっう……」

「フラン！」

体を庇うようにして突き出した左手に、もろに赤炎を浴びたフランが、力なくその場に膝をつく。持ち上げていることも出来ずに下ろされたフランの左手は、袖もすべて焼け焦げ、大きな火傷を負っていた。アメジエスもフランのすぐ横へとしゃがみ込む。

「無事かい？ 我が魔女」

ひどい火傷を負い、明らかに痛みを堪えた表情を見せられているのに、アメジエスの身を案じるように、問いかけるフラン。そんなフランを見て、アメジエスが思わず顔をしかめる。

「馬鹿！ 戦うのは、あなたなのよ！？ 私なんて庇わなくてもっ

……！」

「それは出来ないよ」

強い口調で言い放つアメジエスの言葉を、フランがそっと、否定する。

「我が魔女に怪我一つさせないと、最下級魔士と約束したからね」
「フラン……」

誇らしく微笑むフランに、アメジエスが何か言いたげな表情を見

せながら、それでも言葉を呑み込むように唇を噛み締め、目を細める。

「仲睦まじいことねえっ」

割って入ってくるサフィリンの声に、二人が同時に険しい表情を見せる。

「そんなに仲が良いのなら、二人仲良く、燃やしてあげるわ!」

再び赤炎を纏った右手を、こちらへと向けてくるサフィリンに、アメジエスが目つきを鋭くする。

「冗談じゃないわ」

「え?」

ポツリと小さな声を落とすアメジエスに、サフィリンが少し首を傾げる。

「紫閃火^{しせんか}」!

「あつ! きゃあああ!」

アメジエスが素早く、鋭い紫炎の一閃を放ち、赤炎を放とうとしていたサフィリンを、勢いよく吹き飛ばす。吹き飛ばされたサフィリンは、そのまま力なく、地面へと倒れ込んだ。

「私たちは全然、仲良くなんてないわよ」

「そこに引つ掛かったのかい? 我が魔女……」

立ち上がりながら、はつきりと言い放つアメジエスに、まだ膝をついたままのフランが、少し呆れたような、悲しそうな表情を見せる。

「よくも……」

聞こえてくる、震えたような低い声に気付き、アメジエスがサフィリンから、パラチャへと視線を移す。深く俯いたパラチャは、強く握り締めた拳を、わなわなと震わせていた。

「よくも、俺のリンリンに魔炎を向けてくれたなあ! クソ魔女があ!」

「なっ!?!」

怒りの形相と共に、激しく逆巻く赤炎を、握り締めた拳へと纏わ

せるパパラチャに、アメジエスが思わず怯むように、腰を退く。先程よりもずっと、燃え盛る赤い炎は、まるでパパラチャの怒りを投影しているようであった。

「マズい！ 逃げよう、アメジエス！」

左手は下ろしたまま、少し重たそうな体で起き上がったフランが、右手でアメジエスの手を引き、その場から逃げようとする。

「逃がすかあ！ “赤雷火”！」

「あっ！」

だが、パパラチャの拳から放たれた赤炎は、雷のように目にも留まらぬ速さで空を駆け抜け、二人へと襲いかかる。

「うっ……！」

どうすることも出来ずに、フランがアメジエスを庇うように、アメジエスの体を抱き込み、炎の向ってくる方へと、自らの体を向ける。二人が覚悟するように唇を噛み締め、目を閉じようとした、その時であった。

「せいざんか青斬火”」

横から飛び出してきた青色の炎が、アメジエスとフランへと向かって来ていた赤炎を、真つ二つに斬り裂き、あっという間に掻き消す。

「な、何！？」

一瞬にして斬り裂かれた自らの炎に、驚きの表情を見せるパパラチャ。

「あっ……」

パパラチャの炎を斬り裂いた、青色の炎のやって来た先を振り向いたフランが、小さく声を漏らす。

「シリング……シリング・ウェーガット！」

「……………」

そこに立っていたのは、白い魔刀を右手に構え、鋭い表情を見せたシリングであった。

「シリング？」

フランの発したその名に、アメジエスがフランの腕の中で、戸惑いの表情を見せる。だが、確認しようにも、見えるのは目の前のフランの胸ばかりで、周囲は一切、視界に入らない。

「ちよつと！ いつまでくつついてる気よ！」

「痛い！」

火傷を負った左手を叩かれ、思わず声をあげたフランが、慌ててアメジエスの体を離す。

「酷いよ、我が魔女！ 僕は我が魔女を守ろうとしただけで、決して、役得的なあれではっ……！」

「どうでもいいわ。それよりシリングって、あつ」

フランから離れたアメジエスが、体を横へと向け、その場に現れたシリングの姿を確認する。

「本当に……」

まっすぐにシリングを見つめ、驚きの表情を見せるアメジエス。レイールの聖魔院でならともかく、ここはフレイヤの、しかも聖騎士団の本部だ。そんなところでまさか、シリングに出会うなどとは思ってもみなかった。

「なんで、こんなところに、最上級魔士が？」

「別に。お前たちと、変わらん理由だ」

「私たちと？ じゃあ、あなたも、ルビィネルを助けに……？」

「助けるつもりはない。だが」

戸惑いの表情を見せるアメジエスに、シリングが静かに、言葉を付け足す。

「俺はまだ、あの二人に勝てていない。勝ち逃げされてもらっては困る」

「……っ」

シリングのその言葉に、アメジェスがまた、驚いた表情となる。それは、冷たいシリングには、らしくない言葉であつたが、誰よりも自身に厳しいシリングらしい言葉であつた。

「そう」

頷いたアメジェスが、そつと笑みを零す。

「けれど、よくここまで来れたわね。私たち、随分と苦労したのに」
「そんなの、簡単よ！ なんせシリングには、フレイヤ出身の有能で、おまけに可愛い魔女が、パートナーとして付いてるんだもの！」
得意げな口調と共に、シリングの横へと現れたのは、サファイであつた。

「ねえ、シリング！」

「さあ、戦いを続けるか」

「え、無視！？」

「相変わらずね……」

あつさりとしリングに無視されているサファイの姿を見て、アメジェスが呆れた表情を見せる。

「確かサファイって、フレイヤの貴族の娘だったわね。それなら、簡単に入国も出来るか。納得」

サファイからの答えは求めず、一人で勝手に納得するアメジェス。
「また魔士かあ？ 侵入者は六名って聞いてたけど、追加報告しといた方が良さそうだなあ」

どこかうんざりした様子で言い放つパパラチャと、シリングがゆつくりと向き合う。

「まあ、魔士ごときか何人来たところで、一緒だけどなあ」

皮肉った笑みを浮かべ、パパラチャがシリングを見る。

「お前もさっきの攻撃が、当然とか思わない方がいいよお？ 俺の炎が負けたのなんか奇跡で、お前みたいな魔士ごときが、俺のような上級騎士につ……」

「よくベラベラと喋るものだな。上級騎士というのは」
「ちっ」

挑発するようなシリリングの発言に、パパラチャが思わず舌を鳴らす。

「“赤雷火”！」

「“脚火”」

パパラチャの向けた魔炎を、シリリングが両足に青炎を纏い、空中に浮き上がることで避ける。

「馬鹿か？ 空中になんか逃げたら、狙い撃ちされるに決まってるだろ！？」

余裕の笑みを浮かべ、パパラチャが空中のシリリングへと、両手を向ける。

「“赤雷火”！」

雷のような素早い炎が、まるで逆戻りするように、空へと舞い上がっていく。

「空中に來たのは、狙い撃ちされても、問題ないからだ」

堂々と言い放ち、シリリングが右手の魔刀に、青炎を纏わせる。

「“青斬火”！」

シリリングが勢いよく振り切った魔刀が、空へと舞い上がったパパラチャの魔炎を、またしても、真つ二つに斬り裂く。斬り裂かれた炎が、下方へと戻り、地面に立ったパパラチャのもとへと落ちていく。

「クソ！」

自身の魔炎を避けながら、険しい表情を見せるパパラチャ。

「魔土ごときが、調子に乗るんじゃないやねえよお！ “赤雷散火”！」
せきらいさんか

荒々しく声を発したパパラチャが、再び、空中のシリリングへ向け、赤炎を放つ。先程までは一本の雷であった魔炎が、今度は空中で無数に枝分かれし、幾本にもなつて、一気にシリリングへと襲いかかる。

「全部斬れるもんなら、斬ってみやがれええ！」

「……っ」

挑戦するようなパパラチャのその言葉に、シリリングは鋭く目を細め、魔刀を握る手に力を込める。

「望み通りに」

短く言葉を落とすと、シリングはまるで自分の手足のように、自由自在に、魔刀を振り切った。パパラチャが向けた幾本もの赤炎が、数秒のうちに、すべて斬り裂かれる。

「なっ……！」

思わず啞然とするパパラチャのもとへ、先程同様、斬り裂かれた赤炎が、勢いよく落下していく。

「う、うわああああ！」

落ちて来た赤炎をすべて避けることが出来ず、パパラチャが自らの炎を浴び、苦しげな声をあげる。空中のシリングは、ゆっくりと魔刀を下ろすと、そのまま下降し、地面へと降り立った。

「さすがは、最上級魔士ね」

「フン、まあまあだね」

感心するアメジエスの横で、フランが少し悔しげに腕を組む。

「クツソ、ただか魔士ごときが、調子に乗るんじゃないやねえつつてんだよあ！」

「さっきから、同じ言葉ばかりだな。他に思いつく言葉はないのか？ 上級騎士」

「グッ！」

嫌味たっぷりのシリングのその言葉に、返す言葉を見つけることも出来なかったのか、パパラチャがただ悔しげに、唇を噛み締める。

「こつの、クソ魔士がああ！」

両腕に赤炎を纏ったパパラチャが、怒りの形相で、勢いよくシリングのもとへと駆け込んでくる。

「サファイ」

「へ？」

シリングから魔刀を渡され、目を丸くするサファイ。

「何？ 使わないの？」

「ああ。試したい炎技がある」

「試す？」

サファイが不思議そうに首を傾げる中、シリリングが魔刀を手放し、自由となった右手を、ゆっくりと振り上げる。

「纏え」

振り上げたシリリングの手に、纏わりついていく青い炎。

「あれはっ」

「マルクの……」

そのシリリングの姿を見つめ、サファイとアメジェスがそれぞれ、真剣な表情を見せる。

「食らいやがれえ！ “せきらいだいか赤雷大火”！」

パパラチャが両腕を前方へと突き出し、今までで一番強大な魔炎の塊を、シリリングへと放つ。向かってくる巨大な赤炎に、シリリングは焦りの色一つ見せず、いたって冷静に、青炎を纏った右手を繰り出した。

「せいしょうか青掌火”！」

繰り出されたシリリングの拳から、青色の炎の塊が放たれる。だが、放たれた炎は、パパラチャが放った炎の十分の一ほどの大きさしかなかった。

「ハっ！ んな小っせえ魔炎で、俺の魔炎がどうにか出来るはずがあっ……！」

勝ち誇ったように言葉を発していたパパラチャであったが、その言葉は、二つの炎が合わさったその瞬間、あっという間に、シリリングの小さな炎が、パパラチャの大きな炎を呑み込んだことにより、止まった。

「んなっ……！？」

驚きのあまり、大きく目を見開くパパラチャ。

「魔炎の大小が、魔炎の強さを決めるとでも思っていたのか？ 上級騎士」

パパラチャの魔炎を呑み込み、勢いを増したシリリングの青炎が、まっすぐにパパラチャへと向かっていく。

「魔炎の強さを決めるのは、魔炎の大小じゃない」

シリングが冷たい瞳をパパラチャへと向け、はつきりと言い放つ。
「使う者の、才能だ」

「う、うわああああ！」

シリングのその言葉が放たれると同時に、青炎がパパラチャへと
迫り着き、一気にパパラチャへと襲いかかった。全身を燃やされた
パパラチャは、激しい叫び声をあげながら、その場に倒れ込んでい
く。

「上級騎士といっても、特火保持者でなければ、他愛ないな」

どこかつまらなさそうに呟き、パパラチャに背を向けたシリング
が、後方で待機していたサファイのもとへと歩み寄っていく。

「試してみたかった炎技って、マルク・クラウドの“しんたいそつてん身体装纏”？」

「ああ。だが、俺には、武具装纏の方が向いているようだ。魔刀を
使った時の、三分の一も威力が出なかった」

「それなのに圧勝ってわけね……」

シリングに魔刀を手渡しながら、サファイが思わず呆れた表情を
見せる。

「パーたん！」

聞こえてくる声に、シリングとサファイが同時に振り向く。

「パーたん、パーたん！」

「リンリン……」

アメジエスの攻撃から、いつの間にか起き上がった様子のサファイ
リンが、シリングの炎を受け、倒れたパパラチャのもとへと駆け寄
っていく。サファイリンの必死の呼びかけに、パパラチャがゆっくり
とその瞳を開く。

「すまねえ、リンリン。俺はもう、ここまでのようだ……」

「そんな、パーたん！ リンリンを置いていかないでえ！」

「命に関わるほどの魔炎、向けたの？」

「全然」

パパラチャとサファイリンの妙に芝居がかった会話が続く中、サフ
アイとシリングが、冷めた表情で言葉を交わす。

「リンリンを、幸せに出来なくって……ごめんな……」

「いや！ パーたん、パーたああん！」

皆が冷やかな表情で見つめる中、最後の山場とばかりに、サフィリンの悲痛な叫び声が、辺りへと響き渡る。

「よくも、私から、愛しのパーたんを奪ってくれたわねえ！」

「別に、生きてるでしょ？」

振り返ったサフィリンに、思わず突っ込みを入れるサファイ。

「もう絶対、許さないんだからあ！」

「どうするの？ シリング」

「向かって来る相手は、女であっても、容赦はしない」

呆れた表情で問いかけるサファイに対し、シリングは一步前へと出て、すでに臨戦態勢で、赤い炎を纏ったサフィリンと向き合うべく、魔刀を構え直す。

「さあ！ パーたんの仇討ちといっ……！」

「“紫方炎”^{しほうえん}」

「えっ？」

サフィリンがシリングへと向かって行こうとしたその時、サフィリンの四方を包むように、紫色の炎が地面から突き上がり、突き上がった魔炎が上方で合流すると、サフィリンを、魔炎の空間が完全に包み込んだ。

「な、何？ 何なのよ、一体！」

「これは」

紫炎の中で、戸惑いの表情を見せるサフィリンを見つめ、シリングがそつと目を細める。

「“空間具現”か」

「その通り！」

得意げな大声を響かせながら、シリングのすぐ横へとやって来たのは、フランであった。

「これは、空間具現と呼ばれる、高難易度炎技だよ！ まあ、君の生物具現も相当に難しいようだがあ、僕の空間具現だって、なかなか

か難しいんだからねえ！」

「……………」

現れたフランに、シリングが少し、うんざりとした表情を見せる。
「君の強さはよくわかったが、最上級魔士、ここは、月のように神秘的で、星のように瞬いているこの僕に、譲ってもらおうか！」

「好きにしろ」

あまりフランに関わりたくないのか、シリングはあっさりと引き、サフィリンに背を向け、サファイと共に、後方へと下がっていく。

「さあてとお、じゃあ決めさせてもらおうかあ」

「フザけないで。たかだか魔士のくせにっ」

ゆっくりと歩み寄って来たフランに、サフィリンが魔炎の空間の中から、強気に悪態づく。

「こんな薄い壁、私の魔炎であつという間に碎いてやるわ！ “赤鎖炎”！」

そう言つて、勢いよく右手を突き出したサフィリンであつたが、その右手から、赤々とした魔炎が放たれることはなかった。

「“赤鎖炎”！」

もう一度、サフィリンが大きく声を張り上げるが、それでも右手から、赤炎は出ない。

「な、何？　なんで魔炎が出ないの？」

困惑の表情を見せたサフィリンが、自身の右手を見つめ、眉間に皺を寄せる。

「その炎が、ただ、君を閉じ込めるだけのものだと、思ったかい？」
「えっ？」

フランの言葉に、益々、困惑の色を濃くするサフィリン。だが、しばらくの間の後、何かの考えに巡り合ったのか、サフィリンの表情が一気に歪む。

「まさか、幻炎……！？」

「その通り」

サフィリンの言葉に、フランがそつと頷く。

「その空間は、紫炎の幻惑効果を強めるためのもの。赤炎を放ったつもりだろうが、実際の君は、指一本、動かしてはいない」

「なっ！」

フランから告げられる事実、サフィリンが衝撃を走らせる。

「そ、そんな……！」

「君の感覚は、すべて支配した。これで、終わりだ」

「ま、待つて！ 私っ……！」

「待たないよ」

必死のサフィリンの呼びかけを、フランが揺れ動くことなく、あつさりと拒否する。

「君は二度も、我が魔女に炎を向けた」

フランの冷たく輝いた瞳が、まっすぐにサフィリンへと向けられる。

「僕はそれを、許しはしない」

「うっ……！」

サフィリンが険しい表情を見せる中、フランが、掲げた右手を振り払う。

「“紫幻火”」

「きゃ、きゃあああ！」

フランの言葉と同時に、サフィリンを包み込んでいた魔炎の空間が一気に崩れ去り、サフィリンは崩れ落ちる魔炎に呑み込まれるようにして、激しい叫び声と共に、消えていく。

「おやすみ、“リンリン”……」

落ち着いたフランの声が、魔炎に埋め尽くされていくサフィリンへと向けられた。

「何？ あの子。あのウザ魔士、別に何にもしてないのに、勝手に叫んで、倒れちゃった」

サファイが不思議そうに首を傾げ、見つめるその先には、何も無い地面に倒れ込んだ、サフィリンの姿があった。紫炎の空間に閉じ込められたサフィリンは、フランが手を振り払った途端、突然叫びあげ、何の攻撃も受けていないというのに、そのまま気を失って倒れてしまったのだ。

「幻炎だ。魔炎で攻撃したという幻を見せて、気を失わせたんだ」
「へえ」

シリングからの解説に、サファイが感心の声を漏らす。

「上級騎士相手に、あそこまで幻惑を見せるとは、あいつもなかなかの者だな」

シリングがフランへと視線を移し、そっと呟きを落とす。
「痛っっっ」

サフィリンを倒し終えたフランが、左手の火傷が痛むのか、不意に大きく表情を歪め、その場に力なく座り込んだ。

「怪我が酷いのに、無茶するからよ」

「アメジエス」

すぐ傍へとやって来たアメジエスを見上げ、フランが苦痛の表情を、一気に笑顔へと変える。

「どうだい！？ この素敵かつ無敵な僕に、惚れ直つ……！」

「初めから惚れてないから、惚れ直しようがないわ」

フランの言葉をあつさりとしやがみ込む、冷たく言い放ったアメジエスが、フランのすぐ横へとしゃがみ込む。

「ほら、左手診せて。魔療水で手当てするから」

「すまない、我が魔女」

透明の液体の入った瓶を取り出したアメジエスへ、フランが、火

傷を負った左手を差し出す。

「マルク・クラウドはどこだ？」

フ란の傷の治療を始めたアメジエスのもとへ、シリングが、サファイと共に歩み寄って来て、静かな口調でそつと問いかける。

「あの真つ赤な建物の中よ」

アメジエスが赤炎棟を見据え、真剣な表情を見せる。

「あの中に、ルビィネルも居る」

「そうか」

赤炎棟を確認し、シリングがそつと頷く。

「俺たちは、先に行く」

「ええ。私たちも、フ란の傷の治療が終わったら、すぐに後を追うわ」

互いに真剣な表情で、言葉を交わすシリングとアメジエス。

「あなたにこんなこと頼むのって、おかしいのかもしれないけれど」
アメジエスがまっすぐに、シリングを見つめる。

「マルクのこと、お願い」

願うようなアメジエスのその言葉に、シリングは頷くことも、拒否することもなく、ただそつと目を細めるだけであった。

「行くぞ、サファイ」

「ええ」

シリングが呼びかけ、サファイが頷くと、二人はそのまま、赤炎棟へと駆けていく。

「マルク……」

その後ろ姿を見つめながら、アメジエスはどこか不安げに、マルクの名を呼んだ。

「“緑実火”！」

「“赤壁火”」

ポンドの放った無数の緑炎の粒が、インディゴが自身の前方へと張った、赤炎の壁にすべて、受け止められる。受け止められた緑炎は、まるで吸収されるように、赤炎の壁の中へと掻き消えた。

「お返ししましょう」

インディゴが言葉を発しながら、右手を動かし、壁を形成していた赤炎を、一つの大きな塊へと変える。

「赤業火^{せきじつが}」

荒れ狂う赤炎の塊が、ポンドへと一気に駆け抜けていく。

「緑壁火」！

ポンドもインディゴと同じように、自身の目の前に緑炎の壁を作り出し、インディゴの放った炎の塊を受け止める。

「うっう！」

だが、その赤炎の勢いはあまりに強く、壁で受け止めた途端に、ポンドの両腕にも強い圧が掛かり、ポンドは思わず顔をしかめた。壁越しに押されるようにして、ポンドがどんどん後退していく。

「ポン、ド……！」

「来んな、メル！」

ポンドのもとへと、駆け寄って行こうとしたエメラルディアを、ポンドが強く止める。その声に、エメラルディアは足を止めたが、その無表情な顔には、汗が流れ落ちていた。

「ただの放出じゃねえっ」

「察しが良いですね」

険しい表情を見せるポンドに、インディゴが不敵に微笑みかける。

「見せて差し上げましょう。我が、華麗なる炎技を」

得意げに言い放ったインディゴが、そっと右手を掲げる。

「赤針火^{せきしんか}」！

「あっ……！」

ポンドの受け止めていた巨大な赤炎の塊が、突然、無数の小さな塊へと分解したかと思うと、その一つひとつが、針のように鋭い刃となり、ポンドの張っていた緑炎の壁を突き抜け、一斉にポンドへ

と襲いかかった。

「うあああああ！」

「ポンド！」

無数の針を浴び、後方へと吹き飛ばされていくポンドを、エメラルディアが必死に追いかける。

「グ、ううう……！」

地面に背中を打ちつけたポンドが、苦しげな声をあげる。突き刺さった炎の針はすぐさま消えたが、突き刺されたポンドの体には、傷が刻みこまれ、そこから、赤い血が滲む。

「ポンド、大丈夫……？ 略して、ポンド？」

「あんま、大丈夫じゃねえかも」

駆けつけたエメラルディアの手を借りながら、その場でゆっくりと上半身を起こすポンド。笑みこそ浮かべてはいるものの、その笑みには、焦りの色が見えた。

「その程度ですか？ 愚かなる魔士よ」

構えていた右手を下ろし、インディゴが余裕に満ちた口調で、語りかける。

「アハハ、さすがは上級騎士。お強いこつて」

少し頭を掻きながら、感心したように呟くポンド。

「当然です。我々魔族は、幼き頃から、魔炎の戦闘訓練を受けています。そして、その魔族の中でも、より魔炎技術に優れた者のみが、騎士となることを許される」

誇らしげに、インディゴが胸を張る。

「“魔女”という道具がなければ、魔炎を使うことすら出来ないあなた方とは、物が違うのですよ」

「道、具……」

インディゴのその言葉に、エメラルディアの表情がかすかに揺れ動き、ポンドの肩を支える手に、自然と力がこもる。

—— お前たち魔女は、私の偉大なる研究のための道具だ……！

「……………」

魔炎研究の実験台にされていた頃の、モルダバの言葉を思い出し、エメラルディアがそつと目を細め、視線を下方へと落とす。

「メル」

「え……？」

優しい呼びかけに、エメラルディアが顔を上げると、力の入ってしまったエメラルディアの手に、重なるようにして、ポンドの傷だらけの手が乗った。

「思い出したくねえことは、思い出さなくていいって、言っただろ？」

「ポンド……」

まるで安心させるように、穏やかな笑みを向けるポンドに、エメラルディアがまた、目を細める。

「あんま、レディーのこと、悪く言うもんじゃないぜえ。上級騎士さんよ」

エメラルディアから手を離すと、ポンドが再びインディゴの方を向き、傷だらけの体を、少し重たそうにしながら、ゆっくりと立ち上がる。

「世の中には、その“魔女”のために、ヤールから遠路遙々、こんな所へ来る奴まで居るんだからさ」

「そうでしたね。あなた方の目的は確か、あの朱炎の魔女」

思い出したように頷き、インディゴがどこか呆れたような表情を見せる。

「まったく、人間のやることというのは、愚か過ぎて、理解出来ません」

「理屈じゃねえのよ」

口角を上げ、微笑んだポンドが、ゆっくりと上げた右手に、緑色の炎を纏わせる。

「“一途”ってのはっ」

「まだ、抵抗するおつもりですか？」

魔炎を纏ったポンドに対し、特に焦った様子もなく、大した身構えもないまま、インディゴが緩やかに問いかける。

「あなたと私の実力差は、十分に見せつけたつもりでしたが」

「あ、そうだったの？ 俺、女の子はよく見てるけど、男には興味ないから、全然気付かなかったなあ」

「はあ」

軽い口調を続けるポンドに、インディゴが呆れたように、深々と息を吐く。

「まあ良いでしょう。わからぬというのであれば、何度でも、見せつけて差し上げます」

そう言ったインディゴが、まるで迎え入れるように、大きく両手を左右に広げる。

「さあ、どこからでも、かかって来なさい」

「……じゃあ、遠慮なくっ」

余裕の表情で、受け入れ態勢を取ったインディゴの姿を見て、そつと微笑んだポンドが、緑炎を纏った右手を、素早く突き出す。

「りよくよえん緑与炎”！」

ポンドの右手に纏った緑炎が、ポンドの声と共に、勢いよく飛び出したかと思うと、その緑炎は、インディゴに当たることはなく、インディゴのすぐ横を通り過ぎ、上空へと上昇すると、まるで煙のように掻き消えていった。

「はっ……？」

予想していなかった緑炎の動きに、インディゴが思わず呆然となる。

「何をしているのです？」

再びポンドの方を見たインディゴが、馬鹿にしたような笑みを、ポンドへと向ける。

「折角、攻撃を受けて差し上げようとしていたというのに、当てることすら出来ないのですか？ あなたは」

インディゴの、馬鹿にしたような口調が続く。

「いくら我々に劣る魔士とはいえ、ここまで酷いとはっ」

そのインディゴの長々とした喋りは、突然、インディゴの右頬が切り裂けたことにより、止まった。

「えっ……？」

頬に走るわずかな痛みにも、言葉を止め、戸惑いの表情を見せるインディゴ。インディゴがそっと頬に触れると、触れたその右手に、赤い血が滲んだ。

「な、何っ……う、うっうっ！」

インディゴが困惑し始めたその時、インディゴに強い風が吹きつけたかと思うと、その風が、まるで意志を持っているかのように、インディゴの腕や足を、勢いよく切りつけた。皮膚を切り裂かれ、全身に痛みが走ると、インディゴが苦しげに表情を歪める。

「な、何だというのです！？ 一体……！」

傷ついた自身の体を見下ろし、インディゴが戸惑いの声をあげる。

「かすみどり
“風緑”っ」

聞こえてくるその声に、インディゴが引きつった表情のまま、振り向く。そこには、先程まで、インディゴが見せていたような、余裕の笑みを浮かべたポンドの姿があった。

「俺の炎技」

「炎技ですと？ 愚かなことを！ 風を操る炎技など、聞いたこともないっ……！」

声を荒げるインディゴのその表情には、先程までの余裕の色など、一切残っていなかった。

「たねんしょう
“他燃烧”って言うてね。自分を活性化する“自燃烧”と違って、放出で飛ばした魔炎で、自分の身の回りにあるものを、活性化させて、操るんだあ」

焦るインディゴへ、ポンドはいたって冷静に、言葉を投げかける。

「俺の、お得意炎技。よろしくねっ」

「愚かなっ」

インディゴの口から零れ落ちた言葉が、怒りからか、わずかに震える。

「何が他燃焼です！ 風ごときを操ったところで、私の魔炎には勝てません！」

怒りを押しだすように叫び、インディゴがポンドへと、両手を突き出す。

「せきしんか 赤針火”！」

先程の倍はあろう、無数の針状の赤炎が、一気にポンドへと襲いかかっていく。だがポンドは、迫り来る赤炎の針にも顔色一つ変えず、落ち着き払った笑みで右手を掲げた。

「緑の風よ、我が身を守れっ」

歌うような軽い口調のポンドの言葉に、導かれるようにして、淡い緑色の炎を纏った風が吹き抜け、強い竜巻を起こすと、ポンドへと向かっていた赤炎の針を、一本残らず、掻き消す。

「んなつ！？」

掻き消えた自らの赤炎に、驚きの表情を見せるインディゴ。

「さあーとと、頼りねえダチが待ってんだ。とつとと、終わりにさせてもらっぜっ」

驚いたままのインディゴへと、ポンドがそつと、右手を向ける。

「“風緑”！」

緑炎を纏った風の塊が、目にも留まらぬ速さで、インディゴのもとへと、駆け抜けていく。

「う、うわ、うわあああああ！」

強烈な風に吹き抜かれ、全身を切り裂かれると、インディゴは激しい叫び声をあげながら、後方へと吹き飛ばされていた。そのまま力なく地面に倒れ込み、動かなくなる。恐らくは、気を失ったのだろう。

「ふう、疲れたっ」

その場に勢いよく座り込んだポンドが、疲れを表情に出し、深く肩を落とす。

「お疲れ、ポンド……略して、オツポン……」
「ああ」

座り込んだポンドのもとへと、エメラルディアが歩み寄って来る。すぐ傍にしゃがみ込み、じつと顔を覗き込んでくるエメラルディアに気付き、ポンドが不思議そうに首を傾げる。

「何？　メル」

「ポンド、カッコ良かった……略して、ポンカ」

ポンドをまっすぐに見つめ、エメラルディアが、何の照れもなく、言い放つ。

「そいつは、どうも。でも、そういうのは」

エメラルディアの言葉を受けたポンドが、穏やかに笑う。

「出来れば、抱き締める元気がある時に、言って」

赤炎棟、七階。団長室。

「サードニック様」

報告書らしき白い紙を持ったヘリオドールが、ノックも短く、再びサードニックの居る部屋へと入って来る。今回は、サードニックは机には向かっておらず、窓際に立ち、窓の外から、景色を眺めていた。侵入者を許した赤炎領内は、慌ただしく、騎士たちが動き回っている。

「何だ？」

「パパラチャ、サファイリン、インディゴの、三名の上級騎士が、それぞれ、侵入者に敗れました」

ヘリオドールからの報告に、窓の外を眺めていたサードニックが、そつと目を細める。

「……そうか」

少しの間を置いてから、受け止めるように、頷くサードニック。

「魔士と侮っておりますが、侵入者は揃って、なかなかの実力者のようです」

「それは、敗北への言い訳か？」

「あ、いえっ」

冷たく聞き返すサードニックに、ヘリオドールが少し困ったように、首を横に振る。

「すでに赤炎棟内に侵入した者については、リラ・ヒューズベルに応戦させておりますが、他にも侵入者がやって来る可能性があります。ここは、やはり、他団の援護を……」

「下りる」

「えっ？」

短く言葉を発したサードニックが、素早い足取りで窓際から離れ、ヘリオドールの居る扉付近まで、歩いて来る。

「サ、サードニツク様!？」

「言いたいことがあるなら、付いて来い。下で聞く」

「お、お待ち下さい! サードニツク様!」

呼びかけに足を止めることもなく、すぐさま部屋を出て行くサードニツクを、ヘリオドールは慌てて追いかけた。

赤炎棟、二階。大講堂。

「おうれっか黄裂火”!”」

マルクと繋いだ右手を、勢いよく前へと突き出し、トゥーパが前方へ、黄色の炎の塊を放つ。

「せんねっ茜熱”!”」

右手に纏った茜色の炎を繰り出し、あっさりとトゥーパの魔炎を掻き消すのは、余裕の笑みを浮かべたリラ。リラに一瞬にして魔炎を消され、トゥーパが険しい表情を見せる。だが、その間にも、黄炎に勝った茜炎が、二人のもとへと迫り来ていた。

「マルク、防御!」

「おうへきか黄壁火”!”」

マルクが両手を突き出し、二人の前方に、黄炎の壁を形成する。二人へと迫り来ていた茜炎の塊は、その作られたばかりの壁へと直撃した。

「無駄だつてば」

リラが口角を吊り上げたのと同時に、マルクの張った黄炎の壁に、勢いよくヒビが入る。崩れ落ちていくような音が聞こえ、マルクはすぐに両手を引き、トゥーパの右手を取った。

「避けるよ、トゥーパ!」

「えっ?」

壁を持ち堪えさせることを放棄し、マルクがトゥーパと共に、茜炎の直線上から逃げる。逃げたのと数秒も変わらぬうちに、黄炎の壁は、茜色の炎に燃やしつくされ、茜炎はそのまま、後方へと突き

進み、講堂の壁に大きな穴をあけた。

「うわ、すごい威力っ」

「あいつの魔炎の前じゃ、普通の魔炎はすぐに、掻き消えちゃうんだ。前、シリングが戦った時もそうだった」

壁にあいた穴を見ながら、啞然とするトウーパの横で、マルクが眉間に皺を寄せる。

「ただの黄炎じゃ、特火には通用しない」

「ただの黄炎ですってえ？」

「うっ」

考えたことを、思わず口にしてしまったマルクであったが、すぐ横のトウーパから鋭い視線を向けられ、焦ったように声を漏らす。

「また、私のプライド、傷つけたわね……？」

「い、いや、その、五元炎としては、とても素晴らしい炎だと思うんだけど……！」

「フフフっ」

明らかに怒った様子のトウーパへ、必死に言い繕おうとしたマルクであったが、前方からやって来た笑い声に、二人は会話を止め、厳しい視線を前へと送る。

「いいね、楽しそうっ」

「……っ」

まるで他人事のように興味のない様子で、子供のように無邪気な笑みを浮かべるリラに、マルクとトウーパの表情が、また、厳しいものへと変わる。

「残念ながら、こちらは、まったく言っていないほど、楽しくないんだけどあ？」

「え？ そうなの？」

嫌味のように言い放つトウーパに対し、さも不思議そうに問い返すリラ。

「僕は、楽しいよ？ 君たちをどう燃やそうかって、考えただけでゾクゾクするっ」

満面の笑みで話すリラに、マルクとトゥーパは、恐怖すらも飛び越え、どこか呆れた表情を見せた。

「まさに“狂人”って、感じね」

「やっぱ俺、ここで燃やされて死ぬのかな……」

困ったように肩を落とすトゥーパの横で、マルクが徐々に陰気なものを纏っていく。

「確かに、あんなの見せられたら、私でもネガティブになるわよ」
暗くなり始めたマルクの横で、もう一度、リラが茜炎によりあけた大穴を見つめ、トゥーパが眉をひそめ、厳しい表情を見せる。

「正攻法でいったって、勝ち目はないわ。何とか、あいつの隙を作って、上まで突破しましょ」

考えを口にし、同意を求めるように、言葉を投げかけるトゥーパだが、その言葉に、マルクが何かを返すことはなかった。

「マルク？」

「……………」

不思議そうにトゥーパが振り向くと、マルクは真剣な表情で、何事かを考えていた。だが、纏う空気は決して、暗くはなく、瞳も、諦めの色など滲んではない。そんなマルクの様子を見て、何かを察するように、トゥーパが目を細める。

「マルク」

「あ、ごめん」

再び名を呼んだトゥーパに、マルクがやっと答える。

「何か、考え、浮かんだ？」

「い、いや、そういうわけじゃなくって。やったって、どうせ無理だし。俺、最下級魔士だからさ。よし、何とか突破の方法を……」
「いいじゃない。やってみたいこと、試してみれば？」

「へ？」

トゥーパの思いがけない言葉に、目を丸くするマルク。

「で、でもっ」

「諦める前に、やりたいことがあるんでしょ？」

戸惑うマルクへ、トゥーパが優しい口調を向ける。

「ここに、ルビィネルは居ない。ポンドも、アメジエスも居ない。でも、私が居る」

力強く微笑みかけるトゥーパに、マルクが少し、驚いた表情を見せる。

「今度は私が、あなたを、諦めさせない」

「トゥーパ」

「それにねっ」

トゥーパの美しい、青色の瞳が、鋭く輝く。

「このまま、何もせずに燃やされたんじゃ、私のプライドが許さないのよ」

まっすぐ前を見据え、少しも怯えた様子など見せず、誇らしげに言い放つトゥーパ。どこまでもプライド大事にするその姿勢は、こんな状況の中でも、少しも変わってはいない。

「フフフっ、相変わらず、プライド高いね。魔女さん」

「ええ。お陰で、あなたに利用されて、マルクたち攻撃して、死にそうにまでなったけど、でも」

トゥーパの鋭い瞳が、今度はまっすぐに、リラを捉える。

「このプライドを捨てようと思ったことは、一回もないわ」

はつきりと言い放つトゥーパを、マルクが目を逸らすことなく、真剣な表情で見つめる。

「理解し難いね」

「別に、あなたに理解してもらわなくて、結構よ」

「トゥーパ」

リラへと強気に言い返していたトゥーパを、マルクがそっと呼ぶ。俺に、力を、貸してくれないかな？」

マルクが魔紋の刻まれていない左手を、トゥーパへと差し出す。

「勝てる自信もないし、根拠も保証も、何にもないけど、でも俺」
浮かなかったマルクの表情に、笑みが現れる。

「諦めたくない！」

マルクのその言葉に、トゥーパもまた、大きく微笑む。

「そんなの、お易い御用よっ」

迷うことなくそう言い放つと、トゥーパは右手で、力強く、マルクの手を取った。

「おうれっか黄裂火”！」

二人が声を揃え、重ね合わせた互いの手を前へと突き出し、黄炎の塊を、前方のリラへ向けて、放つ。

「懲りない人たちっ。“茜熱”！」

見限るように、冷たく眩くと、リラが右手から、茜色の炎を放つ。二色の炎は、両者の中間地点でぶつかり合ったが、衝突は一瞬で、マルクたちの黄炎が、一瞬にして、呑み込まれた。

「下がって、トゥーパ」

「えっ？」

トゥーパを自身の後ろへと下がらせたマルクが、全身に帯びるように、黄炎を纏わりつかせながら、トゥーパから手を離し、向かってくる茜炎と向き合う。

「まさか、マルク、“転化”を……？」

「茜色の炎よ」

戸惑うようにトゥーパが見つめる中、マルクがそつと、口を開く。「バツカじゃないの？ 君が今、使ってるの、あの魔女の朱炎じゃないんだよ？ ただの黄炎なんか、僕の茜炎が、転化できるはず……！」

「我が、黄色き炎へと染まれ！」

リラの嘲りの言葉を遮り、マルクが高らかと声を張り上げ、黄炎を纏った左手を突き出す。

「おっせんか黄染火”！」

マルクが力強く左手を繰り出したその時、マルクへと向かっていたりらの茜炎が、勢いよくその色を変え、まるで違う、黄色の炎へと姿を変えた。

「んなっ！？」

色を染められた自らの魔炎に、リラが大きく目を見開く。

「特火を、転化したっ……」

「うわあ！」

「あ、マルク！」

リラの茜炎から変えたばかりの黄炎が、マルクの左手のすぐ傍で、突然弾け飛び、散り散りとなって、力なく掻き消えていく。

「ああ、ダメだ。自分の炎に出来なかった」

「黄炎で“転化”使ったの、初めてでしょ？　なら、完璧に出来なくても、無理ないわよ。というか、“転化”出来ただけで、十分凄いいし」

残念そうな表情を見せるマルクに、トゥーパが少し啞然とした様子で、話しかける。

「ほら、向こうも驚いちゃって、全然攻撃して来ないし」

トゥーパが前方のリラを指差すと、それにつられるようにして、マルクも前方へと視線を向ける。リラは、その場に立ち尽くしたまま、次の茜炎を纏うこともなく、ただ険しい表情で、マルクの方を見つめていた。

「ルビィネルの朱炎ならともかく、ただの五元炎で、僕の茜炎を、転化した……？」

眉間に皺を寄せたリラが、ひどく困惑した様子で、マルクの方を見る。

「一体、何なの？　君」

「え？」

「あの魔女が入れ込んでるくらいだし、やっぱり何か、特別製なわけ？」

「お、俺は、別にっ」

リラの問いかけに、何と答えていいのかかわからず、マルクもまた、困惑した表情を見せる。

「まあ、いいや。君自身がわからないって言うんなら、僕が、僕の魔炎を使って、確かめっ……」

「お待ちください、サードニック様！」

リラが再び茜炎を纏おうとしたその時、引き止める強い声が響くと同時に、講堂の奥の扉が、勢いよく開いた。

「あっ……………」

「……………」

扉が開くと、その奥から現れたサードニックが、マルクと視線を交わらせる。

「騎士団長自らが、前線に出向いて、侵入者と戦うなど、聞いたことがありません！ 我が赤炎騎士団の恥となります！ ここは皆に任せ、お退き下さい！」

「団長つて……………」

サードニックの後を追うようにしてやって来た、ヘリオドールの必死の説得の言葉の、その中に含まれていた単語に気付き、トゥーパが益々、険しい表情となる。

「益々、ネガティブになりそうな展開よ。マルク」

「え？」

「……………」

トゥーパの言葉に首を傾げるマルクの右手の甲に、刻まれた黒色の魔紋を見つけ、サードニックがそつと、眉をひそめる。

「サードニック様！」

「あら、わざわざ下りて来ちゃったのぉ？ 団長っ」

ヘリオドールが声を荒げる中、楽しげに微笑んだリラが、サードニックの方を振り返る。

「でも、ダメだよぉ。この魔士とは、今、僕が遊んでっ……………」

「“移り火”」

「え？」

リラの言葉など聞かず、サードニックが発したその言葉に、リラが眉をひそめる。サードニックの体が赤い炎に包まれると、リラは何かに気付いたような表情となって、慌てて、マルクの方を振り向き直した。

「うあつ？ えつ？」

マルクの体も、サードニック同様、赤い炎に包まれ始める。

「ちょ！ 団長っ……！」

「マルク！」

リラが責める間も、トウーパが止める間もなく、赤い炎に包まれたマルクとサードニックは、次の瞬間、その場から忽然と姿を消した。

「ああー、持ってかれた！ もう、折角、僕が燃やそうと思ってたのに！」

マルクの姿がなくなると、リラは悔しげに頭を掻き、その場に足を叩きつけた。

その頃、赤炎棟地下一階、特別収容室。

「随分と、上が騒がしいな……」

座り込んでいたその場から、ゆっくりと立ち上がったルビィネルが、戸惑った様子で、天井を見つめる。幾つもの足音が移動する音が聞こえたかと思うと、次は、建物全体を揺らすほどの震動が伝わってきた。赤炎棟は、頑丈な建物であり、早々のことでは揺れたりはない。相当のことが、この建物内で起こっているとのことだろう。

「一体、何がっ……」

「ハロー！」

「え……？」

明るい声が響いたかと思うと、突然、重たく閉ざされていた扉が開き、ルビィネルが驚いたように振り向く。

「そなたは、オニクス！？」

「元気だったあ？ ルビィネル！」

軽く手を振り上げながら、明るい笑顔と口調で、部屋へと入って

来たのは、紫色の軍服を纏った、オニクスであつた。やって来たオニクスに、ルビィネルが思わず、目を見開く。

「うわぁー、狭苦しい部屋っ。何もないし、つまんなそうだなぁ」

「何故、そなたがここにっ……」

訝しむように見つめるルビィネルに、オニクスがさらに笑みを大きくし、微笑みかける。

「なぁ？ 俺と一緒に、この部屋出て、散歩でも行かない？ ルビィネル」

「はぁ？」

オニクスの予想外の言葉に、ルビィネルが大きく表情をしかめる。
「何を馬鹿なことを、言っている。私は罪人だぞ？ 折角得た、紫炎騎士団長の座を捨てる気か？」

「ルビィネルの為なら、俺、結構、何でも捨てれるけどぉ？」

「ふざけるな」

呆れたように肩を落としたルビィネルが、オニクスへと背を向ける。

「そなたと散歩に行くつもりはない。とつとと帰れ」

「マルク・クラウドってのが、ルビィネルのパートナー？」

「……っ！」

突き放すように言葉を発したルビィネルであつたが、オニクスの口から出たその名に、驚きを走らせ、再びオニクスの方を振り返る。ルビィネルが振り返ると、オニクスは、右手に持った、一枚の紙を見ていた。

「何だ？ 何を読んでいる？」

「ん？ 報告書っ」

微笑んだオニクスが、そつと瞳を鋭くする。

「“騎士団本部、侵入者”のね」

「侵入？」

オニクスのその言葉に、ルビィネルが眉をひそめる。そんなルビィネルの表情を見て、オニクスは満足そうに、特別大きく微笑んだ。

「侵入って……」

「来てるよ。ルビィネルのパートナー」

「えっ？」

「今、この赤炎棟につ」

「マルクが、ここに……？」

オニキスの言葉を受け、ルビィネルが、ひどく混乱した様子を見せる。

「ねえ、ルビィネル」

誘うように名を呼び、オニキスがそつと目を細める。

「俺と一緒に、散歩に行かない……？」

「……っ」

二度目のその誘いは、ルビィネルに益々の、困惑を与えた。

白き魔士は、無くす 1

赤炎棟、二階。大講堂。

「サードニック、様っ……」

赤い炎に包まれ、マルクと共に姿を消したサードニックが、先程まで居たその場所を見つめ、ヘリオドールが呆然とした表情を見せる。

「ああゝあ、獲られちゃった。ホント、やる気なくすなあ、こっこのお」

マルクとの戦いを楽しんでいる最中であつたリラは、突然、相手をさらわれ、途端にやる気をなくした様子で、右手に纏っていた茜色の炎も消し、深々と肩を落とした。

「そうだ！ 僕も後追いかけて、団長たちの戦いに混ぜてもらっ……」

「リラ・ヒューズベル」

「へ？」

名案を思いついた様子で、笑顔を見せていたリラが、急に名を呼ばれ、大きく首を傾げる。

「何？ ヘリオ」

「あなたは引き続き、ここで待機。あの魔女と、他にもやって来るかも知れない侵入者を、この二階で引き止めて下さい」

「えええゝ？」

「これは、副長命令です。逆らった場合、それなりの処罰があることを、理解しておくように。以上」

「あ、ヘリオ！」

リラが反論する時間すら与えず、ヘリオドールは指示を出すだけ出すと、すぐさまリラに背を向け、下りて来たばかりの階段を、再び駆け上がっていった。

「人に押しつけるだけ押しつけて、自分はちゃっかり、団長のところ」

行くわけだ」

ヘリオドールの姿の見えなくなった階段を見つめ、リラが少し呆れたように、息を吐く。

「パートナーもいない魔女相手に、どう楽しめってわけえ？ ホント冗談、キツイ」

誰にともなく、吐き捨てるように言い放つリラ。

「今更、処罰が増えても、どってことないし、やあゝっぱ、団長たちのご行つ……」

「おうへきか黄壁火」

「……っ」

ヘリオドールの後を追うようにして、階段を上がりに行こうと足を踏み出したリラであったが、そのリラと、階段との間に、黄色の炎で作られた壁が現れ、リラの行く手を阻んだ。目の前に現れた炎の壁に、リラがあからさまに表情をしかめる。

「何？ 何のつもり？」

鋭く笑みを浮かべ、リラがゆっくりと講堂内を振り返る。そこには、マルクが居なくなり、部屋に一人残った、トウーパの姿があった。

「見たら、わかるでしょ？ あなたを、マルクのところへ行かせるつもりはないってことよ」

「フッフ。パートナーもいない魔女が、たった一人で、僕を食い止めようっていうの？」

トウーパの言葉を聞き、可笑しそうに笑ったリラが、笑みを浮かべたその表情のまま、まるで試すように、トウーパへと問いかける。「マルクに付いて行くなって決めた時点で、一人で戦う覚悟はしてた。そのために、魔院の講義室から、山ほど、疑似炎も持って来たしね」はつきりと言い放つトウーパの右手の中には、白色の宝玉のようなものが握られていた。魔女が、講義などで、パートナーがいない状態でも、魔炎を使うための道具、疑似炎である。トウーパの腰に下がった袋の中には、手の中のものと同じ疑似炎が、いっぱい詰

められていた。

「フッフ！ たかだか疑似炎で、特火保持者の僕と戦おうっていうのっ？」

リラが可笑しそうに、少し腹を抱えるようにして、笑う。

「いくら何でも、無謀すぎだよ、魔女さん。それじゃあ、命の無駄使いだ」

「いいえ」

リラの言葉を、トゥーパは、間髪入れずに否定した。

「あの日、あなたに利用されて、マルクたちを襲ったあの日から……」

—— こんなくだらないことのために、自分の命、使っなよっ……

自身の腕が焼けることも顧みず、トゥーパの魔炎を止め、自分たちを攻撃したトゥーパのために、そう叫んだマルク。

「私は、この命を、あの二人のためにも使っつて、そう決めたの。それが私のプライドだって」

トゥーパが胸を張り、誇らしげに、堂々と言い放つ。

「だから、これは、無駄使いなんかじゃない」

まっすぐに届くトゥーパの言葉に、いつの間にか、リラの楽しいな笑みは消え、リラはどこか不愉快そうな、居心地の悪そうな表情で、トゥーパを見た。

「何、それ？ 意味わかんない」

眉間に皺を寄せ、リラが少し責めるように言い放つ。

「他人のために、命使うのが、プライド？ ホントにワケわかんないんだけど」

「わからないのは、あなたに、大事なものが何もないからじゃないの？」

「……っ」

挑発するようなトウーパのその言葉に、リラの表情がまた、歪む。
「あの魔士の正体、掴もうと思ってたけど、もういいやあ」

再び微笑んだリラが、完全に階段に背を向け、トウーパへと数歩、足を進める。

「僕の興味は、君をどう燃やすかってことに変わったよ」

冷たく微笑むリラに、トウーパが厳しい表情を見せる。

「さあ、存分に僕を楽しませて。魔女さん」

誘うように両手を広げたリラは、その手から、茜色の炎を放った。

その頃、赤炎棟前。

「これで粗方、傷は治し終えたけれど……」

「いやあ、腕が、羽根でも生えたかのように軽いよ！ さすがは我が魔女！」

火傷を治療し終えたばかりの左腕をブンブンと振り回して、フランが満面の笑みを、アメジエスへと向ける。その笑顔に、アメジエスは安心することなく、呆れた表情となった。

「無理はしないの」

「あららっ」

アメジエスが、自身の右足を、軽くフランの右足へと当てると、フランは全身の力が抜けた様子で、フラフラとその場に座り込んだ。
「魔療水で傷は治せても、体力までは回復出来ない。それに、あんな大技使ったんだもの。立ってるのも辛いはずよ」

「ハハハ、何でも、お見通しだね。我が魔女には敵わないなあ」

地面に座り込んだまま、アメジエスを見上げながら、フランが少し困ったような笑みを浮かべる。そんなフランを見下ろし、アメジエスはそつと眉をひそめた。

「悪いけど、“ここでゆっくり休んでて”なんて、私は言わないわよ」

真剣な表情を見せたアメジエスが、まっすぐにフランを見つめる。
「私は、マルクを助きたい。マルクの力になりたいの。そのためだけに、あなたをパートナーにした」

アメジエスにつられるように、フランも笑みを消し、真剣な表情を作る。

「だから、あなたにどんなに無理をさせても、私は、マルクを助けに行く」

迷いのないアメジエスの言葉を受け、フランがそっと、目を細める。

「……わかつているよ、我が魔女」

大きく頷いたフランは、穏やかな笑みを浮かべた。

「君にとって、最下級魔士がどれほどの存在か。君がどんな想いで、僕をパートナーに選んだか」

少し視線を下へと落とし、フランが言葉を続ける。

「僕はちゃんと、わかつている。わかつていて、それでも君の傍に居たくて、パートナーをしている。これは、僕の意志だ」

ゆっくりと顔を上げたフランが、大きな笑みを、アメジエスへと向ける。

「だから、君が悪く思う必要などない。安心してくれたまえ、我が魔女」

「フラン……」

フランの笑みを見つめ、少し困ったように、眉をひそめるアメジエス。

「フラン、私はっ……」

「かぁー、ここまで言うてくれる男がいるってのに、それでも、あのネガティブ野郎がいいだなんて、どういう神経してんだらうねえ。まったく」

「……………」

フランへと何かを言いかけたアメジエスであったが、その言葉は、横から勢いよく入って来た、新たな声に、すぐさま止まった。

「もう、魔女つてのは本当、酷い生き物だねえ」

「魔女がひどい、なら……私も、ひどい、の……？ ポンド……」

「ああ、違う違う！ メルは魔女でも全然、酷くないよあ。俺が言ってるのは、極一部の魔女っ」

暢気な会話を繰り広げながら、その場へと現れたのは、ポンドとエメラルディアであった。上級騎士インディゴとの戦いを終え、ここまで駆けつけたようである。ポンドは全身にの傷を負っているが、見たところ、十分に元気そうであった。

「ポンド？ 燃やされたいのかしら？」

「あら、聞こえちゃったあ？」

「聞こえるように、言ったとしか、思えないけれど……？」

睨みつけるような、冷たい視線を送るアメジエスに対し、特に気にも留めていない様子で、軽い笑みを浮かべるポンド。二人の会話を、エメラルディアが、不思議そうに見つめる。

「無事だったのかい。ポンド・アラネル」

「ま、当然よあ。そちこそ、無事だったみてえだな。何？ 二人いつぺんに、倒したわけ？」

近くに倒れているパパラチャとサフィリンの姿を見つけ、ポンドが少し驚いたように問いかける。

「それこそ、当然だよ！ この竜巻のように荒々しく、マグマのように熱い、僕の魔炎技術にかかればっ……！」

「シリング・ウェーガットに助けてもらって、何とかね」

「あつさり、バラしたね。我が魔女……」

フランの言葉を遮り、何の躊躇いもなく、シリングのことを話すアメジエスに、フランががつくりと肩を落とす。

「何？ あいつも来てんの？」

「ええ。マルクたちに勝ち逃げされるのは、困るんですって」

「はあ、ん。ま、あいつらしいっちゃ、あいつらしいけど。で、そのシリングは？」

「あの建物の中。マルクとトゥーパも、先に行ってるわ」

赤炎棟を指差し、アメジエスが答えると、ポンドは赤炎棟へと視線を向け、一瞬、真剣な表情を見せた。

「おっしゃ。じゃあ、行くか」

「ええ」

ポンドの言葉にアメジエスが頷くと、少し重たそうにしながらも、フランが体を起こし、その場で勢いよく立ち上がる。

「行くぞ、メル！」

「うん……」

「我が魔女、ちょっと体が重いので、出来れば肩を貸していただけたりなんか、そのつ」

「嫌」

「ですよねえ……」

四人は、マルクたちを追うようにして、赤炎棟の中へと、駆け込んでいった。

「うっう！」

壁に勢いよく背を叩きつけ、トゥーパが苦しげな声を漏らす。その白い腕や足には所々、火傷が刻まれていた。壁に背をもたれかけるようにして、床へと座り込んだトゥーパの右手から、力なく、疑似炎が転がり落ちると、疑似炎がヒビ割れ、勢いよく砕け散る。砕け散った疑似炎の欠片を見て、トゥーパは少し、表情を歪めた。

「ああゝあ、壊れちゃったねえ」

トゥーパの前方から、傷一つ負っていない、余裕の表情で、トゥーパへと声を掛けるリラ。

「最後の疑似炎っ」

「……っ」

リラの言葉に、曇るトゥーパの表情。トゥーパが腰につけた袋は、すでに空で、いったいに詰まっていたはずの疑似炎も、リラの茜炎

を前に、すべて砕かれてしまっていた。

「これで君も、終わりだね。プライド、プライドって騒いだところで、結局はこうなっ……」

「“黄裂火”」

リラの言葉を遮るようにして、トゥーパが黄色の炎の塊を、リラへと向ける。

「“茜熱”」

茜炎を纏った右手で、やって来たトゥーパの魔炎を振り払い、床へと叩き落とすリラ。

「誰が終わりよ。疑似炎がないなら、自分の魔炎を使えばいいだけの話だわ」

「寿命が縮むのに？」

「それについては、さっき、説明したはずよ。私は、二人のために、命を使うって」

「……本当に、わからない人だね」

リラが少し困惑したような表情で、まだ座り込んだままのトゥーパを見つめる。

「他人のために、そこまでやって、それが一体、何になるの？ 誰かが、称えてくれるの？ それとも、何か商品でも貰えるわけ？」

「本当に、わかってないのね」

壁に背をもたれかけたまま、ゆっくりとその場で立ち上がったトゥーパが、妙に晴れやかな笑みを、リラへと向ける。

「何の見返りもないのに、やるから、プライドなんじゃないっ」

はつきりと言い放つトゥーパに、リラの浮かべる、戸惑いの色がまた、濃くなる。

「わからない。わからないよ……」

表情にあらわれた戸惑いを、そのまま口にするように、言葉を落とすリラ。

「だって、見返りもないのに、やりたいことなんて、何にもない……」

……」

その困ったような表情は、今までの冷たい笑顔のような、上辺だけの表情とは異なり、本当のリラの表情のように見えた。

「そこまでしてやりたいことなんて、僕にはないもんっ……」

「そう」

吐き出されたりらの言葉を、受け止めるように、頷くトゥーパ。

「可哀想な子っ」

「……っ」

短く言い放つトゥーパに、リラの表情が歪む。

「茜熱」

「あっ、きゃあああ！」

リラが躊躇いなく放った茜炎に焼かれ、トゥーパが再び、その場に倒れ込む。

「う、うっう……」

「ごめんね。僕、“可哀想”って言われるのが、一番、嫌いなんだ」
右足に負った火傷が酷く、必死に体を起こそうとするトゥーパであつたが、倒れた状態のまま、体が動くことはなかった。起き上がることも出来なくなったトゥーパを、リラが冷たく見つめる。

「どう？ さすがに、これならもう、終わっ……」

「“黄裂火”」

またしてもリラの言葉を遮るようにして、黄炎を放つトゥーパ。向かってくる黄炎に、また表情を歪めたリラは、今度は振り払うことなく、正面から黄炎を受け止めた。黄炎により、左手が焼かれるが、リラは眉一つ、動かさない。

「まだ、手が動く。終わりじゃないわ」

倒れた状態のまま、右手だけをリラへと向けて、トゥーパがはつきりと言い放つ。その瞳はまっすぐにリラを見据えており、少しの怯えも、恐れもない。

「……何、なのっ。もうっ」

リラの口から放たれる、少し震えたその声は、ひどく困惑しているように見えた。

「わからないよ、君っ……わからなさ過ぎて、気分悪いっ」

何かを振り切るかのように、必死に首を横に振って、リラがトウ
ーパへと、右手を突き出す。

「だからもう、跡形もなく消えてよ！ “茜熱”！」

「クっ……」

強く叫んだリラの右手から放たれる、茜炎の大きな塊に、トウー
パが覚悟するように、唇を噛み締めた。

「青斬火」

トウーパへと向けられた、リラの茜炎が、トウーパへと到達する前に、真つ二つに斬り裂かれる。左右へと分かれ、床へと落ちる茜炎を見ながら、リラは特に驚いた様子も見せず、また前へと視線を向けた。

「何？ また、君なわけ？」

少しうんざりした表情で、リラが前方へと問いかける。

「最上級魔士さん」

「……………」

倒れたトウーパの前に立ち、リラの向き合ったのは、右手に白い魔刀を構えたシリリングであった。シリリングは鋭い青色の瞳を、まっすぐにリラへと向ける。

「シリ、ング……ウエー、ガット……？」

細めた瞳で、目の前に立ったシリリングの背を見上げ、戸惑いの声を漏らすトウーパ。

「何で、ここ、にっ……うっうっ」

「サファイ」

「ええ」

問いかけることも出来ずに、苦しげに表情を歪めるトウーパの方を振り返り、シリリングがそつと、パートナーの名を呼ぶ。シリリングの呼びかけに答えるようにして、部屋の入口から駆け込んできたサファイが、倒れたトウーパの傍へとしゃがみ込んだ。サファイが真剣な表情で、トウーパの体を診る。

「特火で負った傷だから、魔療水は効かないだろうけど、魔炎を分け与えて、体を活性化させれば、何とかなりそうだわ」

「なら、お前の魔炎を使え」

「え？ けどっ」

シリングの言葉に、サファイが戸惑うように顔を上げる。トウーパに魔炎を分け与えることは、直接魔炎を使うわけではないので、寿命を縮める問題はないが、トウーパの治療に集中すれば、シリングと魔炎を共有することが出来なくなってしまう。

「早く治療した方が、いいんだろう？」

「それはそうだけど。けど、それじゃあ、シリングがつ」

「どうせ、お前の青炎は、あいつには通用しない。今回は、お前はいい」

「えっ……」

シリングのその言葉に、サファイの表情が、厳しく変わる。

「シリング！」

そこへ、階段を駆け上がる音と共に、大きな声が響き、大講堂にポンドたち四人が姿を見せる。

「うわぁー、続々。外の騎士さんたちは、何やってたわけえ？」

やって来たポンドたちに、リラが呆れたように肩を落とす。

「トウーパ！」

「治療は始めてるわ。大丈夫よ」

倒れ込んだ状態のトウーパを見つけ、思わず身を乗り出したアメジエスへと、サファイが冷静に言い放つ。サファイの両手から、淡い青炎が放たれ、それがトウーパの体を包み込み、傷を癒やし始めていた。治療が始まり、痛みが落ち着いたからか、トウーパは深く目を閉じ、眠りにについている。

「そう」

その様子を見て、アメジエスはホツとしたように肩を落とした。

「あいつ！」

「前に僕たちを、襲った者だね」

前方にリラの姿を見つけ、ポンドとフランがそれぞれ、鋭い表情を作って、身構える。

「お前たちは、先に行け」

「へ？」

シリングのその言葉に、ポンドが戸惑うように振り向く。

「ここは、俺一人でいい」

「……っ」

シリングの発したその言葉に、トウーパに付き添うサファイの表情が、また大きく揺れ動く。

「さては君！ いいところ取りして、この生まれながらに脚光を浴びてる僕よりも、目立とうという魂胆だね！？」

「うるさい……」

鋭く指摘したつもりのフランに対し、シリングがあからさまに、うんざりとした表情を見せる。

「けど、あいつ、特火保持者だろ？ いくら最上級魔士のお前でも、一人でつてのはっ……」

「俺とマルク・クラウドの、どちらが心配だ？」

「そりゃマルクだけだよ」

シリングからの問いかけに、即答するポンド。

「なら、行け。パートナーもいないマルク・クラウドが、ここより上の階に居る者たちを、相手に出来るはずがない」

「正論ね」

「だな」

シリングの言葉を受けたポンドとアメジェスが、互いの顔を見て、深々と頷き合う。

「んじゃ、お言葉に甘えて、俺等は先行くわ」

「ああ」

「言うだけ無駄かも知れないけれど、気を付けて」

ポンドとアメジェスがそれぞれに、シリングへと声を掛けると、二人は、パートナーであるエメラルディア、フランと共に、リラの横を駆け抜け、大講堂の奥にある扉を出て、上へと続く階段を進んでいった。去って行く四人を、リラは特に興味なさそうに見送る。

「あっさりと逃がすんだな」

特に止める素振りも見せなかったリラへ、シリングが言葉を向け

る。

「ここで侵入者を引き止めるのが、お前の仕事じゃないのか？」

「僕にだけ、面倒事押しつけたヘリオに、ちよっと仕返し、かな？」

再びシリングと向き合ったリラが、まるで悪戯をした子供のように、無邪気に微笑み、軽く首を傾げる。

「あの中で一番強そうな君が、遊んでくれるって言うんだったら、僕は別に、それでいいよ」

満面の笑みで、シリングの方を見つめるリラ。

「それに」

言葉を付け加えたリラの瞳が、鋭く光る。

「パートナーの魔炎も、他の魔士の力も借りずに、君がどうやって特火保持者の僕と戦うつもりなのか、興味あるしね」

シリングが何をするのか、楽しみにしている反面、シリングが何をしたところで、自分に敵うはずもないと思っているのだろう。余裕の笑みを浮かべるリラを見つめ、シリングがそつと、目を細める。

「何、単純な話だ」

トウーパとサファイアから距離を取るように、数歩、足を前へと進めるシリング。

「五元炎では、特火には勝てないと、同じ特火でないと、特火には勝てないと言うのであれば」

鋭い表情を見せたシリングが、右手に構えた魔刀を、まっすぐにリラの方へと向ける。

「特火を使えばいい」

「はあ？」

思いがけないシリングの言葉に、リラが思いきり顔をしかめる。

「ただの人間が、特火を使うってえ？ 何、言ってるの？」

「レイルでは、特火保持反応に引っかけから、使えなかったが、ここは騎士団本部。お前のような保持者がゴロゴロ居る場所で、わざわざ、作動しないだろう？」

「あのねえ」

言葉を続けるシリリングに、リラがどこか、うんざりしたような表情を向ける。

「笑えない冗談は、やめてよ。君は最上級かも知れないけど、ただの魔士に、魔炎、それも特火なんて、使えるはずがっ……」

「目醒めよ」

「……っ」

解放の魔唱を口にするシリリングに、リラの表情が曇る。

「我が、はくえん白炎」

目醒めの言葉と共に、シリリングの全身から、白色の魔炎が湧き起こる。

「ウソ、でしょ……？」

シリリングの周囲から現れた、霧のように白く、雪のように美しい、その真つ白な魔炎に、リラが大きく目を見開く。言葉はどんなに否定出来ても、目の前に現れた炎を否定することは出来ない。視界を埋め尽くす白炎に、リラはただ、自分の目を疑うことしか出来なかった。

「特火、保持者っ……」

サファイアもまた、驚きの表情で、白炎に包まれたシリリングの姿を見つめる。

「な、何？ どうせ幻炎か、何かでしょ。わかってるんだから」

少し声に動揺を見せながらも、リラが強気に微笑み、シリリングへと言い放つ。

「目だけでは、信じられないか？」

落ち着いた口調で話しながら、シリリングが全身を包む炎を、構えた魔刀にも纏わせる。白い魔刀に、白い炎が灯り、それは、何とも幻想的な武具となった。

「なら、全身で味わえ」

白炎を纏った魔刀を、シリリングが高々と振り上げる。

「はくせんか白斬火」！

振り下ろされたシリリングの魔刀から、物凄い勢いで、白炎の塊が

放たれる。リラは表情を険しく変えながらも、素早く後ろに飛び下がり、少し距離を取ると、右手を前方へと突き出した。

「茜熱」！」

リラの右手から、茜炎の塊が放たれる。茜と白、二色の魔炎が、二人の中間地点で、勢いよくぶつかり合った。青色であった時は、一瞬にして掻き消せたはずの魔炎が、白色に輝く今は、まったく消えず、むしろ、リラの茜炎を押し始める。

「うっ……！」

右手に掛かる圧に、思わず顔をしかめるリラ。

「何なのっ？ 何で、消えないの……！？」

リラが戸惑うように叫ぶ間にも、どんどんと、シリングの炎が、リラの炎を押していく。押し続けた白炎が、やがて茜炎を天井へと弾き飛ばし、そのままリラへと襲いかかった。

「うあああああ！」

正面から白炎を受けたリラが、勢いよく吹き飛ばされ、背中から壁へと激突する。

「グ、うっ……！」

床に一度、倒れ込んだリラが、苦しげな声を漏らしながらも、床に強く両手を付け、押し上げるようにして、必死に体を起こす。

「どうだ？ 俺の特火は」

やって来るシリングの声に、上半身だけを起こしたリラが、大きく表情を歪める。

「信じない、信じないっ……！」

「強情だな」

「だって、そうだろ！？」

シリングの言葉を撥ね退けるように、リラが勢いよく声を張り上げる。

「なんで……なんで、たかが人間の魔士が、特火なんてっ……！」

「別にそう、難しい話じゃない」

「え？」

あつさりと答えるシリリングに、眉をひそめるリラ。

「俺は、普通の人間じゃない。俺の体には半分、魔女の血が流れている」

「魔女の？ 混血児って、こと？」

「そうだ。だから、魔炎も使える。単純な話だろう？」

特に躊躇う様子もなく、シリリングが自分の出生を話す。

「だから、特火をつ……？」

「ああ。俺を生んだ魔女は、特火保持者だったからな」

「ふう〜ん。成程ねっ」

納得したように頷いたリラが、先程までの動揺を捨て去り、何食わぬ顔で立ち上がる。体には、シリリングの白炎による火傷を負っているのだが、相変わらず、痛みを表情に出すことは一切、なかった。「確かに混血児っていうのは、結構居るみたいだけど、特火まで持つてる人なんて、初めて見たよ」

リラの顔に、再び笑みが浮かぶ。

「面白いね。僕の興味は、君に移ったよ」

その笑みが、楽しげに輝く。

「うう〜んと、僕を楽しませてよっ。最上級魔士さん」

誘うように言いながら、右手にまた茜炎を宿すリラを見て、シリリングが少し眉をひそめる。

「サファイ」

背後を振り返らぬまま、シリリングが後方のサファイへと呼びかける。

「本気を出す。巻き込まない保証はない。だからお前は、その魔女を連れて、この部屋をつ……」

「自分の身くらい、自分で守るわ」

強く遮るその言葉に、シリリングが少しだけ、後ろを見る。トウーパの治療が続いているサファイは、鋭い視線を、シリリングへと向けていた。

「役に立たないってことだって、理解してる。絶対、あなたの邪魔

「なったりはしない」

強い口調で紡がれるその言葉は、どこか悲しんでいるようにも聞こえる。

「だから、見てるくらい、いいでしょう?」

鋭いその視線とは逆に、願うように、乞うように、向けられる問いかけ。

「……好きにしる」

そんなサファイに、シリングは短く一言だけを落とし、再びサファイに背を向けて、前方のリラと向き合った。シリングの背を見つめ、サファイが厳しい表情を見せる。

——ここは、俺一人がいい——

「シリング……」

サファイが力なくシリングの名を呼び、トゥーパを支える右手を、強く握り締めた。

「同じ特火が使えるからって、それくらいで、僕に敵うとか、思わないでよね。最上級魔士さん」

サファイとの会話を終わらせ、再び正面を見たシリングに、リラが不敵な笑みを向ける。

「僕だって、こう見えて実は、この赤炎騎士団の最上級騎士って呼ばれてるんだから」

「上級だろうと、最上級だろうと、どうでもいい」

リラの言葉に、シリングは、いかにも興味のなさそうな表情を見せる。

「どちらがより強いのか、それを決めるのは、呼び名じゃない。勝敗だ」

「フフ、正論だね」

快く頷いたリラが、茜炎を纏った右手を勢いよく振り上げる。

「じゃあ、とっとと勝ち負け決めよう！ “茜熱”！」

リラの振り下ろした右手から、飛び出すようにして、茜炎の塊が、シリングのもとへとやって来る。

「白壁^{はくへき}」

前方に白炎の壁を作り、リラの魔炎を正面から受け止めるシリング。

「返火^{へんか}”！」

受け止めた茜炎を、壁から弾き飛ばすようにして、シリングがリラへと返す。

「脚火”」

足に茜炎を纏い、上空へと飛び上がって、リラが戻って来た茜炎を避ける。リラに避けられた茜炎は、まっすぐに講堂の壁へと向かっていく。空中に浮かんだリラが、壁際へと向かっていく茜炎に、右手の人差し指を向けた。

「曲がれっ」

リラが小さく呟いた途端、茜炎がその向きを変え、再びシリングの方へと戻っていく。

「白壁」

先程と同じように白炎の壁を張り、もう一度向かって来た茜炎を受け止めようとするシリング。

「上、ガラ空きだねっ」

前面の炎に気を取られていたシリングの、真上へと移動したリラが、下方に居るシリングに向けて、茜炎を放った。前面から向かって来た炎は何とか、受け止めたシリングであるが、すぐさま、上から降って来る炎に、その表情が曇る。

「はくふんか 白噴火」

だがシリングは、焦った様子も見せずに、右手の魔刀を上方へと突き出した。魔刀から、噴き上げるようにして、白炎が舞い上がり、降り落ちてきた茜炎とぶつかり合って、二つの魔炎はやがて、掻き消える。

「へえ、やるねえ」

「余裕のつもりか？」

上空に浮いたまま、笑顔で言葉を掛けるリラに対し、シリングは間を置くことなく、白炎を纏った魔刀を構えた。

「白斬火」！

構えた魔刀を振り切り、上方のリラへと、白炎の塊を放つシリング。

「余裕ってわけじゃないけどお、君のその“武具装纏”も、見飽きて来たんだよねえ」

舞い上がって来る白炎を見下ろしながら、リラがどこかゆったりと、右手に茜炎を集中させる。だが、白炎の動きは、リラが思っていた以上に速く、リラの右手に茜炎が集まる前に、リラのすぐ目の前へと辿り着いた。

「うっ！」

防ぐ炎が間に合わず、リラは右手の炎を消し去り、足元に纏った炎を強くして、慌ててその場から飛び出し、向かってきた白炎を、何とか避ける。リラの避けた白炎は、まるで天井に突き刺さるような大きな穴をあけ、そのまま消えてしまった。

「ああ、あ、三階にまで穴あけちゃった。また、怒られるかなあ」
天井の穴から覗く、三階の景色を見上げ、リラが少し困ったように呟く。

「何か、さっきの技、青炎の時よりも、速さが増してるように見えただけだよ？」

「お前が感じるのであれば、そうなんじゃないのか」

問いかけるリラに対し、シリリングは、自分のことであるというのに、特に興味を持っていない様子で答える。

「ま、同じ技なら、特火でやった方が、速くて当然か。威力も増してたみたいだしね」

シリリングの素っ気ない態度も気にせず、言葉を続けながら、リラが床へと降りてくる。

「うん、楽しくなってきた。君、思ったより強くて、良かったよお」

「余裕のつもりか？」

「言っただでしょう？ 余裕ってわけじゃないって」

満面の笑みを見せるリラに、突き刺すような、鋭い視線を向けるシリリング。だがリラは、その視線にも笑顔は絶やさず、それどころか、もっと楽しげに笑って見せる。

「僕は、この炎で、命ギリギリの燃やし合いが出来れば、それで満足なんだ」

恐怖のまるで滲んでいない、その無邪気過ぎる笑顔に、シリリングが少し、眉をひそめる。

「で、最後に、僕の炎で、君を燃やせば、もっと良しっ」

「……それは、遠慮しておこう」

「フフ、遠慮なんて出来ないよお」

「またも楽しく微笑んだリラが、その全身に茜炎を纏う。」

「だって僕、本気出すもんっ」

リラの全身から、天井まで届きそうなほどに、大きな茜炎が舞い上がったかと思うと、その魔炎は一瞬で消える。だが、炎が消えたすぐ後、シリングの瞳が捉えたのは、広い講堂の壁一面を埋め尽くすほどの、無数の小さな虫たちであった。黒光りした体の虫たちは、尾の部分に、まるで蜂のように、鋭い針を持っている。

「……っ」

「あれは、魔蟲……？」

現れた無数の虫に、シリングと、見守るサファイもまた、表情を曇らせる。

「特火保持者なんだったら、知ってるよね。特火は、五元炎とは違って、その炎特有の力がある」

魔蟲を周囲に従え、その群れに右手を伸ばし、楽しげに微笑むリラ。

「僕の茜炎はね、“操作”の魔炎なんだ。ありとあらゆる生物に、魔炎を与えて、思い通りに操るっ」

「魔猫を魔虎の姿に変え、俺たちを襲わせたように……？」

「そう。そっか、あの時は、君も居たんだっけね」

リラが今、思い出したような様子で、軽く手を叩く。

「そういえば、あの魔猫に襲わせたから、パートナーになったんだっけ？ 君たちって」

シリングと、その後ろに居るサファイの姿を、重ねて見つめ、リラがまるで、試すように問いかける。

「巻き込んだじゃって、ごめんねえ。あくまで、目的はルビィネルのつもりだったんだけど」

感情のこもっていない謝罪を、リラが口にする。

「悪いことしちゃったかな？」

不意に瞳を鋭くし、挑発するように言い放ったリラの言葉に、顔をしかめたのは、サファイだけであった。

「今は、お前の特火の説明をしているんじゃない、なかったのか？」

「ああ、そうだった」

シリングの指摘に、思い出したように頷き、リラがまた、無数の魔蟲へと手を伸ばす。

「この魔蟲はね、ぜえ〜んぶ、僕が飼ってるんだあ。全部に毎日、毎日、ちよつとずつ、僕の魔炎を分け与えてる」

リラが指先を動かし、すぐ傍の魔蟲を、撫でるような仕草を見せる。

「だから、とっても強力な武器なんだよ」

リラが言葉を放った途端、無数に舞うすべての魔蟲の、体の一部である針に灯るようにして、茜炎が燃え盛る。

「そんな強い魔炎を宿らせたら、そいつ等の身がもたないだろう」

「そしたら、次の奴を飼うよ。魔蟲なんて、フレイヤ中に、死ぬほど飛んでる」

あつさりと答えるリラに、シリングが呆れたように肩を落とす。

「お前に飼われた奴は、不幸だな」

「なんで？」

大きく首を傾げ、とても不思議そうに問いかけるリラ。

「こいつ等、ただの虫だよ？ 幸とか不幸とか、あるわけないじゃない」

その考えに、疑念を持つことなどなく、ただ無邪気に微笑んでみせるリラに、シリングはそれ以上、何を言っても無駄と判断したのか、口を閉じた。

「ここに飛んでる、すべての虫が、僕の刃」

リラの周囲から、部屋中へと広がった無数の魔蟲が、茜炎の灯ったその針を、講堂の中央付近に立つシリングへと向ける。魔蟲で埋め尽くされた講堂の、その光景に、リラがまるで、酔い知れるような表情を見せる。

「どこにも、逃げ場なんてないよ。さあ、どうする？ 最上級魔士さん」

試すように問いかけ、リラがゆっくりと両手を開く。

「ま、どうにも出来ないだろうけどっ」

少し声の音調を低くし、呟いたリラが、冷たく微笑みながら、勢いよく両手を掲げた。

「せんほうか茜蜂火”！」

大きく叫びあげたリラの声を合図に、講堂中に広がった魔蟲たちが、一気に、シリングへと襲いかかる。

「シリング！」

四方をすべて、魔蟲に埋め尽くされ、逃げ場すらもないシリングのその姿に、思わず身を乗り出し、必死に名を呼びかけるサファイ。だが、無数の魔蟲と、その魔蟲が宿らせた茜炎の中に、シリングの姿が消えていく。

「シリング！ シリっ……！ あっ」

何とかしようと、咄嗟にトゥーパから離し、左手を、魔蟲たちの塊へと向けたサファイであったが、疼くように、手の甲の白い魔紋が光り、サファイはすぐさま、動きを止めた。

「何？ 助けないの？」

そんなサファイの行動をすべて見ていたのか、リラが、余裕の表情で、問いかける。

「まあ、どの道、君の青炎じゃ、僕の茜炎を相手には、どうにも出来ないだろうけどっ」

嘲笑うかのように言い放つリラに、サファイがそっと、眉をひそめる。

「助けないんじゃないわ」

「え？」

「助ける必要がないのよ」

サファイがはっきりと告げたと同時に、魔蟲の塊のその奥から、魔蟲たちが宿す茜炎よりも、もっとずっと強い、白色の炎が舞い上がった。

「な、何っ……！？ うう！」

リラが焦ったように声を漏らしながらも、目の前へと入って来る、あまりに眩い光に、思わず瞳を閉じる。

「んっ」

瞼の向こうから、光が収まったことを感じ取ると、リラが再び、ゆつくりとその瞳を開いた。

「えっ……？」

瞳を開いた途端、リラが一気に、困惑の表情となる。確かに、あの眩い白色の光は収まっていたが、白炎だけでなく、茜炎も、それどころか、あの無数に居た魔蟲たちの姿も、一匹も見当たらなかった。魔蟲たちが忽然と消えた講堂の中央には、シリリングが一人、静かに立ち尽くしている。シリリングは無傷で、魔蟲からの攻撃を受けた様子もない。

「な、何？ 何が起こったの？」

戸惑いを表情にも声にも出しながら、他に問う相手もおらず、リラがシリリングへと問いかける。

「僕の虫たちはどこ？ どこへやったの！？」

リラの戸惑いの声が、徐々に荒々しくなる。その声に反応し、シリリングがゆつくりと、リラへとその視線を向けた。

「お前の虫なら、消えた」

「はあ？ 消えた？ 虫たちが、神隠しにでも遭ったっていうわけ？ 一体、何言ってる？」

「お前は言ったな。特火には、五元炎にはない、その炎特有の力がある」

突っ撥ねようとしたリラの言葉を遮り、シリリングが冷静に、声を響かせる。

「お前の特火に、特有の力があるように、俺の特火にも、特有の力がある」

リラが、先程まで見せていた、無邪気な笑顔などまるでない、険しい表情で、シリリングを見つめる。

「俺の白炎は、“消滅”の魔炎。ありとあらゆるものを、この世界

から、完全に消し去る炎だ」

「消滅の、魔炎……？」

シリリングから発せられるその言葉に、リラが眉をひそめ、厳しい表情を見せる。

「何、言ってるの？ そんな無茶苦茶な力の魔炎、あるはず……」

「じゃあ、探しに行ってくるといい。お前の虫たちを」

信じようとしないリラに、シリリングが強気に、言葉を向ける。

「きつと、この世界の、どこにも居ない」

「……っ」

断言するシリリングに、リラが唇を噛み締め、益々、その表情を陰しく変える。

「鬱陶しいなあ。もう、君の空想には、付き合いきれないよ！」

「茜熱」！

不機嫌そうに、しかめた表情のまま、リラが右手を突き出し、先程までと同じように、茜炎の大きな塊を、シリリングへ向けて、勢いよく放つ。向かってくる茜炎に対し、シリリングは魔刀を構えることはせず、左手の人差し指のみを、茜炎へと向けた。

「白無^{はくむ}」

シリリングの指先から一瞬、白炎が放たれるのが見えたかと思うと、次の瞬間、シリリングへと向かっていた茜炎の塊が、忽然と消える。

「えっ……？」

一瞬にして、視界から無くなった自身の炎に、思わず戸惑いの声を漏らすリラ。

「何？ 何をつ」

「虫と同じだ。お前の炎は、俺が消した」

「ウソだ！」

シリリングが伝える事実を、リラが勢いよく否定する。

「そんな！ そんな圧倒的な魔炎が、あるはずが……！」

「なら、何を消されれば、信じる？ お前自身か……？」

「っ……！」

冷たく放たれたその問いかけに、リラが思わず、肩を震え上がらせた。不自然に引きつった表情で、リラがまるで逃げるように、徐々にその足を、後退させていく。

「消されるのが、怖いか……？」

「い、嫌だっ！」

鋭く魔刀を構えるシリリングに、泣き出しそうな表情で、必死に首を横に振るリラ。

「嫌だっ……！」

リラがシリリングへと背を向け、階段のある、講堂の奥へと、駆け出していく。

「あっ！」

そんなリラの背へと、魔刀を振り上げるシリリング。シリリングのその様子を見て、サファイアがまた、身を乗り出す。

「ダメ！ シリリング！」

「はくしつか白失火”」

止めるようなサファイアの声が響き渡る中、シリリングは、その魔刀を止めることなく、躊躇なく振り下ろした。魔刀から飛び出した白炎の一閃が、逃げるリラを追いかけるようにして、空中を駆け抜けていく。

—— パアアアン！

白炎が何かを燃やし、その光が輝きとなって、講堂中を包む。講堂内のすべてが白い光に埋め尽くされたかと思うと、すぐに光は止み、そこに静けさが戻った。

「あ、あっ……」

力なく声を漏らしたリラが、うつ伏せに床へと倒れ込み、静かにその瞳を閉じる。リラの体に、特に大きな外傷は見られないが、リラが逃げようとしていた、上へと続く階段は、きれいさっぱり、その場所から消え失せていた。シリリングの白炎が燃やし、消し去った

のだろう。

「何となく階段を消してしまっただが、よくよく考えると、上に行つた連中を追えなくなつたな」

魔刀に纏わせていた白炎を落ち着かせ、ゆっくりと右手を下ろしたシリリングが、困つたように首を捻る。

「サファイ、あれの他にも階段は……」

シリリングが振り返ると、そこには、シリリングへと非難するような責め立てるような、そんな、冷たい視線を向ける、サファイの姿があつた。トウーパの体を支える、サファイのその両手は、恐怖するかのように、細かく震えている。

「……っ」

サファイのその視線を受け、言葉を止めたシリリングが、すぐにサファイから、視線を外す。

「だから、部屋を出ると、言つたんだ……」

シリリングの声が、どこか悲しげに、講堂に響いた。

トウーパが呼ぶ声が聞こえたかと思うと、赤色の炎が、視界をすべて、埋め尽くした。次の瞬間、マルクが立っていた場所は、先程までの大講堂ではなかった。大講堂と同じような広く、何も無い部屋ではあったが、天井が球状となっており、透き通ったガラスの向こうには、青い空が覗いていた。久し振りに見たような気さえする青空を、マルクが見上げる。

「ここ、は……？」

「赤炎棟の最上階だ」

思わず口にした問いかけに、返って来る声。その声にハツとした表情となつて、マルクが前方へと視線を移す。何もないその部屋の中央に、静かに立ち尽くしているのは、感情の見えない表情を見せた、サードニックであった。サードニックの姿を捉え、マルクがそつと、眉をひそめる。

「この壁と天井は、魔炎を受けても壊れることのない強度を持った、特殊な素材で出来ている。だからこの部屋は、主に魔炎の戦闘訓練用に使われている」

「魔炎の……」

サードニックの言葉を受け、マルクがその表情を陰しく変える。周囲を見たところ、トウーパの姿はなく、この場に居るのは、マルクとサードニックだけのようである。トウーパと偽結を交わした黄炎も、すでに反応はない。契約が途切れてしまったのだらう。

「俺一人な上、目の前には、さっきのリラって奴よりも、何となく強そうな騎士……うう、ダメな気しかないなあ、もう」

暗くなつてはいけないと思いつつも、今の厳しい現状に、思わず頭を抱えてしまうマルク。

——ルビィネルに会うまで、もう絶対、諦めない——

「あつ……」

抱えた頭を過ぎったのは、マルク自身が発した言葉であった。マルクを諦めさせないために、ここまで力を貸してくれた仲間たちの姿を、奮起した自分自身の姿を思い出し、マルクが大きく首を横に振り、暗くなりそうだった雰囲気、振り払う。

「……っ」

腹をくくったように、表情を鋭くし、マルクが、警戒するように身構える。サードニックがわざわざ、こうして、魔炎にも耐え得る場所に移動してきたということは、魔炎で戦うつもりであるということだろう。トウーパも居なくなってしまう、魔炎を使うことすら出来ないが、それでもマルクは、逃げずに身構えた。

「何を身構える必要がある？」

「え？」

警戒してみせるマルクに対し、疑問を投げかけるサードニック。その言葉の意味がわからず、マルクが少し、戸惑ったような表情を見せる。

「何って」

「例え身構えていたとしても、貴様には、何も出来はしない」

マルクへと突き刺すような視線を向けながら、サードニックがゆつくりと、自身の右手をあげる。

「俺が、この指を一本、曲げる」

サードニックが、上げた右手の人差し指を、軽く、上方へと曲げる。

「……っ！」

その瞬間、マルクの周囲を、マルクだけ避けるようにして、赤々とした激しい魔炎が、一気に逆巻いた。マルクが驚く間もなく、逆巻いた魔炎は、すぐさま消える。

「一瞬だ。一瞬で、貴様は、灰となる」

断言するように言い放つサードニックに、思わず眉をひそめるマ

ルク。だが、マルクにその言葉を、否定することは出来なかった。先程、一瞬逆巻いた魔炎からは、マルクでもわかるほどの、強い力を感じた。今は、わざと、マルクを避けただけで、サードニックは、いつでも自由に、いとも簡単に、マルクのことなど、燃やしてしまえるだろう。

「だから貴様は、身構える必要などないのだ。マルク・クラウド」
「……っ」

サードニックに生かされている状況であることを理解し、マルクが、身構えていた体から力を抜き、ただ、茫然と立ち尽くした状態のまま、サードニックと向き合う。

「それでいい」

マルクのその様子を確認し、サードニックは、満足げに頷いた。

「あんた、は？」

警戒することすら許されなくなり、時を持て余したマルクが、サードニックへと問いかける。

「フレイヤ聖騎士団、赤炎騎士団長、サードニック」

「サード、ニック……」

どこかで聞き覚えのあるその名に、マルクが視線を下へと向ける。

——そなたも、サードニックの手の者か！？——

「あっ」

それは、ルビィネルと初めて出会った日に、ルビィネルが口にした名前。恐らくは、ルビィネルを追手いる者たちの、トップの名であろうと、マルクの中でも予想はしていた。

「あんたが、ルビィネルをつ……」

「そうだ。俺がルビィネルを、このフレイヤへと連れ戻した」

まったく感情の見えない、冷たい表情のまま、サードニックがマルクの問いに答える。

「我が赤炎騎士団は、フレイヤ政府より、あれと、あれの持つ朱炎

の、絶対管理を任されている」

あえて、ルビィネルの名を口にしないサードニックに、マルクが少し、目を細める。

「あれを一生監視し、あれの自由を許さず、あれの朱炎を、何者にも渡さぬことが、我々の役目だ」

「なんでっ……なんで、そこまでする必要があるんだ？」

ルビィネルが強いられた環境を想像し、思わず険しい表情を見せたマルクが、言葉を零すようにして、シリングへと問いかける。

「朱炎がどんなに危険な力か知らないけど、ルビィネルだって、俺だって、魔炎を、悪いことに使ったりなんかしないよ！」

マルクが思わず身を乗り出し、サードニックへと必死に言葉を向ける。

「ルビィネルが自由でいたって、何か問題が起きるわけじゃないだろ！？ そんな、フレイヤに閉じ込めて、一生監視までする必要なんてっ……！」

「何故、そんなことが言える？」

「え？」

返って来る問いかけに、マルクが戸惑いの声を漏らす。

「貴様やあれが、朱炎を悪用しないと、あれが自由であっても、何も問題は起きないと、そんなことを、何を根拠に言い切る？」

「根拠、とかはちよっと、今、言われても困るけどっ……」

鋭く問いかけるサードニックに、答えとなる言葉を見つけられず、思わず俯いてしまうマルク。

「十数年前」

突然、話を遮り、何かを話し始めたサードニックに、マルクが少し首を傾げながらも、顔を上げる。マルクが顔を上げると、サードニックは球状の天井へと、視線を向けていた。

「百年振りに、“彩炎の魔女”に相応しいとされる、有能な魔女が、このフレイヤに現れた」

天井を見上げ、話を続けるサードニックが、そっと目を細める。

「その魔女の名は、ガーネット。朱炎の魔女、ガーネット」

「朱炎の？」

「あれの姉だ」

「姉っ？」

サイドニツクの告げた事実、マルクが驚きの表情を見せる。

「ルビィネルに、姉ちゃんが……」

「ああ。だが、ガーネットは、“彩炎の魔女”になる直前に、死んだ」

「えっ？」

さらに伝えられる事実、マルクが表情を曇らせる。

「パートナーであった魔士に、その魔炎の力をすべて奪われ、殺されたのだ」

「なっ……！」

マルクの表情に、さらに走る衝撃。それは、マルクが思ってもいない、真実であった。

「魔士が、パートナーの魔女を殺すなんて、そんなこと……」

「ガーネットの朱炎の、あまりに強いその力に、目が眩んだのか、初めから朱炎を奪うつもりで、ガーネットのパートナーとなったのか」

深い、憎しみのような感情を滲ませた瞳を見せながら、サイドニツクがゆっくりと、視線を落としていく。

「真意は知らぬ。だが、ガーネットは死んだ」

「……っ」

サイドニツクの視線が戻って来て、マルクはまた、表情を険しくする。その視線は突き刺さるようで、逃げだしてしまいたいほど冷たいのに、どうしても、目を逸らすことが出来なかった。

「共に“彩炎の魔女”を目指してきたはずのパートナーに、あっさりとその夢を絶たれ、死んだのだ」

死を繰り返すその言葉が、妙に、悲しげに響く。

「あんなことが起こるなど、誰も想像もしていなかった。だが、事

実、悲劇は起きた」

サードニックがまた、問い詰めるように、マルクを見る。

「だから、問うている。何を根拠に、何の問題も起こらないなどと、言い切れるのかと」

再び向けられる問いかけに、マルクが思わず顔を俯ける。誰も思いつきもしなかっただろう、悲劇が起きてしまった事実を、知ってしまったマルクにはもう、先程と同じ言葉を、口にすることが出来なかった。

「あれも、姉と同じ、強力な朱炎を宿す魔女。俺は、あれに、姉と同じ道を歩ませる気はない」

ルビィネルを想うようなその言葉に、マルクが少し、驚いた表情となる。

「だが、あれは、姉の目指した、“彩炎の魔女”になると言っ
て、聞かぬ」

サードニックのその言葉に、そっと目を細めるマルク。

—— 私は、“彩炎の魔女”になる！ ならねば、ならぬのだ！

怖いとさえ思えるほど必死に、ただ、ただ、彩炎の魔女を目指していたルビィネル。その執着が、普通ではないことは、マルクも感じ取っていた。それは、死んだ姉が、歩むはずだった道を歩みたいという、願いの表れだったのかも知れない。

「だから、貴様を、ここへと連れて来た」

答えを示すように言われ、マルクが少し戸惑うように、顔を上げる。

「俺は、貴様を殺さない。だが、その代わり、貴様は二度と、あれの前に現れるな」

「えっ……？」

交換条件のように付きつけられる言葉に、マルクがさらに、戸惑

った様子を見せる。

「貴様とあれの契約は、本結。貴様が死ぬまで、あれは、他のパートナーを得ることは出来ぬ」

無機質な口調で、サードニックがさらに、言葉が続ける。

「貴様を殺せば、契約は解除され、あれがまた、別のパートナーを得る可能性が出る。だから」

「だから、俺が生きたまま、ルビィネルの前から消えてくれた方が、都合がいいって?」

「そうだ」

続きを補うように、言葉を発したマルクに、サードニックは何の躊躇いもなく、頷いた。

「貴様を選ぶべき道は、今、ここで死ぬか、あれを忘れるか。二つに一つだ」

選択を迫るように、サードニックが言い放つ。

「まあ、灰にされることを思えば、一人の魔女を忘れるくらい、随分と容易なことだろうがな」

マルクがまだ、何も答えていないというのに、初めから、マルクが、ルビィネルを忘れることを選ぶと、決めつけているかのように話すサードニック。

「……………」

一方、深く俯いたマルクは、考え込んでいる様子はなく、ただ、厳しい表情を見せていた。

――私が、そなたの夢も、一緒に叶えてやる――

――私と一緒に、マフレイヤに行こう！ マルク・クラウド！

「……………」

思い出されるルビィネルの言葉に、笑顔に、マルクがそっと、瞳を閉じる。

「あんたが」

開かれるマルクの口に、サードニックがそつと目を細める。

「あんたが、ただ悪戯に、ルビィネルの自由を奪おうとしてるわけじゃないってことは、よくわかった」

再び瞳を開いたマルクが、俯けていた顔を、ゆつくりと上げていく。

「あんたが、ルビィネルの姉ちゃんに起こった悲劇を、本当に、悲しんでいることも」

サードニックは、マルクの言葉に頷くことはせず、ただまっすぐに、マルクを見つめる。

「ルビィネルの姉ちゃんに起きた出来事は、本当に悲しいことだと思う。俺だって、そんな悲劇、見たくもない」

険しい表情を見せたマルクが、感情のこもった言葉を続ける。

「けど、それはっ」

決意するように、強く唇を噛み締めたマルクが、勢いよく顔を上げ、サードニックを見る。

「俺が、ルビィネルを忘れる理由には、ならないし」

まっすぐ、真剣な表情で、目の前のサードニックを見つめるマルク。

「ルビィネルが、夢を諦める理由にも、ならない！」

迷いなく、はっきりと言い放つ、マルクのその言葉を受け、サードニックの表情が、あからさまに険しくなる。

「灰にするしか、ないようだな」

サードニックが、ゆつくりと右手を上げる。だが、マルクは怯えた様子も見せず、ひたすらにサードニックを見つめた。

「灰になったって、忘れない」

「……っ」

マルクから告げられるその言葉に、サードニックが大きく表情を歪める。

—— 忘れないよ、ガーネット…… ——

目の前のマルクに、重なるようにして思い出される光景に、サードニックがきつく、右手を握り締める。

「ならば、今すぐ、灰となれ」

怒りの滲む低い声を響かせ、サードニックがマルクを睨みつける。
「目醒めよ、我が緋炎^{ひえん}」

鮮やかな赤とはまた異なる、マルクが見たことのない、緋色の魔炎を纏い、きつく握り締められた右手を、勢いよくマルクへと突き出す、サードニック。

「クッ……！」

向けられる右手に、マルクが覚悟するように、きつく唇を噛み締める。

「“火発^{ひはつ}”！」

『……っ』

マルクへと飛び出していこうとしていた、サードニックの魔炎を止めたのは、二人の間に割り込むようにして入って来た、赤色の炎であった。床へと落ちる魔炎を見届けた後、マルクとサードニックがほぼ同時に、魔炎の飛んで来た、この広場の入口へと視線を向ける。

「あッ……」

そこに見える人影に、少し、間の抜けたような声を漏らすマルク。
「ル、ルビィネルっ……」

「……」

その場へと現れたのは、魔紋の刻まれた左手を、まっすぐに前へと突き出し、厳しい表情を見せた、ルビィネルであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5593x/>

彩炎の魔女

2011年12月16日18時46分発行